

奇譚クラス

麦秋増大号



絵物語 白線地帯の飼育室

昭和二十一年四月二十日創刊 昭和二十五年六月一日終刊 昭和二十五年六月一日終刊 昭和二十五年六月一日終刊

奇譚クラス

定価 三冊 円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

悦特 No. 5

「悦虐小説と緊縛写真」特集

臨時増刊・限定版

好評裡に発刊!!

定価三百円

(略号 悦特五)



集画責・孝馬四

美女の鼻腔鑑賞
「ぶつなら早くぶつて」
奥様御機嫌如何
小さいコルセツト
女体のカンヴアス
小舟の中の漂流娘
マノハは玩具か!

現代緊縛風景百二十態

新星のまたたき……春丘 リル
苦痛への迎聘……絹川 文代
罪なき女囚……大塚 啓子
黒蛇の獲物……絹川 文代
格子なき監房……愛川 悦子
懇謝の眼差……館 典子
幽艶なる受刑……花坂 道子
戯譚の反抗……大塚 啓子

美女縲……絹川 文代
仇怨の欄間……桜井 葉子
憤辱を包む麗姿……益田 房子
軟強肌……大塚 啓子
君知るや麗囚の真意を絹川 文代
嬉戯の拘束……桜井 葉子
プロファイル……岩井 知子
歎泣の像……絹川 文代

集小説虐悦選厳

一撥の花……片矢 薫
青色の蛍光燈……川田 進
植民地加虐秘史
ベンガルの黄昏……川野 京輔
夕暮の窓辺で……古川 裕子
北国湯場哀話……吉野 朝夫
国際スパイ団監房……野中 愛三
実説 白木屋お駒……川野 京輔
気遣いにされた令嬢飛田 良二

忘年会奇譚……白金 紅次
悲風刺青巷談……岩 広志
車中汚辱……九鬼 麻里
愛恋の日に……古川 裕子
灸点三昧……長谷川 清
続・半公刑脱走囚……篠原 咲恵
縛恋(ばくれん)……草薙 久人
夏子抄(「罪ある女」の日記)……桜井京一郎

限定版特別号 第一弾!

「緊縛フォトアラベスク」

略号「あらべ」 特価 五百円

△収載内容▽全部縛られた女体のポーズばかり二十六項目、写真七十七葉一挙掲載!

限定版特別号の第一回発刊として、昨年度上半期撮影の美人モデル嬢の緊縛ポーズを網羅し文字通り表紙から裏表紙に至るまで、可憐きわまりないモデル嬢の緊縛姿態にて埋めました。(限定版のため一般書店へ出廻っておりませんから直接発行所宛お申込願います。)

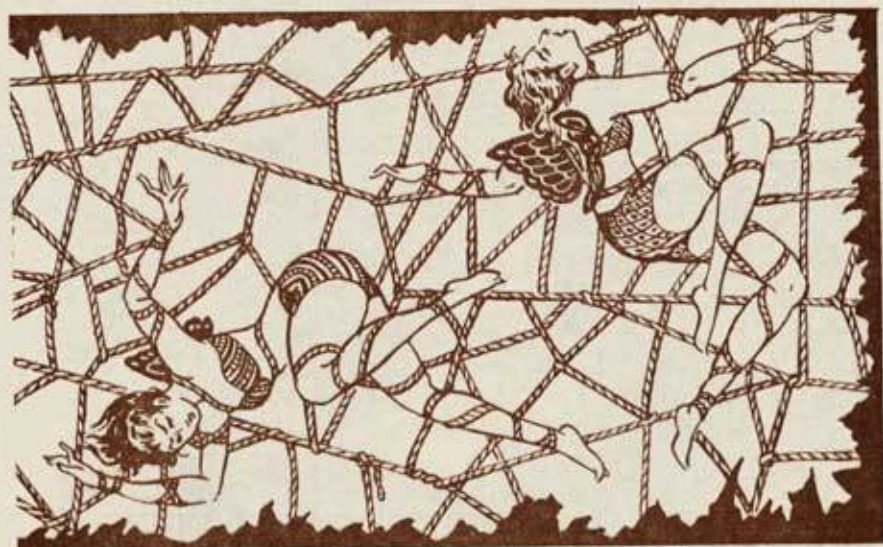
限定版特別号 第二弾!

「緊縛写真と緊縛画集」

略号「緊縛」 特価 五百円

△収載内容▽四馬孝緊縛画二十五項目二十五葉と「素晴しき写真集」緊縛写真十九項目八十四葉とを以て絵画写真が渾然一体となつて奏でられる限定版の醍醐味!

発売以来大好評にて圧倒的なお申込を受けました。一時品切中の所、今回若干増刷! まだごらんにならない方は、売切れぬ中にお早く!



奇譚クラブ

（復刊第六十三号・七月号）

目次

四馬孝・画 白線地帯の「飼育室」中村淳三・文

- 一、白線地帯の女狩
- 二、伸びる悪魔の手
- 三、逃亡者発見
- 四、髪刈りの私刑
- 五、網にかかった美蝶
- 六、「飼育室」の上客
- 七、灸療法の苦痛
- 八、美畜悠子の試験
- 九、浣腸室の汚辱
- 十、外人向の烙印

口 マゾ・フォト マゾ・プレイのワンカット

男性緊縛写真 穴 倉 幽 閉（その三）

頭 責め絵「女体エビ責地獄」 滝 れい子・画

「せむしの刺青師」 北原 祐子・画

巻 縛り絵「折 檻」（せつかん）

読者提供の頁 「女性切腹図」 「囂爽たる馬上の麗人」

「女性人形利用のマゾ・フォト」

組写真「異国船の密航者」

塚本鉄三・撮影

船室の見世物 モデル 杉原紅児・構成

新入荷 陳列 モデル 絹川 文代

モデル 津川 路子

グラビヤ・フォト・セク

- 折檻場への道程 構成 辻村 葉子
 俺にもポーズをとらせろ モデル 絹川 文代
 黒髪は乱れて モデル 大塚 啓子
 縛られポーズの好演戯 モデル 春丘 リル
 さるくつわをつけた モデル 春丘 リル
 ポーズとその点景 モデル 春丘 リル
 珍妙な首飾り モデル 絹川 文代
 女装緊縛「高島田」 モデル 杉江美津子
 縛り人形 モデル 愛川 悦子
 新教祖様出現 モデル 絹川 文代

絵物語解説白線地帯の「飼育室」

随想 不死鳥に似て 中村 淳三 60

随賞募集「告白と手記と体験記」入選作品 松井 頼子 66

告白「宇宙服と私」 飯田 靖子 72

切腹通信 女性切腹の作品と作家 兵頭 庫一 80

懸賞受取者原稿入選作品

創作 零の舞踊会（その二） 氷見 龍也 82

愛好者の記録 名ま・かつひ 88

女装愛好者の告白「倒錯へのみち」 成舞 芳夫 90

あるソドミニストの哀話「特高室」 横村 泰 96

マニヤ観照記「観客席」 牧 高志 106

映画通信 縛られた女優達 大河原珠樹 110

青山京子緊縛事件考察

女優就縛の図 中谷 国夫 112

随筆 演って欲しい責め映画 浮家 鷹三 120

ファンタジア・マゾヒスティカ 山本 節夫 126

マゾ通信「空想のマゾ閑話」 中沢 一郎 130

連載小説 宇宙のどこかで 佐治 麻造 132

サド通信 君死に給うこと勿れ 鷹取 仙吉 146

新緑躍進号を戴いておもう事など 南方 佳男 148

浣腸通信「浣腸に関する資料」 島 直樹 150

創作「酒 樽」 蒼野 礼 152

麻生保氏の生活と意見 麻生 保 167

セメドキュメンタリー「バスガールの運命」 滝畑 三郎 168

告白 ふんどし奇譚（一） 内田 武男 172

マゾヒズム百景 馬場 好男 175

連載第三次元小説「影の国」 雪俊 遙 178

回想録 縄のない緊縛 菅 良太 192

沼正三だよりと雑報欄 沼 正三 196

読者通信

編集後記 218



當世風俗川柳選

佐保 忍作

淹れゝ子重

痛

とは

言わぬが

花の

綿
ロープ

括るのもう

結構と

ぶそをかき

この恰好

イカス

でしようく

裾をけり

セハ
縄の
どげ
シク
シク
肌
をつき

海老責は

足の
拇指

か
えり

後手に

無

防備

胸合

わ
せかね

白線地帯の女狩

中村淳三・文 四馬孝・画

悠子は一人の青年から道をきかれた。気晴しに盛り場へ出て買物でもしようかと思っていたのだが、柔い物腰ですすめられると断りかねて一緒に喫茶店へ入った。案内してくれというので電車道までそろってゆくと、外国製の豪華な自家用車が二人を待っていた。



伸びる悪魔の手

中村淳三・文 四馬孝・画

快晴のハイウェイをドライブして夕方、車は再び市内へ戻ってきたが、彼女の見知らぬ山手の緑に包まれた邸の中へ滑り込んだ。欺まされたと気づいた彼女が大声を立てようとした時、ヤクザ風の男がぐると周りを取りかこんで件の青年の姿はなかった。



逃亡者発見

中村淳三・文 四馬孝・画

連れ込まれた部屋には彼女と同じ年頃の娘が二人、物におびえたようにふるえていた。ここを逃げださなくては大変なことになる、処女の直感で三人は身の危険をさと、身軽な一人はカーテンをさいて紐をつくり、窓から暗闇の庭へつたい下りていった。



髪刈りの私刑

中村淳三・文 四馬孝・画

掴まえられた娘は、裸にむかれて麻縄で手足をきりきりと括られた。もう二度と逃亡の
できないようにと、自慢の黒髪は無惨にも刈りとられ、その上剃刀で丸坊主にそられてし
まった。素裸の尼姿ではたとえ縛られていなくても、とても逃げ出せないだろう。



網にかかった美蝶

中村淳三・文 四馬孝・画

逃亡さわぎで部屋の鍵をかけ忘れたまま、彼等は下の部屋で私刑に熱中していると思った悠子が、廊下をうろうろして降り口を探しているところを張り込んでいたチンピラに見つかった。忽ち後手に縛り上げられ苛酷なムチが容赦なく柔肌にふりそそいだ。



「飼育室」の上客

中村淳三・文 四馬孝・画

地下には無垢な娘を一人前の売春婦に仕込むための「飼育室」があらゆる設備を整えてお客を待っていた。美貌の悠子は、この「飼育室」の上客だった。洋服を剥ぎとられると皮手錠を手と足にはめられ、奇妙な皮パンツを着用させられた。



灸療法の苦痛

中村淳三・文 四馬孝・画

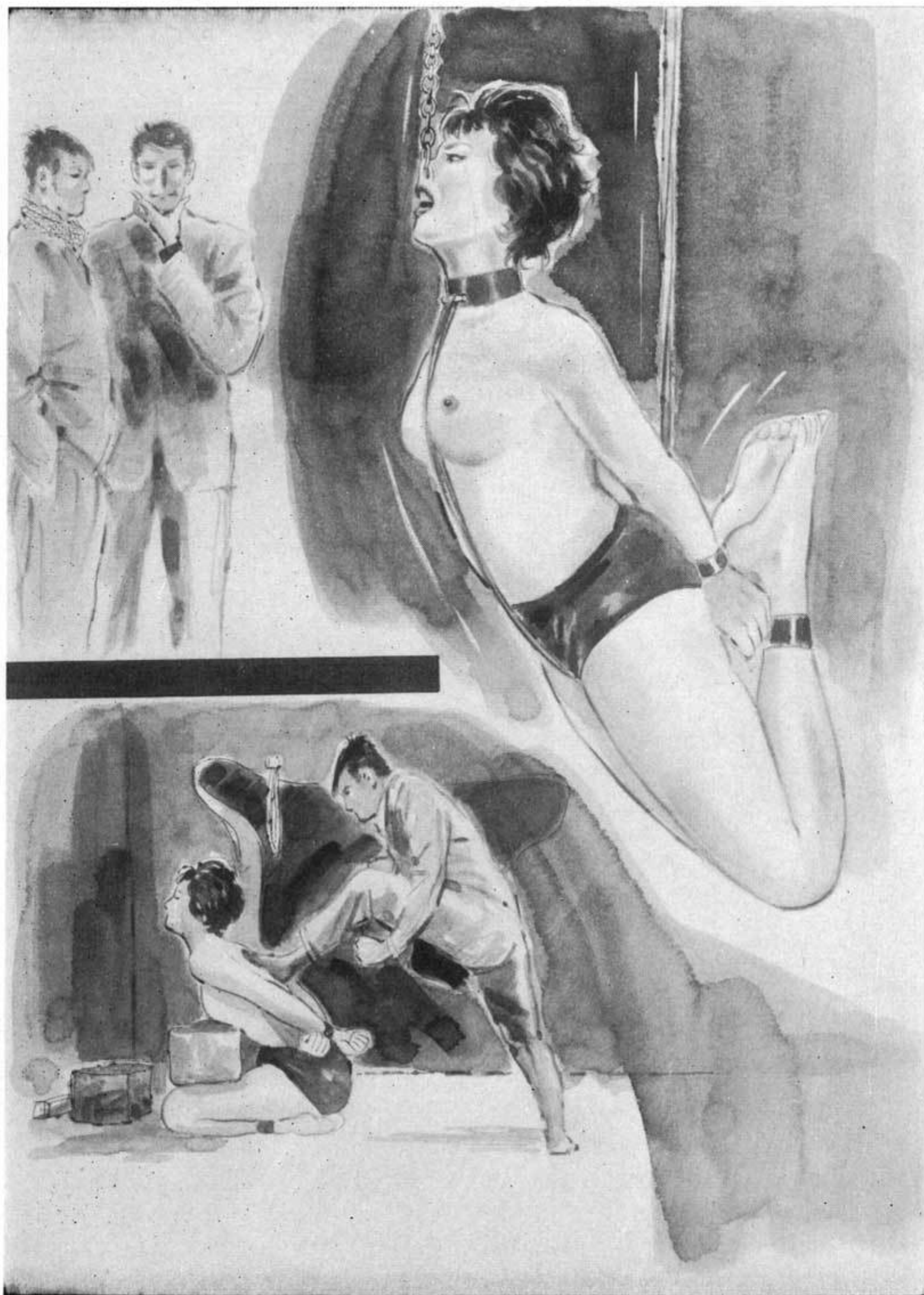
黒光りのするレザー張りの寝椅子に仰向けに縛られた。娑婆氣を脱ぐために先ず最初に灸療法が用いられる。これはどんな我慢強い娘でも一分と辛抱の出来ない効果的な方法であった。乳首の上の艾は火をつけられて次第に白い煙を立てはじめた。



美畜悠子の試煉

中村淳三・文 四馬孝・画

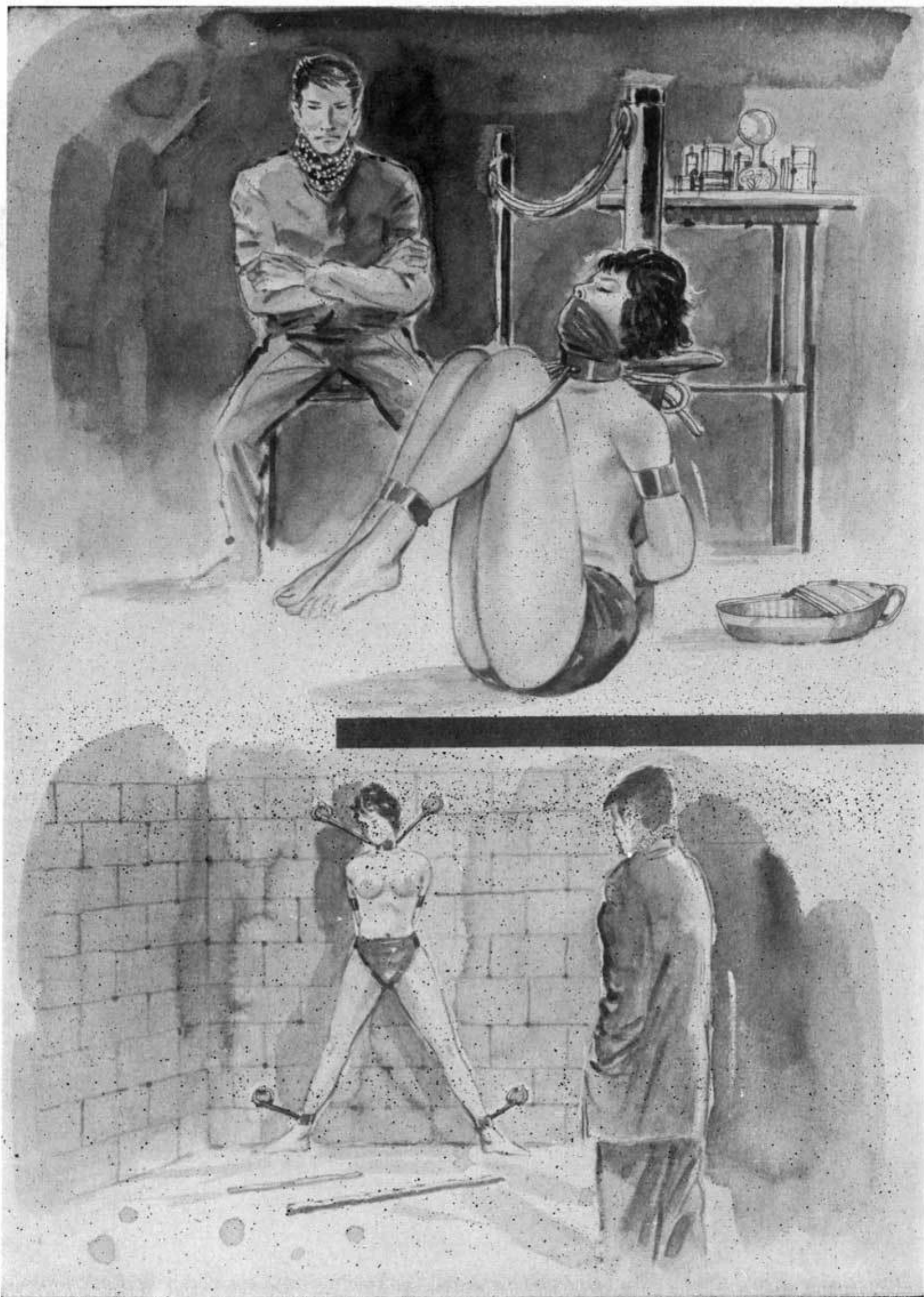
灸責めにの試煉を経た悠子は、次に鼻の障子に金環を通して人間性剥奪の第一歩を歩ませられた。天井から吊り下げられ、石塊を膝の上に抱かせられて悠子は呻めいた。肉体的な苦痛は、彼女をして従順な愛玩用動物として飼育するのに成功したようだった。



浣腸室の汚辱

中村淳三・文 四馬孝・画

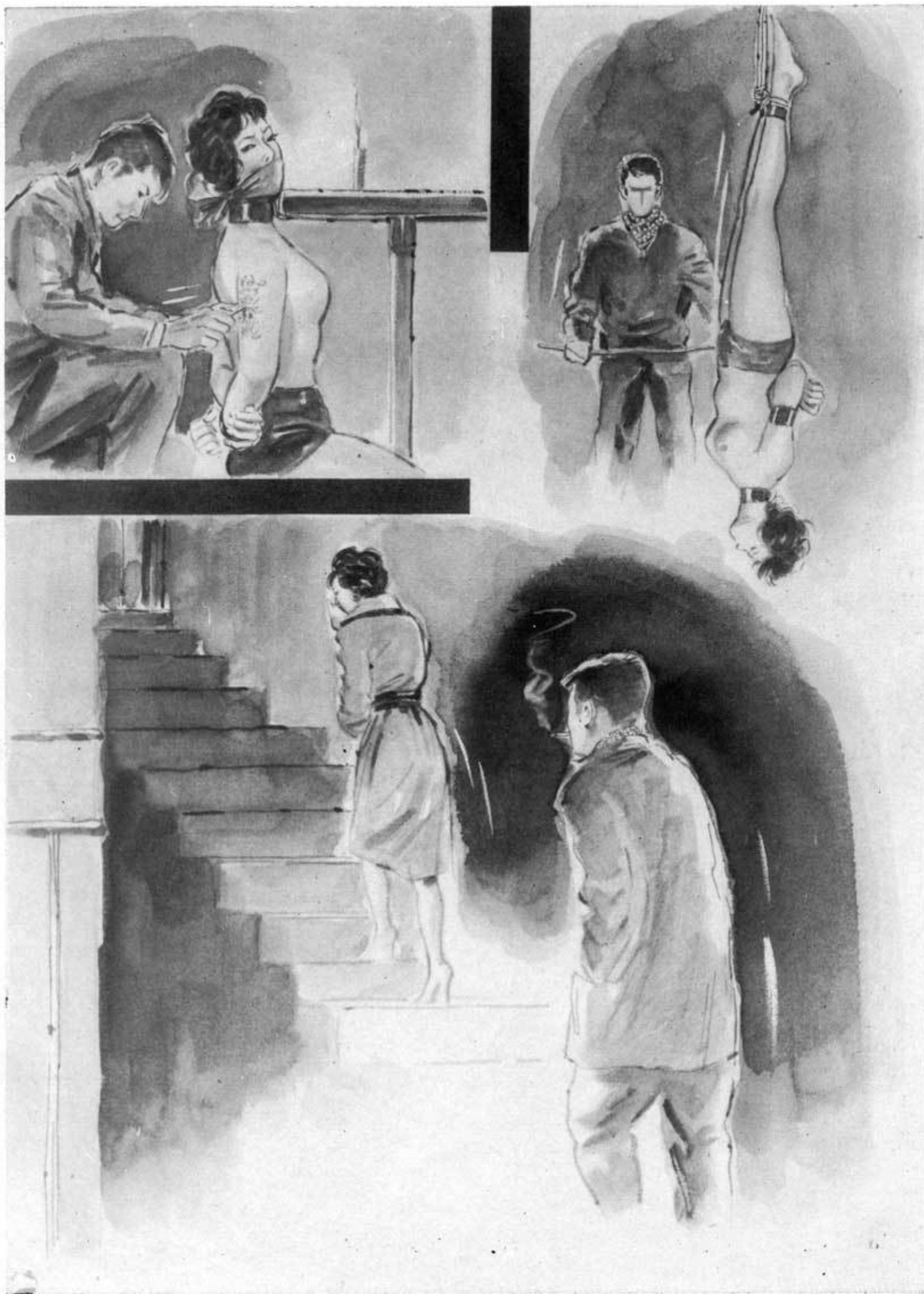
やがて身も心も泥まみれの汚辱の中にのたうちまわる運命にあがく「浣腸室」へ運ばれてきた。悠子の崇高な精神が悪魔の手によって微塵にうち砕かれようとする瞬間を冷然と眺めるように、浣腸の器具が並べられてある中に、彼女の脚が挙げられた。



外人向の烙印

中村淳三・文 四馬孝・画

あらゆる責苦に耐え忍んだ悠子は、その美貌と相まって、第一級のコールガールとして香港向けへ積出されるため、全身に外人好みの刺青を施されることになった。ボスは莫大な身代金を手にすることだろう。

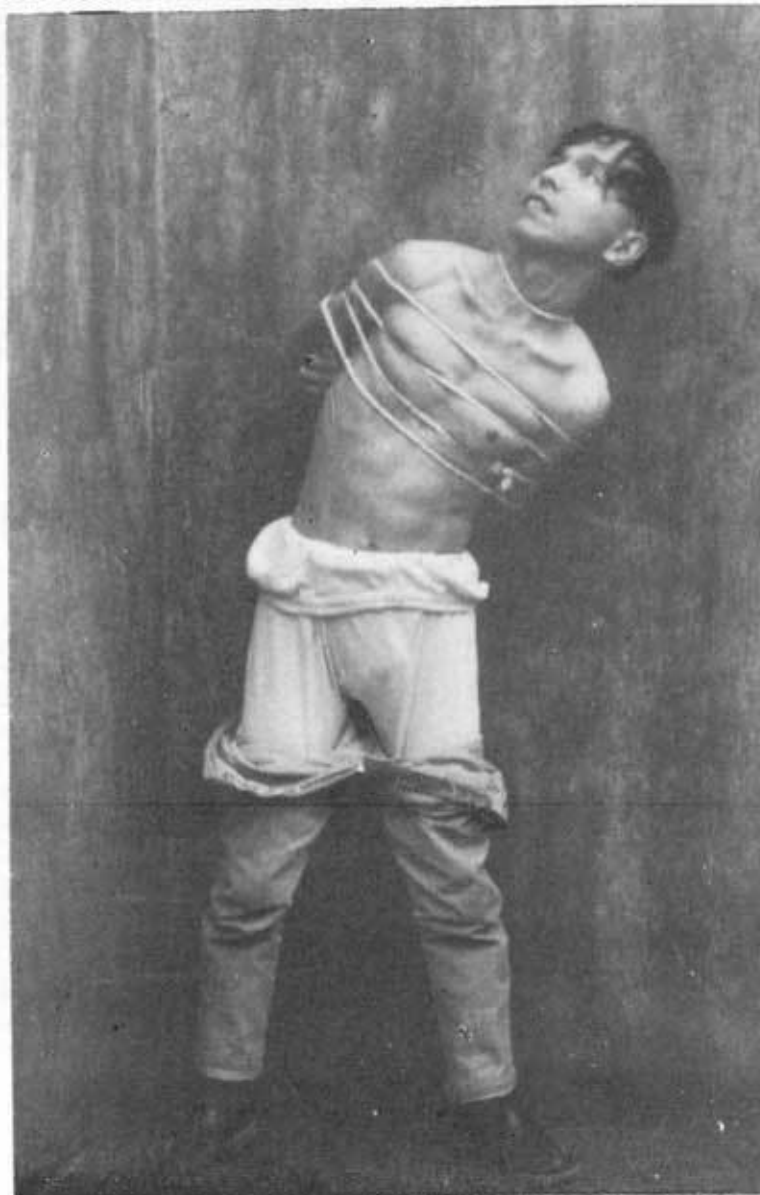




◇ マゾプレイのワン・カット ◇



男性緊縛 穴倉 幽閉 (その三)



女体エビ責地獄

(滝れい子・画)

深夜の温泉場で展開される妖しい悦虐絵巻、人気のない脱衣場で女中の幾代が湯で磨きあげた柔軟な姿態を番頭の祐吉から責められているのだ。全身を二つ折りになるまで締め上げられても、悲鳴どころか呻めき声さえたてぬところを見ると、今まで存分に責められた経験を持つ幾代だろうと思われる。





せむしの刺青師

(滝れい子・画)

「フッフ、このシミ一つない雪の肌針をおろすことが出来るのは刺青師冥利につきるというものだ。ドレドレ、おとなしくしてるんだゾ。今に、素晴らしい観音さまが、お前の背中へ鎮座しますことになるんだからナ」せむしの刺青師は、物に憑かれたように呟やきながら女の肌へ墨を彫り込んでゆくのであった。

北原純子。画

『折檻』



(1) 言い寄ってきたお客を嫌って自分の部屋へ逃げ帰ってきた美津子は…。(2) 大事な常連を袖にしたと、女将に呼びつけられて、お尻をさんざんにぶたれたが、なかなか女将の言うことをきかなかった。それでは、というので……。



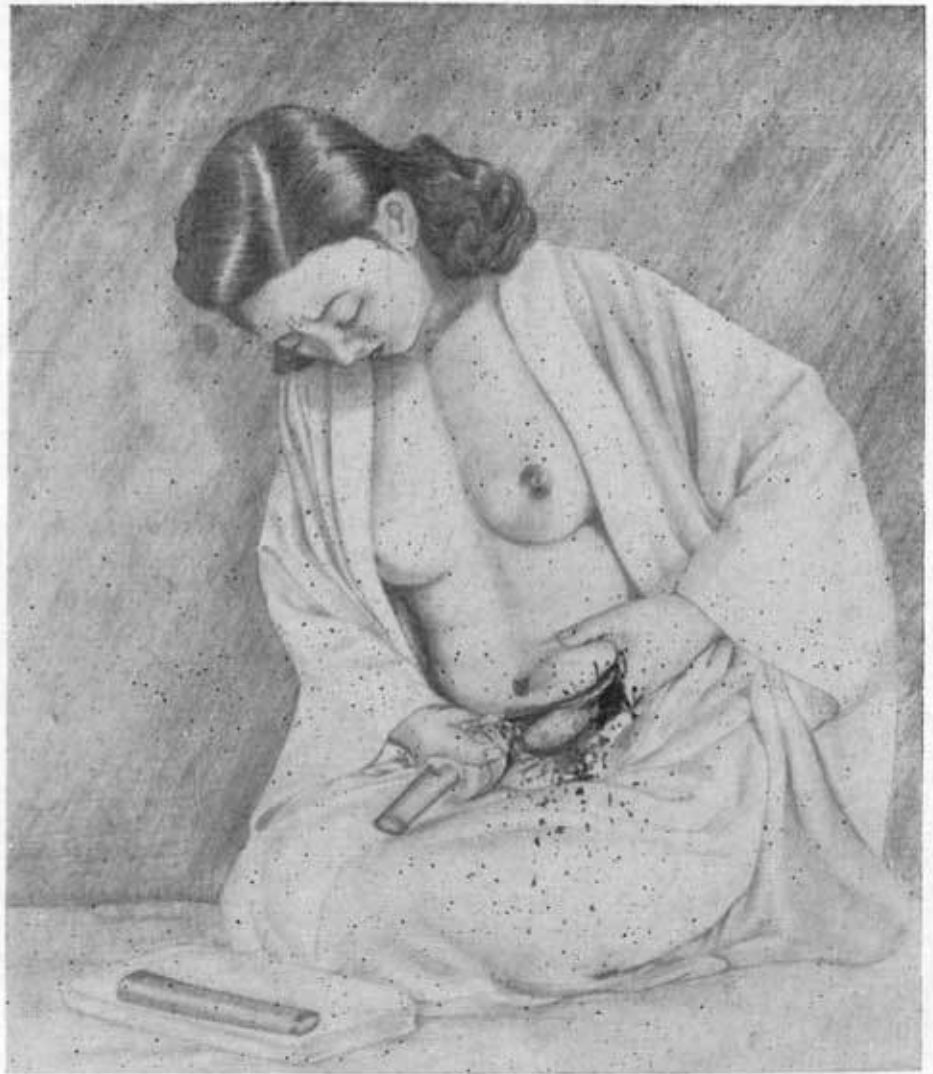
(3) 女将は仲居に手伝わして美津子をグルグル巻きに縛りつけ革バンドで、お尻をうんというまでも殴りつづけた。



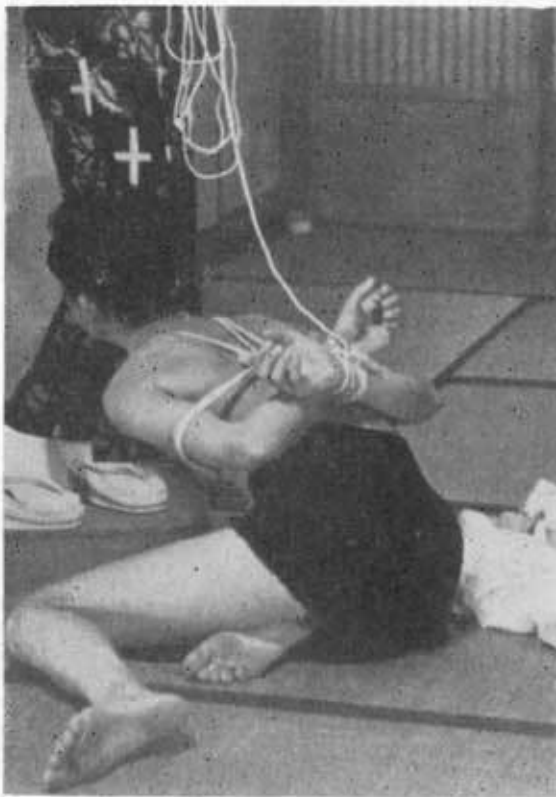
(4) 女将の言葉を半信半疑できいて離室へ来た男は、そこに満開の花のような華麗な光景を見て、驚きの声を挙げた。

読者提供の頁

女性切腹図



颯爽たる馬上の麗人



女性人形利用マゾフォト



組写真

異国船の密航者

塚本鉄三・撮影

杉原虹児・構成

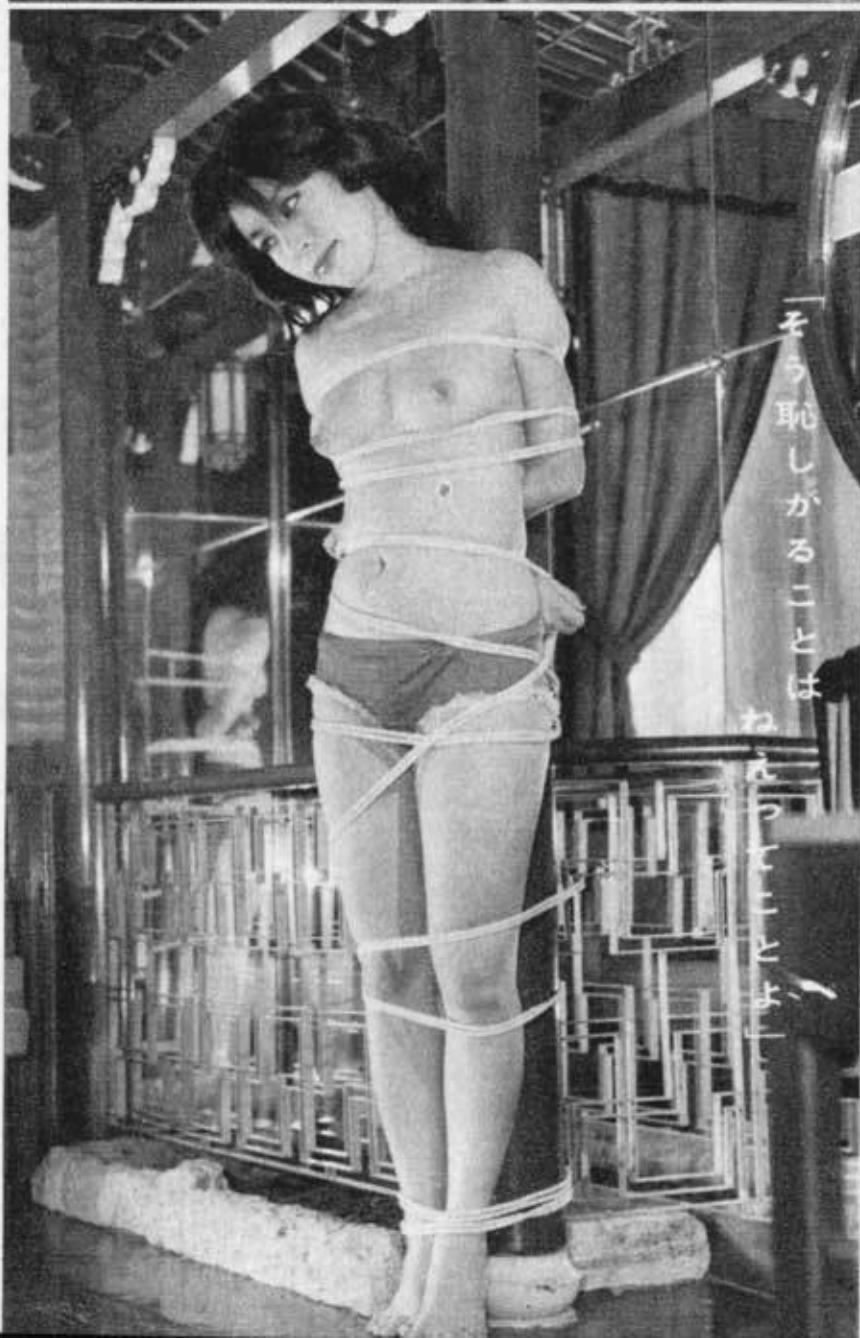


異国船の物置場から一人の若い女の密航者が捕えられてきた。早速船長室へ連れて来られると、高級船員達の視線にさらされながら身体検査が行われた。



「あごをあげてみな

きれいな肌をしてるナ」



そう恥しがることは

ねえってことよ



「どこからもぐり込んで来たか知らねえか、なかなか美しい女じゃないか。退屈しのぎに一つ目の保養をさせて貰おうか」

「バック・スタイルも中々いけるぞ、これだけのタマだったら、中近東あたりのサルタンに売りつけたら相当の身代金がとれるぞ、全く素晴らしいお宝がころげ込んできたものだ」



「もがいたって、あがいたって、
どうなるもんじゃねえ」



「そのチャームな目つきがたまらねえよ」

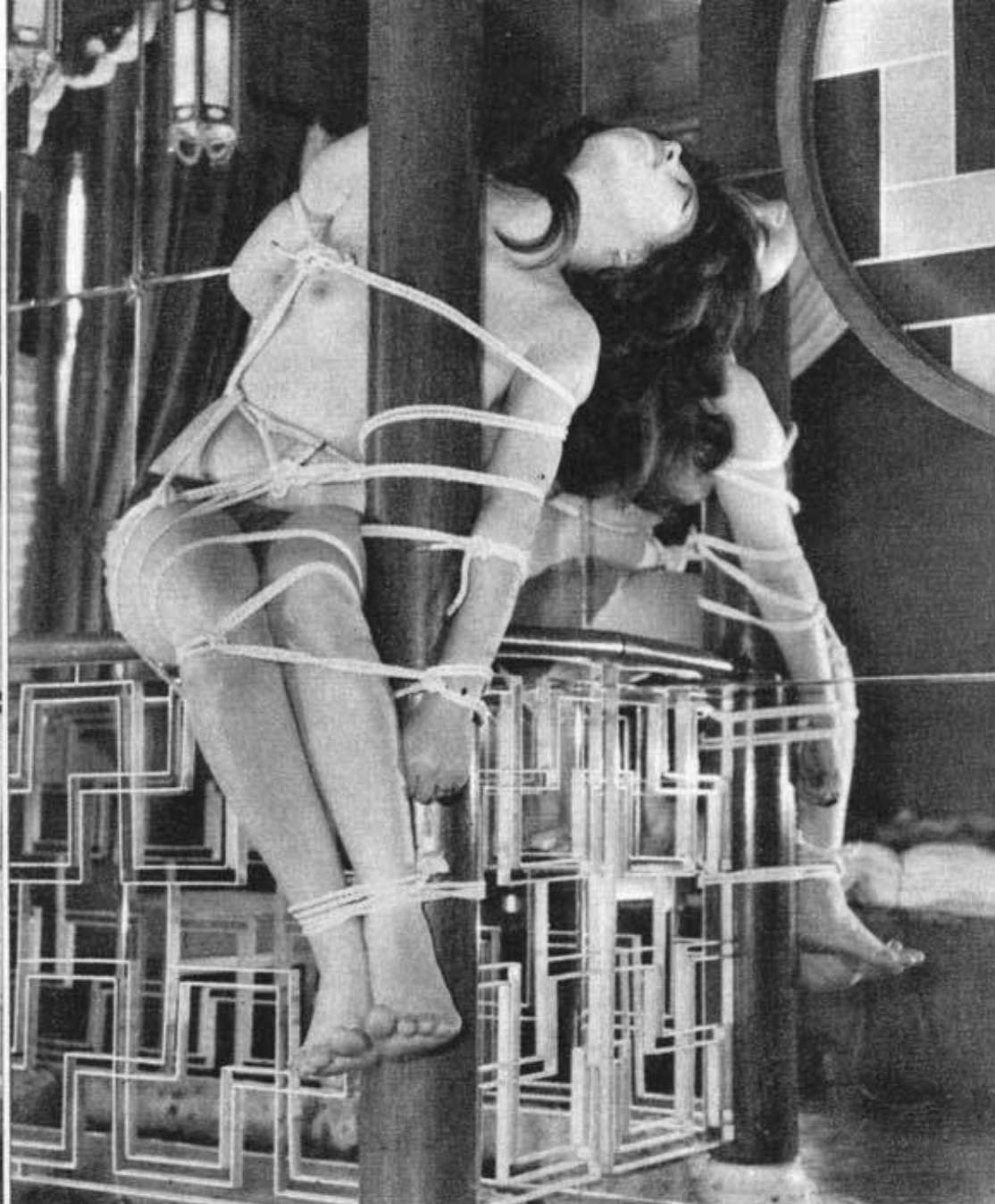
船室の見世物



「う、う、う、痛いワ、痛いワ、許して！」
「おお、その足が宙に浮いてそり反ったところが、
こたえられねえ」



モデル
絹川 文代



「こんなに私をいじめて、どうしようって言うの？」



「手が痺れてきたワ、早くほどいて！」

船長室の柱に縛られた女密航者は、名を知らぬ異国の港町で売り払われるまで、毎日毎日荒くれ男たちの見世物として翫られるのであった。

新入荷品陳列

モデル 津川路子

今度新しく生体家具が入荷しました。年齢19才、身長159センチ、体重46キロ、中肉中背で洋装のよく似合うごらんの通りの美貌です。今日は初めての陳列日です。パジャマ姿ながら、いろいろの角度からとっくりとごらんにいれます。



彫りの深い顔立は十人並以上？



陳列台にかしこまったところは神妙です



少々の縄目でも辛抱できるそうです



足がしびれて一寸行儀が悪いですが…



では、どうぞ御愛顧のほどを…



脚線美も満更でないでしょう



折檻場への道程

構成 辻村 隆

長い廊下を引き廻された挙句、地下にある折檻場への石段を歩まされた葉子は、そこでどんなお仕置を受けるだろうか。





これから
たんまり苛めてやるからナ



逃げようたって逃がしやせんぞ



さあ、この水を腹一杯飲んでみろ



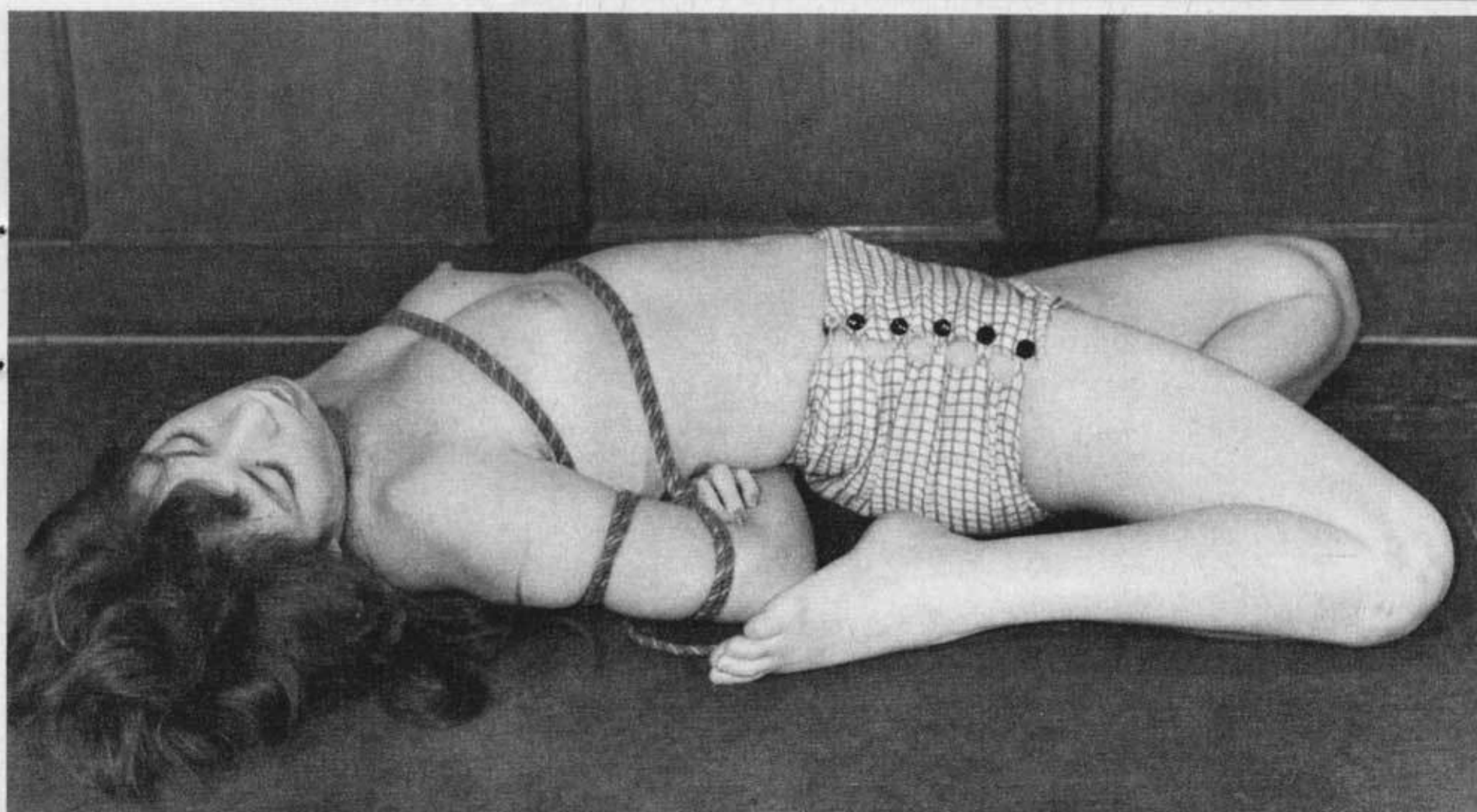
頭をふまえられた葉子は、只うめきながら許しを乞うばかりだった。水は息もできぬ位に次々と頭上から注がれるのだった。



どうだ、観念したか、



俺にもポーズをとらせろ



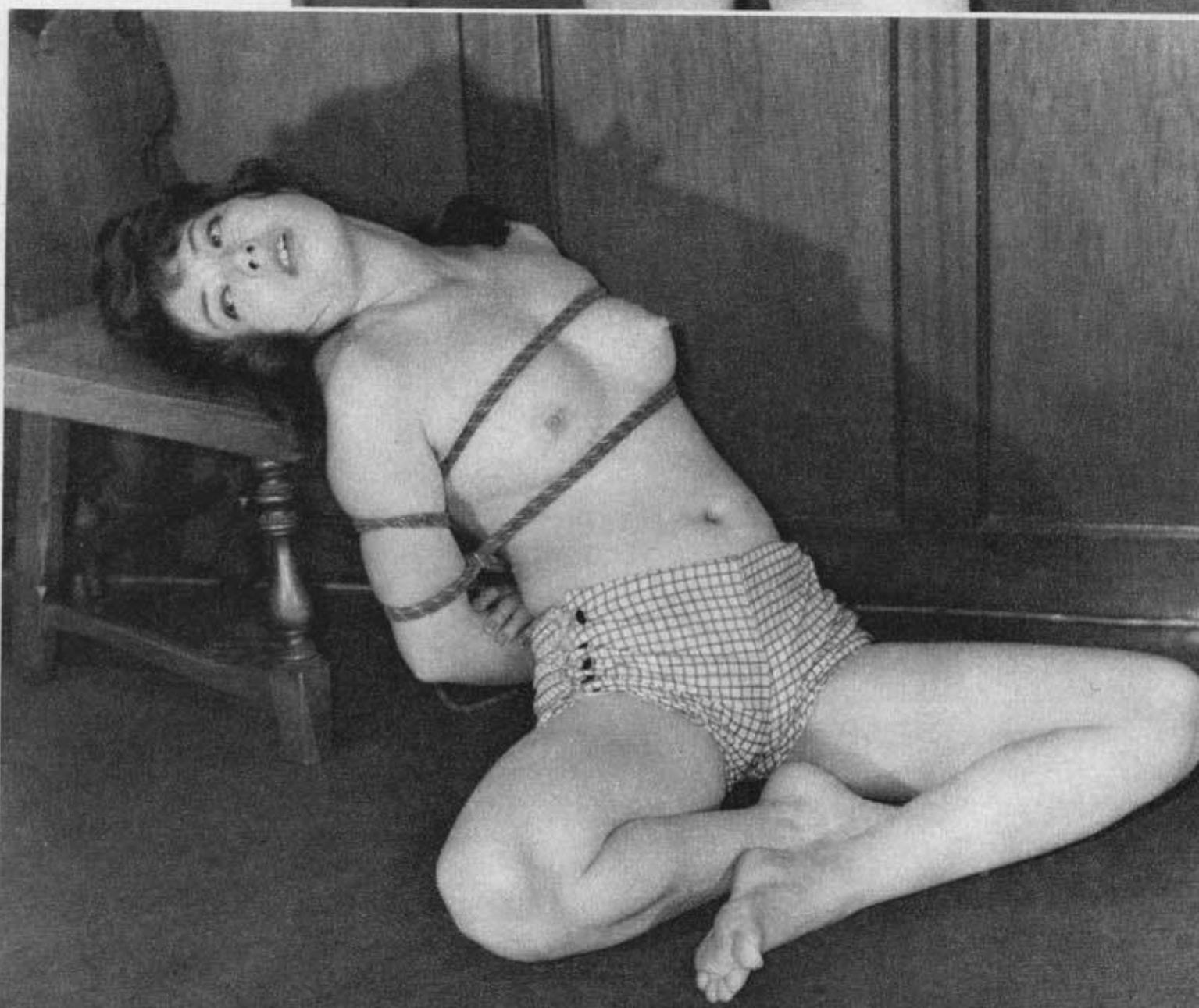
これがあの有名な美人モデルかね。中々素晴らしいじやないか。どれどれ俺にも一つポーズをつけさせろ、とっておきのアイデアでやってみよう。これこれ、もっと右足を挙げて、なに、もうこれ以上挙らん？



モデル 絹川文代



後手首もこの通りがっちり括ってあるから御心配無用



いささかグロッキー気味だね、こう早くのびてしまっ
ちゃ、どうも困ったものだ。

この目つきが千両！



かつくんときたかネ、



うっとりとした境地



この表情はさすがにベテラン



黒髪は乱れて

モデル
大塚啓子









縛られポーズの好演戯

モデル 春丘リル



初めての縛られたポーズにいささか固くなりながら、それでも指示された通り、中腰の不安定な姿勢で顔を上向けて瞑目した。

俯伏せになって後手首が上る



ぐるりと左へ廻って裾が乱れる



全身かくの字になった色気は満点



髪の毛の乱れたところは雰囲気がある

さるぐつわをつけたポーズとその点景



モデル

春丘リル



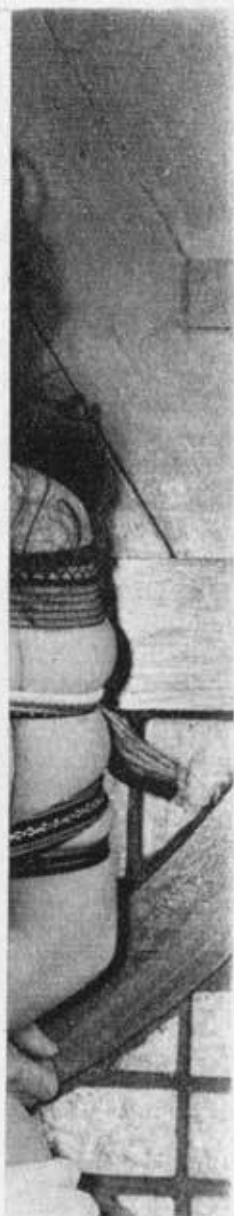
珍妙な首飾

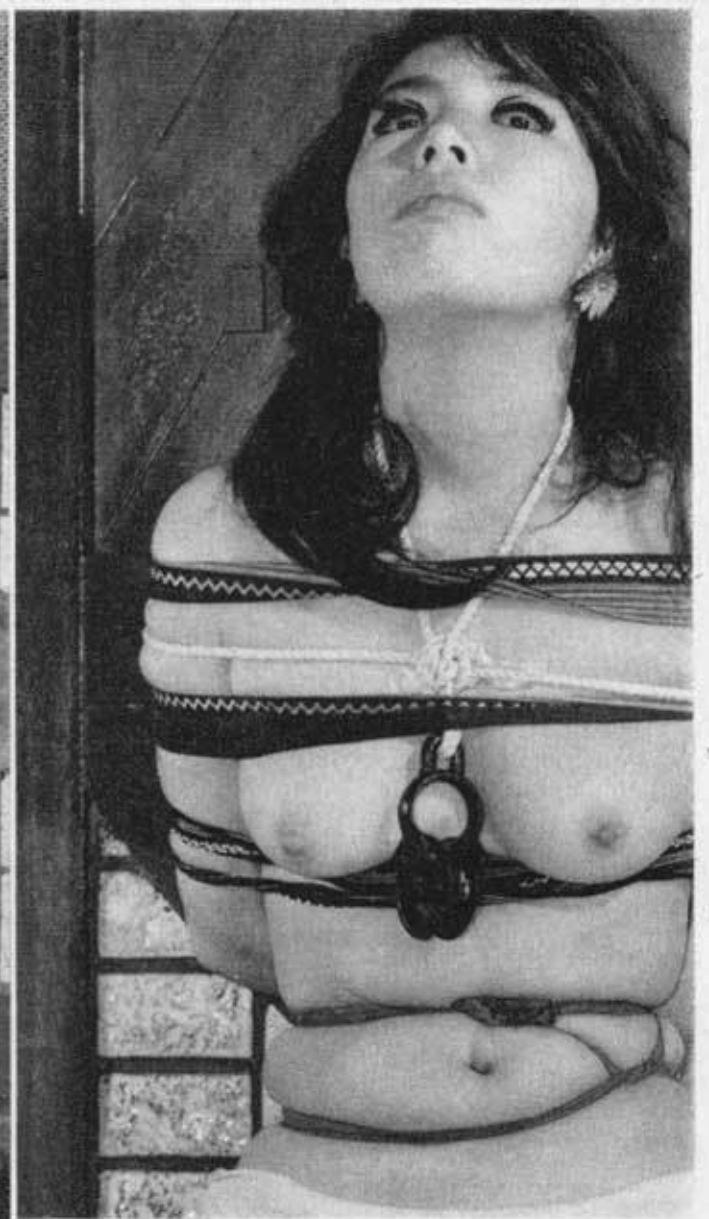
絹川文代
モデル

この首飾りを取った方にはあけてもいいことよ、



どう？素敵でしょう、この首飾り？





高 島 田

男性として生れながら十年余りも娘として暮し、幾人もの男性と交際し、果ては結婚さえ申込まれた杉江美津子さんにモデルになって貰いこのような写真を撮影しました。



モデル 杉江美津子

装縛

女緊

昭和三十三年

四月号所載

告白「私の生い

立ち」杉江美

津子を御参

照下さい。



縛り人形

このモデルはもうベテランであるから荒縄だってビクともしない。猿ぐつわをすると目を中心とした顔全体がいきいきと生彩を帯びてくる。高々と背中へあげた後手も緊縛感があってよろしい。

モデル 愛川悦子







新教祖様出現

又々新しい宗教が出来て、今日はその新教祖が始めて教話をする日です。こんな美しい教祖様だったら、さぞかし信者も急に増えることでしょう。





モデル 絹川文代



新しい文献研究誌

奇譚クラブ

麦秋増大号

1960年 7月 号

(第十四卷 第十一号 通刊第四百四十三号)





(絵物語)

白線地帯の「飼育室」

中村 淳 三・文

巻頭口絵物語、四馬孝画 白線地帯の「飼育室」参照

昭和三十三年四月一日から売春防止法が実施されて、か弱き女性の生血を吸って生活していた赤線業者は、巷から姿を消した、かに思われた。事実、今までのように「遊廓」とか「新地」とか呼ばれて、売春を業とする赤線地帯は表面的にはなくなった。

然し、売春業者が、この日本の町々からすっかりなくなったわけでは決してなかった。いや、むしろ、以前の「赤線」は曲りなりにも税金を納めて表面に出ていた業者であったのと異り、地下へ潜った白線地帯は、初めから巷の無法者として、そのあくなき暴力を縦横に揮ってやまなかった。実際、赤線がなくなれば、白線は独占事業として面白くように儲かった。

赤間岩造——彼は得意の暴力を利用して、可憐な女性を

悪魔の手に売り払う白線地帯のボスであった。暴力といっても、キヤバレーで酒を飲んで暴れるというようなチャチなものではなかった。配下の命知らずの若者をかりたてて目ぼしい娘を狩り集めさせると、一人前の奴隷女に仕立てた上、国内は勿論のこと、遠く外国まで求めに応じて輸出し、巨萬の富を擁する夜の王者であった。

この物語は、この恐るべき国際女性密輸グループの巧妙な触手に陥った悠子という美貌の女性の話である。場所は一応、神戸ということにするが、現在日本の大都市ともなれば、大なり小なり、かかる魔手が暗黒街に存在するものと思つて誤りはないだろう。

その日、悠子は三の宮へでも出て、何か買物をしようかと加納町の電車通りを歩いていった。空は日本晴、さわや

な新緑の微風が頬をなぶって足も軽い。突然、彼女は一人の青年から声をかけられた。須磨へ行きたいが、どちらへ行けばいいのか、と訊くのだ。電車でゆく道順を教えたところ、名古屋からドライブに來たのだが、神戸市内で道に迷ってしまったというのだ。

ダスターコートを無造作に羽織ったその青年の柔かい物腰にさそわれて、見知らぬ男と心にかかりながらも、つい断りかねて、近くの喫茶店へ一緒に入ってしまった。映画の話に音楽の話と気易くなって、ドライブがてら案内してくれということで、買物はそれからでもおそくはないと、揃って電車道まで出ると、歩道沿いに黒塗りの外国車が待っていた。

久しぶりの上天氣に空氣は甘く乾いていた。残りの桜も幾分、枝についていたが、それよりも新緑の樹々は素晴しかった。舞子の浜では淡路島が霞んでうるんだように見え高級車は快適のハイウェイを疾走していった。須磨から明石を回って、再び神戸市内へ戻ったときは、薄墨色のもやの中に、イルミネーションの灯が美しく輝きはじめていた。

車が滑り込んだのは、彼女の見知らぬ山手の邸の中だった。いや、彼女が見知っていたとしても、すでに陽の落ちた街をぐるぐると回られたのでは、見当はつかなかっただろう。

変だ、と気がついた彼女が、大声を挙げようとした時、ぐるりと周りをとり囲んだのは、一癖も二癖もありそうな

面がまえのヤクザ風の男三人だった。

「静かにして、こっちへ来ナ」

「いや、いや、放して。私をどうしようっていうの」

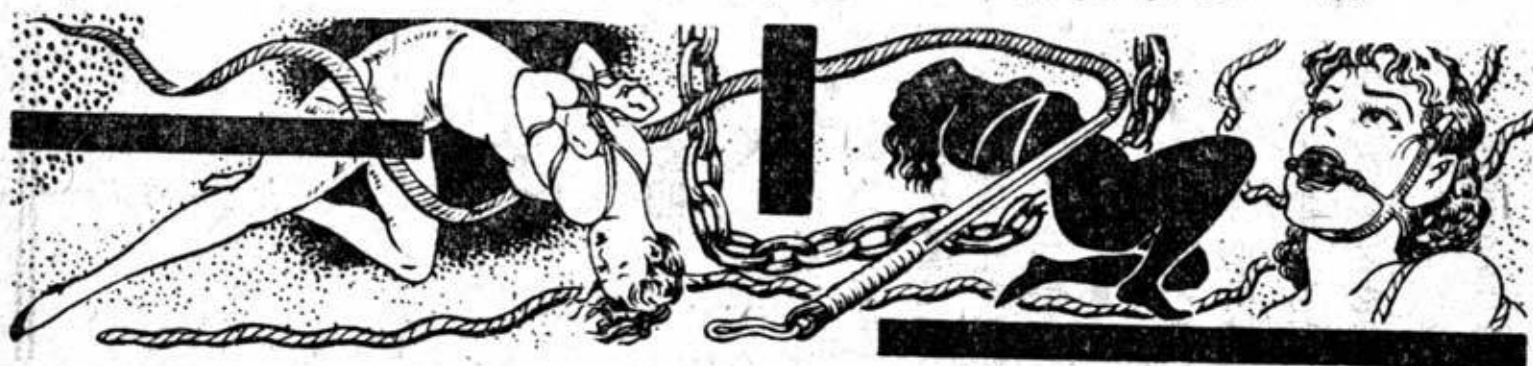
そういうなり、忽ち頬に激しい平手打ちをくらわせられた。先の青年の姿はすでになかったが、あったとしても、何の足しにもならなかっただろう。彼こそは、赤間岩造の手下で「ハンサムの房」と呼ばれる女狩の手先だったからだ。どん、と背中を突かれて強引に連れ込まれた二階の奥まった部屋には、悠子と同じ年頃の娘が二人、物におびえたように、小さくなってふるえていた。

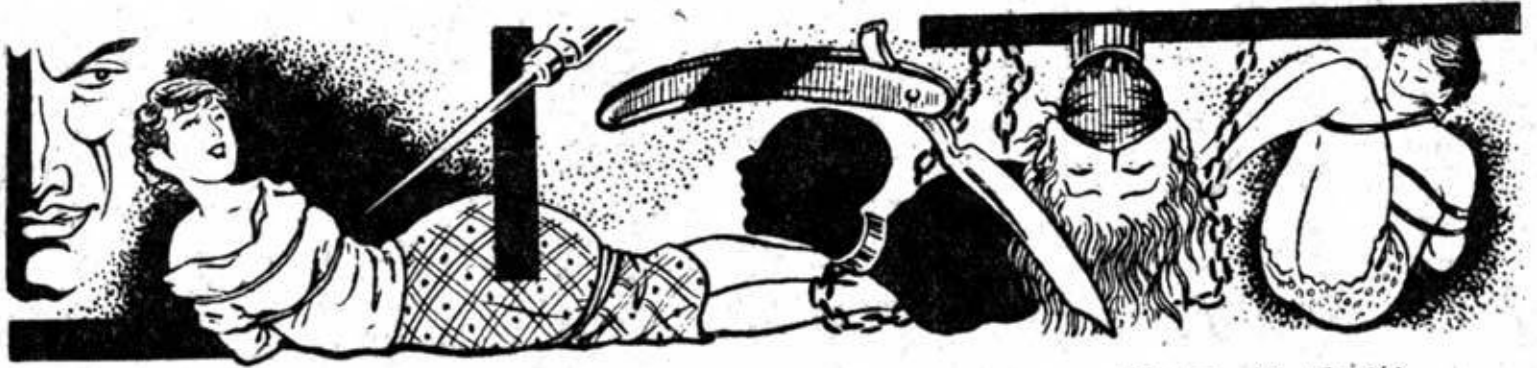
「今度のは上玉だから、注意してな——」

二人の娘も悠子と同じように、うまく欺まされて誘拐されてきた良家の娘であった。ここを逃げ出さなくては、身の上に大変なことが起るといふ予感が、期せずして三人の胸の中に湧いてきた。窓の戸は難なく開いたが、木立にさえぎられて闇だけがそこにあった。

私がこの窓から逃げ出して警察へ届けて貴女達を助けにくるからと、身軽な娘がカーテンを引きさいて結び合わして紐を作った。紐をたよりに窓口から、するすると暗闇の庭へ下りていったが、運の悪いことにその真下は男達の溜り場になっていたので捕まりに行ったようなものだった。

掴まえられた娘には、むごたらしいリンチが待っていた。よってたかって、このピチピチとした娘の洋服がはぎとられ、麻縄で手足をまるで荷物のように、きりきりと括られてしまった。





「いや、いや、いやッ」

力のかぎり暴れまわったが、彼等はそのはかない抵抗を
楽しむかのように、ゆっくり時間をかけて念入りに縄をか
けていった。然し裸にむいて縄をかけただけで、この私刑
が終ったわけではなかった。二人の男が身動き出来ぬよう
に娘を押さえつけると、一人の男が緑の黒髪を無惨にも、
鋏で刈りとってしまった。

「おい、こんな虎刈りじゃ、面白くねえ、いっそのこと、
つるつるの尼さんにしてしまえ」

ひい、ひい、悲鳴を挙げてもがきまわるのを、三人がか
りで押さえつけ、とうとう剃刀で剃ってしまった。

階下でこんな騒ぎに熱中している頃、二階の部屋では、
悠子が何んとか逃げだそうと苦心していた。

さっき悠子たちの様子を見に来た男が、あわてて部屋の
鍵をかけ忘れたのを知った彼女は、そっと廊下へ出てみ
た。彼等に気づかれず、うまく入口へ辿りつくことが出来
たら、と虎の尾を踏む思いで、降り口を探しているところ
を、張り込んでいた見張りのチンピラに見つかってしまった。
いや、偶然ではなく、彼等が折檻の口実を見つけた
めわざとドアの鍵を掛けないでおいたのかもしれない。

えたりかしこしと、後手に縛り上げた。

「逃げようたって、ここは簡単なことでは逃げられねえ
んだぜ。さっきの娘はな、この髪をよ、一本残らず刈り取ら
れて、ツルツルテンの禿頭ってわけさ。お前も、そんな姿
になりたくなかったら、大人しくしてるんだナ。みせしめ

に、俺のムチを受けてみるかー」

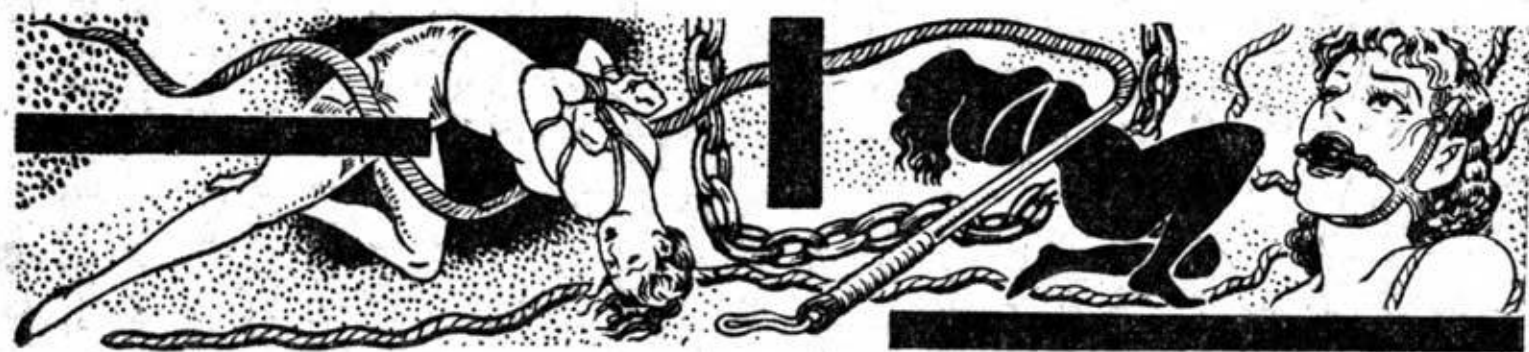
容赦なく苛酷なムチが、降りそそぐ。

この屋敷の地下室には、「飼育室」と呼ぶ奇怪な一劃が
あった。ここでは拐ってきた純真無垢な娘を一人前の商売
女に仕込むためにあらゆる設備が整っていた。今迄、この
「飼育室」でどれだけの女が血の涙を流し、奴隷として仕
込まれたことだろう。

悠子は自分自身では何にも知らなかったが、香港からの
特別な注文で岩造が特に選んだ白羽の矢が悠子に当たった
め、わざわざハンサムの方に命じて誘拐させてきたのだ。
それで、「飼育室」の今日のお客は悠子が上客というわけ
なのだ。ひんやりとした地下の空気の中へ追い込まれると
悠子は素裸にひんむかれて、皮手錠、皮足枷とをはめられ
た。奇妙な皮パンツを直接肌につけられた時は、その冷た
さに思わず悲鳴を挙げた。

この類稀な美貌のいけにえは、これから身も心も入れ替
えて一丁の生人形として男の玩具になる運命に訓練されて
ゆくのだ。いや、この部屋の名前の通り飼育されるといっ
てもよい。人間はその環境と教育によって、どのようにで
も変化させられる。殊に順応性の強い女性は、極めて容易
に馴致することが出来るものだ。

岩造たちが莫大な身代金で世界各国へ密輸するこういっ
た生人形も、初めのうちこそ、泣き喚めき手をつけられな
いものだが、この飼育室で訓練すれば、見違えるように従
順な動物に生れ変わってくるから妙だ。このように飼育済の



白いけにえに対する需要は無制限にある。上物は目玉の飛び出るような値段で外国の白線業者へ売り飛ばされたが中物以下は、いくらでも国内で引受け手があった。

黒光りのするレザーをはった寝椅子には両脇に尾錠のついた皮バンドがあつて、女体をどんな姿勢にでも固定することが出来た。外科の手術室を思わすような、さまざまな道具といつても、殆どが責具なのだが、ずらりと恐怖をそそる光りを放っている。

真白い悠子の身体が、黒い寝椅子の上に仰向けに固定された。両手首両足首は勿論のこと、脛、膝頭、腹部、胸部と弾力性のある強靱な革バンドで締められているので、もう身体をよじることさえ出来なかった。口には革の玉をくわえさせられ、その両端に伸びた革の棒が頭上で固定されたので、顔さえ自由に曲げることは出来ない。

娑婆の毒気を抜くという岩造の案で、先ず最初に灸療法と呼ぶ灸責めが、悠子の身体に加えられることになった。最も効果があるということ、肌に灸痕を残さないということのために、乳首の上に艾がすえられた。

全身を一本棒のように仰向けに伸ばされ、眼の前の乳首にこんもりと艾をすえられては、如何に気丈な女でも、火をつけられるまでもなく悲鳴を挙げてしまうものだ。悠子は健気にも、じつとこの暴挙にたえていた。男の手にしたマツチがすられ艾に火がついた。

もやもやと白い煙が目の前で立ちはじめ、次第に盛んになりだした。まだ乳首にはつきりと熱さは感じないが、煙

を見ながら、それを待っているのはやりきれない気持ちだ。無意識に身体をよじりたくなるが、なめし革のベルトは全身をがちりと寝椅子に固定しているので、身じろぎさえ出来ないのをさすると、悠子の全神経は、今、白い煙を上げている乳首に集中せざるを得なかった。

ツ……と頭のとっぺんにしみとおるような熱さが襲ってきたかと思うと、ジワジワ、ジワジワと、次第次第に、その陰性の熱さが肌を焦してくる。

急激に迫ってくるのではない、徐々に加ってくるその熱さは、割に耐えられそうに思った。煙が一段と多くなってくると、思わず、ううう、うう、と鼻からのうめき声を出した。何かしら、声を立てていると熱さが軽減されるような錯覚に捉らわれて、悠子はさかんに喘ぎぎうめいた。

男は、そんな悠子の姿をじつと嗜虐的な目で眺めていた。煙はだんだんと薄くなり、それにつれて悠子のうめき声もしなくなつた。全身が足の先から頭の先まで痺れるような刺戟だった。そして、それが終わってみると、甘美な一瞬の衝撃のようにも悠子には思えるのだった。

が、しかし、悠子に対する彼等の「飼育」がこれで終わったわけではない。いや、むしろ、これが序の口で、これから次々と戦慄すべき数々の苛酷な責めが憐れむべき犠牲の試験として行われようとするのであった。

これから、その一部を紹介して、悠子の被虐の姿を見てゆくことにしよう。

灸責めで娑婆の毒気を抜かれた悠子は、艾の灰を吹きと

ばすと、今までとは変りない姿であったが、その心は、すでに飼育の第一歩を踏みだしているといつてよかった。従順に寝椅子を下りると、回転椅子に掛けさせられ、鼻中隔へ直径五ミリの穴を開けられた。すぐ金の環を通されると隣室へ連れて来られた。乳首へ灸をすえられることを思えば、この方は苦痛といつて大してなかったが、鼻の穴へ環を通されてみると、自分が人間界を離脱して牛か馬の世界へ転落したようで、ここから逃げだそうという気持が、失われてゆくのを、彼女自身不思議に思うくらいだった。

彼等にしては、女に鼻環をつけることによって、美しい従順な愛玩用動物として飼育できるという狙いが先ず成功したわけであるが、これからの訓練は、この白い美畜が、より高価に取り引きされるための仕上といつてもよかった。

飼育係は、この絶世の美女を思いのままに泣き喚かせ、加虐のかぎりを尽して一人前の白い奴隷として商品化することに、胸をわくわくさせるような昂奮を覚えずにはいらなかった。天井を這っているチェンブロックがガラガラと響を立てて悠子の真上に移動してきた。後手に皮手錠をされている彼女は、おびえた目で天井を見上げた。

その目は、人間から動物へ変化する哀願の視線であった。後手にフックがかけられ、悠子の白い全身は軽々と宙に浮いたが、重心が頭にあるため、ガクンと前のめりになって後手を中心にくるくると廻り出した。忽ち鼻環がたぐられ鎖で天井へ、じりじり、じりじりと吊り上げられる。鼻の力がこのように強いものとは悠子も知らなかった。捻

じ上げられる痛さに、ポロポロと大粒の涙をこぼしながらも、体重の三分の一を鼻の先だけで耐えられるよう宙に吊られているのであった。

こうして鼻で体重の半分にも耐えることが出来るようになれば、この生人形である愛玩動物は飼主に鼻環をとられたままで自由に連れ歩くことが出来るわけで、外国向として密輸するときは、この鼻環の有無が取引価格に影響することが多かった。

革製の首環は女体を固定するために、あらゆる場合に使用して便利だった。

悠子の身も心も泥まみれの汚辱の中に沈ませ、その心に奴隷としての烙印を焼付けるために、洗腸室へ連れて来られた。その部屋にある道具を見たとき、さすがの悠子も、身もだえして激しく抵抗した。然し、荒くれ男たちによって皮紐がしめつけられると、はかない抵抗をあざ笑うように、悠子の意志に反して彼女の身体は杭に奇妙な恰好で固定されてしまった。

今迄悠子の腹中にあつたものを残らず強制的に排出させて、今後は特別な飼料によって飼育しようというのである。絶食をさせると折角の見事な女体を損う恐れがあるので、娑婆で摂取したものを急速に体外へ排泄させるために、下剤と洗腸、それに洗腸が繰り返されるのだ、若い女性が荒くれ男たちの手によって、このような強制が実施されるということは、全く目ざましい嗜虐場面の展開といつてよかった。



悠子の消化器管は何度も何度も微温湯で洗滌され、宿便もすっかり排出させられた。口から肛門に至る長い管の中には、水分の外はもう何一つ固形物がなくなるまでに悠子は身も心も、くたくたにすりへらす数時間の苦行を耐え忍ばねばならなかった。腹の中のもの何にもなくなってしまうと、悠子は全身の力が抜けて虚脱状態に陥った。

三人の飼育係の男は、そんな悠子を抱えあげて壁へはりつけた。首環と足枷は、こんなとき誠に効果的にその役目を果たした。腹の中を全部きれいになるまで洗い浄められた悠子は、今度は身体の外部をホースから進り出る温湯で洗われるのであった。全身に石鹼を塗りまわられて泡をたてると、タイルばりの床の上に天井から温湯が降りそそいで石鹼の泡が流されていった。

愈々最後の仕上げは、最も強烈な試練ともいえる逆吊りの責めである。

逆吊りは血液が頭へ逆流するため、長時間放置されると顔面が充血してやがて失神してしまうものだ。

しかし、悠子に与えられた逆吊りは、長時間の辛抱に耐える訓練ではなくて、飼育者のムチの動きによって、吊られた足を中心に自ら円を描いて、いろいろな運動をする調教であった。体内の老廃物が全部排出せられているので、こういう調教にはまことに好都合であった。身軽に前に身体を二つ折りに膝のところ迄曲げたかと思うと、反動でぐらりと胸をそらしたりした。飼育者はムチを片手にふりながら次々と奇妙な逆吊りの体操を強要していった。

地下の「飼育室」に於ける悠子に対する飼育は、これで終りを告げた。完全に所期の目的である愛玩動物に仕上げた岩造は、注文主の求めによって、悠子の全身に、純日本的な桜の花と富士山、それに浮世絵の美人を極彩色に専属の刺青師の手によって彫り込ませるのであった。

色白で、ぼったりと皮下脂肪ののった悠子の肌は、ほんのりと凝脂がういて指でさわればつるりと滑るような感じだった。刺青を入れるのには、おあつらえ向きの生肌である。勿論、悠子は刺青などは生れて初めての経験である。全身にこんな刺青を彫られてしまったら、もう二度と以前の悠子として世間を渡ることには出来ないだろう。

チクリ、チクリ、

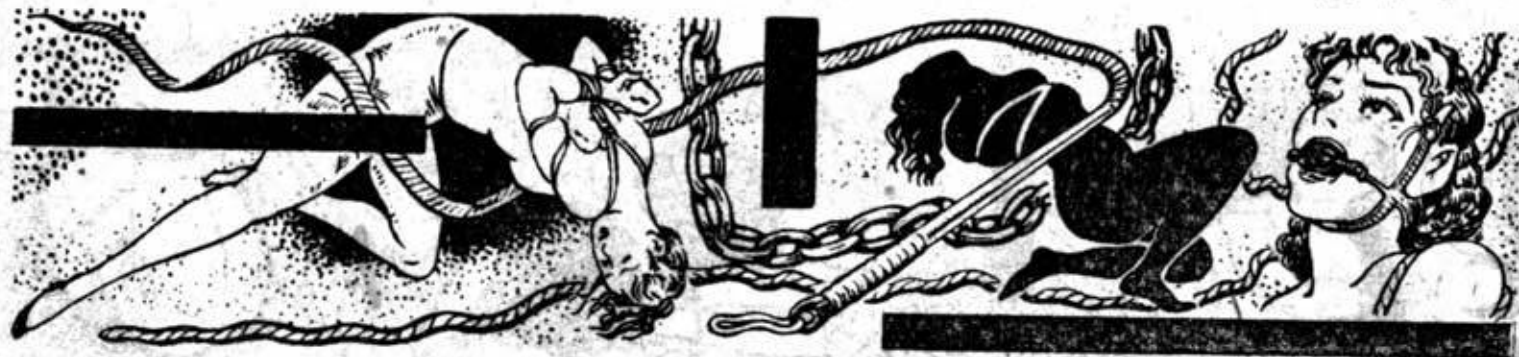
背中にしみ透る痛さをこらえながら、そんな悲しみが悠子の目を涙でうるませた。自分の玉の肌に、もう消すことの出来ない絵柄がいや応なしに刻み込まれている。その言いようのない苦痛が幾日も続いた。

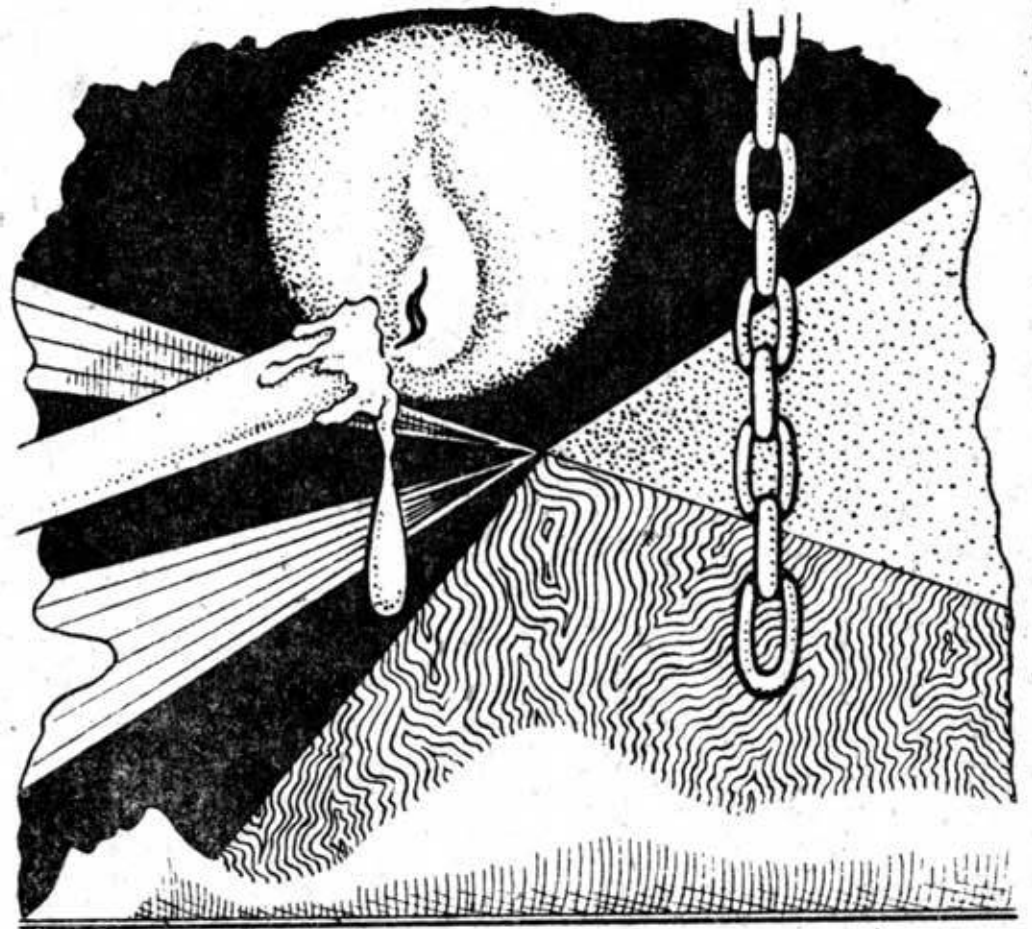
しかし、どうしようもない自分の行末に諦めを感じると、直接肌の中へ針を刺し込まれる痛さが、自棄的な快感となつて、悠子の官能を掻くのであった。

あの日、絶望の暗い気持を抱いて下りたこの地下への階段を、今や身も心もすっかり生れ変わった生人形としての悠子は、新しい人生を生きるため、階段を一步一步、力なく踏みしめてゆくのであった。

階上の部屋では、予想外に高価に取引出来たことで上機嫌のボス岩造は、輩下の若者たちをねぎらいながら祝杯を上げている最中だった。

(おわり)





|| 随 想 ||

不死鳥に似て

|| 松 井 籟 子 ||

朝、目をさましたとたん、しのびこむように恋人の面影が心に一杯にひろがってしまう。経験は、恋をした人なら誰でも持っていると思う。

町を歩いていても、不意に生き／＼と恋人の面影が目の前を横切ったりする。あんまり突拍子もなく、不意にあり／＼と幻がみえた

りすると、彼に何か変事があったのではないかと考えてしまう。

そんな思いによく似て、不意に頭へひろがってくるのが悦虐への希求なのだ。

まさか、いつもいつも、縛りたいとか、縛られたいとか思っているわけではないのだが、新聞の小さな記事からそれを思ったり、

電車の中の、ほんの一寸したシーンから別の連想が浮かんだりする。

だから、私にとって悦虐は恋人なのかもしれないと思う。

そして、私が人を深く愛すると、おさえてもおさえてもその恋心がむく／＼と頭をもたげてくるように、悦虐の思いなんてものもい

いかげん飽きそうなものなのに、なか／＼飽きてくれない。不死鳥のように、たえずよみがえてくるのには、我ながら感心してしまう。

この間、少しひまが出来たので、早春の伊豆をおとずれてみた。

修善寺からバスで天城山を越えて下田へ出る途中に、浄蓮の滝というのがある。上からみたら、とりわけ美しい滝とも思わなかったが滝壺まで細い道をおりと、しめっぽい土の匂いの中に春らしいふくらみが漂って、滝のまわりの山の様相が、深山のようなたたずまいで、他に人がいなかったら、たしかに美しい滝だと感歎したろうにと、観光バスからはき出された人の多さが残念だった。

滝には男性的なものと女性的なものとあるが、この滝は優美な感じで、いかにも女性的だった。

そして、その私の感じを裏書きするように傍の立札に由来が書いてあった。

そこに昔、浄蓮寺という寺があったのだそう。

バスの時間があるので走り読みした為、今、私はその由来をくわしく此処へ書く程は

っきり覚えていないのだが、その寺の主が、或いはこの滝の主が女郎蜘蛛だったというところが、とたんに私の体を刺戟した。

ひとりの木樵が偶然、道に迷ってこの滝のほとりへ来ると、美しい女が出て来て、彼の足に糸を結びつけたというのだ。

木樵がその糸を、そっとといて、そばにある大きな木の切株に結びつけておくと、すさまじい力でその切株が引かれ、滝へすいよせられていったという。

立札に書かれている童話のような伝説が、私の頭のスクリーンへ別の映像となって出てきてしまうのは、私がよっぽど夢想家だからなのだろうか。

蜘蛛が糸をかけてゆくように、その木樵の体へ縄をかけていつてみたくなるのだ。

木樵は粗末な衣服をつけているかもしれないが、あまり陽の当たらない山の中で仕事をすることが多いから、その肌は陽やけしていないで、きつと白いきれいな肌をしているだろう。

上に着ているものが、垢によぐれ、土によぐれていれはいる程、袖をちぎり、裾をちぎって、だん／＼にあらわになってくる肌は、

美しく見える筈だ。

手首に縄をかけて木の枝へ結びつけ、足へ縄をかけて切株へ結びつけ、男はだん／＼手足の自由を失ってゆく。

この場合、縄といっても、それは蜘蛛の糸のようにキラ／＼光るナイロンの紐のようなものの方がいい。

勿論、男は抵抗する。しかし、女郎蜘蛛には毒気のようなものがあって、男の抵抗は空しいのだ。

女郎蜘蛛は美しい女の姿をしていた方がよい。現代風にびったりと体についた黒いタイツをはいていても良いし、歌舞伎の衣裳のような小袖を着て、地面まで届きそうな長い黒髪をしていてもよい。

右の手首を高い木の枝に結んだら、左の手首は反対側の横の茨に結ぶ。茨の刺が男の手首に血をにじませる。

足も動けなくなったら、女は男の着ているものを引き裂く。

ビリビリ、ビリビリと、順に引き裂いてゆくのは、男にとつて何の苦痛でもないのにまるで苦痛を与えられるような軽いさけびが男の口からもれるだろう。蔽っていたものをと

られるということは、不思議な刺戟であるはずだ。

女は時々蜘蛛の正体をあらわして、男の体を這いまわる。這いまわる度に、男の体を縛る紐がふえてゆく。

蜘蛛かと思うと美しい女であり、美しい女であるかと思うと醜い蜘蛛になる。

男の胸も腹も太腿も、がんじがらめに紐をまきつけると、蜘蛛は一番おいしそうな所へ口をあてて、男の生血を吸う。

苦痛と、痺れるような陶醉が男の全身を走る。恐怖と快楽が一つになって、男の体は奇妙な戦慄に波打つ。そして、地面の底へ落ち込むように、男は氣を失ってしまう。

他の木樵の仲間に男が発見された時、男の体にねばつこい何条かの筋がついている他は縛られたような痕跡がなく、仲間はその木樵が毒虫にでもさされて、一時、氣を失っていたのだらうと思う。しかし彼は女郎蜘蛛を求めて、浄蓮の滝のあたりを毎日のようにさまようだろう。

私は自分がマゾヒストだと思っているくせに、こんな空想をたくましくする時は、自分をサジストの位置へおいている。

しかし、どんな場合でも私の空想は美しいものを求める。だから、いくら悦虐でも汚物を食べたり食べさせたりするのは厭なのだ。

女郎蜘蛛と木樵に悦虐を空想して、こんなことを書くと、大変異常なようだが、縄とか紐で縛りつけたくなるから異常なのであって、それを使わずに能や歌舞伎で用いる銀色の蜘蛛の糸を投げつけるだけにとどめたら、私の考えるような場面は、そのまま、日本舞踊にもバレエにも構成出来ることだと思う。

これに似通ったものは古典の中にいくらかもある。その作者達が、本当は舞台上の上の嘘の嗜虐よりも、もっと生々しいものに希求をもっていたかもしれない。それを秘め通して、舞台上のきれいごとで我慢していた人も多いのだらうと思う。

何故なのだろう。

悦虐ということは、それ程恥ずべきことなのだろうか。

縛られてみたいという思い、縛ってみたいという思い……。何度考えても解らない。

しかし、そういう思いがセックスから全然切りはなされたものではないことは解る。だから恥しいのかもしれない。

縛られた体の上を蜘蛛が這いまわるということを考えてみても、這いまわりたいのか。這いまわらせてみたいのか、よくわからないが、それは蜘蛛でなくて、ブラシでもたわしでもいいと云えるのだ。

ただ縛られるだけではなしに、別の手がそこへ加えられることを望むのだ。

やはり、それは肉体の刺戟なのだろうか。ただ縛られて、ころがされているだけでは肉にくいこむ縄の痛さしかないが、その上さらに、たわしでこすられるとか、ブラシでくすぐられるとかしたら、身をよじって、思わずうめき声をあげてしまふだろう。それを快い陶醉に思うのは、やっぱり異常というより他に云いようがないのだろうか。

私は私の異常さを知っている為、通り一ぺんの浮氣が出来ない。といって、男のように娼婦をかいに行くすべもない。健康な肉体は正常な欲求を持つ。それをおさえていることが、異常な欲求を激しく感じさせるものになるのか、まるでにわとりと卵のような関係で我ながら解らないのである。

滝というものが、すでに嗜虐的な意味を持



北子
画

う。

外国の宗教で、無理やり頭を水に浸ける儀式があったり未開人の宗教では随分、残酷な法則があったりする。

高い台の上から足に縄をつけてとびおる成人式のようなものを映画で見たことがあるが、仕置として行ったら別の色合いのものになるだろう。

足に縄をつけて逆さまに高い櫓からつきおとし、何時間かそのままにぶらさげておいたらどうだろう。櫓が高ければ高い程、人間が虫のように見える。

滝に打たれる行にしてもそうだ。

手足が自由で、白衣を着た姿で合掌しながら滝にうたれているのを見ると、清浄なものが生れる。

をかけたなら囚衣のようなみじめさが生れる。鎖でもいい。どうせ滝のおちているような所

っている。

行の為に滝に打たれるのは、しいられたことではないから被虐にも加虐にもならないだ

ろうが、全く被虐的陶醉がないといえるだろうか。

宗教には何かしら悦虐の匂いがつきまと

は岩が多いから、鎖が岩に当る音が悦虐のムードを高めてくれるだろう。

修験者がはいたという鉄の下駄を見みたところがあるが、体に鎖を巻かれ、足に鉄の下駄をはかされて、滝壺で歩かされたら、何度か転んで、岩肌で手といわず、足といわず傷付けるに違いない。

両手を前にしろ、後にしろ、一つにくくられて、急な山道をおりてゆくことは、それだけでも危っかしいことなのだ。まして重い鉄の下駄を足にはかされていたら、転ばないで行けと云っても到底、無理な話だろう。そして転んだら、岩角で傷付く以上に、自分の拘束する鎖によっても傷付くはずだ。

こういう情景をもしマゾヒストが、自分一人で設定しても、はたして本当に悦虐ということになるのだろうか。

被虐に満足を感じるには、必ず加虐者がいなければならぬのではないかと思う。

だから、もし、仏道修業の行として、自ら鉄下駄をはき、重い鎖を腰にまきつけて滝に打たれたとしても、人によってはあくまでそれは修業であって、悦虐ではないかもしれない。

しかし、その修験者が、もしマゾヒストだったら、そこに誰もそれをしている者がいなくても、しいられているという空想のもとにその行為にある満足を感じられるのではないだろうか。

同じ行為が、そうした紙一重の考え方の違いで、純然たる求道にもなり、又、おそらく女色を禁じられていたろうと思われる修験者達の自慰的行動にもなったのではないかと思う。

私は自分をマゾヒストだとみとめているのに、歯医者へ行くのが大嫌いだ。

歯をガリ／＼やられたり、細い針のようなもののさきで、虫のくった歯の穴をさぐられるのは、痛くなくても痛いような気がして二の腕が総毛立ってしまう。

そこで、つい歯医者へ行くのが億劫になり、治療がおくれる。

この間、知り合いの歯医者で世間話をしていたら、商売柄、歯医者は私の歯に目をとめて、今のうちに歯石をとって手入れをしておかないと、若いうちから総入歯なんてことになりますよと、おどかされた。

仕方ないので歯医者の椅子は拷問台だと思

って坐ってみようと思った。

首はうしろから出ている支える器具でぴたっと固定されるが、私は更にその首に幾廻りか縄をまかれて動けないのだと自分に云いきかせた。

腕は腕木の所へかせていると、右側は治療する医者の邪魔になるので腕木の下へおろし左だけはそこへぐる／＼まきになっているのだと思った。

足も足首をベルトでしめられ、胫にも腿にも縄がかかっているのだと思った。

そして私は、どんなに痛くされても白状しない女隠密のように、観念の目をとじた。

しかし、次の瞬間に、私はいつも、受皿の上のつた歯科の治療器具から、目をそらしたくなることを思い出した。

よし、今日はそれもやめなければいけない。そう思うと、メスや金づちや、針の並んでいる治療用の盤を正視することにした。

それも、無理にそれを見なければいけないと加虐者にしいられているつもりになった。

私の目は上へつりあげられて、またたきが出来ないようにセロテープで眉と一つにはられていと思うことにした。

身動きも出来ず、またたきも出来ず、私はこれから何分も何時間も、口をあけていなければならぬのだ。歯医者は次々と私の歯をいじりまわし、痛いめにあわすのだ。たとえ気が遠くなっても、私は逃れることは出来ないのだ。——そんな風に思っ、私は私の嫌いだっ歯の治療をたのしむことにした。すると、あつけない程、痛くなくすんでしまった。

明るい歯科治療室で、拷問の空想をしたなんて誰も知らないだろう。

もし、歯医者が私の空想を知ったら、どんな顔をしてあきれるか、おかしくなった。

私の悦虐の思ひは、こうして、時と場所の如何によらず、不意にむく／＼と首をもたげてくるのである。

そのくせ、そんな空想をたのしんでもいい場所では、案外、私の不死鳥は大人しくしている。

伊豆の旅でも、浄蓮の滝でつばさをひろげたのに、下田の了仙寺では、かえって静かだった。

了仙寺はエロ寺として有名なので、私もこの寺の歓喜天像のことは知っていたし、一度

見たいと思っていたが、歓喜天や淫具の並んだ宝物殿の一方の壁が、伊藤晴雨氏の絵でうめられているのは知らなかった。

「ほう」「すごいな」「ふーん」と、大勢の参観人は口々に短い感嘆の言葉をはきながら晴雨氏の絵に見入っていた。

水責め、石責め、吊し責め、割竹責め、さらし者……おそろく責めと名づけられる、ありとあらゆるポーズがえがかれているのに、私の気まぐれな不死鳥はそつぽをむくようにして、居眠りをつづけていた。

「こんな所に晴雨さんの絵があつたわよ」

と、私は私の不死鳥にささやいたのだが、「珍らしくもないでしょう」

と、いたって冷淡な態度しか示さない。

ただ、私と一緒にいった生みの父親がこの絵を見て、

「ほう、伊藤晴雨の絵だね」と、たちどころに云ったことを、ふと氣にとめた。

その絵のかけてある壁のはじに、晴雨氏の名は明示してあったが、多くの参観人はその名に不案内らしかったし、まして、絵を一目見て、晴雨氏の絵と指摘した人はその場には一人も居なかつた。

それなのに、父がそれを云ったのは、了仙寺以外の場所ですうした傾向の絵を父が見たことになる。すると、もしかしたら、父にもアブノーマルなものが多少はあつたのだからかと思つた。

七十才になる老年の父からは枯淡なものしか感じないので、父とアブノーマルな思ひを結びつけて考えられないのだが、若い頃に、もしかしたら……と思うと、私が先天的に悦虐に興味をもつのも、遺伝であるかもしれないと思つた。

こんな思ひは前にも父が初期の谷崎文学を愛好していたことから、疑問をもつたことがあるが、たま／＼伊豆と一緒に旅して、了仙寺の晴雨氏の絵から、再びその疑問を強くするに至つた。

私の疑問に何か回答を与えてくれる識者なり、或いは経験をお持ちの方があつたら、語り会ってみたいと思つている。

編集部氣付で私宛にお便りを貰えたら、私は、私なりの意見を加えて直接又は誌上でお答えしたいと思う。

(おわり)

懸賞「告白と手記と体験記」入選作品

宇宙服と私

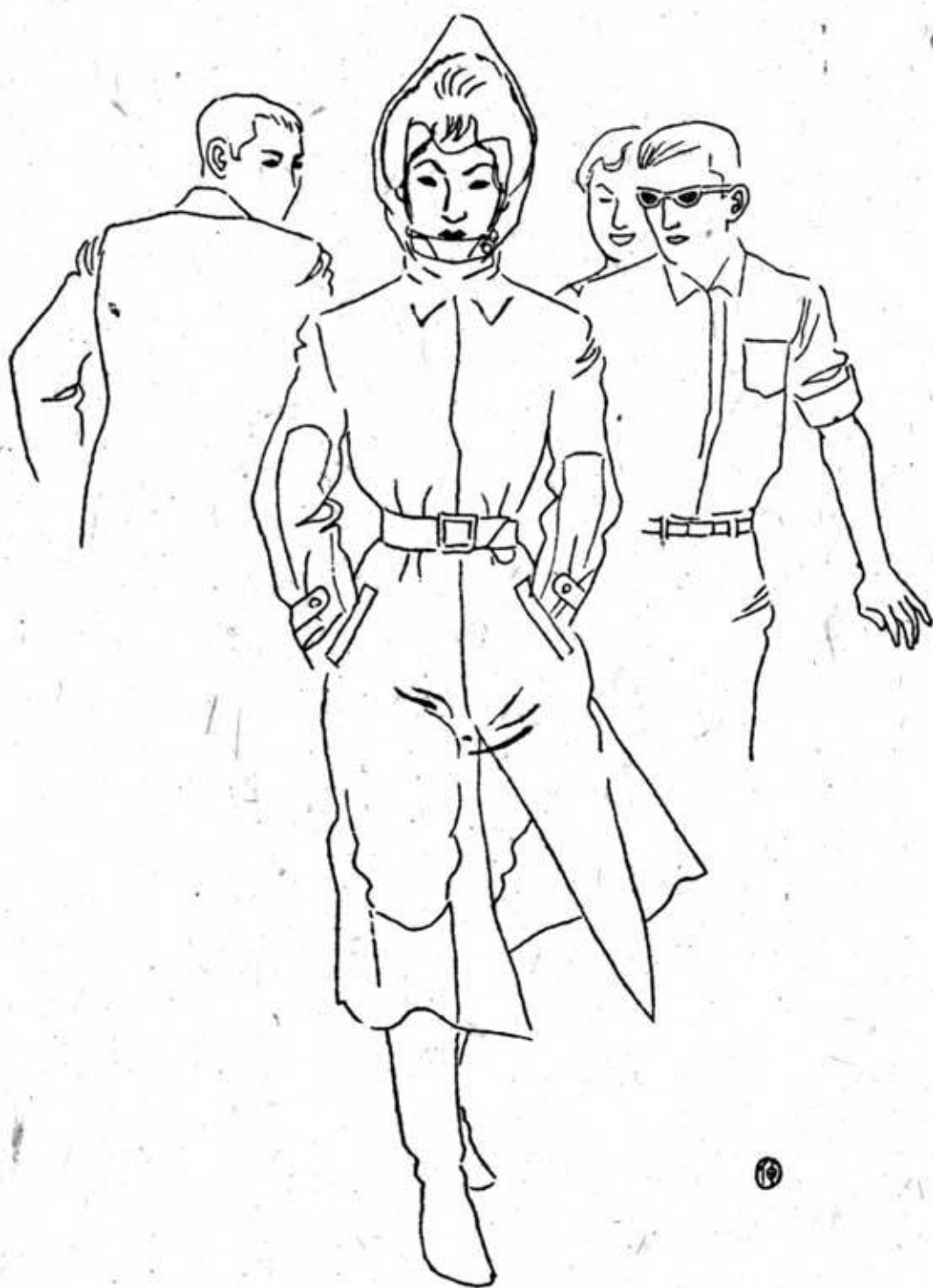
飯田靖子

灰色の雲が一面に拡がり、今にも降りそうで降らない梅雨空の下きょうもまたN駅は朝の出動時で人の波をつぎからつぎへと吐き出しています。雨模様とは言え、むしむしする天候にどの人もせいぜい折畳みの傘ぐらいを持っているだけで、ほとんど白一色の軽装です。その人の波にもまれながら、深々とフードを下したゴム引の真赤なレインコートを着て、黒いスラックスの裾をこれも赤いレインブーツに差入れ、まるで死刑囚のように歩いている女がいます。彼女の額からは一筋二筋と汗が流れています。改札口で定期券を見せるためコートから出した彼女の手は白いレースの手袋をはめてはいましたが、そのレースの模様の間からは一種異様な光沢のある黄色味がかかった皮膚が見られます。彼女はレースの手袋の下にあの医者が手術の時に用いるゴムの手袋を

ピッタリはめているのです。何故、彼女はこの蒸し暑い季節にこんな姿で歩いているのでしょうか。人々はいぶかしげに、しかし半分は好奇の眼で彼女を眺めて行きます。その度に彼女は恥かしげに眼を伏せますが、不思議にもその眼は異様に輝きます。一体、彼女は何者なのでしょう。もうこれ以上、他人事のように言う事は止めましょう。彼女こそ、わたし飯田靖子なのです。

私の異常な体験は、かつて本誌にも掲載されましたが、あのいまわしい太平洋戦争末期のことです。私はある化学会社に動員され、真夏の炎天下、毎日、十代の少女の身にちっとも空気の通らないゴムの上衣、ゴムのズボン、ゴムの手袋、ゴムの長靴、そして防毒面と言う完全な防毒服装を着けさせられて働かねばなりません。周囲の人に「ゴム人形さん」と言われながらも、いつしか私はこの奇妙な姿に魅せられ、人知れぬあやしげな気持を感じるようになってしまいました。戦争が終り平和が再びやって来た現在でも、私のゴム人形に対する異常な欲望は衰えず、かつて益々烈しくなるばかりなのです。それで私は一寸でも雨模様の時はゴム引のレインコートにレインブーツ、そしてゴムの手術用

手袋をつける事によって、この異常な欲求を満たたそうとしているのです。そして二、三年前からある小さな宣伝社——とは申しましてサンドイッチマンの紹介やあっせんをしている会社——にただ一人の女事務員として雇われ、更にあの異常な欲求を満たたそうとしているのです。どのようにして——一寸お待ち



下さい。ともかくこれから話します私の体験談をまずお聞きになって下さい。そうすればサンドイッチマンの生活に、私がどのようにして異常な欲求を満たたそうとしているかがお判りになるでしょう。

二

ゴム引のレインコートに包まれ汗にまみれて、私はN駅から地下鉄に乗りU駅で降ります。ここから程遠からぬ国電のガード下に私の勤めている宣伝会社があります。まだ誰も顔を出していません。私はロッカーの前でフックを外し深々と下したフードを取ります。汗の臭いと共に、汗にむれたゴムの臭が私の鼻を刺激します。ベルトを外しボタンを外しゴム引のレインコートを脱ぐと、その臭いは一段と強くなります。そうです。この臭いとこの感じが私を夢中にさせるのです。私のあやしげな血を燃え上らせるのです。あのゴムの防毒服をやっとの事で脱がせて貰った時と同じ臭い、同じ感じなのです。私は暫く、我を忘れて、うっとりします。しかし、皆が間もなく出勤して来るでしょう。私は手早くゴムの手術用手袋を取り、レインブーツを脱ぎます。ブラウスもスラックスも大分汗に濡れています。手早く脱いで事務服と——。いいえ、そうではありません。皆が出勤して来るまでに掃除をしなければなりません。これは普通の会社の女事務員と同じ事でしょう。ただ私の場合はその服装が異様なのです。髪をビニールの風呂敷で包んで紺デニムの上下統きの作業服を着て、男物のゴムの長靴、腰ま

であるような長いものを履きます。その上からゴムの胸当まで付いた前掛をし、作業用のゴム手袋をはめます。「トイレの掃除をします」と、わざわざ申し出て、こんな姿になる事を理由付けた私は、何と因果な女なのでしょう。木自由なゴム手袋でホースを握り、バサバサとゴム前掛を鳴らしながら、私は腰まであるゴム長靴で懸命に洗い廻るのです。やっとの事で掃除が終る頃、事務の人たちが出て来ます。

「ヤッチャン。毎日、衛生局員のような姿でホントにご苦労さん」

と、ひやかし半分に声を掛け、汗にまみれた私の顔を覗いて行く人もあります。私は泣きたい様な顔をしますが、胸の内はドキドキしているのです。九時頃、ゴムくさい汗の臭いを満喫した私は、今度はサッパリとお化粧を直して事務服にスカートと言う普通の事務員の姿になります。それから夕方までは、私は普通の女事務員として勤めます。こうして毎日勤めているある日のこと、私は再び、あの戦争中の防毒服の想い出を満喫させて頂く事が出来たのです。

三

その日も矢張り蒸し暑い六月の末でした。お昼前、N駅前にあるT会館の宣伝課長のIさんが、大きな包みを部下に持たせて見えられました。Iさんは、T会館で上映する映画の宣伝にサンドイッチマンを使うため、日頃からよく私共の会社に見えられるのですが、この日もその事でした。

「社長。今度は一寸毛色の変ったのを頼みたいのだが――」

「ホー、どんなンだい。」

「知ってるだろうが、今度、ウチでやる映画『宇宙征服』って言うヤツなんだがネ」

「ウン、知ってるよ。仲々前評判がいいらしいネ。それで人工衛星でも飛ばせるって言うのかい」

「いや、宇宙服――例の潜水服みたいなヤツさ。あれを着せて歩かそうと言うンだが」

「ナルホドね。しかしチャチな宇宙服じゃつまらんよ。とんだマンガになるよ」

「それなんだよ。実はそれが此処に立派なのがチャンとあるンだよ。コイツは、あるゴム会社が自社の宣伝を兼ねて映画の物と同じ型のを特に作ってウチへ寄附して来たんだよ」

「フーン。そうすると総ゴム製か」

「そうだ。ホンモノと、まず変りはないね。マア会社の言い分じゃ、これを入口へでも飾ってくれ、というのだからネ。僕の考えじゃ、一つコイツを着せて歩かせたら、きつとウケルと思うんだ。何とか着られるようにはなっているンでね」

Iさんは部下に持たせて来た包みを開き始めました。私はソロバンを置く手を止めて、そつと横目で見ますと、Iさんはソファの上に、ヘルメット、上下続きの銀色に輝く宇宙服、それに酸素吸入器やら無電装置やらの付いた装置等、次々と取り出しています。

「ホウ、仲々うまく出来てるじゃないか。ホンモノとチツとも変らないね」

「そうだろう。所でコイツを着せるのは男じや駄目なんだ」

「ヘエ？」

「女さ。それも若いきれいな女にね。映画の中でもAという女優が着るんだが、一寸今年のトップモードと言うわけさ」

「ナルホドね。いや恐れ入りました。さすが当地随一と言われるI君だけあるね。しかし女となると一寸難しいぜ」

「そうなんだ。ウチの連中でも思ったのだ

が、何しろこの暑さにこんなゴムの気密服を着せられ、一日中ゴソゴソと人混みの中を歩き廻らせるのだろう。皆、カンニン、カンニンッて言うわけさ。いくら課長でもこればかりは一寸カワイソウでね」

「ソリヤそうだよ。それに重さも相当あるらしいね」

「メめて十五キロ位かな」

「それから空気の具合はどうなんだ。ほんとに気密服かい」

「ほんとさ。いや本当以上さ」

「？」

「息が出来ないのさ。元々飾り物のつもりだからね。しかし、この酸素吸入器のボンベの底へ穴を開ければ、マア何とか息ぐらい出来ると思うんだ。一寸苦しいかも知れんが、窒息まではしないだろうサ。ほかに壊す所もないのでね」

「オイオイ。大丈夫かい。息も満足に出来ないものを着せて、その上、この炎天下を歩かせるのだろう。相当重いし、第一、ゴム製とあっては皮膚呼吸とやらも出来ないから汗も発散しないし、こりゃ大の男でも参ってしまふよ。人権問題になるぜ」

「ソコなんだよ。だから、わざわざアンタの

お智慧拝借と言う訳なんだ。それを承知で着てやろうと言う若い綺麗な女がいらないかという訳さ」

「そりゃ、むつかしいね。男でも一寸いないだろうな。しかし、折角の君の申し出だ、男なら何とか当てもよいがね。だが、女は駄目だよ」

「そうかなア。残念ながら女はあきらめて男でガマンするか」

「そうしろよ。しかし、余程マルは出してくれないと駄目だよ」

「もちろん、マルはウンと出すよ。しかし、女でないと残念だなア。」

Iさんは残念そうに腕組みされました。その時、社長さんが、

「飯田クン。冷いお茶を頼むよ。」

と言われたので、私はあわててお茶を持って行きました。Iさんの前にお茶を出した時です。Iさんは、じっと私を見て、

「オオ、ヤッチャン。キミどうだい。これを着て歩いてくれないかい」

と冗談めいた口調で言われました。今の話を一部始終聞いて、多少魅惑を覚えていた私は一瞬、ハッとしました。

「オイオイ。ウチの紅一点に地獄の責具を着

せるのはよせよ。彼女はウチの事務員なんだから。飯田クン、そんなの諾くなよ。この暑いのに、そんな事したら死んじまうぜ」

社長は言下に断ってくれましたのですが、私の体内に燃え上って来た妖しい血潮は、私にこういわせてしまったのです。

「エエ。一度着てみないと何とも言えませんけど——」

「ウン。そうだ、そうだ。やるやらないは別として、一度ヤッチャンに着せてみようよ。ネ、それなら良いだろう。第一、面白いさ」

「ソラ始まった。I君の悪いクセが。マア仕方がない。じゃ着せてみるよ。君は言い出したら退かないのだからね。それで気がすむなら仕方がない。飯田クン。御苦労だが着て見せてやってくれ」

私は早速、ロッカーへ行つて、朝の掃除の時に着るデニムの作業衣に着換えて来ました。

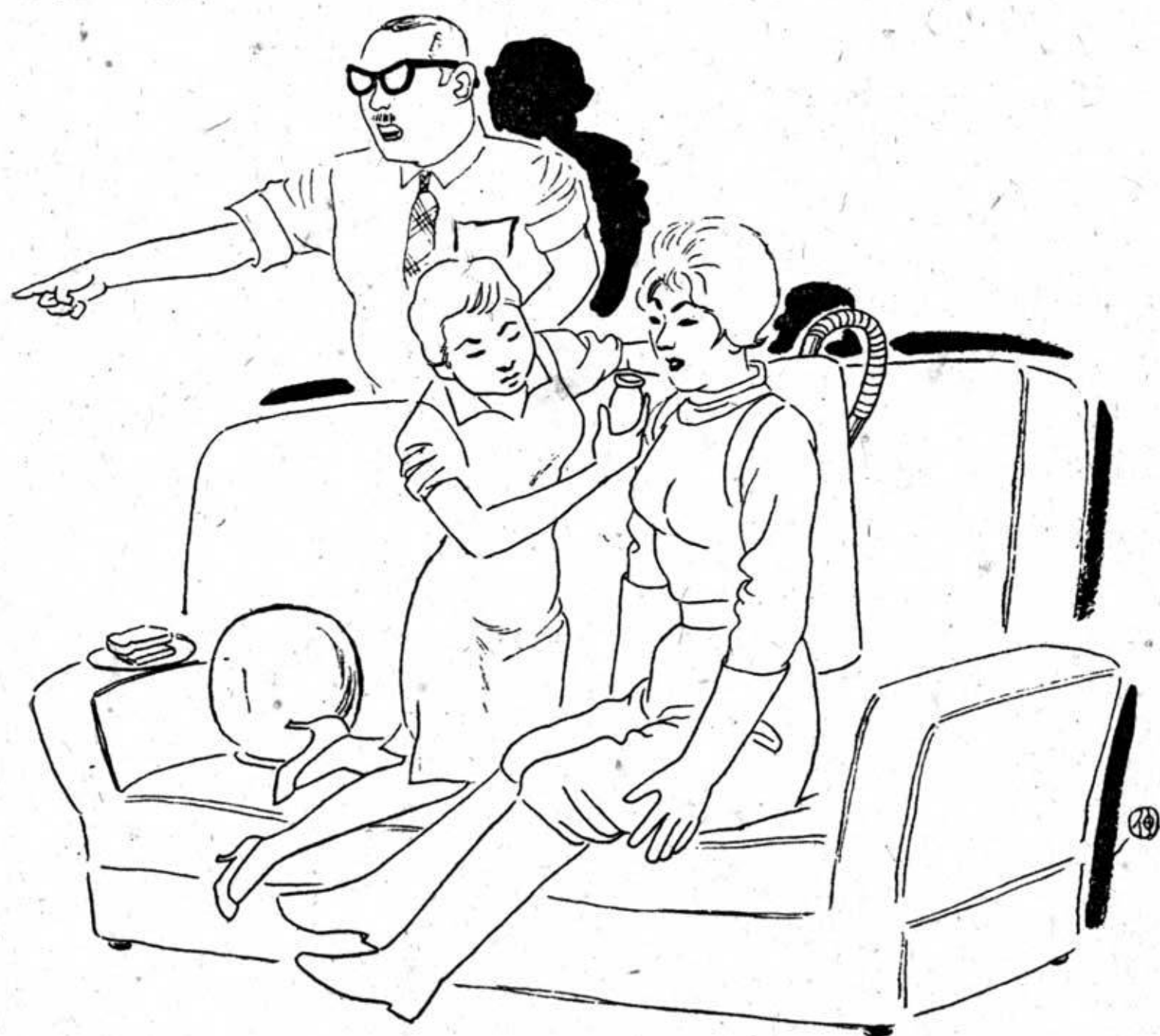
Iさんは、もう例の宇宙服を取り上げています。ほかの社員も物珍しげに私たちを取り囲みました。まず上下続きのゴムの服です。何か化学繊維の布地の上にゴムを引きそれを銀色に光らせているもので、わりあい肉があります。背中の割れ目から両足を入れ、両手を入れて、その割れ目のジッパーをグッと引き

上げられますと、腰から胸、首の下までピッタリと締ります。手首と足首にもジッパーがあり、これも締めますと、服が体にピッタリと喰い付いたようになります。それから同じゴム引布地の半長靴ですが、これもジッパーでピッタリと脚部に密着します。手袋も同じことで、腕にピッタリとはめられます。これだけで首から下は完全に、外界から隔絶されたわけです。私の顔を見て

「ヤッチャン大丈夫かい。顔がえらく赤くなって来たぜ」とSさんが心配そうに言うてくれました。

「ウン」

私は平氣をよそほって首を振りましたが、余程ピッタリとしているのでしうか、首も自由に動けないようです。次にボンベなどのついた装置一式を背負います。これは肩



からバンドを掛けて腰から前に廻して金具で締めますと丁度、背負帯で赤ちゃんを背負ったようで、少々走ってもガタガタしないでしょうが重味がグッと肩に掛りました。最後にヘルメットです。これはプラスチックのような合成樹脂製で下部にゴム布がついていてこれで服の襟首の部分にピッタリと密着する様になっています。そしてヘルメットの内側はスポンジの上にゴム布を張ってある様で、これをかぶせられますと顔の部分を除いて頭全体がスッポリと、はまります。顔の部分には透明のプラスチックの窓があります。耳の部分には幾つか穴が開いているのか、音は聞えますが顔の周りがスポンジで押しつけられているので、耳の穴からの空気は前の鼻や口

の所へは廻って来ない様です。呼吸は恐らく後頭部からスポンジの中を頬にのびているパイプから、するのでしよう。成程、これでは空気は洩れません。全くの気密服です。

「ヤッチャン。一寸歩いてごらんよ」

Iさんがヘルメットをポンポン叩いて言われました。私は二、三歩いてみました。

「どうだい。ウケルぜ」

とIさんの声。

「ヤッチャン。トイレの鏡に映して来てごらんよ」

とKさんの声。私はノソノソとトイレに向いました。何しろ服がピッタリと体に喰い付いているので体中縛り上げられている様な気持です。手足も動かすににくいです。トイレの鏡に映った姿を、狭いヘルメットの窓越しに見た時、何と美しくも又、奇妙な姿であったでしょう。ピッタリと体の線を押し出すような銀色に輝く宇宙服。それは映画のポスターで見たのと寸分、違わない姿です。私の血の騒ぎは、いよいよ高まって来ました。

「アイッ」

思わず息を深く吸い込んだ時です。私はハッとなりました。Iさんは確かポンベの底に穴を開けないと息が出来ないと言っていた事を

思い出したのです。今まで息が出来たのは顔の前面のわずかな空間の空気を吸っていたからなのです。私は大急ぎでもとの事務室に戻りました。呼吸は、すでに刻々と苦しくなってきました。汗が私の顔一面に吹き出して来ます。私は両手でヘルメットを取ろうとしました。しかし、ゴムの手袋はツルツル滑るし、ピッタリと首の部分で密着しているため、仲々取れません。

「取ってー。息がー」

私は叫びました。声がこもるだけで聞えないようです。Iさんは腕を組んでうなずいています。皆はガヤガヤと私の姿を見ながら話し合っています。私はIさんの前に駆け寄り金魚のように口をパクパクさせ、思わずひざまずいて手を合わせました。Iさんは、やっと気付いたらしく、

「そうだ。息ができないだ」

社長さんと二人がかりでヘルメットを取ってくれました。ゴムと汗の臭い。そして、新鮮な空気の味。またしてもあの臭い、あの感じ。私はソファに腰を下しました。

「どうだい。やってくれるかい」

Iさんは私の顔を覗き込んで言いました。

「I君。こりゃ駄目だ。わずかに二、三分でこ

の汗だ。こんなものを一日中、着せて炎天を歩かせて見ろよ。どんな事になるか」

社長さんは心配気に言われました。しかし私は

「やって見ますわ」

と言ってしまったのです。仕方なさそうにしかし心の中にうずく、あの喜びを覚えながら。

四

こうしてその翌日から、毎日、十時頃から夕方七時頃まで、私はピッタリと宇宙服に身を包んでS筋の人波の中を歩かせられる事になりました。

毎朝、T会館のIさんの部屋で宇宙服に着換えます。服がピッタリしていますので、体の線をスマートに出した方が良いというIさんの意見と、直接、皮膚がゴムに触れるのは体に良くないだろうという社長さんの思いやりから、私はブラジャー、ウエストニッパー・コルセットで、体の線をグラマースタイルに整え、その上にナイロン製のバレータイツ上下を着込み、手先はナイロンの手袋で覆う事にしました。また顔は女優のAさんに似せてドーラン化粧をしますが、汗に流れないよ

うに油性のものを、やや濃い目にしました。それでも日に何回かは塗り直しをしたものです。IさんやT会館の人に手伝って貰って私は宇宙服の中にはめ込まれます。本当に着ると言うよりは、はめ込まれるといった感じですよ。ジッパーを締めて手袋、半長靴をつけ酸素吸入器等の装置一式を背負わされます。ここでもう一度メーキャップを改めて、いよいよヘルメットをかぶせられます。グッと、顔の前面を除いて頭部全体がスポンジに圧せられ、空気はシューシューと背中の中のボンベの穴からゴム管を通して来ます。ヘルメットの窓から覗き込むIさんにニッと笑って、これもIさんの発案になる宇宙銃を片手に、いよいよ出発です。

体中を服が締めつける様に感じながら、私は階段を昇り会館の表に出ます。もう真夏を思わせる太陽がカンカンと照りつけています。空気の通らないゴムの服をピッタリと着せられ、十五キロもあるものを身につけさせられているのですから、ものの十分も歩かないうちに、もう汗が浸み出て来ます。S筋を南から北へ、そして北から南へ、何回か往復しているうちに、宇宙服の中身は汗でグッシヨリして来ます。ゴム臭い空気を精一ぱい鼻を広

げて呼吸するのも苦しいですが、顔面から吹き出す汗が眼に入ってくるのは、なお苦しいです。吐き出す息がヘルメットの窓を曇らしますから、たださえ前方がはっきり見え難いのに、汗で眼が開け難くなるのですから、全くどうしようかと思えます。しかし、まだ午前中は何と言っても通る人も少く、日影もある事ですから楽です。

H時計店の時計塔の針が正午を指すのを、やっとの事でヘルメットの窓越しに見上げ、私はT会館に戻ります。Iさんの部屋のソファにくずれるように座ると、もう言葉も出ません。

「あつい——。あつい——。苦しい——。ヘルメットを外して——」

私の手は無意識にIさんに伝えていきます。勿論、Iさんは手早く脱がせてくれますが、この時です、カアッとした顔に新鮮な空気が触れると共に、ゴムと汗の混じった臭いが鼻を刺激するのは。私はヒクヒクと鼻を動かしてこの臭いを満喫し、悦びに酔います。冷たいタオルで顔や頭を拭いて貰い、やっとな心地になります。背負った装置もたいい外しますが、服は又、着るのが面倒ですので脱ぎません。背中のジッパーを下げるのが関の山

です。土曜や日曜はかきいれ日ですからヘルメットを脱ぐだけです。食事がすめば、直ぐに又、歩かねばならないからです。だからこの時は、食事も自分で思う様には食べられません。両手は不自由なゴム手袋ですし、体を前屈みにすることも背負った装置のため思う様にはなりませんもの。もっとも食事もうり欲しいとは思いますが、Iさんに吹き出る汗を拭いて貰いながら牛乳とサンドイッチを口へ入れて貰います。全く第三者から見ればこっけいな様ですが大変な事です。ともかく、そんな姿で食事を終わりますと、少しの休憩でメーキャップを直し、また午後の仕事になります。

午後は午前中に比べ、ずっと苦しいです。太陽は、ますます烈しく照りつけ、日影は殆んど無く人波もずっと増えて参ります。午後二時頃になりますと、ヘルメットは焼いた鉄の様に熱くなり、頭はガンガンして目くらみそうです。もちろん宇宙服の中は汗グッシヨリで、半長靴の先や手袋の先には汗が溜って来ます。時々カタカタと宇宙銃のハンドルの廻りますが、溜った汗がその度に宇宙服の中を流れるのがよくわかります。もはや、タイツは着ていても用はなさず、汗に濡れたゴ

ムのヌルヌルした感触が直接、皮膚に感ぜられます。手を動かし足を動かしますと、まるで泥沼の中か、のりの中に体全体が浸されている様です。暑さと汗にむれて苦しんでいる私の耳に、ザワザワした雑踏と共に通行人の声が聞えます。

「オイ。アレ見ろよ。女の宇宙人だぜ」

「ホウ。ドコの宣伝だい」

「T会館の映画さ」

「思い切った事をやるじゃないか」

「しかし、よくいたね、あんなのを着せられて歩く女が——」

「ホントだ。暑いぜ、この炎天下に宇宙服を着ていてはね」

「ウン。それにゴム製だぜ」

.....

「一寸見てごらんなさいよ。あの人」

「アラ、宇宙服じゃないの」

「そうよ。女の人だわ」

「ホント。かわいそうね。ゴムの服なんか着せられてさ」

「とっても苦しうじゃないの。顔の汗、見てごらんなさいよ」

.....

「ね、あなた。あれ、宇宙人よ」

「ホウ。女だぜ」

「マア」

「ひどいな。この暑さに、あんなものを着せて歩かせるなんて」

「そうね。私なんかビニールのレーンコートでもむれて着ていられないのよ」

「そうだろう。何しろ、風が通らないものね」

.....

私はこれらの声と共に、不自由なゴムの宇宙服の中で身をよじります。

重い、そして窮屈な、そして暑いゴムの宇宙服。小さな窓からしか外を見ることが出来ず、頭や顔に喰い込み、呼吸もやっとのヘルメット。不自由なゴムの手袋。ゴムの半長靴。重く肩に喰い込む酸素吸入器に無電装置。それらを、か弱い女性の身にヒシヒシとつけさせられ、皆にじろじろ眺められながら、汗にまみれ、呼吸も絶えだえにノロノロと歩き廻らねばならない私。

ああ——。私の被虐感絶頂に達します。私のあやしげな血潮は体中を駆け廻ります。このまま蒸発してしまいたいような気持なのです。私はこれを望んでいるのです。何と因果な女なのでしょう。

こうして毎日、久し振りに大きな満足感を

覚えながら暮す事が出来ました。Iさんも満足な様子で、客の入りも上乘でした。そしてIさんは宇宙服を着けた私に、このほかにいろいろの事をさせました。

ある時は涼しげなワンピース姿のモギリ嬢と一緒に入口に並び、不器用なゴム手袋のはめられた手で入場券を切る事もさせられました。また、ある時はお金を集める女の子は付けてくれましたが、狭い客席の間を宇宙服に身を固めてプログラムを売りに歩かされもしました。この時は客の呼ぶ声がハッキリせずウロウロして何かにつまづき客に笑われたり子供に呼吸のゴム管をいたずらで止められ、もう少しで窒息しそうになったりしました。映画が始ってロビーに帰った時、集金についでくれた女の子は気の毒そうに私を覗き込んで「暑いでしょうね。苦しくありません？」と訊いてくれました。

しかし、この仕事もやがて映画の打上げと共に終りになり、私を苦しませ、そして又、私の異常な欲望を満たしてくれた宇宙服ともお別れする時が来ました。その最後の日、私は宇宙服に無限の愛着を感じて、朝早くから夜遅くまでヘルメットも脱がずに働き続けました。Iさんの「一寸、休み給えよ。風を通さ

切腹通信



女性切腹の作品と作家

兵頭庫一

奇譚クラブが女性切腹を収載し始めてから、かれこれもう十年位になると思うが、

類似誌と異り、かくも長年月に亘って連載されたことは、愛好家と奇ク編集部とが熱心

ないと毒だぜ」とという言葉もヘルメットの中で首を振り、食事も摂らず、文字通り汗グツシヨリになって働き続けました。だってもうこんな機会は恐らく二度と無いと思うと、一分でも脱ぎたくありませんもの。映画もはねて最後の客をヘルメットの窓越しに送り出した私は、もう一度ゆっくりと館内に入りました。暗い客席の通路を歩きながら、私は苦しかった、しかし久し振りに望みの叶ったこの一週間を思い出していました。このまま、いつまでも着せられていたい。そして、もっと苦しめて欲しい。私は不自由なゴム手袋をは

められた両手を胸にあてました。
「ドキ、ドキ、ドキ……」
あやしげな血潮の脈打つ響が、ゴムの宇宙服を伝わって参ります。
「ああ暑い、苦しい。脱がせて欲しい」と思いながらも、もう一人の私は、
「駄目だ。もっと苦しめ。もっと汗を出せ」と言います。私は暑さと苦しみのあまり、もう立っていることもできません。思わず暗い通路に伏せてしまいました。いつまでもいつまでも、こうして着せられていたい。いやもう脱がせて欲しい。そんな問答をいくら繰

り返した事でしよう。

「オイ。ヤッチャン。どうしたんだ」

Iさんの声に私は我に帰りました。

「何でもないの。何でもないの。もう少し、このまま一人にして置いて」

私はうわ言のように言いました。すべてが判ったのでしょうか。Iさんは私を客席に座らせて立ち去りました。

暗い保安灯の下で、私は宇宙服を着たまま再び思い出に耽りました。

丁度、月世界に一人残された宇宙服の女のように。

(完)

な協力を続けた賜物に外ならない。筆者は四十年来の愛好家の一人であるが、奇クのような素晴らしい文献に巡り合ったのも長生きしたお蔭である。そこで私は、この十年間、奇ク誌上を飾った作家を回顧して見ようと思う。

先ず、女性切腹に関心を持つ人々を次の四群に分けて見よう。

- (一) 女性切腹を研究する人々
 - (二) 女性切腹の創作や報告をする人々
 - (三) 女性切腹を願望する女性
 - (四) 女性切腹に憧憬する男性
- そこで私は色々な観点から、これらの人

々、並びにその人達の作品を眺めて見たい。

(一)女性切腹を研究する人は、その歴史、史実、実話、口碑、作法、切腹願望女性の心理解剖、医学的考察、文芸的価値、演劇への影響等々について、あらゆる努力を払い乍ら、撓まなく研究している。例えば、斯界の第一人者とも云える中康弘通氏を始めとし、田谷敬生氏、壬生三郎氏、折伏下男氏等がそれである。中康氏には「切腹史談」「切腹研究夜話」「会津娘子軍」「女人悲傷譜」等、数多くの珠玉篇があつて、満天下の愛読者に深い感銘を与えたものである。田谷、壬生、折伏の三氏は特に医学的考察に力を入れ、切腹願望の女性達の伴侶たる事、多大と信じる。即ち、田谷氏の「女腹切りの考察と実例」「女性切腹断想」壬生氏の「切腹風土記」折伏氏の「腹を切ること」等の作品である。

(二)女性切腹は凄絶な中にも悲愴美が包含されている。勇武にして可憐な女性達の美しくも哀れな最期を華麗な筆致で描く人達で亀岡絃七郎、瀬川泰子、法谷四郎、青山芳樹、南方純、藤山秀緒、東福次郎、北川操、佐藤すみ子、芦田千枝子、山中同人等の芳名

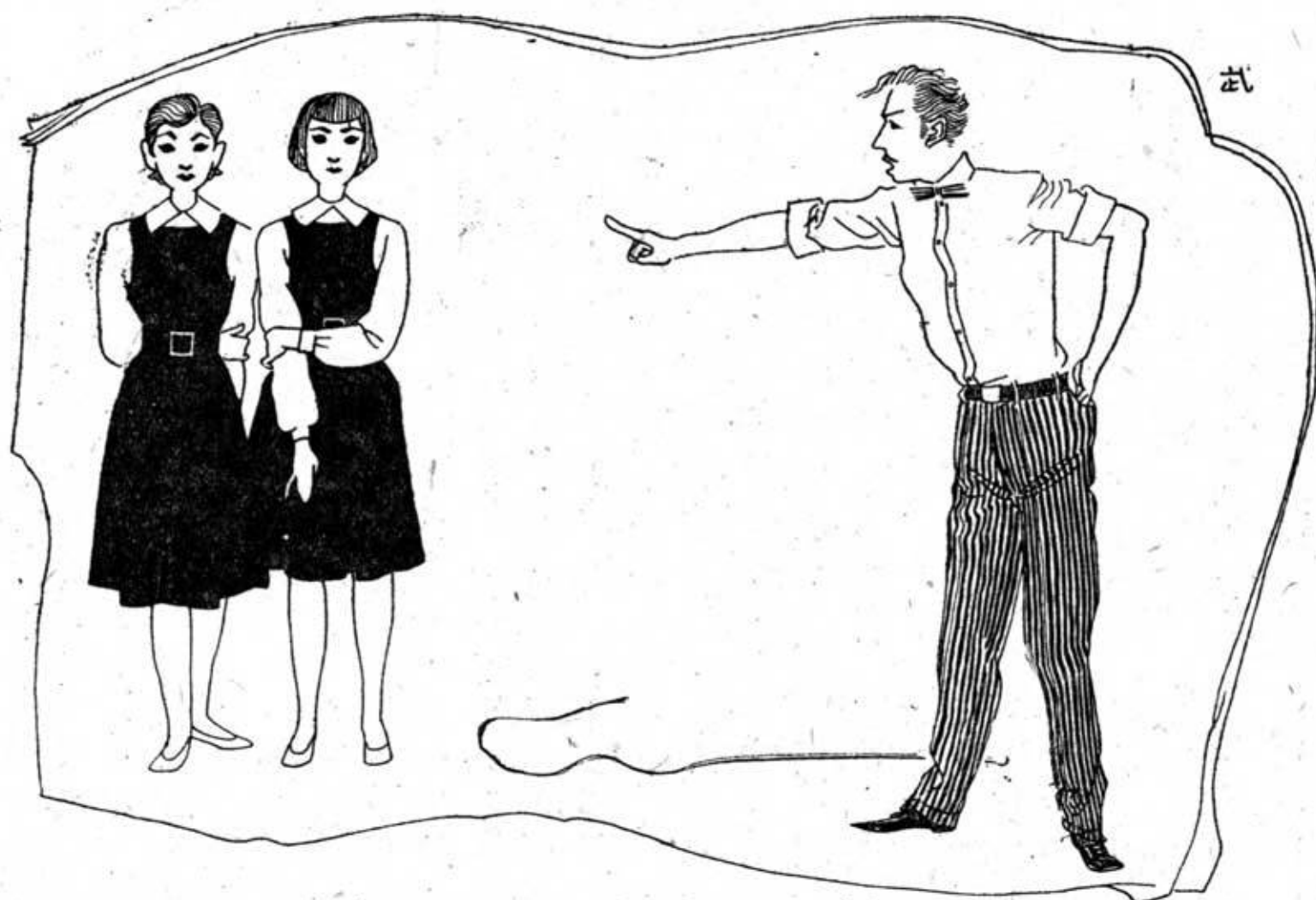
を挙げることが出来る。中にも亀岡氏の「女腹切八景」は、美しい挿画を加えて、若く美しい八人の女性散華を連載したものである。

瀬川氏は特に古文書をよく渉猟し、中康氏と双璧をなす文筆家といえるだろう。「鮎川おせん」「奇書婚姻の儀」「女人の誓」「悲風摺上原」「堀主水一件始末」等に於て、遺憾なくその面目を発揮している。瀬川氏と、女流として好一对ともいふべき藤山氏は、特異な存在である。「女武者自刃」「屠腹乙女桜」の外、男装の麗人物を数々発表して、その活躍は目覚ましい。法谷氏には「切腹曼陀羅」シリーズ、青山氏には「落日婦士道」「女白虎隊」「愁風連」等の異色作がある。南方氏の「東京自殺クラブ」や「外人の見た女腹切り」の二篇は、その構想に抜群の斬新さが見られる。その他、一篇ずつではあるが、東氏の「実見女性切腹譚」北川氏の「撫子の花散りぬ」佐藤氏の「文江の切腹」山中氏の「変った切腹」芦田氏の「在満移民女の切腹」等、それぞれ異色を持つ佳作と思う。

(三)女性の切腹願望者。中康氏も書いていられるように、この群に属する女性は実に多く潜在しているものと考えられるが、奇ク誌上に現れた人達だけ拾つても、川合伊都子、賤機礼津子、信太蓉子、木村悦子、羽村京子、梅村和子、愛川晃子、皆川波留子、山田久仁子、不破和子、向井美佐子、原月田鶴子、原桐咲代等、枚挙に暇がない程である。中にも原桐氏が自らポーズした切腹フトは空前絶後の物で女性特有の秘匿性を踏切つて悩ましくも美しい四態を公開された切ない心情に、満天下の女性切腹憧憬家の感激措く能わざるものがあつた。又、賤機氏は巧緻な筆を以て自らの姿態を描き上げた美しい切腹面を寄せている。貴重な体験を、冷徹な批判の下に自ら切腹実演を行ったデータは、不破、皆川、山田の三氏に依つて詳しく報告せられている。

四女性切腹憧憬者としての男性も又、女性のそれに劣らない数と思われる、奇ク誌上に現れた者は案外少ない。即ち、津島比呂史、西山一郎、大島博、桜恵之介、安城文雄、吾妻京生等の諸氏で、筆者もその末席を汚すことを許して頂きたい。

以上は、奇ク誌上、最近十年間に女性切腹に多かれ少なかれ関与した作家と、作品を大ざっぱにまとめて見たものである。



懸賞愛読者原稿入選作品

零の舞踏会

(その二)

彼は机を叩いた

「零にするのだ」

Ⅱ コルヴェイツ Ⅱ

氷見龍也

特別研究生教育の篇 (二)

うかつに恋もしてはいけないという教訓ほど非現実的な教訓はない。恋というものは相手やところをきらずに発生するものだ。恋を知る心をもつ者は、ところをえらばず恋をするし、恋を求める心が恋人をもたらずのであって、恋人が恋心を惹起するのではない。馬鹿氣たことをいってもはじまらないが、ありふれた女学生の教師に対する思慕と共通する水原淑子の感情が、抜きさしならぬ恋情となったのは、特別研究生として三島毅彦の教育を受けるようになって二週間めだ。

特別研究生の教育は、厳しいというより、鋭どかった。それは運動選手の強化合宿のトレーニングのようだったが、内容はさらに強烈だった。水原淑子にしても、それよりは甘く考えていたが同じように新村節子にしても特別教育が相当に厳しいものであることは、あらかじめ覚悟はしていた。だが、その覚悟が、いかに甘いものであったかを知らされたのは最初の週からだ。

特別教育にはいる前に、一週間の外泊休暇があった。ただし、特別教育に入ってからはず許可あるまで外出は禁止されると彼女は申し

渡された。特別教育が、別館三階のA・B二つの特別ルームを使用して行われ、教師は三島毅彦だけであることを云い渡されたのは、休暇が終って、明日からいよいよ特別教育にはいるというときである。

別館は綾小路私邸内にあって、一、二階は特別会議室と外人客のための迎賓室で、通常は全く人気もなく使用されていない。その三階に新しく工事された特別教育用のルームは、A・Bともに授業中は真昼でも、絶えず夜の雰囲気をかもしだしていた。分厚い緋色と黒色の三重カーテンは外光を遮断し、内外からの物音を相殺して、人工照明だけが明暗の度を加減した。Aルームは体技室でBルームは講義室だ。その隣りに三島毅彦の専用の主任室があるが、体技室はタイル張りでかなり広く、Bルームの講義室は、四坪ほどの小教室だ。どちらにもノート台つきの椅子が二、三脚あるが、体技室にはバレーや体操の器具が備えてあり、講義室は図書と黒板が備えつけてあった。しかし、いずれのルームにも共通してあるのは、装飾ひとつない殺風景な荒涼さである。授業中、人工照明が皎々とともっていても、暗い静寂がどこからともなく湧きだしてくるような雰囲気があった。そ

の暗い不気味な静寂は、ふとした瞬間に、足許から脇腹をとって腋の下へと、いつ知らず、じりじりと這いあがってくるようであった。

三島毅彦が教育主任になって、二人のまだ十八才のうら若い特別研究生に課した教育方針は、いわば、ローマの実力者ポメルスフェルデンがアルブレヒトにむかっていた「精神とは服従するものだけに宿るのだ。服従しないものは亡びるよりほかはない」という激しい言葉の通りであった。これは彼の教育の一切を貫ぬいた原則だ。

教育は徐々に進められた。しかし、徐々にというのは順序を追ってというだけのものだ。第一週の前半は、講義だけだった。彼が教えたのは、俳優の基本精神についてだ。具体的には講義と実技が並行して行われるようになったのは後半からである。だが、初期のその実技は動作としては極く簡単なもので、

立て、坐れ
走れ、歩け
止まれ、
中腰になれ
背をそらせ
伏せ、仰向け

手を上にして足踏み

といった行為の絶えまのない繰り返しであった。

階段をテンポを変えて何度も昇降させられる。両手を水平にして壁に体の前面を密着させられる。体技室の中を縦横斜めに駆けさせられる。そういう簡単な動作も、二時間以上もぶっ通しでやらされると、ふらふらしてくるほど強烈な動きとなる。次の日も、また次の日も同様であった。

この単調な反復動作は、運動としては無意味に近い。しかし、それは特別研究生に課せられた「教師の指示を受けたなら敏速に反応を示し行動しなければならない。ためらい、迷い、反対は許されない」という「規律」の訓練であった。勿論、それは、自分の凡てを委ねて、教えを乞う生徒として当然の義務だが、同時にそれは穀彦のいう「俳優の基本精神」に通じるものであった。

俳優は自己主張をしてはならない、と二人の特別研究生は教えられた。彼女達は、俳優精神の根幹にあるのは、従順な服従の努力と自己意識の没却と敏感な動きであり、その精神を身につけることが、特別教育の中心課題だとさとされた。

演劇の舞台で、ステージを上手から下手へ

駆け抜けるという単純な演技一つをとってみても、そのことは容易に理解できる。それは去ってゆく恋人を追っていくところかも知れないし、忘れていたハンドバッグをとりにくところかも知れない。しかし、そういう動作を必要とするのは、勿論、水原淑子や新村節子自身ではなく、作者によって創造され、演出者が描き出そうとする役の上での別人格だ。そこには水原淑子、新村節子という個人は零なのだ。

舞台構成上からいえば、必要なのは、俳優の持つ肉体的な諸器官にすぎない。俳優の側からいえば、彼女達は、自分とは無関係な別の人間を表現するために、脚本や演出者に全面的に依存して、自己を捨てさるなければならない。

映画製作における映画俳優の立場は、そのことを一層、分り易くする。支離滅裂な各カットは、撮影されるときは支離滅裂だが、監督の脳裏では一貫した映像として組み立てられている。確実に存在するのは監督のその映像で、俳優は監督の意向に忠実に努力を重ねて、彼の満足を得るように従わねばならないし、俳優は監督の指示に疑いや迷いをもたな

くてもよいのだ。

こういう事例は無数にあり、そのことが亦明晰な事実、俳優は先ず第一に「作者の意図に従い」「演出者の指示に従って」行為する人間であり、俳優は作者や演出者の存在なしには零に等しく、彼等に従ってこそ、初めて自己を生かせる存在だということである。ここにある関係は指示と服従の関係である。俳優はなにものにもまして自己没却と服従の精神をつかまねばならない。

しかし、俳優は土偶人形であってはならないし、俳優にも限りなく意志が必要だ。ただそれは好悪をとまなう自己意識ではなく、如何に作者や演出者の意志を敏感に掬みとって十分に表現できるか、という努力の面に注がなければならない。

穀彦は著名な世界的な演劇人の名をあげた。日に四時間は激しい基礎演技の稽古をする王室バレエのプリマ、新しい出し物にかかると前には、実際に素足から血がにじみ出る稽古を重ねる琥珀の舞姫とうたわれるスター、三日間同じシーンの撮影を重ね、夜の都会をさまよった映画スターなど、それらは穀彦と交際のあった人間の話だけに、有無をいわせぬリアリティをもった。

俳優精神の根幹にあるのは従順な服従の努力と自己没却と敏感な反応動作であり、その精神を身につけるのが特別教育の中心課題となるということは、だから、特別研究生は常に教師の指示に従って敏速に行動しなければならぬ。迷いや反対は許されぬという規律に直接結びついたものになっているのだ。

仔細に検討するまでのことではない。彼のいう「作者や演出者」を「主人」なり「王」に置換すれば、俳優精神とは奴隷精神にほかならない。自分を捨てて主人の意志に従う、自分の命じられた行為を十全に果たすためにだけ努力を傾注する。それは奴隷になれということであつた。果して、そのことはそういうことであつたのか。しかし、そうであるのかないのかということは、彼女達が、すでに従順に納得し肯定していたということを、ひるがえせるものではない。

聖朋女子学園の優秀な生徒であつた彼女達は、そのことを肯定した。ただ、彼女達は、そのことを「奴隷」と思わなかつただけにすぎない。

いったい殊更に奴隷精神と強調するまでのことはないのだ。教師と生徒との間にある関係を注意してみれば、そこにある基本的なものは、指示と服従の関係で、あえて悪徳教師の場合にはと注釈をつけてもいいが、そもそも悪徳教師が発生しうる素地は、教師と生徒という奇怪な関係の一面を利用できるところにあるのだ。否定はできない。

暗示的なのは、東京の某女子高校に起つた、スポーツの対校試合中、満員の観客の見守るコートで、監督の教師が、選手の女生徒を整理させてビンタをくわえた事件だ。さまざまな非難や意見がこの事件に浴せられたが「わたし達がタルンでいたからです」と当の女生徒達は、その教師の行為を当然のことと認めた上に、その教師は運動部練習中にも、しばしば生徒を叩いたが、生徒達は、その行為を喜んでうけ入れていた節がみうけられる。

生徒は教師の指導に正當な疑念などは本来は起しえないし、教師と生徒という指導と服従の関係に、世間知らずの女生徒などは、無条件に曳きずられやすい。教育という体裁のいいオブラートは、毒藥を包むこともできるのだ。

教師はいわば絶対者に似ている。生徒は先生のいいつけをよくきかねばならないという教師に無抵抗な観念が幼時からしみこまされ

ているので、それをほらいのけるのは困難であつた。叱られれば誇大に畏怖するのも生徒なら、親しく賞められれば他愛なく喜ぶのも生徒の常態なのだ。青臭い反抗などは、赤子の手を捻るようなもので、一つの行為をする場合に全面的に善であるという行為は存在しないのだから、叱られる場合は常に生徒が悪くなるし、罰を選択できる権利も当然のことながら生徒にはない。宿題を忘れて放課後一人居残されることを生徒は拒否できないし、教師が腹をたててグラウンドを十周させることを拒否することは、それが如何に嫌であっても、生徒にはできない。常に指示は一方的に教師や学校側にあつて、服従は生徒の義務であつた。同時に、ある精神年令に達した女生徒は、強制的に服従させられることを、愉悦に転化させうる。不可解だが、かなり一般的な血を沸々と湧きかえらせている。このような状態は、一時的に、容易に奴隷精神に移させることができるだ。

いずれにしても毅彦の言葉は、俳優という立場の一面の真実をいえたものであり、彼女達は俳優になるべき女生徒にすぎないし、それは先生の教えであつた。彼女達是否応なくまきこまれて納得したし、勿論、それは毅

彦の奴隷として行為することだというふうには考えもしなかった。彼女達は奴隷という言葉で自分の言葉としてもっていなかった。それを奴隷の状態だと感じたとしても、彼女達は、神のしもべとしか表現できない。神の僕とは、試煉に耐えて栄光の天国に到達するものであり、芸術の道も厳しい修業と苦難の試練の末に、初めて栄光の座にのぼりうるものであった。

しかも、その厳しい修業の内容を彼女達はまだ実際には知らない。厳しい試煉に耐えなければならぬということとは漠然と知っているが、具体的に体験するのは、今度が初めてなのだ。これがそうなのだとはいわれれば、これがそうなのかと納得せざるをえないし導いてくれるのは三島毅彦であり、彼は立派な演劇人であり、尊敬と慕情に包まれた教師であったのだ。彼女達は安心して自分の身柄を毅彦に委ねていた。

しかし水原淑子の毅彦に対する思慕の情が、はっきりと

絶ち難い激しい恋情となったのは、特別教育が二週目にはいったときだ。第二週にはいると毎日、午後の時間は交替で個人レッスンを受けるようになった。そしてそのとき彼女は裸形になった。それは基礎演技のレッスンだった。

淑子は体技室で、毅彦と二人だけで向かいあっていた。夜の暗いルームに一条のライトが円光を投げかけていた。荒涼さと緊張感が眩惑感をかもしだした。眩惑にまきこまれた者は眩惑を眩惑と感じない。

毅彦はそのとき、こういっただけだ。「服をとりなさい、演技体操の邪魔だ」言葉の直後に強烈な沈黙が、ぴしっと淑子を叩いた。

ためらいや抗いがあったとしても、それはなんの意味もなくはしない。服を脱げ、というのは教師の指示であった。それはレッスンの邪魔だからだ。

毅彦の口調には教師の厳肅さがこもっていた。羞恥やためらいはあったし、本能的な恐れや抗いもたしかにあった。だが、そういう羞恥や抗いを不純と感じさせる圧迫感や厳肅さが彼女を圧倒した。

このとき新村節子のことが脳裏に浮かんできたのは、ライヴアル意識であったか、同類意識であったのか。彼女もそうしたのだ、という思いが浮かんできたとき淑子は曳きずり込まれるように運動着のホックに指をかけた。

秘密を知られるという事実は重い比重をもっている。成績を全部知られているという事実が生徒にとって重大な秘密を握ら



れていることであるのと同様に、うら若い乙女にとって、自分の素肌をさらけ出したという事実は殆んど絶対的なものとなる。淑子は毅彦の前に清らかに輝やく肌理こまかなみずみずしい白い肌、みるからにしなやかに美しく均整のとれた肢体を彼の目の前にさらけ出したのだ。

「それも」

と彼はブラジャーもはずせといった。

淑子は羞恥に身悶えた。しかし拒絶はできなかった。彼女の睫毛が合わさった。

愚かなことだ、と彼女と同じ心理的外的な境遇にあつて、なおいいきれぬ者があつたら、それは、罪なき者は石をもてこの女を打て、という比喻を思い浮かべねばならない。

そのとき毅彦が焦つたならば、凡てはぶちこわしとまではいかなくても、その後の進展は別のものになったに違いない。しかし彼はそれ以上に踏み込みはしなかった。彼は淡々と素気なく演技体操にとりかかった。それは



一種の柔軟体操である。

彼女が、個人レッスンを受けるときには、常に服を脱がねばならなくなり、いつのまにかその行為が、義務づけられ、習慣づけられるようになった最初の契機はこのときのことからである。

しかし、彼女は消そうとしても消しきれない強烈な衝撃を、このときのこの行為から受けたのだ。如何なる理由にしろ、彼女は初め

て一人の異性の前に自分の素肌をあからさまにしめしたのだ。彼女のむきだしの羞恥に身悶える素肌をみたのは、唯一人、毅彦だけであつた。

その夜、淑子は泣いた。しかし、それがなんの涙だったかは彼女にもはっきりとはわからな。泣き止んだ後、彼女は三島毅彦が憧れの対象としてではなく、一人の決定的な異性として心の内奥に深々とはいりこんで彼女を捉えたことを、鮮烈な感激として味わった。

厳密に言えば、二人の特別研究が、日常生活の隅々まで、毅彦の指示に従つて、完全にその行動の自由を奪われて行為しなくてはならなくなったのは、日常の起居動作、会話、食事、生理的な習慣にいたるまで、外国の習慣を教え込まれるようになったことを通じてだ。それは第二週から始まった。第二週の終りに初めて鞭が用いられた。教育は厳しさと激しさを増した。三週目に入ると、鞭は一日に一度は使用された。

第四週の月曜日の日課表によると、個人的な時間は殆んどない。

彼女達は五時三十分起床しなければならぬ。起きぬけに手洗いにいき、十五分間で清掃を済ます。五時五十分にはシャワー室にはいり、洗顔を兼ねて、冷水シャワーを十分間あびる。

その後、まだ人気がない朝のグラウンドにいて、体操とランニングをする。これは三十分間で、正確に三十分間、彼女達は絶えずなんらかの運動をしつづけなければならない。

それが済むと、学園の祈祷室にはいって一時間、沈思の時間を過ごし、七時五十分には必らず離れ洋館の食堂にはいって、八時に綾小路学園長と朝食をとる。

八時三十分には、穀彦の検診がある。もと

もと彼は医学者である。検診は相当デリケートな点にも及ぶ。検診が終ると手洗いにいき、九時三十分には、特別教育Bルームにはいって、午前の講義である。講義は十二時までぶっとおしに行われる。生徒は二人だけなので気をゆるめることはできない。講義が終つてぐったりとして帰室すると、昼食、手洗いとあつて、午後一時から一時間、休息を兼ねた日光浴が、洋館の一階ヴェランダで、服を脱いでおこなわれる。

午後二時から交替で個人レッスんだ。この間、体の空いている方は、自習または洗濯等の身の廻り整理だ。個人レッスンは、六時三十分の夕食までで、夕食が済むと、七時から

九時まで、穀彦の部屋に呼び込まれて、補講という名目の、反省の時間を過ぎなければならぬ。穀彦の部屋の掃除や、彼の肩をもむことや、服や靴の手入れをして、彼につかえるのもこの時間だ。

九時をすぎると穀彦に続いて入浴する。一日の疲れをいやし、身体を清潔にたもつための時間だ。しばしば鞭痕がしみて痛む。

九時三十分、夜の祈祷、十時、自室で総復習と予習、十一時、就床というのが、主要な日課だ。睡眠時間の六時間三十分は、熟睡すれば短かすぎはしないし、長すぎもしない。

(続く)

記 録

の

(140) らくがき

世の謹厳なる紳士諸公は、見ゆれど映らぬ類のらくがきに、かつひこの心には直接、響きかける種類のものを、まま見受けるようになったのはどういふわけだろうか。

かつひこの実見した範囲では、都内での公衆トイレだが、駒形橋、上野御徒町、中央線西荻窪南口、新宿西口等々に、それぞれ人が違

うと思われる書きかたの、かつひこと同好のあこがれの文章を読みとることができた。内、三件は男性より女性への所望、一件は逆に女性からの呼びかけとれる。

ケッサクは、山手線新大久保駅のもので、便器希望者を求むとのらくがきに、志願者が二人。ゼヒこの私めに、と熱願している。らくがきについては、二、三回このノートに書いたが、無責任なざれごとには違いない

愛好者

とやま

かづひこ



が、それだけに本心の吐け口ともいえるだろうと思うのだ。

(141)

ミルク・スタンド

「週刊大衆」誌（四月十一日号）「今週の話題」欄に、東京神田駅付近にあるという末亡

人サロンのはなしが載っている。

ここのサロンの女給さんにハイボールをおごると、おかえしに赤チャンの代りとして、本物のミルクをゴチソウしてくれる、とかいうのだが、これが万一、本当のこととしてもかづひこは、これだけでは、もの足りない。同じおかえしを貰うなら、赤チャンの分を横取りなどしたくはない。全々不要になったもので結構、いや、その方がより有難い。そんなサロンが出現しないものか、とタメ息をつくのだ。

(142)

四つんばい

三月二十五日の朝日新聞社会面を開いて思わずドキッ!とした。

『宮さまお泊りで四つんばい検便』という、三段又キの記事にぶつかったからだ。

二十五日から高松宮さまが泊まれる山形県の亀屋ホテルで、保健所が、家族、従業員、の全員を男女を問わず四つんばいにさせて検便し、そのやりかたが、人権じゅうりんだと問題になったそうである。尚も、翌二十六日付の同紙社会面でも、波紋よぶ四つんばい検便と大きく追いうちをかけ、検便の模様を

報道しているが、若い女性たちが、あられもない格好で検便されるのは、ずいぶん羞しいことであつたろう。

ともあれ、かづひことしては、大新聞の紙上に、現実の報道として、ガラス棒とかマツチ箱だとか検便だとか若い女性などという字句を見出すだけで、奇妙に胸がおどるのだ。

(143)

地上最低のショー

日本観光新聞、三月二十八日号に、

「女の加虐性（サディズム）」と男の被虐性（マゾヒズム）を満足させるショーが、ロンドンの「カジノ・ド・パリ」で上演されている。石綿でできたダブダブの奇妙な服を着た男をパンティ一枚の美女が鉛玉を入れた皮袋で所かまわずひっぱたくという「レディース・アンド・ゼントルメン・スリング」で、女が男をいじめるのだから女の客が多いと思いきやお客はほとんど中年の男。「ショーもここまできてはおしまい」とかなり非難の声もたかい。Ⅱ（原文のまま）

という一文が写真入りで載っていた。一度実際にその「おし、まいのショー」を観てみたものである。

告白

倒錯へのみち

成 舞 芳 夫

私が戦争末期に送った不思議な生活、それは今こうして筆をとっていても、小説の筋書の様な気がするくらいです。しかも、その時の「変えられた性による生活」が現在の私の生き方に計り知れない影響を及ぼしてしまっただです。

話は十六年前の晩秋、日本が米英相手の戦に敗れて、東京がそろそろB29の少数機による空襲にさらされ始めた頃に遡ります。当時の私は、職業軍人として満州事変で戦死した父の恩給で煙草屋を経営する母と、二つちがいの姉との三人ぐらしでした。私は私大の予

科に入って二年目でしたが、既に文科系学生徴兵猶予は撤廃された後であり、まもなく戦に狩り出される運命を待つばかりで、希望の無い毎日を送っていました。ところが、それが一夜の空襲によって百八十度の大転回をしてしまったのです。

その夜は、例によって七時頃になると空襲警報が発令されました。毎夜の事ではあり、数機しか来襲しないとのニュースなので、親子三人は真暗な母屋で雑談をしていたのですが、その夜は私達の近くにあって飛行機工場が目標と見え、爆発の音や火の手が意外に近

いので、姉を裏庭の防空壕に一足先きに退避させ、母と二人で明朝早くから行列を作る人達の為の配給の煙草を片づけている、丁度その時でした。目の前に真赤な火柱が立った次の瞬間、物凄い音と一緒に家ごとずしんと叩きつけられて、しばらく気が遠くなっていました。私が、はっと正気に戻ったのは氣狂いの様な母の叫びが耳を打ったからです。「芳夫ッ美佐子が」私はよろよろと立上って母の声のする裏庭に走り出しました。姉がひそんでいた防空壕のあたりに、ぽっかりと穴があいて姉の姿はどこにも見当りません。焼夷

弾、それも小型なのに運悪く直撃をくったのです。しかし、たった一人の娘、そして姉を失ったという悲劇にも、いつまでも打ちのめされている暇がありません。火の手が身近に迫ってきたからです。夜の白じら明けに戻った時、あたり一面にたちこめる硝煙の中に残ったのは僅かに我家の土蔵だけでした。

内に入った母は放心した様に坐ったまま身動き一つしませんでした。突然ふりかえる
と「芳夫、お前、美佐子になってくれないか」と、つきさす様な口調で言いました。私は、とっさに母が気が狂ったと思って、ぎよっとなりました。母は、すぐ話を次いで「いいえ私は正気です。でも、美佐子が死んでしまいたった一人残ったお前も、ほっておけば兵隊にとられてしまうのは、わかりきったこと、誰が何といったって嫌です。幸い、まだ何が起ったか誰も知りません。死亡届は芳夫にしておきます。ね、一生のお願いだから、そうしておくれ」と、私に口をさしはさむ余地すら与えず、しゃべります。勿論、その頃、相

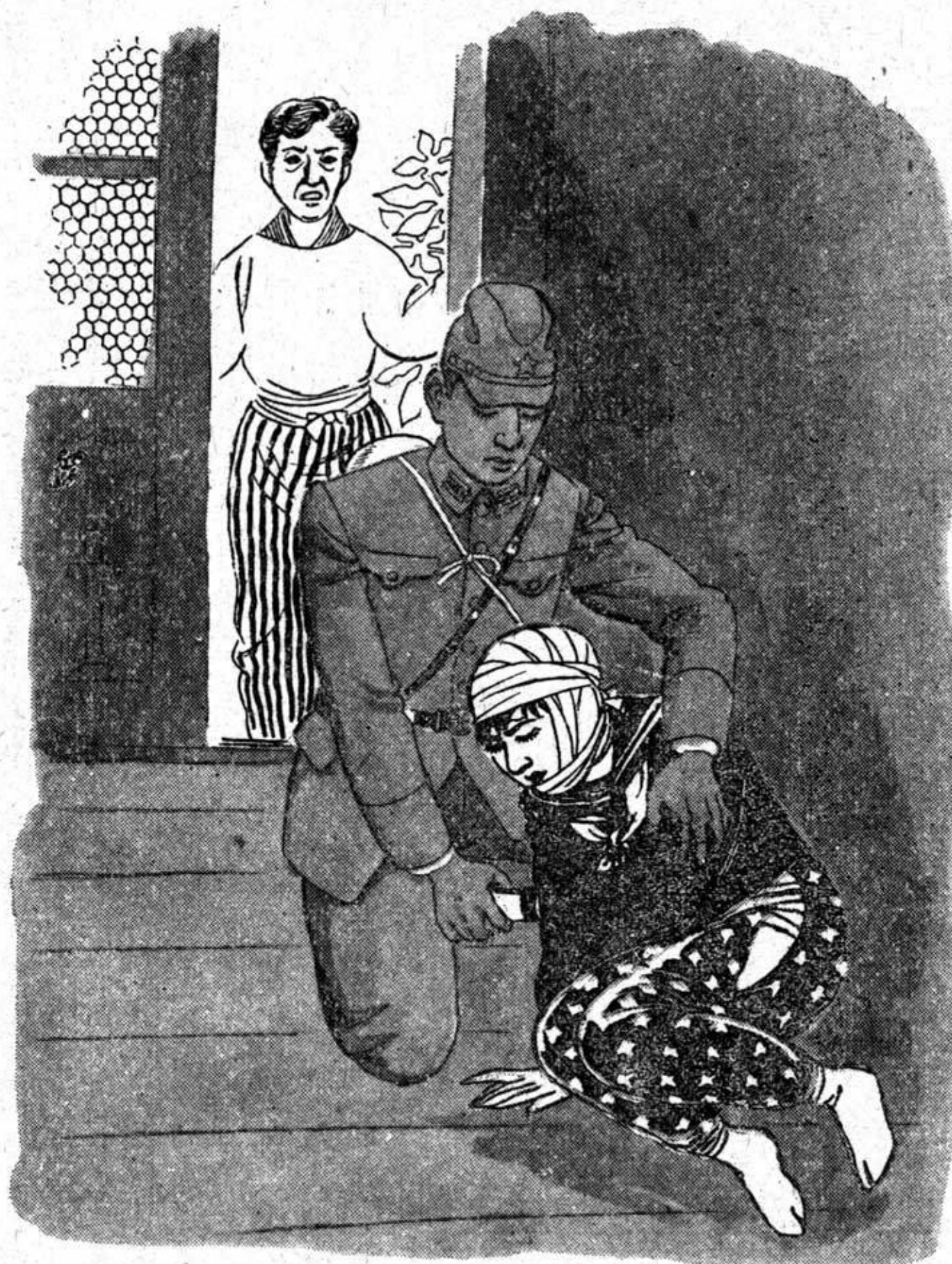
いう事にする届出自体は、さしてむづかしい事ではありませんが、男である私が、いくら姉に似た顔立とはいえ、四六時中、女になって暮せるものでもなし、又、こんな奇想天外な計画も万一、真相が判明したら、私達親子の運命がどうなるかに思いを走らせると、そう簡単に母の言葉に服するわけにはゆきません。極力、思いとどまる様に説得につとめたのですが、母はいつもに似合わず頑としてききません。「大丈夫、大火傷をしたことにして髪がのびる迄は顔中に繃帯をして、外に出ずにいるのよ。女らしい動作や言葉は、その間に練習するのです。お前は幸い小柄だし、顔立もやさしいから、それで髪でものびれば大丈夫だよ。それにね、芳夫、伯父さん（母の兄で当時、A新聞にいました）から聞いたんだけど、東京もやられはじめたし、もう戦争は長くないそうだよ。その時はその時でもとに戻れるさ。それにね、芳夫、お前は母さんが何も知らないと思ってるだろうけど、お前が姉さんのセーラー服やブローズなどをこっそり着たり穿いたりして楽しんでたのを、ちゃんと知ってるんだよ。ね、お願いだから私のいう通りにしておくれ。万一の時は、それこそ二人で一緒に死んだっていいじゃない

か。ね」私は、とうとう母に負けました。勿論、私は兵隊なんかにくくのは大嫌いですがセーラー服を着たときなど、ああ女になりたい、女の方がどんなにかいいかなどと屢々思ったのも事実ですが、ただそんな事が現実に出来るものではないと、あきらめていたので。でも、何も知らない筈の母が、そこ迄知っていると切り出した時、私は、もうどうにでもなれ、と半ば捨鉢の様な気分で承知したのでした。幸い焼残った土蔵の中からとり出した姉の下着類を身にまとい、ブラジャーの中には綿を丸めてつめ（その頃、パットなどというものはなかったのですから）頭も丸坊主では具合が悪いので綿で適当にふくらませ首まで、ぐるぐるほう帯で巻いてしまい、セーラー服に、もんぺをはきました。支度が出来ると母は、「じゃ、母さんは芳夫の死亡届を出しに行ってくるから、ここに寝ていなさい。あなたは負傷人で口がきけないのよ。それを忘れないで」と言い残して戸外に出てゆきました。取り残された私は俄に心細くなってきました。今迄は、衣服フェチシズム（あとでこんな言葉も知ったのですが）で済んだが、これからは、大げさに言えば敵中に潜入したスパイの如き周到な注意や勇気や演

技力がいるのです。それらに考えが及ぶと、不安は後から後から潮の様に押し寄せてくる

のです。その時、ガラッと土蔵の戸があいて顔見知りの防火班長が入ってきました。私の

胸は早鐘を打ちはじめました。彼は横になつた私のもんぺ姿をみると「おっ笑うちゃん、やられたな。大丈夫か」と顔を



のぞきこむ様にします。私が、こっくりとうなずきますと「芳夫君はどうした、お母さんは」と、やつぎ早にききます。仕方がないのでそばの紙に「弟は死にました。お母さんは届けを出しに」と書いている所へ、母が帰って来ました。流石に一瞬、ぎょっとした様でしたが、班長さんが「奥さん、今、笑うちゃんにきいたんだが、芳夫君がやられたって本当かね」ときいたのを汐に「そうなんです。それに美佐子だって顔にやけどまでしてしまつて、嫁入り前だっていうのに」と急に涙声になつてしまいました。母としては、娘と息子とのちがいこそあれ、子供一人を失つた悲しさは格別だったにちがいありません。私も何とはなしに涙がぼろぼろとこぼれてきてしまいました。月並の

なぐさめを言つて班長さんが出ていってしまった。母は「さあ、美佐子、これから女のしつけの練習をするから起きなさい」と、きびしい声で言いました。

それから私にとって、気の安まる暇も余り無い毎日がつづきました。坐り方、食事の仕方をはじめ、そうなのよ、そうですわ等の女性用語が、すらすらと口をついて出る為の発声法に至る迄、母はびしびしと容赦なく私をむちうちました。一生けんめいです。遊びや道楽ではなく、失敗はこの世から抹殺されることなのです。それに、いつ迄も頭から顔中、ほう帯でごまかすわけにもゆきません。母の計算では髪がお下げに辛じてゆえる頃迄には、ほう帯の大半はとり去らねばと考へていた様で、お化粧の方法も、しばらくたつうち教えてくれる様になりました。勿論、戦時のことです。それと一目でわかる様な濃い化粧は出来ませんが、白粉を薄く刷き、口紅をほんの少しさす位のこと、自分には女なのだという意識をたえず持ちつづける為にも必要だと母は信じている様でした。正月を越して春が近づくにつれ、空襲は大規模となってきましたが郊外に近い私の家のあたりは、かえって静かな日がつづきました。母

は、その頃から「美佐ちゃん、ちよっと配給物をとりに行つておくれ」とか「一寸、お店に坐つてて頂戴」などと私を世間の空気になじませる様な態度をとることすら、ありません。おそらく母がみても、私が髪も延び、化粧、立居振舞も何んとなく女らしさを増してきたので、母は自分のもくろみ通りとなりつつある計画に対して、自信を持ちはじめてきたのだと思います。

ある春の午後でした。母は買物に出、私は所在なさに手近の小説を拾ひ読みしていた時でした。突然「やあ、やっぱり焼けたんですね」と元気そうな声と共に、陸軍少尉の服を着た青年が入ってきました。「美佐子さん、よく無事だったね。僕もやっと暇をみつけて出てこられる身分になったよ。お母さんは？ 弟さんは、もう入隊した？」と、彼が次々と質問した時、私は、やっと、この人こそ姉がひそかに恋していた青年Kだったことに気がつきました。さあ、一大事です。もう私のほう帯は首だけで、顔はすっかり露出しているのです。少くとも今迄の他人とはちがって、姉を愛していた人です。今にも「君は誰だ？ 君は美佐子じゃない」と彼が大声で叫び出しはしないかと、身ぶるいの出そうなのを、じ

つとこらえながら、お茶でも入れようと腰を浮かしかけた時でした。彼は、いきなり私を力づくで引寄せると、あつというまに、唇を合わせてしまいました。この時です。私の身体の中を或る感動が不思議な戦慄となつてふきぬけました。彼の夢をこわしてはならないとか、自分の正体を見破られてはならない、などという理窟など考える余裕もありませんでした。しかし次の瞬間、私はハッとKをつきのけました。「いやよ、かんにんして」こんな場合にも、私は口にする言葉を吟味してかからねばなりません。そんな自分が、ひどくかわいそうになつて、私はポロポロ涙をこぼしつづけていました。Kも少し冷静になったとみえ「僕は近く戦場に征くです。その前に君の愛情をたしかめたかったです。ね、どうか僕の願いをきいてください」と低声で耳元で、ささやきます。私は両手で顔を掩つて泣く真似をつづけていました。早く母が帰って来ないと、きつと真相がわかってしまう。今は土蔵の中が暗く、Kさんが逆上気味だからよいけれど、彼が冷静を取り戻してくれば、いくら弟の私に面識がなかったとはいえ、又女姿になつている私が姉とよく似ているとはいえ、いつまでも自分の恋人をまちがえる筈

はありません。その時、母が帰ってきました。私は、ほっとし、彼は少々あわてました。彼は、いきなり母にむきなおると、「おばさんどうか芙佐子さんを僕に下さい。戦地に死に征く前に、僕は結婚式をあげたいのです。でも僕は、きつと帰ってきます。どうか僕の願いを許して下さい。芙佐子さんは僕が入隊前に、承知して下さったのですから」といささか矛盾した事を口走りながら、母に迫ります。母が「とにかく突然の話だから、よく考えて」と大汗をかき乍ら彼を帰したのは一時間以上もたってからでした。彼は入口まで送って出た私の手を握って「芙佐子さん、一週間たったら、きつと来ます。その時、きつと僕の申込の返事をして下さいね」と小声でいうと、未練をふりきる様に、後をもみずに足早に帰隊してゆきました。

その夜、私は母から、こう言われました。「こうなつては、ここに居るのは危険だね。辛い荷物を疎開してある山梨県の韮崎町に一応、私達も行くことにしようよ」私達母娘は二日ほどたって韮崎に移りました。南アルプス連山が間近に聳える北風の冷い、淋しい町です。引越してすぐ私を女子挺身隊にと町会から言ってきましたが、母は東京で戦災の為

大けがをしたこと（その頃、私は又、ほう帯を顔半分、巻いていました）を理由に金の力に物を言わせて撃退してしまいました。そのうち初夏になり、私の髪も大分長くなったあの夜、私は町の中心部にニュース映画を見にいった帰り、村の百姓に襲われました。家まで二十分位の、とある橋のたもとまで来た時その男がいきなり飛び出すと、私を抱きすくめました。その頃、私はもうすっかり心理的に女性化が進んでいたもので、争うより先に、がたがたとふるえが来てしまっていました。が、はつと氣をとりなおして力一杯、彼を突きとばしました。不意をくらった男が土橋の下に、さんぷりと落ちこむのを後に、私は息せききつてかけ戻りました。母はその晩、お茶を飲みながら「お前もすっかり娘みたいになつてしまったね。男に狙われるなんて、死んだお父様がきいたら、どんなに怒ることだろうね」と、しんみりした調子で言うのでした。

私の生活はその後、終戦まで割合、平凡に終始しました。配給物をとりにゆく時など、リヤカーをひっぱったりしていると土地の人から「東京のお嬢さんがこんな事をしてるのを見るのは、なんだか痛々しい。でも、体格も

よく、丈夫そうだから、いっそこで嫁さんにいったら」などと、からかわれることがある位のものでした。

終戦から半年、母はひとりで屢々東京に出てゆきました。その頃、極度に入手困難だった切符や闇物資を手に入れるのには不思議な才能を発揮する母でしたが、私の戸籍もいつの間にか、すりかえるのに成功してしまつたのです。昭和二十年も終りに近づいたある日母は私を呼ぶと、いつになくあらたまった声で「芳夫、お前がやつと男に戻れる時が来ましたよ。これでお前も又、大手をふって歩ける様になれる。長い間、御苦労様でしたね」そういつて私の三つ組に編んだ髪をザクリと立ちきつて、無造作にバリカンをあてはじめました。私は、もんぺにブラウスのまま丸坊主にされてゆく自分に、ひどく悲しくなつてしまいました。その頃は、もう女ぐらしが板についていた私は、出来れば一度でいいから姉の豪華な訪問着を身にとって記念の写真をとってみたかったのです。

東京に戻つた私は、その頃の日本人の誰もがそうであつた様に、生きる為の毎日に追われて、いつとはなしに過去のことは忘れてゆきました。

母は二十五年の春、死にました。臨終の床に私の手を握って「美佐子、よかったねえ。本当に、戦争で死ななくてねえ」と、つぶやく母に、親せき一同は「可哀そうに、芳夫さんと死んだ美うちちゃんの見さかいもつかなくなったらしい」と涙をぬぐっていました、真相を知るたった一人の私は、他の人々とはちがった悲しみと感謝の涙が、あとからあとから湧き上ってくるのでした。

それから更に三年ほどたつうち、私の心に

不思議な誘惑が芽生えてきました。それは戦時中とちがって、すっかり美しくなった女性の仲間入りをもう一度、それも今度は誰にもおびやかされずにしてみたいという気持なのです。昔とちがって私の皮膚も荒れてきており、ひげも濃くなって化粧には苦心をしなければならず、又、髪ものばすわけにゆかないので、高価なかつらも用意せねばならず、実現迄には種々の障害がありました、私は気長に一つずつ障害を克服してゆきました。

三十年頃には和洋装と、一通りの女物衣類を揃え、時折は外出する迄になりました。ところが女の服装をし、化粧品や香料の匂いに包まれているうち、単にそれだけでは物足りなくなってきたのです。私はこの頃、美佐子としてKさんから抱きすくめられたあの時の身内をつらぬく様な、戦慄を、もう一度味わいたい。そして一年のうち数週間は身も心も女として過してみたい、と願う様になってしまったのです。

(おわり)

【新版】袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集 大名刺判 (9×6.5cm) 印画紙焼付

各組一枚一組 (全部送料共)

Y1	全裸荷造棒しぼり	(大塚啓子)
Y2	乱れ黒髪裸見本	(大塚啓子)
Y3	観念した胡坐	(大塚啓子)
Y4	見事な飾り物	(大塚啓子)
Y5	浴室股間縛り	(大塚啓子)
Y6	麗しの緊縛裸像	(愛川悦子)
一組一枚		八〇円
五組五枚		三〇〇円
十組十枚		五五〇円
二十組二十枚		一〇〇〇円
三十組三十枚		一四〇〇円
四十組四十枚		一七五〇円
五十組五十枚		二〇〇〇円

Y7	逆十字後手縛	(愛川悦子)
Y8	裸身の捕われ人	(愛川悦子)
Y9	逆エビ後手足吊り	(愛川悦子)
Y10	全裸ねの縛り	(田中芳代)
Y11	なまめかしき緊縛	(花坂道子)
Y12	全裸フトンむし	(大塚啓子)
Y13	蒲団責裸またぎ	(大塚啓子)
Y14	初々しき裸全身像	(岩井知子)
Y15	ヌード股間しぼり	(絹川文代)
Y16	全裸脚掌股間縛	(絹川文代)
Y17	セーラー後手吊り	(川辺砂登子)
Y18	庭園ヌード縛り	(絹川文代)
Y19	全裸全身軀自慢	(愛川悦子)
Y20	豊満双丘くらべ	(愛川悦子)
Y21	追いつめられた裸女	(愛川悦子)
Y22	遅ましきヒップ	(愛川悦子)

Y23	大の字晒し	(絹川文代)
Y24	縛り正面正坐	(絹川文代)
Y25	胸のポリウム自慢	(愛川悦子)
Y26	麗人受難の巻	(益田房子)
Y27	もつこれで許して	(益田房子)
Y28	むしられたスロース	(花坂道子)
Y29	全裸縛りの全身	(平野笑子)
Y30	鎮座する縛り女神	(平野笑子)
Y31	囚女後手柱縛り	(大塚啓子)
Y32	全裸強烈股間縛	(絹川文代)
Y33	ベッド縛りのポーズ	(絹川文代)
Y34	開股一番一直線	(絹川文代)
Y35	縛り腰巻色模様	(絹川文代)
Y36	亀田股間縛正面	(絹川文代)
Y37	全裸椅子またぎ	(田原美佐子)
Y38	妖艶闊のしぼり	(絹川文代)
Y39	椅子またぎ後手	(田原美佐子)
Y40	強烈第手首縛	(田原美佐子)
Y41	ハタ力縛り人形	(絹川文代)

Y42	濃艶ハタ力縛り	(絹川文代)
Y43	あられもなき開股	(大塚啓子)
Y44	全裸変形股間正面	(大塚啓子)
Y45	後手立木吊り	(村井知可子)
Y46	全裸後手壁ハリツケ	(愛川悦子)
Y47	全裸寝台羞恥責め	(花坂道子)
Y48	振袖令嬢後手責め	(花坂道子)
Y49	長襦袢後手しぼり	(花坂道子)
Y50	ワンピース縛り	(花坂道子)
Y51	手吊り裸身の乱舞	(絹川文代)
Y52	柱縛り観念の図	(絹川文代)
Y53	不行儀姿態の美	(絹川文代)
Y54	カメラに晒す全裸	(大塚啓子)
Y55	緊縛女体の開陳	(絹川文代)
Y56	膨隆突出した臀部	(絹川文代)
Y57	前手錠全裸像	(大塚啓子)
Y58	股間縛開股の絵	(絹川文代)
Y59	聖壇のさらし者	(絹川文代)
Y60	エビ責めの表情	(絹川文代)

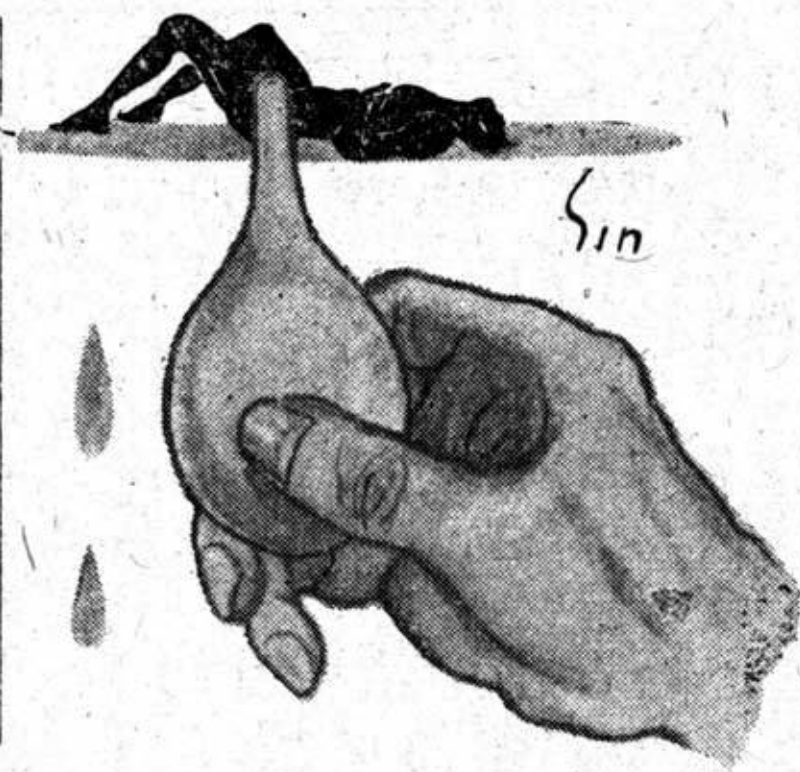
あるソドミニストの哀話

特

高

室

榎村 奏
青木 審・画



稲葉徹次が社会主義に傾いていったのは、何も信念があつてのことではないが、勿論、動機らしいものはある。尋常小学校をやつと出ただけの彼は、大学出に対して当然ながら強いコンプレックスを抱いていた。社会主義と大学とは直接に関連はない。しかし少くとも主義というものに知性の匂を感じていた。彼は、そこにまた、いいしれぬ魅力を感じてもいたのだ。事実、徹次はレーニンの写真を密かに下宿の壁に貼ったり、"アカハタ"を

読んだりすると、自分が急に偉くなったような気がして昂奮した。そして何にも考えないでただ働いている仲間の職工が馬鹿に見え、不思議にも大学出に対する劣等感も消えた。そして、電車の中や人混みで、(俺は主義者だぞウ)と叫びたい誘惑を覚えた。組合員であるということとは、彼にとって誇りであるよりも一種の優越感だった。

常任委員会の席上での徹次といえば、殆んど発言などはないで、お茶汲みみたいな雑用を好んでしているふうに見えた。そして、その合間々々には、同郷の先輩である石渡省

吾の、いつも不精髭の生えている頬骨の突きでた貌を、畏敬の念をもって眺めるのだ。石渡の口から出る「マルクス主義」だとか「ストライキ」とかいう言葉を聞くと、徹次は身内がゾクゾクした。石渡は痩せた躰付に似ず非常にエネルギーで、それは私生活に於いても端的に現れていた。三十五才の彼には二度目の細君と五人の子供があつた。ときとして徹次に奇妙な要求をすることがあつたが。もはや徹次には「神」である石渡の要求を、否定しざる勇氣を持たなかつた。だが、どこまでいっても徹次にとってそれは苦痛の

時間でしかなかった。

徹次の心は湿った薪の様に燻りはしても決して燃えあがらないのだ。

二月に入って東京では三度目の雪が降ったその日、常任委員会が十二時過ぎまでかかって組合員達はそのまま泊ることになった。

東北出身の者は習慣で冬でも裸になって寝る。埼玉県生れの徹次には、そんな真似はできなかったが、石渡は「そのほうが確かに暖かいし、健康にもいい。第一、プロレタリア向きだ」と共鳴してそれにならった。

頸紐をかけ、サーベルを押えた警官の一隊が、靴音も荒く組合の二階へ駆け上って来たのは、それから一時間ばかり経ってからのことだった。

眠っていなかった徹次は真先にそれに気づき、跳ね起きると素早く服装を整えた。

部屋に踏み込んだ警官達は、片端から掛布団を剥ぎとり、

「オイ、起きろッ！」と口々に呶鳴った。

八名の組合員は、まるで予期していたことが起ったように少しも騒がなかった。

裸でいたものも悠々と服を着けている。

「何だ、その恰好は。早くしろッ」

警官は焦立って喚き、威嚇するつもりでサーベルをガチャガチャ鳴らした。

徹次は牀の顫えを止めることができなかった。恐怖というよりは異常な緊張だった。

「オイ、気をしっかり張ってるんだ。俺がついてる」

石渡がすり寄って囁いたが、徹次はその言葉でかえって不安になった。

留置場の中は、野犬繋留場のような臭気と喧噪が充満していた。それは既にブチ込まれている先客がいたからで、彼等は堂々(?)と連行されて来た石渡の一行を拍手をもって迎え、「プロレタリア、万才」を叫んだ。

そんな昂奮の渦の中にいて、徹次はどうかするとスツと孤独に落ち込んでいく自分を感じた。石渡にピタリとすがりついていてもいつものような信頼感は湧いてこない。

そういう心理状態は、今までも、ときどき徹次を襲ったことがある。そして、その後では必ず、組合員には違いないが発言力も行動力もない己に嫌気がさして、いっそ組合なんか脱退してしまおうかと本気で考えたりした。

取調べが開始され、第一番に連れ出されて

いった石渡は、かなり長い時間が経っても戻されて来なかった。

「今日も、禪巖が暴れてンだろ。こんなにかかるようじゃ、石渡は半殺しだぜ。畜生! ……」

隣の男が呻くように口ばしすると、徹次は思わず言葉をかけた。

「禪巖、って何です?」

「おまえ知らねえのか。巖本ってえ特高のイヌさ。そいつはな、拷問をするとき、きまつて六尺禪一本になりやがるんだ。それだけじゃアねえ。あいつは、ソレ、何とかいうだろ——そうそう、サジストだ。そのサジストに達えねえと思われるくらい残酷なんだ。あいつにかかったら最後、半殺しにされるなアまだいいほうで、今までにもう何人の同志が殺されたか判らねえ。畜生オ。禪巖の野郎! ……」

男が再び唸って拳を固めると、徹次はものがいえなかった。

石渡は本当に半殺しの目に遭わされているのだろうか。そう思うと勃然として特高に対する怒りが込み上げてくるが、徹次にとって今はそれよりも、自分もまた同じ運命にあることへの恐怖のほうが大きかった。

「オイ、稲葉徹次。出ろ」

まさか次が自分の番だとは思っていなかった徹次は、一瞬、耳を疑ったが、

「こらッ、稲葉。聞こえんのか！」

唳鳴られると、躓きながら立ちあがった。

膝頭が、いくらとめようとしてもガクガク慄え、徹次は急に激しい尿意を覚えた。

「アノ、便所へいきたいんですが——」

恐る恐るいってみると、色の黒い瘦せた巡査は、

「我慢できんのか」

と不気嫌に眉をしかめたが、

「面倒な奴だ。来い」

といって廊下を曲った。

「早くするんだぞ」

監視されたうえに、そう急^せきたてられると常のような調子にはゆかない。

（嘘だと思われやしないか——）と焦^{あせ}ると愈々

というのをきかないのだ。徹次は情なさ^{なさ}に涙が湧いてきた。

やっと少量を済ますことが出来たが、その色は気味の悪いくらい赤味がかっていた。

徹次がノロノロと向きを変えると、巡査は何かいおうとしていたのをやめたが、それは涙ぐんでいる徹次の眼を見たからかもしれない

い。とにかく、他の組合員とはどこか違う徹次に、若い巡査はほんの気まぐれな同情を抱いたらしい。取調室が近くなると、巡査は徹次の耳に口を寄せ、

「あんまり逆わんほうがいいぜ。それが結局おまえの為だからな」と囁いた。

取調室へ入って徹次が最初に見たものは、何か異様な物体だった。そのものは天井の梁についている滑車からロープで吊り下っていた。そしてそれが人間であり、石渡にまぎれもないと判るまでには、一分近い時間がかかった。それは徹次の気持が顛倒していたからばかりではなく、打撲の痕で殆んど通常の皮膚の色をしていない躰や、暗紫色に脹れあがって、顔^顔の概念を離れてしまった頭部、しかも頭と足とが逆になって逆さに吊られているたのでは、予備知識でも持たぬ限り、咄嗟にそれを人間だと識別するのは無理だった。それまで死んだように眼を閉じていた石渡は、徹次が入ってきた気配で眼を開けたが、その眼は普段の半分もないくらいに細く、しかし燃えるようにキラキラ光っていた。

（頑張れよ。俺達はこんな目に遭わせられれば遭わせられるほど、強くなるんだ！）

石渡の眼は、徹次を睨めてそういつているようだった。徹次は、その言葉にならぬ声を振り払うように視線を逸らした。それでなくとも、逆吊りにされた石渡の姿は、信じられぬくらいに醜悪で正視するに堪えなかった。

「禪^{いん}巖^{いん}」という異名で、鬼のように恐れられている巖本は、聞いた通り六尺禪一本の姿で一息入れる為に竹刀を持ったまま椅子にかけていたが、徹次を見てもまるで意に介しないふうだった。三十七、八の髭の痕の濃い貌は獣じみた精悍さで、骨太の岩乗な体軀は固く締った筋肉がもりあがっている。石渡に与えた拷問で汗ばんでいるのか、狐色の皮膚は油を刷いたように輝き、醜く変色した石渡の躰と比べ、思わず齒ざしりをしたくなるような美しさが、瞬間、徹次を捕えた。

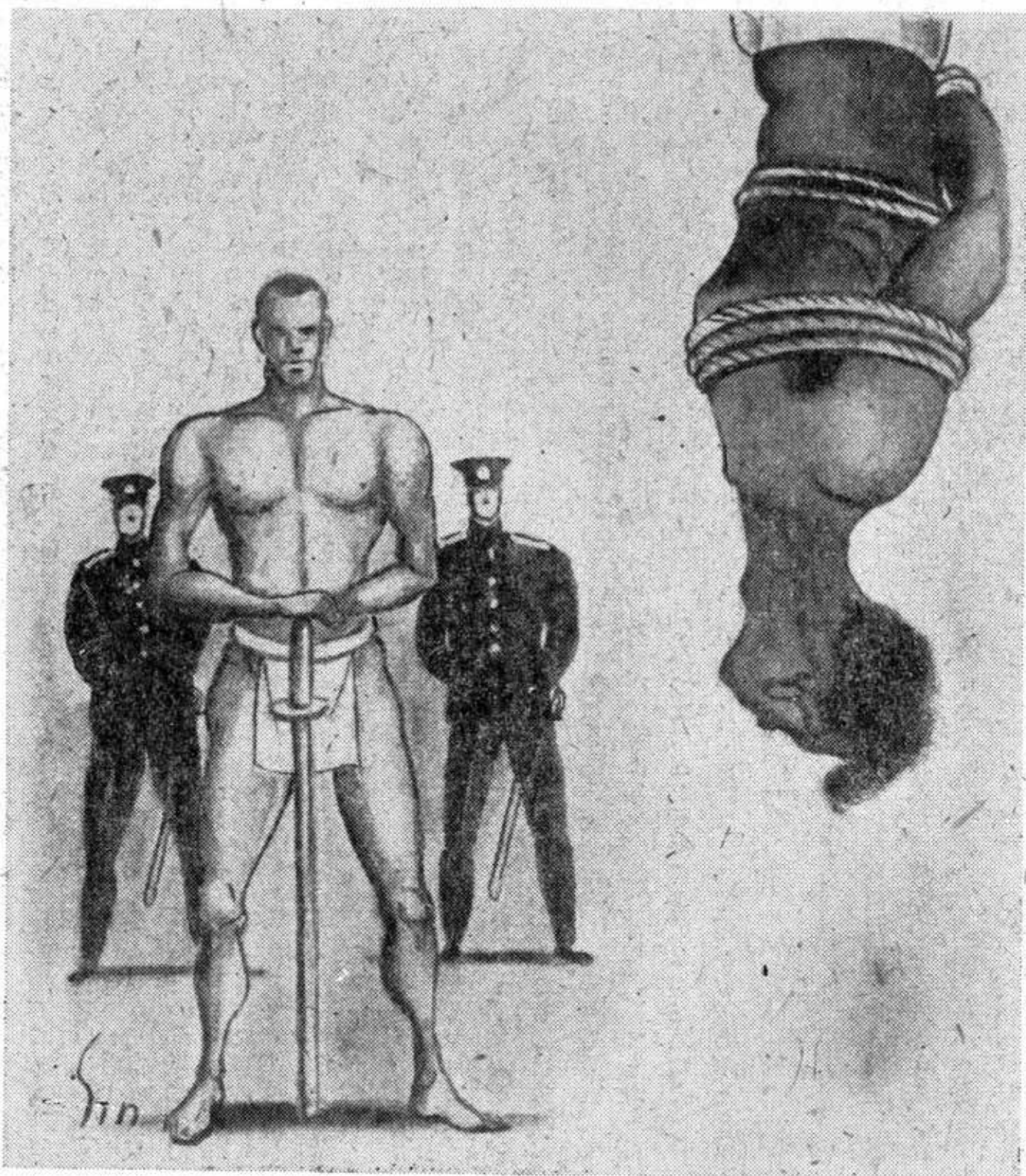
「稲葉。どうだ。おまえはこういう光景を見るのははじめてだろう？」

女のような声を出す司法主任が、クローム鍍金の薄手な眼鏡の縁に指をかけながら、ゆっくりと徹次を眺めた。何と答えていいか判らないので徹次が俯向いていると、ガタンと椅子を鳴らして巖本が立ちあがった。五尺七、八寸は充分にある巖本の体軀から、サツと殺気のようなものが流れる。

「いいか、小僧。よく見ておれ」

そういわれて徹次は顔を上げたが、異常な緊迫感で立っているのがやっとだった。

巖本の竹刀が風を切り、肉の打たれる音と共に「グッ!」というような石渡の呻きを聞



くと、反射的に徹次は眼をつぶったが、「よく見ている」といわれたのを思いだして、すぐまた眼を開いた。竹刀は続けて飛び、石渡の呻きは次第に高くなる。

この残酷な拷問が行われている部屋の中では、蒼白い顔の司法主任も、黒い喪章のような拷問係巡査も、犠牲者の石渡までもが、陰惨な空気にドス黒く冒されていたが、当の拷問の執行者である巖本だけは、不思議に生々として、猛々しく躍動する筋肉や汗に光る脂のような皮膚は、眩しいほどに鮮烈だった。

この世のものとも思われぬ残酷さと、奇妙な倒錯した甘美さの混ざり合った光景は、もはや悪夢としか表現できない。

徹次の脳髄は痴呆のように痺れだし、ともすると現実感を失いそうになったが、石渡の躰が踊るように痙攣を始め、血か汗か判らない液体がポタポタと床に滴ったのを見ると、それきりフツと失神してしまった。

二

下町にある総合病院の外科病棟は、羽目板が反って床がブカブカするような木造病舎で、大部屋にギッチリ並んだベッドは殆んど満員だった。吹きさらしの廊下から一步、病

室に入ると、病院特有の消毒薬の臭いの他に何かムツとする醜えた臭気が鼻を刺す。ただでさえ採光の悪い窓には、いつでもおしめや繃帯が干してあって、どんなに天気の良い日も部屋の中は薄暗かった。

壁際のベッドに身を横えている石渡省吾は拷問を受けた日から十日余りで、もうかなり体力を恢復していた。痩せた軀のどこにそんな強靱さが潜んでいたのかと誰もが驚くほどで、瀕死に近い重傷だったとは、どうしても思えない。

「元氣そうですね……」

他の組合員達とは、わざと別行動をとって一人で見舞に來た徹次は、遠慮深そうに石渡の顔を覗き込んだ。

「ありがとう。もう二、三日したら退院するよ」

「でも、余り無理をしちゃいけませんよ」

「うん。しかし、入院費のこともあるし、それに正直いってここは余り居心地がよくないんでね」

「そうですね」

「君。何だか元氣がないようだな」

「いいえ。そんなことはありません」

「皆に何かいわれたんじゃないのか？ 氣にす

るなよ。俺は君を信じている」

あの日、検束された組合員達は多かれ少かれ皆一様に拷問を受けた中で、徹次だけが失神はしたものの殆んど何もされずに帰されたということは、確かに彼の立場を苦しくしていた。面と向って嫌味をいう者こそなかったが、何かあったのではないかという疑念を抱かれてもしかたなかったし、それがハッキリとした形でなくても、徹次に対する不信は組合員達の表情から隠せなかった。警察としては、何も特別の意図があつて彼を拷問にかけなかったわけでもないだろう。彼のような新顔の若僧には仲間の拷問を見せるだけでたくさんだと思つたかも知れないし、偶々彼が失神したのでとりやめにしたのかもしれないのだ。徹次もあのかきは自分の幸運を喜んだものだが、今になってみれば頬の一つも殴られなかったことが却って恨めしくさえる。

「しかし、君ははじめてだから、あのときは驚いたろう？」

「え、ええ。いいえ……」

「俺達はな、弾圧を受ければ受けるほど、結束が固くなるんだ。拷問の痛みに堪えるとき心の底から資本家に対する憎しみが燃えて、新しくまた決意が漲るのだ。ハハハ、奴らは

逆効果であることに氣がつかんのさ」

「そうですね……」

「お互いに頑張ろう。俺もすぐ元氣になる。命ある限り、我らプロレタリアの為に闘うんだ！」

「石渡さん。声が高過ぎますよ！」

徹次に宥められて首を辣める石渡の顔は、昂奮で薄く上氣し、羨しくなるような斗志に満ち満ちている。

「ところでね君、いい難いことなんだがね。

女房は忙しいとみえて、このところサッパリ現れないし、看護婦にも頼み難いんだよ——」

「何ですか？ 一体……」

「ウン……看護婦がしてくれればいいんだが——」

「この看護婦は随分ガサガサしていますね。さっきも廊下でマゴマゴしてたら嘔吐られましたよ」

「いやア、彼女らも忙しいんだよ。低い賃金で酷使されてるんだ。資本家に搾取されてる労働者だよ。我々と同じプロレタリアさ。彼女らが女らしい優しさを失っているからって責めちゃア氣の毒だよ。だから俺も無理がないんだ」

「判りました。僕でできることなら何でもいってください」

「すまんア。実は、俺、十日も通じがないんだ——」

「十日も！それじゃア苦しいでしょう」

「うん。それですまんが、浣腸をして貰いたいと思ってね」

「浣腸ですか——」

「病院の前の坂を下ると四つ角のところに薬局があるだろう。そこで軽便浣腸を買ってきてほしいんだ。もう随分固くなってるから四つぐらい必要だな。悪いけど頼むよ」

「いいですよ。すぐいって来ます」

徹次は薬局へいくと、いわれた通りイチジク浣腸を四つ買い、隣りが洋品店なので思いついてメリヤスの申又を奮発した。

「本当にすまん。こんなことは女房にも頼み難くいんだが、君だから頼むんだよ」

いざとなると照れくさいのか、石渡は意味ありげないいかたをして笑った。

徹次は馴れない手つきで浣腸を施しながらフト巖本の姿を思いだした。細くて筋ばった石渡は、まるで巖本の躰付とは違っているのに、奇妙なくらい巖本の姿が髣髴としてくるのだ。それとは別に、徹次は浣腸という作業

が、ひどく自分の気持を昂ぶらせるものであることを知って、自身をもてあましていた。

それは、あるいは、いつもは石渡に対して従属的である自分が、施薬とはいえ命令的な位置に立った為からくる、一種の優越感かもしれないなかったし、もしかしたら、内攻しているサディズムが陶酔を呼び醒めたのかもしれないかった。

病院からの帰り、余り来たことのない町なので物珍らしそうにシネマの常設館の前に立ち止ったりしながら、ブラブラと歩いていたら徹次は、いつの間にかゴミゴミした住宅地に出たが、一軒のさほど大きくはない家の門を入っていく男の黒っぽいオーバーの後姿が、どこかで見たようだと思い、何の気なしに門へ近寄ってみると、ハッとして唾をのんだ。標札には「巖本銃三」と書いてあったのである。

徹次は急いで門の前を離れたが、よく考えてみると、巖本という姓は他にも無論ある筈だし、名前のほうは聞いていないのだから、「禪巖」だと断定してしまうのは早過ぎる気もする。徹次は五、六町先に煙草屋を見つけると、「バット」を買った。

「小母さん。あそこの巖本って家の人ね、もしかしたら警察へ出てる——」

「ええ、ええ、そうですよ。それもあんな特高でね、近所じゃア余り評判がよくないんだよ」

それだけ聞けば、たくさんだった。徹次はまるで逃げだすようにどんどん歩いて空地に出ると、やっと足を止め、暫くボンヤリしていたが、やがて転っている土管に腰をかける。と、「バット」に火を点けた。煙草は苦いだけで少しもうまくなり、忽ち灰になった。もうそろそろ夕飯時になるのに腹は空かなかった。そして辺りは次第に暗くなり、とうとう夜になったが、徹次は土管の上を動かかなかった。

更にそれから一時間余り経って、徹次はやっと腰を上げると、巖本の家の方角へ歩きだした。別にハッキリとした目的があつてではない。ただ何となく巖本の住む家の近くが立ち去り難く、そのあげくがもう一度、家を見てから帰ろうと思ったのである。

巖本家には明々と電灯が点り、普通の中流家庭と少しも変わったところはない。おそらく鬼と恐れられている巖本も普通の人間に返って、丹前にでも寛いでいることだろう。門柱

の陰に立ち尽してそんな想像を囲らすと、徹次の胸には甘酸っぱい懐しさがジーンと広がってきた。

誰か人の来る足音に周章てた徹次は、どこか身を隠すところはないかと探した。するとちょうど隣家との境が僅かばかり隙いていて通り抜けられるようになっていたので、急いでそこへ入っていった。奥がどうなっているか判らなかつたがズンズン歩いていくと、巖本家の裏へ出た。表側には板塀が張り囲らしてあるが、裏は低い竹垣があるだけで、それも相当古いとみえ、一カ所は破れたままになっている。まさか警察官の家へ押入る泥棒もいないだろうからいいようなものだが、不用心には違いない。狭い裏庭には植木らしいものもなく、表の構えに比べると荒れ果てた感じだが、徹次の関心をひいたのはそんなことではなく、庇がつきでている風呂場らしい建物だった。外についている焚口に残火が赤く見えている。

徹次は上衣の下がキュッと締めつけられるようになり、凝ッと立っていたが、やがてものに憑かれたようにフラフラと垣根の破れから庭に入ってしまった。
「オーイ。風呂に入るゾ」

それまで静かだった家の中から、大声でいう男の声がした。サビのかかった低い声は聞き覚えのある巖本のものである。

「加減はみてありますよ」とかん高い声でいっているのは細君だろう。

パツと風呂場の電灯が点き、灯影が徹次の足許へも落ちた。徹次は、風呂場の羽目にピタリと躰を着け息を喘がせた。今、巖本が着物を脱いでいると思うと、心臓の鼓動は愈々高くなる。徹次はもう己のあさましい行為を省ってみる余裕はなく、巖本を見たい一途な願望で火のようになっていた。湯気を出す為、細目に空けてある窓は大して高くはなく、背を伸ばせば届く位置にあった。薄白く洩れている湯気が、徹次の気持を焦々と掻き立てる。

戸の開く音がして、巖本が風呂場に入った気配。続いて湯を使う音。桶がコーンと響いて、浴槽に浸った様子。浪花節を唸る声が暫くして、やがてザーッと湯をきる音――。

それらの音を手に取るように聞きながら徹次は気の狂いそうになる焦慮に身を揉んだ。一寸背を押ばし、窓の隙間に眼を当てればすぐにも目的は達せられる。しかし、運悪く発見されたら大変なことになるだろう。といっ

てグズグズしていたら、巖本は風呂からあがってしまう。そうしたら、もう二度とこんなチャンスはこないかもしれない。

二度目の、ザブッと浴槽を出る音がした。
(ああ、もうあがってしまった……)

徹次は遂に思いきって背を伸ばした。だが忽ち窓から眼を離すと、夢中でその場を逃げだし、どこをどう走ったかも判らずに、やっと明るい通りへ出ると、はじめてホッとした。

徹次が覗いたとき、巖本はちょうど、こっちを向いて立ち、躰を拭いていた。(しまった！)と思うと、もう見つかってしまったように逃げだしたのだが、いくら気が鎮まってくると、早まったのが悔まれてきた。でも彼は(とうとう見た！)という充足感で気分が昂揚していたし、次々と湧いてくる空想で我を忘れていた。ほんの一瞬、しかも湯気を透してではあったが、巖本の裸形は臉の裏に強く焼きついている。それは警察署で見た逞しさと少しも変らなかつたが、逞しさの他に何か別のものが感じられた。それが何であるかは判らない。その広い胸板は触れることも許されぬ傲岸さに充ちていながら、躰ごと飛び込んでいきたい慕わしさで、徹次の慕情を疼かせるのだ。

三

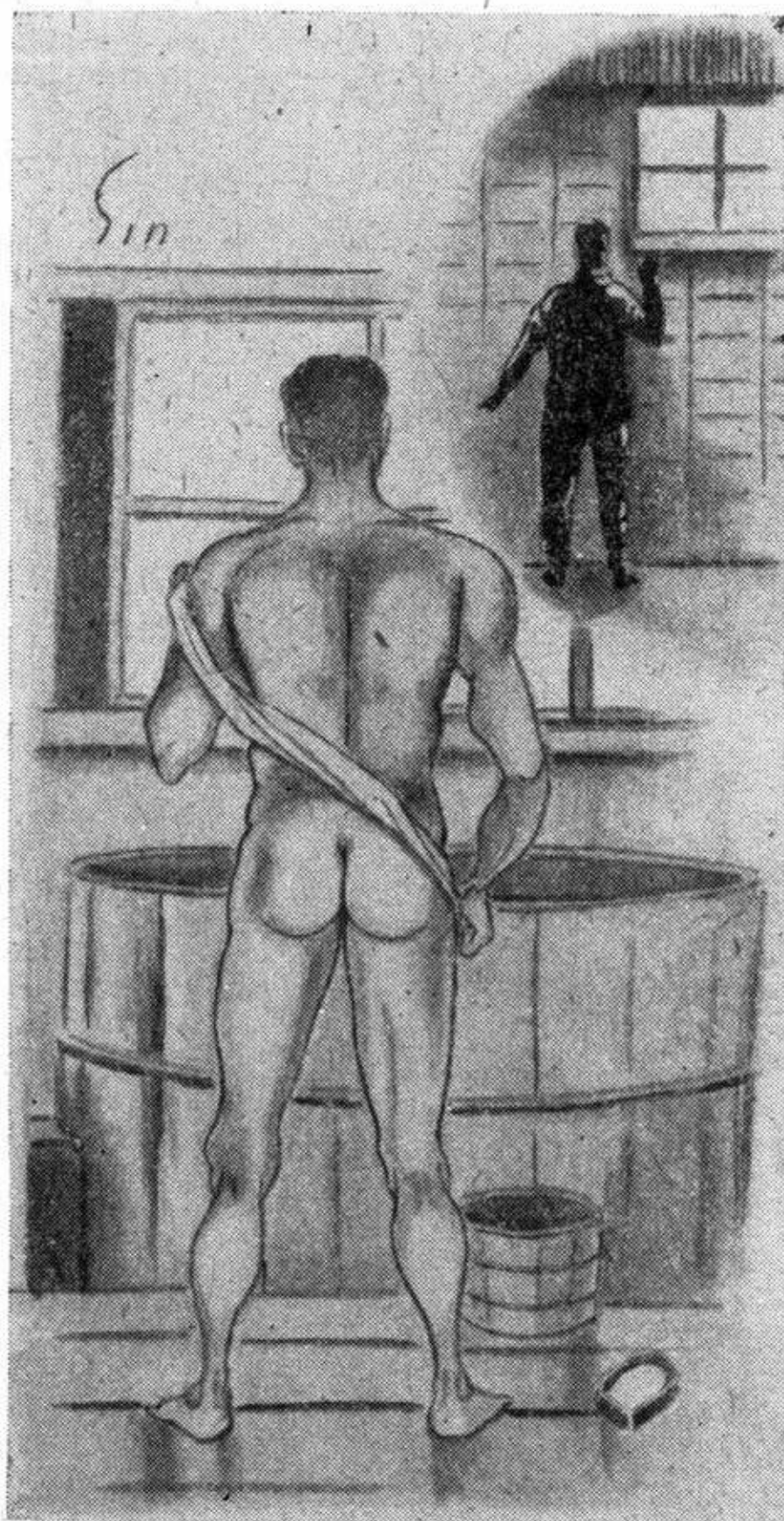
二、三日して、徹次は石渡を見舞うつもりで電車に乗ったが、病院の前まで来ると、石渡に対する背信に心が責められて足が進まなくなった。「オイ、坊や達。いいものやろう」

一山いくらで買った見舞品のリンゴを通りかかった子供達に分けてやると、丸めた紙袋を川に抛り投げ、徹次は橋の欄干にもたれて重油色の水面を覗めた。

石渡に別れることが、ただちに組合からの離脱を意味するわけではない。しかし正直いって徹次の頭にはもう「マルクス」も「レーニン」もなかった。

あの日を境にして確かに彼は変わったのだ。自分だけ拷問から除外されたことを、巖本の好意だと考えるほど徹次も甘くはなかったが、それが余りに希望的に過ぎるとはしても、一つの可能性を追い求めはじめたのは事実である。(何かあったのではないか——?) という組合員達の疑念は、他の面からみれば当たっていたのだった。

(裏切者!)



それでもよかった。徹次は己のすべてをなげうっても悔いがないと思う。愛憎は、ときに人間の運命を狂わせてしまうものだ。そして一度、狂った運命は仲々元へは戻らない。

夜になった。徹次は先夜、憶えた通路を入って、巖本家の裏庭に忍び込んだ。風呂場には既に灯が点いている。急いで窓下に近寄る徹次に注意力が不足していてもしかたない。

「キャッ!」という女の悲鳴を背後に聞いた彼は、ギクッとしたまま辣んだようになって

体が動かなくなった。焚口の火加減をみに来た巖本の妻に発見されたいらしい。

「何だ? どうした——」

乱暴に窓が開き、巖本が外を覗く。

咄嗟に逃げようとすれば逃げられた筈なのに、どうしてか徹次は巖本の声を聞くと愈々動けなくなり、戦きながらその場に疑々と棒立ちになっていた。

「おいッ! 誰だ? 貴様そんなところで何をしていた?」

台所の戸口から出て来た巖本が威嚇するよ
うに呶鳴りながら、グイと徹次の肩先を掴む。

「ア、アノ、別に何も——」

「別にイ？とぼけるな！黙って他人の庭へ入
り込んで、何もしないで通ると思うか」

「そ、それは、実は、あなたに逢いたいと思
って……」

「何だ？ウム、そういえば見たような顔だ
な。オイ、もっと面を上げてみる」

「……！」

「そうだ、思ひだした。だが、何の為に俺に
逢いたくなったんだ？まさか、仲間の仕返し
に来たわけでもなからう」

「そんな！違います」

「フン。とにかく怪しい奴だ。こっちへ来
い。おい、来るんだ！」

巖本は徹次の腕をとると台所の土間にひき
たてていった。妻の着せかける丹前をはおる
と、巖本は何の意味かニヤリとして、

「オイ、服を脱げ。身体検査をする。俺の家
と知って忍び込んだ限り、おまえの行動は穩
かでない。徹底的に糺明するからそう思え」

幸い、風呂場覗きだけは気づかれなかつ
たらしいが、徹次の行為はどう責められても
しかたないものである。観念して服を脱ぐと

巖本の残酷さを知っているだけに、その次に
くるものを推して彼は恐怖に震えた。

「うん。兇器は持っていないな。だが疑いが
晴れたわけではないぞ。おまえが正直に泥を
吐くまでは容赦はせん。ここが警察でないか
らといって甘くみていたら、とんだ大間違い
だ。俺がどんな男だかは、おまえも承知の筈
だな」

「……！」

「さアいえ。おまえは何の目的で俺の家へ忍
び込んだんだ？」

「それは、アノ、さっきもいった通り——」

「黙れッ！そんな弁解を俺が信じると思っ
ているのか」

「でも……」

正直にいつて本当に赦されるものならば、
風呂を覗きに來たのだといってしまえないこ
ともない。しかし、そんな釈明はなおさら信
じて貰える筈がなかった。

「どうだ。いえんのか。よし、それならい
えするようにしてやる」

巖本は帯をといて徹次の手首を縛り、前屈
みにさせると余った端で足首も括った。そし
て、どうなることかとハラハラしながら眺め
ていた妻を振り返り、

「オイ。こいつが逃げぬよう番をしている」
と、帯しろ裸のまま奥へいこうとする。

妻の旗江は、もう黙ってはいられないとい
うように、

「あなた！うちは警察じゃアないんですよ。
この人だって何も盗ったというンじゃなし、
いいかげんに赦してやったらどうですか？」
「よけいな口出しをするな。おまえは知るま
いが、こいつは「アカ」なんだゾ」

「アカ……」

「俺は義務としてこいつに拷問をするんだ」

「拷問？あなた、ここで拷問するンですか？」

「そうだ」

「やめてください！そんな……。いくらあな
たが特高だって、うちまで特高室にされちゃ
たまりません」

「うるさい！女の出る幕じゃない。黙って引
っこんでろ」

「いいえ、黙りません。ご近所であなたのこ
とを何ていつているかご存知ですか。鬼とか
蛇とか——少しはあたしの身にもなっくだ
さい」

「オイ、旗江。おまえは俺のいうことがきけん
というのか。そんな女は女房の資格がない。
出ていけ！」

「出ていきますとも！あたしはもうセンからあなたには我慢できなかったんです。いわれなくても今すぐ出ていきますよ」

蒼白な顔でヒステリックに叫ぶと、旗江は奥へ駆け込み、すぐに風呂敷包を抱えて戻って来て、

「あした。本当にアカなら転向したほうがいいわよ。それでないと、今に殺されちゃうからね」

下駄をつっかけながら、うなだれている徹次に声をかけ、激しく戸を開けたてして出ていった。

不当とは知りつつも旗江に嫉妬を抱いていた徹次は、彼女がいなくなったことを、むしろよかったと思った。巖本の拷問を今度こそは避けられないとしても、それを彼の妻に見られるのは堪えられなかった。いまや最悪の条件下ではあるが、ともかく巖本と二人きりになれたことは、彼を慕う徹次にとって無上の喜びといっても過言ではない。徹次は、巖本の為なら死んでもいいとさえ思っている。しかし、それは、拷問されてもいいということとは違う。もしも巖本が徹次と同じ気持ちでいて、そのうえの要求なら、たとえ百の鞭打ちも苦痛とは思わないが、**特高**としての

巖本の拷問の非情さは、徹次の慕情を無慚に引き裂くだけである。

いくら特高係刑事の家でも拷問の設備はないから、逆吊りにされるのだけはまぬがれたが、徹次は万才の恰好で、鴨居から欄間に通した縄に吊られた。巖本は、丹前を脱ぎ捨て六尺を固く締め込むと、押入れから古びた竹刀をとりだして、二、三、空振りを試みた。最初の一撃で、徹次は「ああッ！」と大きな叫声をあげた。

「チェッ。忪え性のない奴だ」

巖本は、さすがに悲鳴が外へ洩れるのを憚ってか、徹次の口に手拭で猿轡を噛ませる。五十余り続け打ちにしてから、巖本は徹次の猿轡を脱し、

「どうだ、この辺で口を割らんか？白状さえしたら赦してやるぞ」

竹刀の先で邪慳に突かれると、それだけでビクリと軀を戦かせた徹次は、

「僕、あなたが好きなンです！だから、悪いと知って忍び込んだんです。信じてください！あなたが死ぬほど好きなンです……」

と殆んど夢中で謔言のように訴えた。

「この野郎！俺を舐めるのもいいかげんにしろ。そんな迷言まよひごころで俺を誑せるとでも思ってる

のか。ようし。こうなったらもう根比べだ」

妻への怒りも手伝ってか、巖本は憤怒に顔を染め、一段と力をこめて竹刀を振り上げ打ち下した。しかし、それも、徹次の失神によって長くは続かなかった。巖本は舌打ちをすると、徹次の縄をといて風呂場にひきずっていき、水を汲んでザブリと浴びせかけた。

ところが、ものはずみとは恐ろしいもので、石鹼分でも残っていたのか不覚にも足を踏み滑らせた巖本は狭い風呂場に転倒し、浴槽の縁に頭を強打して、一時的な軽い脳震盪を起してしまったのである。

皮肉なことには、その瞬間に徹次は息をふき返した。彼は、はじめボンヤリと辺りを見回したが、倒れている巖本がムクムクと動きだすのを見ると、いきなりその頸を力まかせに締めつけた。徹次に殺意があったと断定するのは正しくない。すべては無意識に行われた兇行だった。

こうして、徹次は巖本を独占できた。

最後まで徹次も罪悪感を感じなかった徹次は、やがて巖本の屍に死後硬直の起りはじめる頃、風呂場にあった剃刀で頸動脈を断り、短い一生を終った。

(完)

第一図 大映「風雲将棋谷」
近藤美恵子



マニヤ観照記

観客席

縛りに対する或るつぶやき

観客席とは云うまでもなく芝居や映画、野球、レスリング、その他、モロの競技を全く自由に観賞するための施設であって、他人に迷惑をかけない限り、観る方の心構えと態度は完全に解放され、自他共に干渉を行ってほならない筈のものなのである。

だから所定の料金を払いストリップ劇場や映画館に入った以上、心ゆく許り娛んで差支えないことは判るが、昨今のように世の中が何等かの形で落ちついて来ると、道德の昂揚こうきやうだの再検討とやらで、法の網目をくぐらぬ限り、

時たまのリクレーションとわれわれが解釈する縛りゴッコとか弄なやりゴッコとか云った類いは、たとえ興行的なものであっても、少くとも一般大衆の面前での公開沙汰は次第にむづかしくなってきたことは事実だ。

従って、このような公開の場処で娛しもうとするには、一切が出たと勝負、他人まかせのアクションで満足しなければならぬ。例えば市販の娯楽雑誌をひらいてみても、何等かの制約があつて往年のチャタレー夫人式の描写は書かれてないし、まして挿絵に至ってはその感が強い。

わが愛する本誌にしても、こうすれば読者

牧 高 志

は必らず喜ぶだろうと思っても、ついには、ばか
って遠慮する部分が、記事にしる絵画にせ
よ、極めて多いのではないかと兼々推察して
いる。

私は心理学者でもないし、また人類の身体
に分布するすべての器官のフアンクションを
相互に関連ずけて診断を下す医学者の理論に
ついては全くズブの素人であるから、人を縛
ったりする心理の誘因とか、縛るに至る進展
性が脳神経を刺激して理性の域を脱せしむ、
などと云った高尚なことは皆目、判らない。

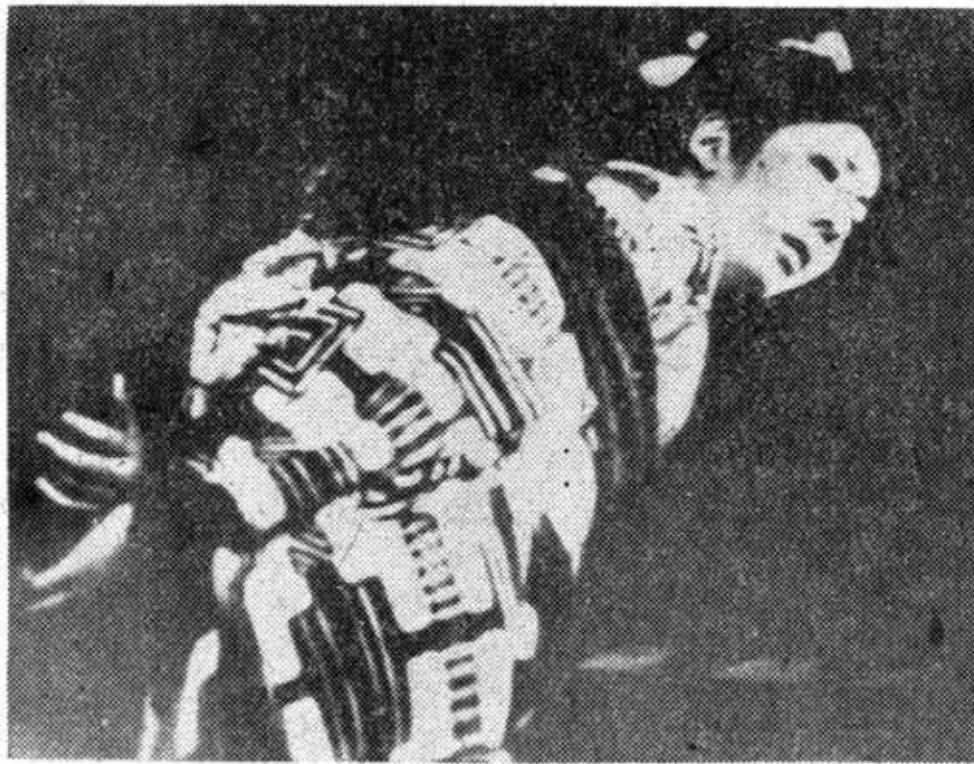
では理窟は兎も角、何故、縛られた女に興
味を持つのだろうか。

理論に基かないと断った以上、その答は極
めて簡単である。すなわち、その姿態に何ん
ともたとえようのない魅力的な美しさ——
義的な美しさと云う人もいる——をゾクゾク
と感ずることが第一。無精に残酷の中にじ
み出るようにかもし出される哀れさが第二。
そして恐らく、この二点に関する表現の巧劣
さが、すべての勝負を決するものと考えたい
のである。

では、上は豪華な赤いじゅうたんを敷きつ
められ一席千円をふんだくられる大劇場から
下は極めて庶民的な匂いの漂う三本立五十円

第二図 大映「風雪将棋谷」

近藤 美恵子



の三流映画館の観覧席に、どっかと腰を据え
ておもむろに注文なり、若干の希望を述べて
みたいと思う。

先ず女性を（これを単におんなという言葉
に置き替えてみると、ぐっと色気が出て来
る。曾て、伊藤晴雨老は御自分の奥さんを普
段は家内と呼ぶが、いったんお縛りという段

になるとおんなを縛るには云々といわれた）
後手に（前手などという生ぬるいやり方をや
めて）縛る（たとい真似事であろうと女がそ
の縄を後で持ったりするような偽まんなこと
はしないで）ということとは、そんなことをし
なければ自由に活動出来る身体を暫時の間、
束縛して手元にたぐり寄せて置くという心理
も大いに手伝って、そういった情景の中から
クローズアップしてくる姿態美は全く捨てが
たい。——男性に取って何物にも替え難いも
のではあるまいか。

しかし、このような情景は正直に云って絶
対、美女でなければならぬし、乞食のよう
なボロを着ていては百年の恋もさめ兼ねな
い。裏を返せば、美衣の美女が何は兎もあ
れ縛られる処に焦点が集中し、それが続いて
残酷さの中で苦しむ処に被縛の絞りが効いて
ぐっとシャープになって吾れに迫る。

ただ、この場合、さしみにワサビを添える
如くに、女が縛られて行く過程が前後に必ら
ず演出されるものとすれば、被縛に対するム
ードは最高頂に達するであろうことが一段と
予測されよう。

実は、封切直前の完成した被縛の映画を改
めて観客席から一方的に観賞するのではなく

第三回 東映「いれずみ判官」

木暮実千代



して（独り映画ばかりではあるまいが）寧ろスタジオ内で、どのように演技が行われて行くかに千金の価値があると、云いたいのである。寧ろ、これが本心かも知れないが……。

私は、被縛のある娯楽映画、責め折檻が出てくる演劇、さては自由にペンを操って忽ち誌上に責めの天国を創りあげる小説家といった、万事、雰囲気主義で仕事（職業）という方

がよいかも知れない）をしている連中——余暇さえあれば筆者も多分に、そのような素質があるが——は結構、楽しんで縛ったり縛られたりしているものと、にらんでいる。極端な云い方をすれば、徹夜をしてそれらしき演技を行ったため、苦痛と疲労は並大抵なものではないとスタジオマンは仰言るが、事實は決して左様なものでなくて寧ろ撮影された、詳しく申せば封切用として再度、編集されたフィルムを、高い観覧料を払って観る奴こそいい玉だよとなる……のを、よもや御存知あるまいと思う。

考えてみると一杯喰わされた変な気持ちにもなる。参考までに挿入した印画は、いずれも封切館の観客席で一方的に観せて頂いた縛りシーンのスナップであるが、いくら映画の題名が「風雲——」と銘打たれたとしても、極太の麻縄で四巻も締めつけられたんでは流石の大映スターの近藤美恵子嬢も堪るまいと見えたが、事實は安んじて宙天に吊るされて責められているから情けない（第一回）ただスナップして驚いたことは、両手首にも麻縄が二巻程巻きつけてあって、従来、仲々見られなかった後手の指先きを判っきりスクリーン上に現わしたことは頗る良心的（？）であ

る。（第二回）ところが残念な事に、この二葉の印画からは何等の反響も感じられない。否、十数枚スナップしたどのネガも表情はすべて零であり、全然、演技にはなって居らない。縛りシーンを、たとい量的に盛ろうとも残酷さが何処にも発見されないからだろう。もっとも岡引の娘を縛ったんでは、色っぽいおんなには程遠いことではあろうけれど……。

これに対して十数名の娘をレビュー式に後手に縛りあげ、巾広の猿轡をかませて異国に密輸させるべく、丘さとみの連中を真先きに縛って度胆を抜いたり、老いたりといえども師匠タイプの木暮実千代女史を殊更、オーバーに連行して演技させた東映の「いれずみ判官」は近来にないヒット作だと感心したが、縛りには間違いないも御大、実千代女史を始めとして、十数名の娘集団のどの娘ッ子にしても悲しみと云うものは雀の涙程もなく、まして哀れさなど何処かに吹飛んで、一同欣喜雀躍、ワアワアキヤアキヤアの賑やかさで男達のいたずら遊戯を甘んじて受けとめていると観た。

東映の社はたる「映画は芸術に非らず、観て、聴いて、万人の楽しむ娯楽でなければならぬ」は、少々頂き兼ねるとグチをこぼす奴

が恐らく馬鹿なのであろうが(第三図)

同じレディメイドの縄目を、よしんばそれ
がゆるんだたるみ縄であろうとも、予告篇で
みる女の縛りは、どういうものかちよっぴり
迫力が感じられる。誰しも釣った魚には餌を
やらないが、これから釣る(客を——)時に
は別誂えの特級種のシーンを発表するものら
しい(第四図)

以上は「映画——この場合、緊縛場面のお
る映画を意味する——とは、観客に取って誠
に腹ふくる業なり」と云わざるを得ないが



第四図 東映「朝やけ天狗」 雪代敬子

筆者は某日都市を離れてさる近郊の映画館で
図らずも新東宝の「危うし伊達六十二万石」
を再見した際、観客席で中年風の女と老婆の
洩らす、いとも感泣の哀詞を耳にしたことが
あった。

こうした場合、講談調に筋が運んでいるた
め、無条件でスクリーンを見つめているうち
に、北沢典子嬢の腰元お糸が車井戸に吊るさ
れて、鞭で折檻されるシーンが映るや、間髪
を入れず

「ああ……可哀いそう、むごい目に……」

ああ……打たれる。あッ、あんなに
たたかれて……。スクリーンのおん
なの動作の反応をいちいち率直に口
で現わした。否、そうさせた映画は
そうさらには、転がっていないよう
にも思える。もっとも、慎重に緊縛
の行程を考え込んでいる最中に飛拍
子もない雑音が観覧席のあちらこち
らに聞えるようでは筆者の冒頭の仮
説にもとるから、かかる端たない
ことは勿論、拒否しなければならな
いが、幸い携えて居ったカメラで久
々に再度スナップしながら、お婆ハ
ン達の感嘆を伴奏に一刻を過したの

は、その意味で我が意を得たものと云ってよ
からう。

処で、そう云った表面的なことは、映画な
り演劇が取りも直さず一個の商品であるがた
めで、裏面、つまり舞台裏は努めて公開しな
いのが常識となっている。例えば、ここにグ
ラマー張り女優がいるとする。

「どうだい、これで縛られてみるか、それと
もフアンが泣くように天井から吊り下げよう
か……」「だって、役目だから縛られるのは
かまわないワ。だけど、どうせ女の人を縛る
ンならフランスから帰ったひとのようなのが
哀れっぽくていいんじゃないか知ら?」「馬
鹿云ってらア。スチールマンもお客さんを驚
かすには、うんと縛り甲斐のあるのが撮りや
すいってことよ。じゃ両手を後ろに廻わしな
さい。痛いけど、これで君の人氣がトント
ン拍子に騰るんなら安いものさ。ハイ、そのポ
ーズで。序でに猿轡のアップも——」と、ま
あなれば、二、三流会社でもスターなみの扱
いをされそうだが、問題はこうした楽屋裏の
所作事の冰山の一角も明るみに出て、どれだ
け観客席を魅了するかである。

演劇、殊に時代物では「明烏夢泡雪」は
色彩美から、「欠皿紅皿」は残酷美から、観



映画通信

縛られた女優達

大河原珠樹・記

◇御存じいれずみ判官（東映）

木暮実千代、丘さとみ、三原有美子、ほか多数

密輸品の代償に美女達が集められ、親船へ送るために伝馬舟に乗せられるが、女達はいずれも後手ぐる／＼巻にされ、白布で猿ぐつわをかまされている。

◇浪人市場・朝やけ天狗（東映）

雪代敬子

江戸城お出入許可の見返りにねらわれる材木商の後家。老中の側用人を接待の途中謀られて襲われる。中ぐらいの縄で二巻の後手縛り、ふとんの上を逃がれようと悶える。

◇よきい・三度笠（大映） 中村玉緒

悪親方にねらわれている女を救けたチンピラやくざの恋人だが、しつこく女をねら

う悪親分一味に踏込まれ、後手に縛られ、猿ぐつわをされて押入れの中にほうり込まれてしまう。後手といっても刀の下緒か何かで手首のみ縛ったかたち。但し、その縛るシーンがあまり、素早くって、たしかめられなかった。

◇よきい三度笠（大映） 中田康子

悪親分が身分をたぶらかした罪だと立樹に縛りつけてモリ投の的にする。太い縄で後手に二巻き巻いた上に、立木へさらに二巻、おどかしのモリが耳もとへグサリと刺さったりする。

◇初春狸御殿（大映） 若尾 文子

少し遅れ過ぎたが、珍らしく若尾文子が縛られたので。御殿へ忍び込んだ罪で立木へつなされる。ミュージカル映画らしく紅白の太い縄で二巻ばかりの後手縛り、縄尻

る人の心を奪うといわれている。曾って、筆者はパントマイムではあったが明烏の踊りを観たことがある。この時は、ここでいう観客席からではなくて文字通り舞台裏、詳しく申せば化粧、着付から始ってステージのけいこまでと云った処を、つぶさに拝見拝聞したのであるが、物を云う芝居であれば、例の松の木の前元（もと）にうずくまって精々哀れっぽく演ればよいのに、踊りで表現するためには、口がきけないだけに縄尻を見せながら舞台狭ましのばかり踊らなければならない。

「裾を乱して、後手にいわかれたところを見せて踊らないと映えませんか、この娘を本当に縛って下さいネ。それから、いくらお女郎さんでも脚が見えては下品になりますから下着は二枚……お腰に裾除けをしつかりと巻いて頂きましょう」「師匠ッ、衣裳が厚くて縄が締められませんよ」「駄目、駄目……少々窮屈（きゆうくつ）でも我慢して、胸がくびれるように縛らなくっちゃ……時次郎さんをこれで、うんとやきもきさせんですよ。こちらを向いて……その裾の方はそれ位下着が見える方が色っぽいでしょ。どう？手がしびれる？開幕まであと少うし、ウフフフ……縛られると本当に、見直おすわよ。まるで歌舞伎座みたい

を立木につないでチヨコナンと座らされている。

◆柳生旅日記・龍虎活殺剣 (松竹)

女優名不詳、女をさらう海賊一味に、おそれれた豪商の夫婦が寝間着姿で後手、狼ぐつわをされる。

◆女体渦巻島 (新東宝) 三原 葉子

密輸団の仲間を裏切った女が吊り責の私刑をうける。皮のジャンパー、ストラックス姿で後手もつと吊り、鎖をきしませながら吊り上げられる。

◆二発目は地獄行きだぜ (東映)

佐久間良子

予告編で拝見したのだから筋は判らないが空色のスーツ姿でぐる／＼巻の後手縛りやせぎすなので見ばえはしないようだ。

◆怪魔八尺坊主 (第二東映)

藤田佳子、光美智子、他一名

八尺坊主と称ばれる盗賊達にさらわれる女達。駕籠で送られる時に三人ながら狼ぐつわをかまされていた。お弓(藤田)だけが太い縄で前手首縛りをみせるが、おそれ他の二名も同じだったろう。かなりきびしく縛っていた。

◆照る日曇る日(第二東映) 雪代 敬子

尊皇派浪士をねらう暗殺隊の秘密を知った女スリのお銀が捕えられて後手に縛られ一行の屋敷へひかれる。グル／＼巻の普通の後手縛り。さらに屋敷の一室に閉じ込められても縄はといってもらえない。

◆続・照る日曇る日(第二東映)

雪代 敬子

前編の続き、屋敷の一室で暴れているところへ仲間が救けに来る。

◆人肌呪文 (大映) 宇治みさ子

ファスト・シーンで父のエン罪を晴らすため証拠を盗みに仇の屋敷に入っているお組が捕われて梁から吊下げられ弓杖で打たれる。胸をグル／＼巻きの後手縛りのまま本吊りにされ、笞打ったびに体がグラ／＼ゆれる。そのまま失心すると水をあびせられる。口を割らぬので遂には葛籠に入れられ川へ投げ込まれる。

またラスト近く、再び捕われ座敷牢へ入れられる。

◆人肌呪文 (大映) 女優名不詳

炭焼小屋の中の柱へ、炭焼夫婦が縛りつけられたまま殺されている。

「アラ、嫌やだワ。こんな処をお撮りにならないで。だって恥ずかしいンですもの」

と云った情景は、表の観客席では薬にしたくも味えない妙味である。筆者の観た縛りへの過程というか、縛りのお勝手台所なるものはこのように楽しいものであったが、これらがヒットするかしないかは人間の条件、つまり縛られる女性が品よく、縛ろうとする者に妥協するその仕方によってどうにでもなる——と思う。

例えば、今の流行歌詞で云えば「お色気ありそうでウツフン、なさそうでウツフン……と全く同様な雰囲気が必要とする。しかもその雰囲気は、甘美な殺気のみなざるものでなければならぬ——とまあ、これだけの殺気が舞台裏にせよ、スタジオ内に漂ようて居れば、何分の一かは、たとい片鱗であっても観客席に必らず到達するであろうし、釣った鯛(縛られた女)の鮮度や眼の下何寸の縄目具合を胸算しながら、おもむろに観客席を退去って行くであろうに……。願わくば、もろもろの果てしなき自由なる観賞のポストである観客席に、永しえに美しく妖しき被縛のおみな(女)の訪れむことを……。



青山京子緊縛事件考察

女優就縛の図

縛られた青山京子さん

中谷国夫

前 が き

三月のはじめに、東京の青山京子さんの自宅に賊が侵入、青山さんの手足を縛ったという事件がありました。

この事件について、私は一つの考察をしました。この一文の概要は、先ず青山さんの手記に基づいて事件の概略を記述し、次に私が賊（加害者）の立場をかりてこれを補足し、最後にこの事件の実体がなんであったかを追究、結論として私は「女優緊縛説」をとりました。

記述に当って、私はつとめて青山京子さんを傷つけないように気を配りました。この事件については、本文を読んでいただければ分りますが、暴行（凌辱）説、狂言説も可成り強く、私も新聞紙、週刊誌を通じてだけの知識であります。この二説も一概に排斥出来ないような気がします。然し、これでは青山さんの立つ瀬が無くなることは明らかです。

そこで一つの可能性として、青山さんの立場を十分考慮して、ここに緊縛説を展開した次第です。

（参考）

一、暴行（凌辱）説

深夜、他人の家に忍び込んで待ち伏せするということは、人を殺傷するのか、物を盗るとか、凌辱を行うとか、兎に角、容易ならぬ動機と目的がなくては出来るものではありません。青山さんに対するあこがれが昂じた余り、縛ってみたいという気持を観念的に抱く人は居ても、現実に非常な冒険をおかして態々家に侵入して、而も実際は暗闇の中で十分許り緊縛しただけで飽気なく逃げてしまうなどということは、普通では一寸考えられないことです。

「週刊実話」（三月二十八日号）第十五頁に『……彼女はその男にいたずらされた？ 混乱した意識の中で彼女は母を呼ぶため、枕もとの「防犯ベル」を夢中で押した。驚いた母は一一〇番で「強盗だ」と訴えた。事情がわかってあわてる一家。供述に不審な点が多いのもこのためだ。……』とあるのも、一つの見方でありましょう。

二、狂言説

賊の侵入、脱出の経路がはっきりしない、足跡、指紋がない、犬が吠えなかった、等々から狂言説に賭けている事件記者も案外多いようです。

私説、緊縛説

私としては、青山さんに最も好意的且つ同情的な見方を展開するわけですが、ただ、細部の記述、殊に緊縛の情景などのところでは新聞、ラジオの報道のように、ただ「賊は手足を縛って……」というだけでは、論理的な話の展開（緊縛説を裏付けるためにも）が出来ませんので、私の推理を働かせて具体的に記述しました。

その結果、青山さんをいたぶったというか、罰つたというかのようにも、見られなくはないかもしれませんが、本文を貫く精神は、あくまで青山さんに好意的、同情的のつもりです。一体に芸能人などの場合、ずいぶんひどいことを書かれても、大抵のことは、名誉税有名税として看過されているようですが、それは本人にとっては酷い仕打ちだと思ひますし、私のとるところではありません。

この事件は、有名女優が縛られるという一寸、世を騒がせた而かも未解決の問題でありますので、記述に際しては青山さんの名誉を傷付けないよう特に注意した次第です。

引用

本文中の「青山さんの手記」は『週刊女性』（三月二十七日号）に載ったものから抜粋しました。その他、私の参考としましたものは

朝日、毎日、読売、産経、日経、東京、内外
タイムス、毎夕の、八紙と、週刊女性（三月
二十七日号）週刊新潮（三月二十一日号）週

刊明星（三月二十七日号）及び週刊実話（三
月二十八日号）の四誌です。

女優緊縛説の根拠と私見

三月七日付の東京都下の各紙夕刊は一斉に
「青山京子しばらる」という四段抜きの見出
しで、女優の青山京子さんが、東京世田ヶ谷
の自宅で就寝中、何者かに襲われて、さるぐ
つわを喰まされ、後手に縛られ、その上、ご
丁寧にも両足首までしっかり括られて、恐怖
の十何分かを過ごした事件を報じました。

まことに、ぶっつけ本番、女優就縛の映画
を地で行く光景であります。一般に映画や芝
居に出てくる就縛の図は、いうまでもなく演
出であるから、必ずしも全部が全部観客に息
をのませる程の緊迫感百パーセントであると
はいい難いが、青山さんの場合は、文字通り
襲う方にとっても襲われる方にとっても喰う
か喰われるか、殊に青山さんにとっては、下
手をする女優という人気稼業にとって命取
り、いや、それどころか、かけ替えのない生
命さえ奪われ兼ねないという瀬戸ぎわの、死

物狂いの「演技」であったことは想像するに
難くなく、また、このことは、次に掲げる青
山さんの告白にみても明らかどころであり
ます。

ところでこの事件は、事件が事件だけに、
種々の想像や臆測まで加わって諸説紛々、青
山さんに対する好意的、同情的なものから、
その正反対のものに至るまで、さまざまな報
道や見解が伝えられました（一寸私の目に
ふれただけでも八種の新聞が報道、四種の週
刊誌が取りあげた）私としては、出来るだけ
想像や推測を行うことを避け、専ら、客観的
事実をお伝えすることとし、そのためには先
ず最も基本的のものとして、当の青山さんの
供述をかけた、次に女優就縛という『緊縛』
の見地からこの事件を解剖してみたいと思
います。

青山さんの手記によりますと、

——思い出してもゾットする悪夢の十分で
した。いま私は東映の京都撮影所で『朝やけ
天狗』と『新吾十番勝負』の二本にかけもち
で出ていて、とても忙しいのですが、わずか
の暇が出来たので、東京の自宅に五日、土曜の
終列車で帰りました。翌六日の日曜日には、
お昼ごろから母と二人で用足しに出かけ、夕
方六時頃戻りました。うちは母と姉と私の三
人暮しですが、その日は兄もやって来て、四
人で久し振りで一家水入らずで屈托のない雑
談に一夜を過ごし、……さあ、やすみまし
ようとなったのが午前二時過ぎです。

私の部屋は母屋と別棟になっているので、
私はみんなにおやすみなさい、といって、い
つものように母に先に立ってもらって庭づた
いに、別棟の自分の部屋に入りました。母は
ある少年ファンに私が強迫された事件があっ
て以来、私の事をとても心配してくれて、い
つも細心の注意を払ってしてくれたのです。
例えば、私が車で帰宅しても、すぐ車から降
りないように、まずクラクションを鳴らして
母か姉かの出迎えを受け、周囲に異状のない
のを確かめてから車を降りる、ということに
決めています。

私が別棟の自分の寝室に入る時も、必ず、

母が先に立って部屋に入り、寝室に続いているキッチン、フロ場、トイレなどを点検してから、私を導き入れてくれます。その晩も、いつもと同じく、母が先に立ってお部屋に入りましたが、もう時間も遅く、多少気も急いでいたのと、兄が来て泊っているという安心感もあったのでしょうか、あとから母の話しを聞きますと、ほうぼうの電灯もつけず、ただキッチンにあるスイッチで、屋外の電灯をただただ点灯させています。その暗がりの中で、キッチンのドアの止め金と、キッチンに続くおフロ場のドアの止め金を、手探りで確かめたというのですが、おフロ場のほうの記憶があいまいなのです。そして、いつもは必ず開けてみるトイレの点検を、フト、忘れてしまったらしいのです。

賊は、私たちが入ってくるまえに、すでに塀を乗り越えて庭に入り、おフロ場のくぐり戸から忍び込んでいて、私たちが入って来たので、トイレに隠れたらしいのです。ほかに隠れ場所といっているのではありません。

不思議なことといえば、足跡が全然ないことですが、母や私たちの推理では、さきに忍び込んでいたので、足跡があれば、あとから入ってくる私たちに怪しまれると思って、お

フロ場の外でぞうりかなんかを脱いで入ったものと想像されます。

とにかく、母は、トイレの点検を忘れたのをくやしがっています。が、災難の起きるときはしょうのないもので、しかし、母が急にトイレのドアを開けたら、賊はどのようなことをしたでしょう。考えようによっては、母がトイレのドアを開けなかったことが、母の身にとっては幸運だったと私は喜んでいます。トイレのドアを開けて見ないでも、母がドアの外の掛け金をハッキリ掛けておけば、賊はトイレにカン詰めになったわけで、惜しいことでした。

さて、ベッドに入った私は、睡眠薬をのみ疲れてもいたので、すぐ眠りについたようです。

ふと、異様な息苦しさ、顔のあたりが何かヒヤリとした感じで、目をさました。とたんに、私は、自分のノドにだれかの手がかかり、グッと締めつけられているのがわかり、一瞬、なんともいえない恐怖で全身を包まれました。

その恐怖の瞬間にも私は、この場合、どうしたらよいか、とっさに、いろいろの考えがひらめきましたが、やはり、思い出したの

は、母にふだんいわれていたことです。それは、いざというとき、声を立てて騒いだら、殺される。首など締められたら、なるべく早く死んだフリをすること、死んだフリは、相手が鼻息をためすような時には息を止め、目を調べたら目玉を上にとって白目を出してみせること――そんな母の注意が、その瞬間、電光のように私の頭の中にひらめいたのです。

でも、グイグイ締めつけられるソドの苦しさに、私は無意識のうちに、頭を柔らかいマクラの中に自分から押しつけるようにして、少しでも相手の力の加わるのが軽くなるように努めていました。ベッドのスプリングと柔らかいマクラが、相当、役立ってくれたようです。

でも私は、「ああ、死ぬんだ、今死ぬんだ、死ぬ、死ぬ！」という、声にはならない自分の叫びを続けながら夢中でした。母や兄や姉等さっきまで中華料理を食べながら談笑していた、みんなの顔がチラつきました。

目は一度も開かなかった様な気がします。賊は電気もつけず、部屋は、まっ暗だったことはカンでわかりましたから、たとい目をあけても、賊の顔はわからなかったでしょう。

賊はそれから絹のマフラーのようなもので

私を目隠しし、猿ぐつわをはめました。それから手ぬぐいで私の手と足を縛りました。あとでわかったのですが、目隠ししたものは賊が自分で持ってきたもの、手と足をしばった手ぬぐいは湯殿の二本の手ぬぐいで、それを二つに裂いて、私の手足を縛ったのです。

私を縛っている間、締められた首への力が抜け、私は助かりました。あの首締めが、もう少し時間が長く、もうちょっと力が加わったら、私は死んでいたでしょう。

声をたてれば殺される——私の頭には、マクラ元にある非常ベルのことも思い浮びましたが、第一、手足を縛られていては、どうすることもできません。賊は、ひと言も声を出しません。私も飽くまで、極力、死んだフリをしました。早く賊がマクラ元にあるハンドバッグか（お金が七千円ほど入っていました）私の指輪でも抜いて逃げてくれればいい……長い長いまっ暗な恐怖の時間が続いたと思ったのですが、あとから考えると私が目をさましてから賊が逃げ出すまで、わずか十分ぐらいだったようです。

賊は、私の目の上をソーッとなでるようにさわったことを覚えていますが、なんだったのでしょうか。私をためすのだと思い、私は母

に言われたとおり、自玉を上へ上げ、白目の出る用意をし、息を殺し、死んだフリをしました。

賊が、私のハンドバッグをいじっているらしい物音がしました。その時、私の体が、無意識のうちに横に少し動きました。それで、賊はあわてた様子で、また私の首を締めにかかりました。今度こそ死ぬ！ という恐怖で私は思わずウーンと、かすかにうなったようです。思えば危険なことでした。自分でうなって、ハッとしましたが、天の助けでしょうか、賊は私のうなり声に、たいそう驚いたらしく、締めていた手を離して、ベッドから飛び降り、逃げ出しました。でも、逃げ出したのか、また何かをしようとしたのか、その時は、もちろん判断はつきません。すぐまた引っ返して来て、私の手を強く縛り直して出て行きました。

もうその時は、ハッキリ賊が逃げたということがわかり、私は「助かった！」という安心感で急に元気が出て、縛られた手の指でマクラ元の非常ベルを押しました。このベルは母屋にも通ずるようになっていたのですが、母ははじめ目ざまし時計かと思ったそうですが、非常ベルとわかると、はね起きて、すぐ

一一〇番へ電話をかけ、兄や姉と駆けつけてくれました。

縛られた足のまま私は寝台を飛び降り、駆け込んで来た母と抱き合った時、はじめて気がゆるんで、ポロポロと泣きました。

以上が、被害者としての青山さんが語ったところでありました。（註、傍点の箇所は後述）ところで、今度は私が加害者（賊）としての立場に仮になって、これを補足してみたいと思います。もっとも加害者の立場からといっても、犯人はまだ判明していないのですから結局は新聞や週刊誌の報道を基として私が推測を加えた創作でありますから、その点、予め御諒承いただかなくてはならないことをお断りしておきます。

——あらかじめ、室内にひそんでいた男は、青山さんがすっかり寝込んだ頃合いを見はかかって、いよいよ時期到来！しのび足でベッドに近付いた。もう目も暗やみにすっかり馴れたし、また、カーテンを通して外の明りも入ってくるので、電灯はつけなくても充分に分るし、下手に明りをつけて青山さんに気付かれたり、外から怪しまれてもマズイと思うので、明りはつけないこととする。ベッドの上では、青山さんが安らかな寝息を立ててい

る。青山さんの顔には、何か楽しい夢でもみているのであろうか、微かな微笑さえ浮んでいる。彼はその時、ふと最近読んだ「レミゼラブル」の一場面を思い出した。大僧正の寝顔に打たれるジャンバルジャンの姿である。彼は、しばらく美しい青山さんの寝顔に見入っていたが、やがて、我に返ったように、片足をベッドにかけて、青山さんの上にのしかかって、両手で首を押えにかかった。それから、声を立てられてはいけなかったので、持参のマフラーで猿ぐつわをかませた。幸い青山さんは何んの抵抗も試みない。それから、思いついて、パッとフトンをはぐと、美しい彼女のパジャマ姿が現れた。そこで今度は、彼はベッパの上に這い上り、青山さんの肩を持ち力をこめてうつ伏せにねじ伏せ、両の手首を握って後ろに組ませ、それを出来るだけ上方にグーッと両ひじが直角になるまでねじ上げて、手拭いで素早く緊縛してしまった。その時、感じた青山さんの手はふくよかでありもう全く観念しているのだらう、縛られた瞬間も、手の指は握ったり折り曲げたりすることなく、自然に伸びたままであった。次に彼女の両足も縛ってしまうこととする。先ず足の方ににじり寄って、両方の素足を足の甲

から裏にかけてガッシリと握り、それを徐々に持ち上げながら、従って青山さんの両ひじは曲げられて足部が宙に浮いてくる、その両足首を宙で心持ちななめに交差するように束ねて、手拭いを巻きつけ、そこで力一杯括り上げた。その瞬間、恐らく青山さんは無意識だっただろうけれど、ほとんど反射的に、その十本の足の指が、はじめはバラバラに開いて、足の甲の方にグーッと反りかえり曲ったかと思える間に、次の瞬間には今度は全部の足指をそろえて、反対に蹠の方に向けて、キューッと力一杯折れ曲ったのが、夜目にも白くなまめかしかった。

彼は、いつか映画の広告で、青山さんが和服で足を投げ出して土手に腰をおろしている姿で、その素足が大きく写されており、足の指や爪の恰好まではっきり鑑賞出来たので、しばらく立止って、それを飽かずに眺めた記憶があった。それによると、青山さんの足の指は、やや長めで肉付きもよく、足の爪も長めで、過日來日したフランスのドモンジョの足の爪によく似ていた。もちろん、今度は暗いし、青山さんの足の爪の恰好までは鑑賞出来なかったが、くの字に曲った白い足指のなまめかしさは、また格別であった。

さてこれで、ブツツケ本番、女優就縛の図が完全に出来上った。青山さんは、恐怖のためか、或いは往々にして見受けるように緊縛を受けて恍惚感にとうすいしているのか、身じろぎもしない。彼はしばらく、うっとりとしながら、この美しい緊縛シーンに見入っていた。いつもはスクリーンでしか見られない高根の花が今は完全に彼の手の中にあるのである。美しいけにえ！煮て食おうと焼いて食おうと、彼の意のままである。しばし彼はこの征服感に酔っていた。すると青山さんはわずかに寝返りを打ったようだ。彼は、ハッと我に返えって、無意識のうちに彼女の首を再び締めたところ、彼女は、今度はウーンといううめき声を発し出したではないか。これはいけない、長居は無用と、彼はあわてて、ベッドから飛び降り、風のように部屋を後にした。けれども逃走の途中も彼の眼の前には先程の青山さんの美しい寝顔、フトンをはいだ時現れた全身の姿態、これをうつ伏せにねじ伏せた光景、両手首をねじ上げて後手に縛り上げたシーン、足首を括られたとき、キューッと弓のように反ったり曲ったりした青山さんの足の指の表情などが走馬燈のようにかめぐった。

以上が、私がかくもありなんと推測した加害者の立場からみた陳述であります。

さて、青山さんの供述では、後手に縛られたとはいっていませんが、報道では、殆んど「後手」といっています。(ちなみに、報道は青山さんから直接、聞いたもの、青山さんの姉さんから聞いたもの、警察から聞いたものの三種類があるであろう。)寝ていて、後手に縛られるためには、うつ伏せにされるか、或は少くとも横向きの姿勢にされるかしなくては、不可能であります。朝日新聞その他では「うつ伏せにして……」と明記していますが、恐らく横向きでは不安定であるし、うつ伏せにされたものと思われまます。

それから、フトンをはがされたことは、どの報道にも出ていませんが、三月七日といえは未だ早春で、室内でも明け方は十度以下になる位なので、当然、青山さんも毛布一、二枚のうえにフトンも掛けていたでしょうし、その手足を縛るのに、フトンの中でゴソゴソやることは、全く不可能ではないにしても矢張りフトンハイだとみるのが自然でありましょう。報道にも、最後にフトンをかぶせて逃げに行ったと書いてあるのからみても明らか

だと思えます。

青山さんの前記告白によると「賊が逃げてから、縛られた手の指でマクラ元の非常ベルを押しました。……縛られた足のまま、私は寝台を飛び降り……」とありますが、後手に縛られたその手の指でベルを押したのでしょいか。これは格別困難なことでもないでしょうが、他の報道では「人の気配がなくなったので、青山さんは手をしばられたまま、足をとすり合わせてタオルをはずし、ベッドの枕許にある防犯ベルを足の指で押した……」或いはまた「パントマイムの幕は、それから手足のタオルをほどき、枕許の母屋に通じている防犯ベルを押して……」という週刊誌記事もあったことを併記しておきます。

さて、それでは、この事件の実体は何んであったでしょうか。

第一に、物盗りでないことは明りょうであります。青山さんを後手に縛った時、当然、目に付く腕時計や指輪に目もくれず、枕元のハンドバッグの中の金もとらず、部屋も物色していないことからみても明らかであります。

第二に、青山さんの狂言説があります。これは賊の侵入、脱出の経路が必ずしも明らかでないこと、足跡、指紋がないこと、犬が吠

えなかったこと等から、事件記者の一部には可成り有力に信ぜられているとのことでもあります。(翌朝、かけつけた刑事は職務上、青山さんの靴下を脱がせ素足にして両方の足首をし、細に調べ、手首、首すじなども調べたあげく「タオルでしばられたというが足首に少々赤くなった跡があるほか、手にも首にもウツ血がみとめられない。……」また、別の刑事は「供述は割にスラスラしていて、ウソばかりとは思えない。何しろ弁護士さんがついていてウルサク、事件の核心がつけにくい困るよ……」といっている。)然し、狂言説は動機が薄弱であります。最初に述べたように、この種のことは女優として下手をするに命取りのことであり、青山さんとして、それ程までに冒険する理由がありとは考えられません。

第三に痴漢説。しかし、青山さんは、首をしめられたり、手足を縛られたりしたとき以外は身体に触れられていないと主張しています。賊がベッドの上にあがり込んでいたことは、どの報道にも触れていないが、御本人の青山さんの陳述で「ベッドから飛びおりて逃げてゆきました。」とある以上、おりる前にはベッドの上にあがっていたとみても誤りで

はないでしょう。しかし、ベッドの上にあがっていただけで、乱暴したとは限らないし、また、賊としても、青山さんの両足首まで固く縛ったところを見ると、所謂狼籍など働く意思は全然なかったのではないでしょうか。

そうすると、残るものは一つしかない。私の推理としては、青山さんの熱烈なファンか、或いは青山さんの極く身近かな人（そうでなくては、偶々の帰京日を襲ったり、風のように侵入、脱出したりする芸当は出来まい）があつた青山さんの手足を縛り上げ青山さんの自由をうばうことによって、女優緊縛の征服感に酔い、二人だけの雰囲気を楽しんだのではないでしょうか。それにしても、可成りの冒険ではあります。これは、つかまったら、何罪ということになるのでしょうか。住居侵入は間違いないとしても、所謂わいせつの意図も行為も何もないのであるから、わいせつ罪というには当たらないと思います。傷を与えたわけでもないから傷害罪でもない。いや、一体青山さんの今度の場合に限らず、一般論として、遊戯や納得ずくで緊縛を行う場合は勿論問題ないとして、相手の女がいやがるのに強引に縛ってしまうという

ことは、何か刑事上の罪にでもなることがあるのでしょうか。

今、書いたように「わいせつ」でも「傷害」でもない（普通の縄目の跡位では、傷害とはいえないであろう）とすると、「暴行」や「逮捕」に当たるかどうか。刑法第二〇八条には「暴行を加へたる者人を傷害するに至らざるときは二年以下の懲役若しくは五百円以下の罰金又は拘留若しくは科料に処す」とあり、第二二〇条には「不法に人を逮捕又は監禁したる者は三月以上五年以下の懲役に処す」と規定されています。緊縛行為はこの「暴行」や「逮捕」に該当することがあるものでしょうか。

私が思いますのに、緊縛が暴行や逮捕に当たる場合があるかどうかは、縛る人と縛られる人との間柄、その目的、態様、四囲の状況等諸般の事情全部を勘案したうえで決められることであつて、予め、緊縛行為そのものが暴行や逮捕に該当するかしんかというのを論ずることは余り意味がないでしょう。

緊縛を手段とした場合、たとえば、強盗が家人を縛った場合は、緊縛行為は強盗行為の中に包含、吸収されてしまいます。縛って逮捕や監禁を行った場合も同様でしょう。愚連

隊が仲間を縛ってリンチを加えた場合、これも緊縛は暴行の手段として用いられるだけで前二者と同様です。こうみてくると、どうやら単純な緊縛行為そのものだけでは、すなわち緊縛のみを目的とするに止る場合は、何んのトガを受けることもなさそうです。報道によると警察が、青山さんの事件を、「暴行未遂容疑」で捜査しているということも、緊縛だけでは暴行既遂にならないことを、裏書きしているようでもあります。このように、全く無関係の間柄でも緊縛行為が問題にならないとするならば、まして、縛る人と縛られる人との間に、何らかの関係がある場合、すなわち、妻であるとか妾であるとか友人、知人であるかといった知合い関係がある場合、または、知合い関係はなくても、相手が芸者、ダンサー、女給、モデルその他何んでも職業関係（主と客）があるような場合にはなおさらのこと、いくら縛ってみたところが、畢竟これは遊戯にすぎず、その間に反社会性とか違法性というか、世の中を害する要素は少しもない。

青山さんの就縛事件から、とんだ方に脱線してしまいましたが、以上の私見について識者の御教示をいただければ幸いです。

筆

隨

演^やって欲しい責め映画

三鷹家浮

近頃の様に、こう責め絵や責め写真が容易く手に入る時代になると、われわれこの種のマニアには、欣喜が過ぎて？何となく一抹の物足りなさを感じるようになった。

戦前のその昔……ビクビクしながら月刊雑誌や単行本の挿絵を落丁して、スクラップしていた頃程のスリル的な楽しみが、戦後の今日この頃には、無い様な気がする。

では映画の方は……？ 即ちヒロインの美女、又はヒロインの相手役に廻る美人女優が、縛られ或は責められる場面のものに就てだが

——これは案外、頂けるものが出ていると思う……。

例えば「新東宝映画」のように、特にそうした場面を見せ場に力を入れている社もあり又一般的に云って、責め場（緊縛場面）の演出が、戦前のものより技巧的に進歩してきた——と見るべきであろう……。

無声映画の頃の「縛り」には、われわれこの種のマニアを欣ばせてくれる「大縛り（車井戸用の太綱やイカリ綱等用いた）」が相当多く見られ、結構楽しませてくれたものだが

如何せん、この時代の緊縛演出には、時として演劇的要素丸出しの、謂わば「噓縛り」があつて、被縛者に対して加虐者が何等かの行動に出ている最中に、縄がスッポリ抜けかかったり、弛んだりして観客を気抜けさせる場面によくぶつかったものだ。——というのが気抜けさせる様な縛りの弛みが見えたトタン……画面は一度カットされて、恐らくは縛り直したであろう事が、われわれこの種のマニアには読み取れるからであつた。

その点、戦後のそれも今日この頃の作品中

には以上の様な「嘘縛り」は、先ず先ず無いようである。

余程、名の売れた女優でも、自ら「本縛り」に「諾」を与える程、演出に真剣味が加わり又そうで無ければ、現代の観客層は昔の様な甘っちょろい演出法では承知すまい。況んやこの種のマニアに於ておや——である。

さて、課題の「演って欲しい責め映画」であるが……これは素より此の種のマニア向きのものを特写して貰えるのなら、云う事は何も無い。ただ「お願いします」の一語に尽きる。——然しそれが出来ない以上、吾等マニヤは一般大衆小説でも読んで、その中に現われる「責め（緊縛）」場面井然たるべきものを見付けて、その映画化に期待するより他ないであろう……。

そして又、それらが既に今日迄に上映上演されていて、即ち過去のものであっても、当時大いに歓待したものであれば、再度、或は数度繰り返しての上映も望ましいのである。

勿論こうした期待なり希望に叶った——つまり原作者の同じ題材を二社も三社もの異なる映画社が異なるスターを駆使して製作したもので何れも吾等マニヤを楽しませて呉れた過去のものもあり、反対に原作では素晴らしい

責め場面があるのに、映画の上では全然それが無かったり、或はあってもホンの申し訳のような簡単さで失望させられたものもあってその両者共、年代が変りスターの顔触れや監督の変る度に、前者は往年のものに劣らぬ……後者はグッと趣を替えて、吾等マニヤの期待する場面を演出して貰い度いと念願するのである。

では筆者が往年観た時代劇映画を主とした記憶の中から、再度上映して欲しいと思うものを先ず述べ、後に同名題材であっても往年のものより改革した、即ち吾等の期待する「責め場面」を原作に忠実ならしめて貰い度いと願うものを数え挙げてみよう——。

茲で一言お断りして置かねばならぬことがある。それは他でもないが、本稿の筆者自身は映画界の関係者ではない故に、又当時（往年）のそのものの記録を全部、太平洋戦争で焼失したので——従って、筆者がこれから本誌上に発表するもの丈をもって、必ずしも当時の傑作とは断言出来ないのである。

これは、あく迄、筆者自身がコツコツと本職の余暇を割いては、観劇し、且つ読破したものの記憶を辿ってゆくに過ぎないのであるから、読者諸兄の中から、他にもこんな素晴らしいものがあり、又、あったぞと誌上に名乗り出て下さる事こそ、筆者の希うところである。

× × × × ×

先ず、ずっと古い——と云っても昭和初年からゆこう……。

無声映画時代のその頃は、よく新聞連載物を映画化して、これを各社——松竹。帝キネマキノ。日活。東亜。等々——が競映したので、だから吾々マニヤは各社の異った女優の責め場面を満喫する事が出来たものであった。即ち「燃ゆる渦巻」に於ける「お綾」及び芸妓「幾松」の責め！「孔雀の光」「砂絵呪縛」「落花の舞」「丹下左膳」等々何れも競演の中に、美女優の緊縛場面が観られたが、これらの内容については、特記すべき程の大場面？はない様に思うので、茲では省略させて戴くとして、各社競映でない単社製作のものを挙げてゆくと、こうだ。

往年の無声映画時代のもので、もう一度、是非共、演って見せて欲しいと、筆者が切に希うもの——それは昭和二年、松竹系で封切された「凡生奈落」と題した時代劇と、今一つはもう他社が殆んどトーキーになってしまったのに、依然、無声で撮っていた日華時変だけ

なわの頃の極東キネマ、古市白鳥園で撮影された「怪人金仮面」と題した、これも時代劇のこの二つである。

何しろ今から数えれば古い昔のこと故、これら映画の内容を、一、一説明する事はお許し願いたい、筆者が何故に以上の二作を今一度観たいと切望するか？と云う事については勿論お話しせずばなるまい。

「凡生奈落」が封切された頃、筆者は十九歳の青年——といっても、封建制の厳しかった大阪の某職の見習徒弟で、凡そ「自由」ということの許されなかった時代であり、殊には背丈の短い故もあってか、一見、未だ少年としか見えなかったであろう——であった。

そして、映画界の内幕なり興業方式というものについては、全然知識を持たず、又、それを研究する余暇さえ持たなかった時代に、この「凡生奈落」は、二番館で封切されたまま、その後広い大阪中の何処かで必ず上映されつつ廻って行くであろう筈のそれを、二度と観る機会に接しなかった——というその事も今以て忘れ得ない「懐しの緊縛映画」である。

前置きはこの位にして……この映画には、われら緊縛マニアの垂涎に価する場面があっ

た。一寸紹介すると——。

この映画のクライマックスでもあるウラストに近いその場面！異国人を交えた海賊達の本拠とみえる邸の裏庭に、車井戸がある。

被縛女優は当時のピカ「森静子」で、今しも彼女はその乾分達に左右の手を捻じ上げられ乍ら、座敷から裏庭へと引立てられてくる。口には既に猿轡……「水責めにしろッ」という主領の命令一下、乾分の一人が井戸に吊り下っている釣瓶縄を手繰り上げ、一方の釣瓶を外すと、寄って集って彼女の軀を雁字搦目に縛り上げる。

見ているこちららは、もう鳩尾のあたりがムズムズする位だ！

縛り終ると、縄の端を手繰ってキリキリと吊し上げる。

あわやという時、市川伝之助扮する「小鳥仙太」が救いに現われ、画面は茲に一大乱闘となる。

全くアノ場面をもう一度観たいものだ。さて今一つの「怪人金仮面」である。

この映画の主演者が、当時「パンジュン」と片仮名タイトルを使っていた。現在の伴淳三郎であった事も是又、記憶に残った一つだ……。

何せこの映画の嬉しかった事は、初っぱなから、「小浜美代子」の大縛りが見られた上に、中程では背中に白粉彫りにしてある秘図を悪人達がそれとは知らずして、彼女の軀の何処かに財宝の所在を示した個処ありとして彼女を半裸体（事実、上半身を裸にして縛り上げた場面を見せた映画は、この当時としては滅多にない）にして、太い薪雑棒で折檻し猶白状せぬとて裏山で吊し斬にせんとする。

裏山に連れ出される途すがらの、馬上での緊縛姿も良し、いよいよ目指す断崖に達して彼女の上半身、即ち胸には、背後に廻った悪人の手下共の手に依って太縄が幾重にもかける。

最後に金仮面の持つ秘図と交換条件が整い彼女は縛られたまま、よろよろとして馬に曳かれて行く場面等、いやもう見ように依っては、始めから終りまで緊縛の連続であった。

だから、この方も今一度、否、何度でも歓迎する映画だと思っている次第である。

昭和の初年頃に、筆者がよく観に行った映画は、主として「日活系」の時代劇であり、これに続いて「帝キネ」「マキノ」等であった。勿論、例の場面を表示したスチールの出ている劇場なら、系統等そのけではあった

が――。

そこで、自然？日活系のものが先に出る訳だが……往年の正月映画に、大河内伝次郎主演の「旅姿上州訛」というのがあった。

アレのスチールを観て、筆者はムズムズする胸の欣びを覚えてその上映館に飛び込んだものだった。

その時の映画のストーリーとスチール画面の紹介をすると、こうだ――。

この映画のストーリーは、御存知「国定忠次」の「山形屋乗込み」の一幕であり、監督は確か、伊藤大輔であった筈。

さて、お待兼ね被縛女優は、当時のピカー「桜井京子」の長襦袢一枚、太綱のグルグル巻である。

この、われらマニアに執っては垂涎の場面が、実際の映画面ではホンの五秒程度のカットであり、それも遣手婆の「お角」の為に土蔵の二階で、その縛り縄の端を梁に高く結わえている

ところに始って、下で被縛者が悲しそうにガックリ首垂れたトタンのカットで、全く呆気無かったが、これに反して、スチールは――宣伝用に撮ったのであろう事を、アトで感付

いたのだが――これは全く素晴らしいものだった。

そしてこのスチールを転写したものは当時の「日活画報」にも掲載されていたので筆者



はよく記憶している。

……百姓娘の「お初」——年貢の金を調達する為に山形屋に奉公した——が、湯に入られて、美しい長襦袢に着替えさせられ、髪を直されて客の前に出る事を強要される。が、娘は父親と藤蔵との約束が「一年間は店に出さない」……であったし、思いもかけぬ事だったので、拒否する。もとより非人道な藤蔵夫婦であるので、茲に問題の拷問的折檻が始まるという訳——。

スチール面では、この藤蔵の妾「お近」に扮した「伏見直江」が「桜井京子」扮するその娘の長襦袢「グルグル」巻に向って長キセルを振り上げ、つまり折檻の有様を撮し出してあって、これが中々「イカス」ものだったし他にも二場面、実際には現われぬそれがあった。

そこで筆者の希いは、かの「旅姿上州訛」なる映画を、今度は当時の宣伝用に撮したそのスチールの場面の実際化したものに改革したもの、どの映画社でもいいから是非共、演（撮）って貰い度いものだ、実現しそうなものと思ひ乍ら、期待をかけて待っている次第である。

次は同じく当時の日活時代劇で、子母沢寛

の原作「海棠やくざ」である。

この映画中で「鈴村京子」扮するその緊縛場面は、珍らしくも一分間近くの長時？に亘るし、その緊縛姿態の構成も仲々素晴しかった。

何しろ大勢の敵方のヤクザ共の為に、散々モミクチャにされた上に、縛り上げられて土蔵の中に監禁され、一晩中、簋蚊に責められるという原作のそれに劣らぬ？我等マニアには素晴らしい眺めであったので、未だに忘れぬ！

殊に印象に残っているその縛り縄が、百姓の手製？に依る三ツ又編みの、平べたく丸味の無い……筆者の臆測によると、荷車を挽く時の「先挽き縄」と見られた事も、再度の上映を希望する所以である。

子母沢氏の原作で思い出す、筆者が茲で、絶対に不可能とは思われないで切望する題材のものが一つある。他でもない——「天狗の安」がそれだ！

この題名で、原作に九分通り忠実な演出をして観せてくれた映画といえば、昭和十二年新興キネマ提携で封切られた、当時の阪妻プロの作品、即ち「天狗の安」であった。

さて——気負い込んで、ここ迄書綴ってき

たものの、この原作に忠実な映画中には、待望の——原作では、安の幼馴染の「お八重」という女が、土蔵の二階で大黒柱に、文字通りの裸で、太縄に雁字搦目の緊縛を受けた身を、弓の折れで死ぬ程烈しく折檻される——

その場面は実写されず、影絵となって現われたに過ぎなかったので、この垂涎に価する画面を、茲で紹介の仕様が無いのである。

けれども又、それ故にこそ筆者の希い——否、愛好家を代表しての、この映画、即ち「天狗の安」を原作通りに演ってくれないものか——と切望するのである。

では茲でその吾等マニアの切望する画面について、聊か「註」なるものを加えてみるとうだ——。（実現されたら堪りませんゾ）

もともと「お八重」という女は「安」とは幼馴染で（あったらしい）……後年、この場面では、お八重は「陣場の××」というひどくヤキモチ焼の親分の妾になっていて、敵方の親分「桶惚」一家に草鞋を脱いでいる安と戸外でぱったり出会って、お決まりの懐旧談となる。……この現場を目撃したのが陣場の代貸「駒蔵」で、此奴もとかからお八重に横恋慕していて彼女を口説き、肘鉄を食っているの、これ幸いと「お八重」を脅迫して口説く

が、結果は却って猛烈な肘鉄を食う。

そこでヤキモチ焼の亭主であり親分の「陣場」に駒藏がウンとそのヤキモチを煽るザンソ（安と密通していたと）をする。

哀れ「お八重」は、朝起きぬけから、裏の土蔵の二階の大黒柱に全裸で縛り上げられ、折檻となる――。

とまあこうなのだが、……何がさて戦前のアノ取締りの厳しい時代では、全裸にして縛

奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第1号	(昭和30年10月号)	△売切
復刊第2号	(昭和30年11月号)	△売切
復刊第3号	(昭和31年4月号)	△売切
復刊第4号	(昭和31年5月号)	△売切
復刊第5号	(昭和31年6月号)	△売切
復刊第6号	(昭和31年7月号)	△売切
復刊第7号	(昭和31年8月号)	△売切
復刊第8号	(昭和31年9月号)	△売切
復刊第9号	(昭和31年10月号)	△売切
復刊第10号	(昭和31年12月号)	△売切
復刊第11号	(昭和32年1月号)	△売切
復刊第12号	(昭和32年2月号)	△売切
復刊第13号	(昭和32年3月号)	△売切
復刊第14号	(昭和32年4月号)	△売切
復刊第15号	(昭和32年6月号)	△売切
復刊第16号	(昭和32年7月号)	△売切
復刊第17号	(昭和32年8月号)	△売切
復刊第18号	(昭和32年9月号)	△売切
復刊第19号	(昭和32年10月号)	△売切

復刊第20号	(昭和32年11月号)	定価二百円
復刊第21号	(昭和32年12月号)	定価二百円
復刊第22号	(昭和33年1月号)	定価二百円
復刊第23号	(臨時増刊号)	△売切
復刊第24号	(昭和33年2月号)	定価二百円
復刊第25号	(昭和33年3月号)	定価二百円
復刊第26号	(昭和33年4月号)	定価二百円
復刊第27号	(昭和33年5月号)	定価二百円
復刊第28号	(昭和33年6月号)	定価二百円
復刊第29号	(昭和33年7月号)	定価二百円
復刊第30号	(サド特集号)	△売切
復刊第31号	(昭和33年8月号)	定価二百円
復刊第32号	(昭和33年9月号)	定価二百円
復刊第33号	(昭和33年10月号)	定価二百円
復刊第34号	(昭和33年11月号)	定価二百円
復刊第35号	(増刊号青い魔院)	定価二百円
復刊第36号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第37号	(昭和34年1月号)	定価二百円
復刊第38号	(悦唐小説と緊縛写真)	定価二百円
復刊第39号	(昭和34年2月号)	定価二百円
復刊第40号	(昭和34年3月号)	定価二百円

復刊第41号	(昭和34年4月号)	定価二百円
復刊第42号	(サド特集第二集)	三百五十円
復刊第43号	(昭和34年5月号)	定価二百円
復刊第44号	(昭和34年6月号)	定価二百円
復刊第45号	(悦特第二集)	定価二百円
復刊第46号	(昭和34年7月号)	定価二百円
復刊第47号	(昭和34年8月号)	定価二百円
復刊第48号	(昭和34年9月号)	定価二百円
復刊第49号	(昭和34年10月号)	定価二百円
復刊第50号	(昭和34年11月号)	定価二百円
復刊第51号	(サド特集第三集)	三百五十円
復刊第52号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第53号	(昭和35年1月号)	定価二百円
復刊第54号	(悦特第三集)	定価二百円
復刊第55号	(昭和35年2月号)	定価二百円
復刊第56号	(昭和35年3月号)	定価二百円
復刊第57号	(サド特集第四集)	三百五十円
復刊第58号	(昭和35年4月号)	定価二百円
復刊第59号	(悦特第四集)	定価二百円
復刊第60号	(昭和35年5月号)	定価二百円
復刊第61号	(悦特第五集)	定価二百円
復刊第62号	(昭和35年6月号)	定価二百円

り上げて折檻する場面等は、とても演れる訳がないのだから、当時としては筆者も生唾を飲み込んで、我慢したのだが、さて戦後のこん日、グラマー女優の売出しにも役立つこの場面！どうです？新東宝さんあたりで演れそうなもの……否、是非演って下さいと、筆者は切望する。

「戦後——主演者も同じ阪妻で「天狗の安」を東映が撮ったが、これは原作とは大分ストリーが变っており、その代り？「お八重」が「お静」になって、「入江たか子」が緊縛場面を見せたが、勿論、裸でもなく折檻もない、それは平凡？なものであった。最近の「喧嘩鷹」も、どうやら「天狗の安」の吹き替えらしいが、何れも原作のアノ素晴らしい責め場がないので残念だ」

『未完』



ファンタジア

マゾヒスティカ

山本節夫

十六、女性の乗馬について(その二)

大宅壮一著わすところの「日本の裏街道」のうち、隠岐(?)の島であったか、島内には交通機関がないので専ら馬の背中が使われる。しかも働き手は女なので到る処で女性の乗馬姿がみられ、又その服装が膝を僅かにかくす位の紺がすりに脚絆といういでたち、前掛けはするが跨ったところ膝の割れたあたり、の太腿がチラチラと覗くのは、なか／＼エロッポイと評してある。こんな情景は世界の各

処でみられる様で、エーゲ海の島々、シシリ島、はてはスペインの各地など、ロバが乗用されていると聞く。「パンと月と恋」とか云う映画で、大柄のジーナ・ロドリゲスが、どっかりとロバに跨って買物に出掛ける場面があったが、馬と違って足が地面につきそうなロバとなると、馬乗り姿も又、違った趣きがある。殊に、あのセカセカした歩度では騎り手の乗り心地はどうなのであろうか。

十七、幻想

ワン・ラウンドを終ってクラブ・ハウスに憩っていると、彼方の練習場で女性ゴルファーが盛んにウッドを振り上げている。ピチッと身にあったスラックスに真赤なセーターがよく似合って、年はまだ二十にとどかぬ風情。みるとはなしにみていると、ハウスの腰窓にさえぎられて下半身が殆んど陰になってよく見えない。両脚を開いてスタンスをとり、体の前でクラブを握り、両脚を片方ずつ僅かに動かしては調子をととのえている。振り上げ

ては、また気が合わぬか体をあちこちと動かして、また狙いを定める。その繰り返してから私の脳裏に或る幻想が浮んだ。

——彼女の足下には一人の男性が両膝をついて、しゃがんでいる。その肩の上に、のしかかる様にして彼女は跨り、しかし尻は肩に落さず、獲物の頭の辺りを両手で押えつけながら降伏を強いている。「コレデモカ、ヤイ、アヤマレ」両脚で首の辺りをしめつけながら女王様は身体を左右に揺すって男性をいじめつつける——。

楽しい幻想ではある。

十八、女性の乗馬について(その三)

歴史ブームというのか各種の全集が出ているが、S社の叢書の中に文豪、佐藤春夫氏の執筆されたものがある。数巻ある中で平安時代の巻に、当時、未開の蝦夷地帯と交易する商人の物語りとして詩人特有の空想が面白く描かれていた。曰く「エゾの乙女の抱き具合の好いことといったら、何しろ朝から晩まで裸馬に跨って暮しているから脚の力がつよいことよ」と、そのものズバリの表現には恐れいった。

近頃、NHKとんち教室などにも出るミス・スミスという御嬢さんは、カナダ大使館の

女性とかで年は十七才位、週刊誌でみると、なかなかの美人である。土地柄、乗馬は五つの時からやっている由。現在も毎日、ハイツの馬場で練習しているそうだ。乗馬の写真もなかなかよろしく、金髪、白哲の美女がガツシリと跨ったために、さすがの御馬も小さくみえ、殊に曲り角で手綱でも控えた関係か、馬の首の上にのしかかる様にかぶさって押しつぶさんばかりの有様。傍の同嬢のしとやかな和服姿と対照して、そのアマゾン振りには感、又ひとしおであった。

十九、ストリップ小屋にて

「淑女は乗馬が御好き」 春は馬に乗って

こんな看板につられて築地の去るストリップ小屋に入ったのは、たしか五、六年前の正月である。立錫の余地もない人混みの中で立ちつづけたが、ついにそれらしい風景もなく悄然としていると、フィナーレ近く「女助六」が出た。紫頭巾はかぶっているが、あとはパンティがすけて見える軽羅姿で見得を切るとみるや「ヤイ、俺様の股アぐれ」と両脚を開いて仁王立ちになった。「股アぐれ、くぐれ」と、客席に向って叫びつづけると、司会の男が出て「どなたか股くぐりの希望者はありませんか」と訊くが、さすが築地の客

はおとなしい。助六は相変らず高足駄を踏みならして、股くぐりの馬をまっている。「では止むを得ず」と件の男、助六様の前に四つ這いになって頭を突込むと「馬鹿野郎、後かへまわりやがれ」と一喝。男は這いながら後へまわって尻の下から、よたよたくぐり始めた。頭の先が抜け出たところで予期通り助六様はムンズと御尻を下ろし馬乗りに跨り「しつかり歩け、ヨタ馬奴」ハイシ、ハイシと舞台を一周、ヒラリ首っ玉に跨り直して今度は肩車で一周、やがて幕となった。そして私は始めて看板の意味を思い出したのであった。

二十、トラ・グラについて

流行語の一つにトラ・グラというのがある。トランジスター・グラマー、つまり小型のグラマーの意である。さて、マゾ男性にとってのトラ・グラの意義を考えてみたい。

一番、心をひかれるのは、普通の男が馬になっても跨ったトラ・グラ嬢は足が地面につく様なこともなく、極く自然にハイシドウ、ハイシドウと御馬の稽古が出来るだろうということである。肩ぐらいまでの身の丈のグラマーにぐっと睨まれ「やい、デブ野郎、おとなしく馬になれ。云うこと諾かねえとこうだぞ」などとすごまれ、指の二、三本も逆にと

られて意気地なく地面に四つ這いになり、ス
ラリとした御み足の先に口づけし、さて首を
さしのべて御跨り下さるのを待つのも一興で
はないか。小さい乍らも相手はグラマー、発
達したいきのいい両足でギュー、ギューしめ
られ蹴られて、馬はいななきながら奉仕をす
るのだ。

処で、このコントラストは裏をかえせば普
通のグラマー対巨人ということにもなる。キ
ング・サイズのグラマーの御馬には普通の男
では駄目なので、それは例えば相撲取り、或
はプロレスラーなどがよい。それも余り横に
ひろがったのではなく、やせぎすの長身者が
いい。朝夕太郎を馬にして、どっかと跨った
万里昌代の姿を想像してみたまえ。ああ、私
は大男になりたい。

二十一、プロ・レスの二つの型について

前回も話題になった「グラマ天狗」が週刊
漫画別冊に連載で出ている。その新年号に女
天狗のグラマー振りにイカれた捕り手の武士
が「ヤッホー」と合図の呼声を盗用する。そ
の声に、いずくともなく現れ出た「グラマ天
狗」は、さっと後から武士の肩に飛び下り、
そのままプロレスよろしくの恰好で首を締め
上げる。「このH（エッチ）め」次の一駒は橋

の上を例の武士を馬にして跨り、馬は這いな
がら「ヤッホー、ヤッホー」と云わされてい
る。「もっと大きな声を出せ」馬乗りグラマ
ーは馬上ゆたかに、ほほえんでいる。次号が
待遠しい。

この様なプロレス遊びでは、嘗て「猫と庄
造と二人の女」の映画スチールが思い出され
る。

香川京子が追いかけて引き倒す。立ち膝で
後から咽喉輪の辺りを掴み、ひらいた両脚で
首を挟みこんでしめつける。「苦しい」と
もがく男をギューギューやつつける香川京子
は、余りに真剣すぎて却てマゾ味を弱めるほ
どであった。これとは別に、香川京子が椅子
に脚を開いて腰かけ、同じ様に仰向けに引き
ずり倒された森繁を膝に挟みこむスチールが
あったが、これは上映されなかった様だ。

二十二、イタ・セクシユアリス草稿

（その二）

名前は仮に糸春とでもしておこう。何しろ
実在の人物なのだから。

糸春はA花街の芸者といっても芸をしない
芸者である。いわゆる、小股の切れ上った伝
法な江戸っ子で、体重も十四貫はあるだろう。

丈は五尺三寸は下るまい。いろ／＼な家庭事
情でこういう境遇に甘んじているのだろうが
二十四という年の割には若々しく、別に苦勞
の跡もない処をみると案外、派手な世界が好
きで自発的に芸者稼業に入ったのかも知れな
い。都心の有名校ではないが女学校も出てお
り、「痴人の愛」が谷崎のマゾ文学であるこ
とぐらいは心得ている訳である。

始めて会ったのは、もう四年になろうか。
初秋の宵であった。相当酔っていた私にもハ
ツとさせるほどの魅力で、殊にその瞳が美し
かった。どこかに負けん気をただよわせて、
眉根の辺りが時々キュッとする様なそんな女
であった。私は彼女に短刀直入にいった。

「背中に乗ってくれよ」「ア、マッサージ
するの？」知ってか知らずでか、そんなこと
をいいながら彼女は、いきなり私の背に馬乗
りになった。「重くない？」身体を僅かに前
後しながら彼女はいう。しばらくして私は、
うんと力むと女騎士を跨らしたまま両手を踏
んばって四つ這いになった。「スゴイ力！お馬
ネ」彼女は降りもせずといった。「一寸、歩
いてみて、さあ早く」横目でチラッと見ると、
形のよいスラリとした脚が私の頬の横に突き
出されていた。足先のくるぶしもなめらかだ

し、指の形も美しかった。私は蒲団の廻りを三、四回まわった。といっても六畳の部屋である、息が切れるというほどのものでは勿論ない。

いつかも指摘した様に、人間馬に跨った女の口癖か、糸春も例外ではなく「ハイシ、ハイシ、もっと速く」といいながら片手で馬の尻を叩くのである。

頃合いなので私はまた前の位置に戻って立ち止ると、彼女は「疲れたか、疲れたら許してやる」と、もう始めとは口調が変わるのである。そして、じっと見下した糸春の瞳は、いたずらっぽく輝き、口許には柔しい微笑がみえた。

番外、――間奏曲――

珍しくスミさんからの便り。

「年のせいかしら、このごろ太ってきて困っているの。ゴルフが面白くて暇をみてはいくんだけど、ゴルフをするとお腹がすくでしよ、だからよく食べてそれでぐっすり寝るもんだから、痩せるためのスポーツで逆に太っちゃうって訳なの。だから……判った？可愛いあなたのお馬さん、待ってるわよ。バイバイ」
御主人様、早速、飛んで参ります。そして賤しい馬奴は、いそいそと御前に這い、御跨

り遊ばすのを御待ち致します。思いきり責め上げて下さい。馬奴もこの頃、すっかり怠けたおかげで醜く太ってきました。

二十三、女性の言葉について

「跨る」「馬乗りになる」その他もろもろの征服語を、自分に対してそうして欲しいと思ふ様な美しい人に、何とか云わせる方法に色々苦心をするのだが、その一、二例を示す下次の通りである。

(一) 一番、端的には乗馬についての話題。

きっかけがむづかしいが「馬に乗ってみたわ」「いい気持でしょうね」となれば割合にスムーズに行く。

「女性用の横乗り鞍もあるけど」

「そりゃ、やっぱり跨った方がいいわ。第一

その方が安定感があるでしょ」

「拍車で蹴ったり鞭をあてたり一寸、馬が可哀そうみたい。だけど仕方がないわね、こっちが乗り手なんだから。云うことをきかなきゃ」

「初心者は乗り具合で判るらしいよ。馬が馬鹿にして動かないもの。そしたらどうする」

「絶対にいうことかしちゃう、かがとでお腹を蹴とばして、御尻を引っぱ叩いてギュウギュウいわしてやるわ」

(二) 馬乗り場面の回想

映画でも小説でも「痴人の愛」のハイドウ場面を話題にする。

「いい気持でしょうね、ああやって男を征服して、何んでもいうこと諾くかなんて馬乗りのままいうなんて」

「どんな男でも女の人にいじめられたい気持はみんなあるらしいよ。ぶたれたり、つねられたりしてさ」

「そういう弱点を利用すればいい訳ね。どういじめてあげようか」

チャンバラ映画などで力の強いヒーローが片っ端しから相手をやつつける場面がざらにある。時にはそれが男装の麗人であったり、

また女性そのものであったりする。

「女剣げきでもいい訳だ」

「みていると胸がすくね」

「そう、実にいい気持。ああいう具合にバツタ、バツタと切りまくったら、いい気持でしょうね」

「君の胸の奥には、そういうサジ的な要素があるんじゃないかな」

「あら、どうして。でも時々はいじめたいっていう気分もあるわね。大の男を組敷いてギュウギュウいわしたいという風な」



【マゾ通信】

マゾ閑話

中沢一郎

一、トガったパンプス

マゾ男の憧れは女の足。ひざまづいてその甲に接吻し、その指を舐めその裏で踏みつけられることに絶大な感激を感じる。

最近流行の先の尖ったパンプスは、以前の丸いおだやかなものに比べて攻撃的で悩ましい。特に先の長くなった関係から、足指の分れ目まで表から覗かれるものもあって一層楽しい。どうかこの型の流行が長く続きますように――。

二、婦人雑誌から

『若い女性』という雑誌の三月号、グラビヤ頁の入江美樹さんの写真で中々サド的な感覚を受けるのがある。斜め横向きで両足を開き、鋭くこちらを見つめているポーズは、何か今から自分が懲罰をいわたされているような、又、自分が憐れみの許しを乞うているような感じを受ける。

その裏の頁に同じく入江さんの写真で、片足先を少し上げたものも同様に「この足

(三) スクーター。

スクーターでも、横乗りは嫌、ちゃんと跨らなくちゃ」とか「オートバイに跨ってぶつとばしたい」などという女性は大体、馬乗り姫タイプとみてよからう。

「もし僕が約束を破っていうこと諾かなかったらどうする？」

「承知しないわ、うんとトッチめて上げる」

「腕力なら負けないよ」

「何よ、そんな痩せ腕で。押えつけてキュウキュウしめ上げて泣かしてやるから。柔道は兄貴に習って相当な腕前なんだぞ」

「ゴメン、ゴメン、おみせしました。いうことききます」

「よし、武士の情じゃ、今日の処は御慈悲を以て生命だけは許してつかわす」

二十四、馬場にて(その二)

どういう階層の女性であろうか。あまり教養らしいものは感じられないが、あけすけなアプレの体臭を惜しげもなく発散して、あたり構わぬ態度の女であった。西洋人の少女達と一緒に来ていたので或いはその方面の関係者かも知れぬ。ピンクのネッカチーフに割合ととのった顔をつつみ、真赤なセーターに白い乗馬ズボンと、服装だけは一流だが、お馬

の裏をお舐め」と命令されているような感じを受ける。概してこの人は目の力が強く若くてしかも混血、私はいつもこの人の写真を楽しみにしている。

三、デパートのエスカレーター

Mデパートのエスカレーターで偶然、私の二三段前に美しい婦人が乗った。スラリとした足が素晴らしく、思わず息を止めた程だった。私はそのまま、ずっと息を止めてみた。上りきる頃、少し苦しくなったが、彼女の足がエスカレーターから床に移る迄我慢した。

ここで一回だけ呼吸すると、幸い彼女は売場へは行かず、そのまま再びエスカレーターで三階へ。私も勿論、これに続いて息をとめる。前より幾分苦しい。上りきった所で同様に一呼吸し四階までゆく頃には相当苦しくなったが、目の前の美しい足を見つめて、その美しい足で息を止められているように想像して我慢した。五階へ行った時は、傍に立っているエスカレーター嬢に自分の表情を覺られないように苦勞した程であったが、この一時の楽しみもここで終

り、彼女は颯爽と売場の方へ消えていった。

四、トルコ風

これは計画と御願ひ(このようなことは読者通信にでも投稿すべきものかも知れませんが)。雑誌などで読むと、最近一流の所は別として、大概のトルコ風呂では、少しチップを奮発すると、普通のマッサージの外に特別なサービス迄すること。私の要求はトルコ嬢の前に全身をさらけだして、施術者たる彼女の冷静な眸で見つめられることを想像してマゾ的感覚を呼び起される。

只、この場合、誰でもいいわけではなく少くとも十人並位の容貌を持ち、出来ればサド的なセンスの一片でも持ち合わせていたら幸い。若し読者の方でこの様な処を御存知の方は御知らせを乞う。尚、今手元ないので明確には記憶していないが、確か三十三年三月号かに、黒田さんの文で新宿赤線のサド女性三人を紹介した記事を、赤線廃止直後に読んだが、この種の記事をどんどん載せてほしい。欲求不満の多いM派の為に――。

の方は始めてとみえて初っぱなから大さわぎであった。馬の口をとる馬丁に、しっかり押さえててよ」と命じ、踏台に片足かけてドッコイショと跨ると、両脚をデンと開いたまま「アブミにかけて」と馬丁に足をもたせるのも平気。「一寸こっちが長すぎるわ、直して」とさんざん文句をつけてから、さて「ハイシ、ハイシ」と大声で馬をせかすが、一向にいうことをきかぬのに業をにやして「コイツ、いうことをきかないか。コラ、歩け」と人がみているのを、むしろ意識する様な口のきき方であった。むやみやたらと手綱を引きしほるので、馬は面喰ってアブクを吹いて後すぎりしたが、やっと駄足にうつり乗り手は大得意。相変らず自分でハイシ、ハイシと腰を浮かせながら拍車を入れて連れの少女達に「ヘーイ、ルカット、ミー」と得意である。

興味を持って暫くみていると馬場の隅の障害の前辺りで、盛んに馬腹を蹴つて飛ばそうという気構え。乗ったばかりで障害とは恐れといった次第だが、さすがに師範の先生が飛んで来て止めさせると、不満そうに下馬した。乗馬のカミナリ族とでもいうのか。

(未完)

連載小説

宇宙のどこかで

手記「無実の罪に哭く男」より

実地検証

何日経ったのか一向に分らなくなってしまい、一日中、嵌口具の中で呻き乍ら懲戒されていましたが、或る日の午後、曳き出されました。

いざり出た私の両手が久し振りに別々になり、投げ与えられた鍵で足錠の鎖を長くさせて貰い、嵌口具を外されました。我と我が両手を自由度三の鎖で繋ぎ合わせ、シャワー室でシャワーを浴びます。十日以上も後手錠にされていた訳ですが、第一種手錠の様に締めつけられて居ませんので手は割によく動きました。手錠を腰枷に固定され検事室へ曳かれてゆきましたが、十日間も折曲げたまま伸

せなかった両脚は、歩くたびにガクガクとして雲の上を歩く様です。胸鎖は、まだ外して貰えません。

婦人検事の前に平伏して、懲戒して貰った礼を申し述べさせられます。

「フ、フ、フ、どう？ 辛かったかい？ 少しは囚人の分際が分った？ え？ ところで今日これからね、お前のいう通り連れて歩いてやるから、ちよっと待っていい」

婦人検事は再び旅行の話を楽しそうに周りの人々と始めました。私は自分から願い出たこと乍ら、いざとなるとどうしたらよいかと身のすくむ思いで考え込まざるを得ません。ともかく、友人と最後に飲んだ所は確か法膳寺の近くの「何とか小屋」とか云うバーだっ

佐 治 麻 造

たから、その辺へ連れて行ってもらって考えることにしよう。しかし大変なことになったものだ。若し分らなかったらどうしよう。それに、こんな恰好を盛り場の人々に見られるのは堪らないなあ、等と考えますと次第に怖気づいて来ます。

「検事様。ひよっとすると分らないかも知れません。今夜もう一晚、考えさせて下さい……」

革鞭が巧みに振われて、平伏している私の右の太腿の外側に激しく鳴りました。今まで受けて来た革鞭とは比較にならないひどい痛みを感じさせます。

「ぎやっ、う、うー」

更に左にも一撃です。後で段々分って来たのですが、革鞭は同じでも、又、振う力が同じでも、肌に当たった瞬間、鞭を引くようにすると今の様な激痛を与える訳です。

「へえー。あれ程頼んでおいて今度はやめるの？」

「い、いえ、今夜一晚だけ待って下さいまし」

「勝手なこと言っちゃ困るわね。こちらも予定があるんだしね。ホラ警務庁の山本刑事さんも来られたじゃないの。さっさと出掛けようじゃない？」

聞きおぼえのある山本婦人刑事の澄んだ声がします。

「こんにちは、検事さん。おそかったかしら？」

「いいえ、御忙しいのにすみませんねえ。これ、三三九号。御あいさつしなさい」

「ハ、ハイ。……あの、刑事様。いろいろと……お、お世……話になりました。ありがとうございました」

ポンと頭を蹴られ身を起します。私を逮捕し、殆んど無実と云え

る罪を着せてしまった、この婦人刑事をうらめしく見上げます。

「胸鎖をつけられてるのね。検事さん。こいつ、本当に強情でしよう？」

「バカだよ、こいつは。看守さん、支度してよ」

手鎖が外され、嵌口具を我と我が口に嵌め、錠を下ろして貰います。

後手に自由度零に手錠され、腰に鎖をつけられました。胸鎖は、とうとうそのまま外して貰えません。こんな浅ましい姿で街を曳き回されるのかと思いますと、悲しく情けなくて、余計な願いを頼んだことを後悔しました。

検事、刑事の外、一人の婦人書記と一緒に、男の看守に腰鎖をとられて中庭で自動車に乗りました。ワゴン型の最後部の荷物を積む所に正坐させられ車が滑り出します。

「これから降りようか」

皆は軽々と車外へ降り立ちます。夕暮れ近い盛り場は、華やかな装いの若い男女が多勢、行き来しています。その真只中へ、この哀れな囚人姿を晒さねばならないのです。諦めて車を出ます。鎖がジャラジャラ鳴り、首枷の音響器が音を立てるのを防ぐすべもなく、忽ち人々の眼に止まってしまいました。

「オイ、見ろよ。今頃こんなところへ囚人が来たよ」

「ああ、実地検証か何かだろ。しかし時間がおかしいね」

「この辺じゃ今頃でないと居ない人が多いからじゃないかな。しかし、情けねえだろうなあ。場所が場所だから」

「あの手錠や鎖や何か全部で、どの位あるだろう？」

人々の嘲りを受け乍ら、三十疋以上ある戒具を施され、膝を屈め

うなだれて居ますと

「サア、三三九号、先頭に歩きなさい。どこから始めるのよ？」

恥しき口惜しさにブーツとなり乍ら、鎖を引摺って見覚えのある通りを歩きます。両側はバーとか喫茶店とかキャバレーとかが並んで居ます。店へ急ぐ着飾った女給らしい婦人達は、一応、眉をひそ



一人に集中する訳で、本当にこんな情ない思いはありません。唯、嵌口具で顔の下半分が隠れているのが、せめてもの慰めです。
見おぼえのある店構え、

「ア、ここだ」

看板には『赤い小屋』とあります。口が利けませんので立止って

めて見せますが、内心は好奇と嘲りと憐れみを感じるのでしよう。ジロジロ眺めて通り過ぎます。
「ずい分と、きびしい縛り方ね。どんな気持ちかしら？」

「あの鞭の痕、ごらんなさいよ。囚人って哀れなものね。あんなっちゃ人間もおしまいね」

今迄、街の中を曳かれた場合、逮捕の時には手錠、腰縄だけで服を着て居ましたし、検事局送りの時には同じ様な姿の仲間が居た訳ですが、今は私一人です。私以外の人は皆、立派な社会人の方々です。皆の視線は私

いますと

「ここかい？ それなら正座するのよ」

道端に正座して、店内に入った刑事を待ちます。

「大丈夫よ。御通りなさい」

店の女給でしょう。こわそうにして入りそびれている若い娘さんに検事が言います。なまめかしい脂粉の香りがして、女給さんは和服の裾をひるがえしながら、さっと扉の内へ入ります。入れ違いに刑事が顔を出して合図をしたので、私達は店内に入りました。私は扉のすぐ内側で再び正座です。小さいバーですが、見廻すと確かに見おぼえがあります。

若い男のバーテンは知らん顔でコップを磨いて居ました。奥からマダムが顔を出しました。

「マダムさん。早々からこんな汚らわしい囚人なんか連れて来てごめんなさいな。今、嵌口具を外してやりますから、ちよっと見てやって下さいよ」

嵌口具を外された私は、恥しさの余り思わず、うなだれてしまいました。

「コラ、顔をあげんか」

鞭で額を小突かれ、思い切って顔を上げます。

「さあ、ねえ。何分、多勢の御客様でしょ。だから一度や二度の方は、とても覚えて居られませんか」

「そりゃそうでしょうともねえ。三三九号。どうなの？」

「ハイ。あの、あの時の女給さんは居られないでしょうか。たしか、お絹さんとか……」

「ああ、お絹さんね。丁度、今来たわ。お絹さん、おめかしはあと

回しにして一寸出ておいでよ」

御化粧半ばで出て来たお絹さんは、マダムの後へ隠れる様にして「こわいわ。大丈夫？」

「大丈夫だわよ。手も足も括ってあるじゃないの。どう？この男、二十日程前の土曜に来たって言うんだけどねえ」

私は、このお絹さんには確かに見覚えがありました。

「お願いです、思い出して下さい。ホラ、二人連れで来て、酔払って居たでしょう。レコードをいろいろ無理にたりして……」

「この野郎。許しもなしに社会人の方に口を利くなんて太い奴だ」マダムや女給のお絹さんの眼の前で、正座している膝に革鞭が鳴りました。

「ヒーツ、う、う、御鞭ありがとうございます」

「立て、胸鎖がゆるんどる」

重い戒具にヨロヨロし乍ら鎖をジャラつかせて立ち上り、胸鎖を更に締め付けられます。

「まあ、何ときびしいこと」

「哀れなものねえ。けど、この男、一体どんな悪いことしたの？」

「オイ三三九号。申上げろ」

情けなさに涙を流し乍ら平伏して

「横領、強盗、暴行、及び傷害致死罪容疑、未決囚三三九号でございます。こんな姿を御眼にかけて申訳ございません。何卒御赦下さいまし」

「まあ、こわい。兇悪犯人じゃないの」

「お絹さん。覚えてるの？それとも知らないの？早く出て貰わにや困るじゃないの」

「そうですわね。アラ、ちょっと、その首環のとこ見せて」

お絹さんは近付いて来て、身体を屈めて私の右の首筋を、しげしげと見つめました。なまめかしい香りが鼻につき、私が立入ることの許されない世界を悲しく思い出させます。

「このホクロの形で思い出したわ。マダム。確かに来たわ。土曜日だった筈よ。二十日程前の」

「いや、どうも御手間かけました。実はねえ。其の時の連れの友人の証言でね、ここへ来たことはまあ本当らしいんですよ。問題はこれからなんですの。おじゃま致しました」

再び嵌口具が、がっきと嵌められました。少しでも顔をかくせますので、この時はありがたいと思いました。

店を出しましたが、途方にくれました。

「これから何処へ行ったの？え？」

婦人検事に意地悪くいわれ、ままよ、と法膳寺横町へ鎖を引っ張り乍ら入ります。ジロジロ物珍しそうに見られて恥かしく情ないのですが、この際そんなことは言って居られません。

この辺で友人と別れたと思うが、と辺りを見廻します。首枷が余計な音を立てなきや良いのに、と余分な事を考えた途端、足鎖につまづいてつんのめり、鉄鎖の音を石だたみに響かせて膝をついてしまいました。

周囲の人達の冷笑するざわめきが耳に入ります。

「くそっ。お前達もこの様に縛られて見る。どんなに辛いか判るか」と心中で叫び乍ら身を起した途端「三幸」という看板が眼に入りました。

「あっ。そうだった。ここですし、を食べたっけ」

喜びにふるえ乍ら、腰鎖をグイグイと引張ってその店の前で正座します。

「ここかい？ちよい待ち」

期待に胸をふくらませ恥しさも打ち忘れて、居合わせた御店の方々に見て頂きました。

しかし、考えて見れば覚えて居る訳がありません。御店の石の床に正座し、ままならぬ後手錠の身をもだえて、思い出して下さるように御願ひするのでしたが、只、嘲笑を受けるばかりです。近所の人達も集まって来てさんざん羞ずかしめられました。男泣きに泣き乍ら嵌口具を嵌められ引き摺り出されます。

「駄目な様ね。次はどこ？」

失望に打ちひしがれた私は、半ばやけくそになって出鱈目の店へ入ります。入って来られた店こそ迷惑な話です。あたりは殆んど暗くなり、遊興する方々も繁くなりました。料理の芳香が鼻につき、もはや口にする事のできない様々の飲食物を思い出させます。

「どう？未だ思い出せないの？」

刑事に嘲けられ、諦めた私は足許に正座してうなだれました。

「フン。諦めたの？監房が恋しいのかい」

「じゃ帰りましょう。車はどこだったかしら？本当に御苦労様でしたわね。御茶でも御馳走するわ」

喫茶店に連れ込まれた私は、皆の席の近くの床に正座します。立つことができない様に腰枷と足錠を結ぶ鎖をうんと短くされ、額を床に摺りつけて待たされました。コーヒーの香り、タバコの香り、そして周囲の人々の楽しそうな談笑の声。囚われの身の悲しさが身に沁みます。ホンの一口だけ、それもコーヒー等とは申しません。

水でも良いのです。飲ませて欲しいと思いますが御願ひする術もなく、首枷の音を立てない様じつとひれ伏して居ました。

車へ帰る途中、一軒のキャバレーの入口を這いずり回って磨いている二人、いや二匹の奴隷が居ました。若いボーイに罵しられ乍ら苦役している二匹の奴隷は共に四十位の男でした。情けないだろうな、と思いました。今の自分にとっては、首枷と腰枷だけの彼等が羨ましくも思えます。勿論、

鞭痕だらけの身体で、革褌一本の姿、手足には鋼鉄のいましめの痕が歴然とついて居ますが、一応、手足は自由です。本当に羨ましくて、せめて奴隷になれたらと考えました。しかし彼等はどの様な心持で華やかな歓楽境の床を磨いて居ることでしょう。彼等も又、自由を恋ひこがれて居るに違いありません。

「御待ち遠様。運転手さん、N電鉄とH電車の方へ回って頂戴な。山本さんも確かN電鉄だったわね？」

それぞれ家路につく人々を車で送った上、最後に婦人検事がH電



車のターミナルで降りました。

「じゃ看守さん、御ねがいしますよ」

「ハ。失礼します」

「懲戒具は、そのままよ」

車は拘留所の門に入り、私は薄暗い廊下を監房へ曳かれました。胸鎖も嵌口具も後手錠もそのまま蹴り込まれます。

夕食も与えられず、咽喉の渇きに苦しみ乍ら正座を続け、点呼の時、外された嵌口具も直ぐにきびしく嵌められ、首枷を床に結ばれ

て横になりました。すっかり失望し、胸鎖の苦しさも余り感じず、虚脱した様な心持で眠ってしまいました。

電 気 鞭

翌朝、曳き出された私は、他の未決囚が中央監房台の所で珠数繋ぎにされて居るのを後にして唯一人、戒護課へ連れて行かれました。婦人係官の足許にひれ伏して申渡されます。

「三三九号。検事侮辱の廉により電気鞭六回の懲戒を加える。お前は、初めてだろうね。大分こたえるからね。しっかりするんだよ」薄々には聞いて居ました恐ろしい電気鞭が私の身に加えられるのです。検事侮辱とは何と一方的な扱いだろう、と腹が立ちましたが如何とも出来ません。用便をさせられゴム引きのおしめカバーの様なものを穿かされました、粗相を防ぐためだと知って与えられる苦痛の程にふるえ上りました。

曳かれた隣室は懲戒室です。見るもおそろしい懲戒具が並んで居ます。一隅にある鉄の檻の中には若い女囚が入れられ、坐り吊りの懲戒を受けていました。「坐り吊り」と云うのは主として再三、正座を崩す囚人に加えられる懲戒で、檻の下面は三角形の鉄棒が並び、その上に正座させられ自由度零の足錠を更に床の鉄棒に固定され、腰枷に關係なく嵌められた自由度一の後手錠を別の鎖で首枷の後の環を通して上方へ吊られるのです。

そして腰枷の後と足錠とを適当に鎖で結ばれ、後手錠を吊り上げられますと後手が痛いので腰が浮きますが、腰と足を結ぶ鎖のため中腰以上にはなれず、又、吊り鎖に通してある首枷の環のため上体は垂直にしか出来ません。

大たい太腿が脛に対して三十度位前後にしかできない様に鎖を加減されて放置されるのですが、その苦しさも格別なものです。

哀れな女囚は嵌口具の内でも低く呻き、額に脂汗を浮べ、腰や太腿部をビクビク痙れんさせていました。

私は電気鞭なのです。

合成樹脂製の絶縁板の上に立たされ、自由度一にされた前手錠を天井から下った樹脂製の鎖に結ばれ、両腕を差し上げた姿勢にされます。両膝の上に銅の電極環が嵌められ、ハイポンの注射を受け、そのまま検事の出でくるのを待ちます。婦人検事は三十分程で見えました。嵌口具が外され、苦痛のため舌を噛むのを防ぐための鉄棒をくわえさせられ、そして十何日振りかで胸鎖が外されます。

「フ、フ、フ、ちょっと痛いわよ。覚悟はいいの？」

ヒュウと音がして、背中一面、焼きごてを当てられたかと思った瞬間、背中が断ち割られた様な鋭い電撃痛が上半身に流れました。

「ギャッ、ギャッ、う、ひーいっ」

その痛さ、形容の仕様がありません。全身がはいれんし口の鉄棒を思わずが、つきと噛みます。

「ソレッ、ふたーっ」

「ギャッ、ギエーッ」

眼の前が暗くなり、全身に脂汗が流れるのを感じます。三撃、四撃、私は昏んだ眼に婦人検事が手を挙げて制止しているのを微かに見ました。普通なら先ず完全に失神ですが、ハイポンの威力は失神による、せめてもの逃避すら許してくれません。それにしても婦人検事の慈悲で、これで赦されたのかと思いましたが、仲々どうしてそうではありません。

「ちょっと待って。電圧はいくらなの？」

私の背後にある電源装置へ歩み寄ると

「五十じゃ少いわよ。こいつは特に強情で図太いんだから、もう少し上げないとこたえないんじゃない？六十にしてよ」

慈悲を願い出ようにも何とも術もなく、激痛の名残りを全身に味って震えています。

「私に鞭を貸してよ。あと二つね。三三九号、今度は胸と行くわよ」

本来ならば鞭打ちの箇所を胸といわれれば正面向いて胸を張り鞭を頂かねばならない訳ですが、先程、我と我が両足を足鎖一杯に開いた状態で絶縁板に固定させられて居ますので、どうともできません。婦人検事はコードの付いた電気鞭を手に私の前に回りました。六、七十鞭の革鞭の外側に、しなやかな金属網をかぶせたものです。そして、ふるえおののいている私の眼前で鞭を振り上げました。

「それっ」

ヒュウという鞭の唸りに、思わず身をくねらせ避けようとしてしまいました。おそらく最初から、その企てだったのだらうと思いますが、鞭は空を切って床にバシッと鳴ります。

「おや鞭を逃げようとしたわね。まだ神妙にできないの？それっ」
今度は狙い誤まらず、痛撃が胸に炸裂しました。

「ぎや——っ、あう、あ、う、う、……」

胸に鞭を当てられたことは数える程しかありませんでしたし、電圧が更に上げられていますので、其の痛さ、本当に死んだ方がましだと思える位です。続けて第二撃。足と腰の鎖を引張って身もたえし、全身のけいれんに脂汗を流して堪え忍びました。全くこの世の中にこんなにも痛烈な苦痛があるとは思っても寄りませんでした。革鞭等、

これに較べれば本当に撫でる様なものです。

やっと済んだと思ったのも束の間、更に一撃を加えられました。

先程、鞭を逃げる身振りをしたからなのです。両手を吊鎖から解かれ、くらくらし乍ら尾錠だけの口の棒を取らせて頂き、其場に崩折れて平伏し御礼を申し上げねばなりません。

「お、ありがとうございます」

「どう？ 今度は、こたえた様ね」

「ハイ、もう本当に……こんな痛い……本当に骨身にこたえましてございます。神妙に致します。御赦し下さいまし」

頭をポンと蹴りとばすと、婦人検事は出て行ってしまいました。力一杯もがいたためでしょう、手首足首の皮はすりむけて、骨がずきずきしています。

自由度三の前手錠で監房へ入れられ、やっとホッと致しました。

咽喉が猛烈に渴きます。先程、身体を洗った時には勿論、飲むことは許されていませんでした。思わずあえいで身を動かしますと、忽ち発見され容赦なく革鞭です。やはり鞭は鞭、痛さに思わず呻いてしまいました。昼食をむさぼり飲み、やっと人心地ついて正座致します。これからこうして、じっと公判を待つのです。夜、幾日振りかき背中を床に着けて仰臥し、じっと考えますと、課せられる刑罰のおそろしさにねむれません。もはや何としても逃れるすべはないのです。唯々死刑だけは赦して欲しいものだと思います。

十日目辺りでしたか使役番に当って朝から、こき使われました。起床と同時に引き出され、戒具の検査と嵌口具を受け、もう一人の男の未決囚と一緒に運搬車を一台宛押して朝食を取りに行きました。大きなタンクから流れ出る濁ったドロドロの液体を深皿に受け

一枚宛運搬車の棚に載せます。両手は三十糎の間隔しか開きませんが、少しでももたつくと背中が鞭が鳴ります。約三十人分程積み込み、車を押して監房へ帰り、婦人看守に腰鎖を曳かれ乍ら、既に点呼の済んだ各監房へ次々と配って行きました。

私の繋がれた監房区画は全部で六十房あり、女囚が十人ばかり他は男で、空いている房は五、六房ありました。配り終えて私達二人は中央監視台下で自分の朝食を啜り再び嵌口具を嵌められて、食器を集めて回ります。労役の際も外しては貰えない手錠足錠の不由さ、苦役という言葉の意味がつくづく分りました。鉄格子の内の未決囚達は、或者は悄然とうなだれ、或者は口惜しそうに壁を睨み或者は涙を流して啜り泣いて居ります。後手錠、胸鎖されているのが一人、後手錠だけで懲戒されて居るのが三人程いました。食器を洗って納め、帰って来ますと、今度は床の拭掃除です。鎖を鳴らし不自由な手足で婦人看守の鞭で責められ乍ら、嵌口具の中で息をはずませ、汗を流して監房の中以外の全部の床を這いずり回って磨くのです。本当に手足に嵌められたままの手錠、足錠がうらめしくなりませんでした。ついで私達二人は各自の監房内の掃除をさせられます。検査に来た婦人看守の鋭い眼に、些細な拭き残しを発見されました。

「おなめ！」

嵌口具を外され、鞭の一振りが加えられた私は這いつくばって床をなめさせられます。再び引き出されて私は洗濯を、他の一人は戒具磨をさせられました。中央監視台下の水道の所で未決囚が着けていた汚れた褌を次々と洗って居ますと、屈辱感がこみ上げて来ます。他の一人の囚人は拘置所で使用されている戒具の山を前にして、油

布で次々と丁寧に磨き立てて居りました。

水道の蛇口から流れ出る冷たい水を見て居ますと、本当に一口で良から飲み度いものだと思いますが、嵌口具で口を閉され、更にきびしい監視を受けている身、とても叶うことではありません。婦人看守がタバコをふかし乍ら見廻って来ました。

「仲々上手に洗うじゃないの？」

嘲笑と共にタバコの煙りが私の顔に吹き付けられます。烈しい労役のあとです。欲しくて堪らないタバコの香りに、思わず身をもんでタバコを羨ましく見上げました。

「喫いたいの？フ、フ、フ、水も飲みたいだろうね。いつも、ドロドロの雑炊だけなんだからねえ。けど、もうお前にゃ許されることじゃないのよ。お前は囚人！分ったかい？さっさと洗うんだよ」

ピシリと革鞭で尻を打って立去ってゆきます。辱かしめられた口惜しさに全身が震え、頭がカッとなりましたが相手は看守、私は手錠足錠、嵌口具の囚人の身、どうなるものでもありません。

洗い終えますとすぐに、もはや昼食の時間です。手足を動かして労働致します、重い手錠、足錠が骨に当り、食器を集める時になりますと手首足首がずきずき痛み、鉄に摺れた皮肉が所々薄く血を滲ませてきました。戒具のままの苦役の辛さ、本当にせめて足錠だけでも外して欲しいと思いました。

或る監房には三十前後の女囚が繋がれて居ましたが、食器を集める時、見ますと床に突伏して手錠の上に顔をのせて身を悶えて嗚咽して居ました。黒髪は無残にも短くザンギリに切られ全身に鞭痕があります、社会人として生活していた時は中流以上の若奥様だっ

たのでしょう。スナナリした身体と上品な、おも立ちの様です。
「八九号っ。何してるの！ 静かにしなさい」



婦人看守に「喝されビクッとした女囚は、涙を振り払って身を起し、私の姿を見て恥かしそうにうなだれました。

本当に着るものを着れば立派な若奥様です。

「泣いたって仕様ないじゃないの。昨日、来たばかりだから少しは大目に見てるけど、なめると承知しないよ。これっ、こんな時には手をどうするのよ？ え？」

気が付いた女囚八九号は手錠の嵌まった両手を重たげに胸で合掌しました。

「鞭の味も万更知らない訳じゃなさそうね。今後、声を立てるとこれよ」

婦人看守は私の嵌口具を指で弾いて示しました。黒い大きな目に涙を湛え、お

そろしそうに私を見た女囚は、勇気を振った様子で訴えます。
「お願いでございます。決して暴れたり逃げようとは致しま

せん。せめて監房の中では、この手錠足錠を外して下さいまし。お願いです。決してお手むかい等致しません。なんでしたら手錠だけでも……」

女囚は両手首に嵌った手枷をなで、繋いだ鎖を握って全身で哀願します。

「へーえ。何を寝呆けてるのよ。お前は女囚なんだよ。奥様じゃないんだよ。まだ分らないの？」

「い、いいえ。それはもう……よく、よく分って居ります。私は……女囚で……ございます。監房から出して頂く時には、どの様に縛られましょうとも仕方ございまして……」

「お前の取扱い方にお前の指図は受けないわよ。そりゃね、お前も生身の体だし未だ半分位は人間だからね、辛いだろうさ。情ないだろうよ。けど何べんも言うけど、お前は囚人なんだよ。何ならもう一度、警察署へ連れて行って連れて帰ってやろうか？」

「あ、あ、そればかりはもう……」

「フ、フ、フ、恥かしかったかい？ そりゃね、その手錠や足錠はね、ホラこの鍵さえあれば、すぐ外れるのよ」

残酷にも女囚の眼前で鍵を見せびらかせて嘲笑を浴びせる婦人看守。

「ここは、もう監獄みたいなものだからね、今迄みたいな暮らしは、ちょっとさせて上げられないわ。神妙にするのよ！ いい？」

「ああ、こんなに御ねがい申上げて……」

「くだいわねえ。そんなに言うんなら、そうね、前手錠だけ外して上げようかね」

何思ったか婦人看守は格子の間から手を入れて、いそいそと差出

す女囚の両手の手錠を鎖だけでなく枷迄も外してバラバラにしてしました。

「あ、ありがとうございます。ありがとうございます」

手枷のあとをさすり乍ら、夢ではないかと喜ぶ女囚。

「そんなに嬉しい？ 見てごらんよ、この男を。労役の時も手錠のままなんだよ。それにお前は監房の中で何もしないのに前手錠を外して貰ってさ」

「ハ、ハイ。本当にありがとうございます」

「今迄御世話願った戒具に御礼を云いなさい」

「ハイ。手錠様、ありがとうございます」

女囚は手錠を押しいただきました。私は本当に羨ましく思っていますと、

「八九号。お前の言う通り前手錠は外してやったわよ。後手錠にしなさい！」

冷い婦人看守の声に女囚は茫然として、

「う、うしろ手……」

「そうよ。自分で早く嵌めるの。命令に服従しないとひどいわよ！」
手にした鞭が床に鳴り、女囚は手錠を床に取落して身悶えします。

「あ、あんまりでござい……」

「十数える間にしないと体にこたえるわよ」

おそらく鉄砲手錠位の責苦は味っているのでしょう。諦めた女囚は床に落ちた手枷を再び取上げて自分で自分の両手首に嵌めます。

ガチャリと云う冷い音に大きな涙の玉が白い頬を伝います。足の鎖の音を立て乍ら後を向き、自由度三の手鎖で後へ回した両手の手枷と手枷を繋ぎ合そうとしますが、見えませんので仲々錠孔に嵌り

ません。口惜しさ情なさ肩を震わせて嗚咽を始めるものですから尚更です。

「どうしたの？ 警察じゃ自分で後手錠を嵌めさせられたことがある筈よ。神妙に囚人生活を過ぎて頂く気があるの？ 大体お前は頭が悪いわ。もっとも頭が良けりゃ、こんなことして捕る筈がないけどね。先に鎖をつけといてから嵌めりゃ訳ないじゃないの。馬鹿ね。本当に。早くおしよ」

鋭く冷い声で急がされた女囚は、漸く気がついて一旦、前へ回して先に右手の枷に鎖をつけてから後へ回し、何とか左手の枷にも挿し込んで嵌めようと身をもみます。やっとカチリと小さな音がして錠孔に鎖が嵌入しました。

哀れな女囚は汗を流して苦勞して、我と我身に後手錠を嵌めた訳です。

「本当にだらだらしてるわね。いいこと？ 当分そうしてるのよ。ちよっと立って」

女囚は悲痛な声を立てて、へたへたと座り込んでしまいました。後手錠がガチガチ鳴っています。

「あの、夜もこのままなんでしょうか？」

「ああ、知れたことよ。ぶっ通しで嵌め放し！ 正座の時間よ。フ、フ、フ、」

思わず、うらめしそうに見上げる女囚を後に、再び私の労苦が続きました。

午後は看守様方の靴を磨かされたり細々したものを洗わせられたりしました。革鞭の手入れもさせられました。自分達の肌に苦痛を与えるこの恐ろしい道具に油を摺り込み磨かされるのです。本当

に口惜しいと思いました。

日が暮れて当直の済んだ看守達は交代して帰ります。看守達の控室から私服に着換え乍ら談笑する声が洩れ、革鞭を磨き乍ら羨ましさ涙が出ました。夕食を配り、そして再び食器を集めます。

腰鎖を持つのは、やはり婦人看守で、おそらく看守学校を出た許りの二十才位の娘でした。分際の相違とは申せ、大の男が小娘の様な看守に腰鎖を曳かれ鞭で追い立てられ顎でこき使われる情なさ。勿論、看守は勤務としてやって居ること、又、私は未決囚として取扱われて居るのですから当然のことではあります。昼に後手錠にされた女囚八九号は、口の周りをべたべたにしてうなだれて坐って居ました。犬か猫の様に這いつくばって口を食器に当てて啜ったことでしょう。

「どお？ 奥様、御気分は如何？」

からかわれた女囚は口惜しそうに唇を噛み

「あんまりですわ。いくら囚人だからって。あなた達も一度こんな風にされてごらんないな。本当にもう……」

「アラ。何だか私達の方が悪い様じゃないの。よし。まだそんな口の利き方するのね。警察で相当辛い目に遭って来た筈なのにねえ。」

房内へ入っていった婦人看守の革鞭が女囚の背に炸裂します。

「ひーっ」

鞭の前に胸を張りブルブル震えて女囚の白い胸に赤い蚯蚓ばれが一条、それにクロスして又一条。

「お赦し下さいまし。おゆるし……」

「うるさいわね」

足で蹴り転がされ、横になった女の背に鮮紅色の条痕がさつと走りました。悲鳴と共に全身から流れ出る脂汗。思わず両脚をすくめようとする女囚の頭が蹴り飛ばされ、又痛烈な一撃。全く眼をそむける様な有様です。

「正座」

やっこのことで身を起した女囚に冷い声。

「御あいさつは？」

ハッと気付いた女囚は、ひれ伏して鞭の御札を申し上げます。

「大体ねえ、自由度三じゃ後手錠とはいえないわよ。零と行きましよう」

ポケットから短い鋼鉄の丸棒をつまみ出すと、器用に手枷の錠孔に嵌め変えるのでした。

「八九号。少しは性根が入ったかい？ 今日ね、自分で後手錠にさせられた時からのことを、ずっと詳しく言っただらん。反省のためよ。さ、早く大声で言うのよ」

女囚は声をつまらせて云い淀みましたが、振り上げられた鞭にビクッと身震いして

「本日昼頃、看守様に私が前手錠を外して……」

「私とは誰のこと？」

女囚は口惜しそうにして、いい直します。

「殺人未遂罪容疑で拘置して頂いて居ります、未決囚八九号は……」

「そうそう、その調子、その調子」

「……本日、分際もわきまえず手錠を監房内だけでも外して頂きたいと昼食後、看守様に申上げま……いえ、御ねがい致しました。その罰として自分で……自分で……後手……錠を嵌めさせられまし

た。(ピシリ) あっ、ひーいっ。……後……手錠を嵌めさせて……頂きました。そして只今、又、囚人として……生意気な……分際にあるまじき口を利きましたので、鞭を……鞭を頂戴し、又……後手錠を……きつくして頂きました。……御ゆるしのある迄このまままで……させて頂きとうございます」

「フン、フン、そして現在のお前の恰好は？」

「ハ、ハイ……後手に縛られて……」

「頭先从足先まで詳しくお言い」

「……ハイ……頭の……髪は短く切って頂いて居ります。首には……革の首枷を嵌められて……鉄の番号札が前と後について居ます。……背中と胸に……囚人番号を……刷られて……腰には革の枷を締めて頂いて……両手は後手錠を……自由度零の後手錠を嵌められて居ます。両足には重い……足枷と鎖がついています。……そして……足錠と腰枷は短い鎖で結んでありますので真直ぐに立てませんし……身動きすると……首の音響器が鳴ります。……そして……コンクリートの床に……正座させられて居ます。……」

「フン。大体そんなとこね。妙な口を利きたくなったら自分の恰好を反省して見るんだね。口を開けて」

「あ、あっ、その……嵌口具だけは……」

反抗の許されぬ身をもだえ乍ら哀願する女囚の口に、邪けんな扱い振りで、がっきと嵌口具が嵌められ、後頭部で非情な錠が下ろされました。

苦役の一日が終り、やっとな横になった私の眼には、きびしい戒具に悶え苦しむ女囚八九号の姿が灼きついた様に浮んで来て、悶々の一夜を過したのでございます。

(次号へ続く)

●次号八月号● 予告

△六月下旬発売▽

愈々本誌の真価を発揮する増大号の威容―

口 絵 四馬孝画集「白と黒のコンビネーション」十景

絵物語 嵯峨紀世案、滝れい子画「仮借なき凌辱」

グラビヤ写真 夢の緊縛アルバム 杉原虹児構成

緊縛風俗画 佐保忍作、滝れい子画「当世風流いろは草紙」

◇本文主要呼物記事◇

白 と 黒 萩市湯之次

蟻責地獄に喘ぐ美女とサドの老婆の物語。

由紀子の手記 上原由紀子

浣腸マニヤの夢と幻想を語る手記。

被虐のシルエツト千草 忠夫

夜は知っているに引続いたサドとマゾの悲しい交響楽。

あ る 復 讐 上田 美路

女性切腹にまつわる女教師の告白。

益々佳境に入る二大長篇小説

影 の 国 雪俊 遥

宇宙のどこかで佐治麻造

零の舞踏会 氷見 龍也

「或る女優の乗馬日記」について

倉仁 成人

マゾヒズム百景 馬場 好男

愛好者の記録 とやま・かづひこ

愛 犬 譚 扇町 秋子

脂肪の塊のような妖艶な女の愛犬として愛玩される少年のマゾ物語

女装の楽しみ 比良野 裕

完全なノンフィクションによる女装者の告白

狼谷の魔女 塔婆 十郎

忍者と忍者の血斗、美女の緊縛、妖気をはらむサド時代小説

一悦虐者の回想 一ノ瀬悦子

「快楽」と題したあるサド女性の手記

晩 鐘 三条 卓史

野趣の中にかもし出すサジスチックな雰囲気

裸 祭 榎村 奏

禪刑事捜査ノートのソドミヤ的なマゾ・ファンタジヤ・マゾヒスティカ

実験報告「浣腸」

ふんどし奇譚 栗瀬 節夫

和装古典下着あれこれ 牧 武男

切腹レポート 山田久仁子

女性衣裳の魅惑 兵頭 庫一

臨時増刊号

「悦虐小説と緊縛写真」

定価 各一部 三百円（送共）

第一集 略号（悦特第一）

第二集 略号（悦特第二）

第三集 略号（悦特第三）

第四集 略号（悦特第四）

第五集 略号（悦特第五）

○昭和二十六、七年頃より昭和三十年春頃までに至る本誌所載の傑作悦虐小説を網羅し、加うるに最近撮影の本誌写真部の特写フォトをグラビヤとして豊富に登載し、更に四馬孝描くところの緊縛画で毎号趣向を変えて口絵を飾りました。今回、本月号の目次裏に詳細広告の通り「悦特第五」を発売、今秋刊行の「悦特第六」を以って、一応このシリーズを完了することにいたします。番外として「告白と手記と体験」特集号も企画しておりますので、どうかお揃え下さるようお願い致します。

サド通信

君死に給うこと勿れ

鷹取仙吉

嘗て「ミス奴隷宣言」なる拙文を本誌に発表し、マニヤの皆様のお目を汚したかとも思いますが、中には心から賛成下さる方もあらうかと存じております。どうか今後共、我々共通の女奴隷達の振舞に鋭い愛の眼を注ぎ、寸分の仮借もなく彼女たちを心ゆくまで飼育してゆくではありませんか。

さて皆様、私は又一つ、ここ数年来、抱き続

けて来た意見を厚かましくも再び述べさせて頂きたいと思えます。最初にお断りしておきますが、これから申し上げることは総て私人の意見でありまして、これを決して皆様方に押しつけようなどという大それた気持は全くありません。どうぞ誤解のないよう御願致します。

多分、復刊以降、この傾向が強くなつてき

たのかと思いますが、最近に於ける女体切腹の悲壮美と女性の自虐、或は女性のマゾを扱った読物は本誌の一大特色をなしており、数多くの支持者もおられるようです。

そういった女性の切腹場面の刻明な描写、苦悶の絶頂のうちながらも、尚も自らの手によって自らの肉体を死に到らしめる迄、傷つけてゆく女体被虐の恍惚たる境地。この狂わしいまでの心境は私にも分るような気もしますが、それでいて尚、私は

「美しい女性達よ、自らの手で自らの命を絶つて呉れるな」と声を大にして叫びたいのです。それが男まさりの女丈夫であればある程私はどうか切腹してくれるナと言いたいのです。何故、彼女等は生きていて、死にも優る苦痛と汚辱に呻吟しては呉れないのだろうか。

生きてゆく事が死んでゆく事より苦しい場合は幾らもあるでしょう。殊に若い女性が縄目の恥を受けんとする時、その女性が身分もあり気性もしつかりして居れば居る程、彼女達はその恥しめを受ける事を潔しとせず、死を選ぶということも当然ありがちな事でしよう。然かも「切腹」という男でも真似の出来ないような放れ業をやったのければ、死してゆく身には、限りなき満足と、それにも増し

て凄艶なる悲壮美に、その人の最期は美しく彩られる事でありましょう。

しかし、昔の武士ですら、余程しっかりした者でなければ、中々切腹は出来なかったも

事志と違って敵方に捕えられる寸前、もはやこれまでと覚悟をきめて、雪白の肌を惜し気



のを、うら若き女性の身でそれを行うとなれば、その女性は余程意志の強い、しっかりした女性でありましょう。そうでなければ、自ら自分の下腹に白刃を突き立てて苦しみ悶えながら、然かも見苦しからぬように死んでゆく事など到底出来るものではありませんまい。それ程気性のしっかりした勝気な女性なら何故、彼女達は、もっともっと強く生きていて呉れないのだろうかと思うのです。

このまま敵方の手に落ちれば、うら若き女性の身をもっては到底耐えきれないような激しい責め折檻と、死よりもむごい屈辱とが待ちかまえているのを知っていながらも、尚、且つ、その苦悶と流血の泥沼に身を横たえて苛酷なる運命を甘受すべく自ら進んで敵の縄目を静かに待ちうけるというような素晴らしい女性はいないものだろうか。

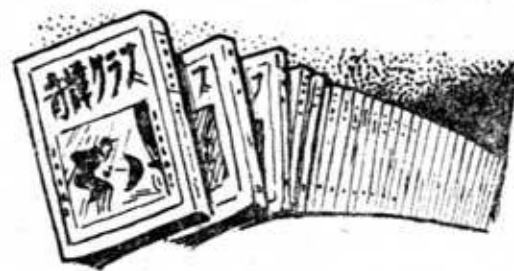
若くて美しい女スパイが、或は武將の妻が、或は又、海賊の女船長が

もなく、ぐっと押しひろげて、手にした氷の様な刃を腹にプツとばかりつき立て、こみ上げてくる苦痛を懸命にこらえながら、鮮血に染って死んでゆく最後はまことに悲壮きわまらない美しい光景でありましょう。でも私はそうして死を選んでゆく女性達よりも、仲間の裏切りか何かで死ぬ自由すら与えられず、いや自ら死を選ぶ自由はあっても、自分が此処で自決をしてしまえば、同志、或は恋人、若くは部下達に恐るべき災難がふりかかるであらう事が当然、予想されるが為に、捕えられれば、みすみす生き恥をさらし、そうしてとどのつまりどのような酷い取り扱いを受けるかを十分、承知していながら、遂に死ぬ事を諦めて、唯、口惜しさに唇をかみしめたまま無惨にも荒々しく縄打たれ、腰を蹴とばされ背中をこづかれながら引立てられてゆく女首領の姿の方に、より一層の悲壮美と無惨美とを感じ、女性としての被虐の花びらを見出すのです。

若く美しい女体の隅々まで蹂躪しつくさずにはおかない敵方の地獄のような数々の責苦に対しても、彼女が激しい気性と強靱な意志とをもって、じつとこれに耐え忍んでゆく時たとえ肉体は、余りの加虐の激しさに思わず

呻めき喘ぎ、或はその汚辱の余りのむごたらしさに、泣きわめきながら、全身をのたうちまわらせようと、彼女が最後まで、この責苦を耐えしのべば、そこには切腹などには到

底、見出しえない凄絶妖美な女体の悲壮美が私達の心をゆさぶる事でしよう。若くて美しい女性よ、強く美しい女性よ、



新緑躍進号を載いて

おもう事など

南方佳男

私の貴重な慰労の書「奇譚クラブ」が、この六月号から鮮麗な多色刷りの表紙も懐しく、巻頭口絵やグラビヤ・フォートも豊富に新しい姿となって飛躍されたことをまず心から祝福致します。あれから足掛六年私の本箱の中には休刊以前の十数冊の特大号に続いて、すっかり見なれた白い表紙が五十冊、ところどころに臨時増刊号を散らし乍ら並んでおります。部厚くって豪華だった休刊以前の本に比べて、どこことなく物

足らぬわびしさを感じながら、何時かは旧に戻る時を待っておりますが、私の願いは、こう申しては失礼かも知れませんが以外に早く訪れて来ました。私は、ただ嬉しさに満ちております。この間、万難を押して発行を続けて参られました貴社の方々の御労苦に心より感謝を致しております。奇譚クラブは前進致しました。あの素晴しかった往時に戻りつつあります。しかしそれは、こんな事を申しては、はなはだ失

「君死に給こと勿れ」と私は心からお願いたい。生きて命のある限り、この世のありとあらゆる苦しみ、そして悲しみに、そして更に死よりもむごい屈辱に、じっと耐えしのんで下さい。貴女方は決して自ら切腹などという自決行為は絶対にしないで下さい。いやするナ!と私は言いたいのです。

本当に死を決心したのなら、その強い意志を以って、じっと我慢なさい。そして自分の肉体の隅々まで多くの人々のむさぼるような好奇と貪婪の眼にさらされ乍ら、美しくも気高い素肌にくす汚いロープがギリギリと巻きついてゆくのを辛抱するのです。

そしてそれから先は、来る日も来る日も、救いのない日々の連続に貴女の豊満な肉体はなぶり放題になぶられ、責め放題に責めあげられるのを、只々死んだ気になってじっと耐え通してごらんなさい。貴女が、その激しい拷問と言語に絶する汚辱とに何回かの失神を重ねてゆくうちに、いたぶりつくされた貴女の肉体のここかしこに、妖しいまでに美しい被虐の花びらがチラホラと咲き始める事でしょう。それでも嘗て感じた事のない不思議な陶酔がそこはかとなく感じられるでしょう。

礼であります、かつて二十七、八年当時の建設期にたち帰ったに過ぎません。「奇譚クラブ」の発行は昭和三十年の秋、再出発したものです。あの大型版からでなくって、白い表紙が私達の前に現われたあの時はじめて創刊したのだと思わねばなりません。そのようなファイトを私は要求したいのです。

二頁だった目次が三頁分に増えただけに六月号（新緑躍進号）は、まず口絵が十九頁分、そしてグラビヤ・フォートが十五頁分と、まずは各増刊号に等しいものとなりました。滝れい子、四馬孝、杉原虹児の諸先生が絵筆を競い、田辺啓二兄提供の映画スチール等、また緊縛モデルも絹川文代、大塚啓子、愛川悦子、桜井葉子の諸嬢がズラリ揃って楽しませてくれます。充実の一言につきるといえましょう。

だがここに、願わくばいま一つの要求が御座います。あのツッシリと重味のあった休刊直前の内容、それには冷たい圧力がかかったわけで御座いますが、それだけに私達

を狂喜熱中させたので御座いました。これは必ずしも現在の内容が好ましからざるものであるというのではなく、現に六月号中でも、これは一例で御座いますが、私の最も熱読致しております雪俊遙兄の「影の国」などの如く、月々発行日直前になると、その筋の発展を仮想したりして、待ちわびるものも御座いますが、総体的にみて今一歩内容のマンネリ化の傾向もいなめず、ことに今六月号の飛躍をみるに当って、昔年を振り返り、見せる内容の充実に対して読ます内容の幾分低調（私の慾心によるものかも知れませんが）であったことが、心残り心残りで御座いました。

かく申します小生も、時折り拙い文章を以って、読者諸兄、編集部の方々のお眼を穢している者で御座いますが、これを機会に小生も一段の勉学にいそしむ覚悟、したがって貴社の方々にも「奇ク」の成長に限り無き意欲を燃やし、かの頃をしのぐ素晴らしい雑誌に育てていただく事をお願い申す次第で御座います。

浣腸に関する資料

浣腸通信

島 直 樹



小説新潮 昭和29年5月号

「或る亭主の煩悶」 P 160 ~ P 162

『或る夜ふけ、清川医師は寝ているところを看護婦に起きた。西村呉服店からの電話で細君が急病で危険状態だからすぐ来て欲しいとのことだそうである。清川医師は異常なシヨックを感じて、すぐさま起き上った。』

『君もすぐ仕度し給え』看護婦にそう命ずると、すぐ洋服に着換えはじめた。「一体どうしたっていうんだっ！」着換えながら、彼は口を尖らせて、そう独りごちた。熟睡中を起されたのが不平なのではなくて、何か不吉な予感があり「若しものことがあったらどうするんだ」という気持なのであった。

清川氏は看護婦をうしろに、自転車をつらねて、西村呉服店へ駆けつけた。夫婦の寝室になっている二階の部屋の階段を上る前に、もう細君の長く尾を引くはげしいうめき声が耳を打って来た。階段を上るのもどかしい思いをじっとおさえて、ことさらゆっくり歩調をととのえて上り、枕もとへ坐って見ると細君は昏々と眠ったままだである。瞬間、清川氏の顔色がさっと変った。服毒自殺！ そう思われたのであった。果して

「どうも睡眠薬を多量に飲んだらしいんです……」
すぐに西村氏が横からいった。型の如く脈を取りながら、

「寝られたのはいつごろですか」

「お午ごろでした。風邪気味でからだがだるいといって寝たのでした」

「それからずっと眠ったままでしたか」

「ええ、夕飯のとき起したのですが、あんまりよく寝てるんで、そのままにしておいたんです」

「睡眠薬は平生、飲まれるんですか」

「これまではなかったんですが、近ごろよく眠られないって、四五日前アドルムを買って来たようでした」

そういつているあいだも、病人は「ウーンッ」「ウーンッ」とはげしいうなりようである。絶たれようとしているのに抵抗して、彼女の体内で必死にのた打ち廻っている生命そのものが、そこにありありと感じられた。

「殊によるとダメかも知れないな」清川氏は心で眉をしかめながら、小肥りの、受け口の顔を一瞬、まじまじと見入った。

「ともかく浣腸をしましょう」そういつて、彼は看護婦にそれをするように命じ、一方、彼の家へ使いを出して、胃洗滌の器械を取って来てくれるよう、西村氏にたのんだ。

看護婦が浣腸をしているあいだ、彼はそのほうを見ないようにし、煙草を吸っていたがそうしているうちに、ふと彼女のふっくりした堅肉の腿にゴマ粒ほどの黒子のあったのが思い出されて来た。かすかではあったが、そ

れは雪白の肌との対照で、ひどく印象的であった。つい一と月ほど前、彼は彼女にとくべつ頼まれて、専門でもないのに妊娠中絶をやったことがあり、その時それを眼にしたのであった。彼は極力、産婦人科へ行くようにすすめたのだったが、知らない医師のところへ行くのはいやだといひ、泣きつかれたので渋々引き受けたのである。

その黒子を思い出しているうちに、ふと彼の腫がぎらぎら、みだらなものを浮かべて光りはじめた。脂が乗ってすべすべした、たるみのない腿の肉塊を、手で触れているようにまざまざと皮膚に感じていたのであった。がすぐ「これが死肉になってしまったら、何って惜しいことだろう」という思いが彼にわくと、急にゆめからさめた表情で、かすかに、ためいきを吐いた。

やがて浣腸がすんだので、彼はすぐ葡萄糖の注射をやった。間もなく胃洗滌の器械が来たので、洗滌をやり、つづいて強心剤の注射を打った。」

清川医師と西村氏とは釣友だち、暮友だちで、細君とは俳句友だちという関係にある。

この作品で、私が特に興味を魅かれた点は看護婦が浣腸するあいだ清川医師はその方を見ないようにはしていたというところ、そうしているながら太腿の内側に黒子のあったのが

思い出され、「彼の腫がぎらぎら、みだらなものを浮かべて光りはじめた」というところである。私だとしたら、浣腸されていること自体に特別な興味を抱くのだが、この作品の医師は、前述したように、浣腸そのことにではなく、浣腸されている細君の姿態から太腿を想起し、「脂が乗ってすべすべした、たるみのない腿」そしてそこにある黒子にみだらな感じを受けるのである。アブノーマルな私の観点と、ノーマルな人間のそれと比較して私は面白いと思った。

「朱い挑戦者」 深見杏子 光書房刊

P 56

「略」あたしはいったったか、一週間ほど便秘が続いて、いやだったけれども、灌腸したことがある。

あの、イチジクのような恰好をした、肉色の小さな塊り。あたしは、小さな尖起部の先きに、針で穴を開ける。あたしはフツと、いっただったか、路傍に蹲みこんでいた小さな男の子のことを思いだした。略

イチジク形の灌腸器は、ちょうど、それに似ていた。しなやかな指さきで、ポコポコと音のする塊りを潰してみる。すると、穴の開いた尖起部から、白い液体が噴きでた。略お上品とはいえない、無様な行為。一瞬、私は軀の中を吹き抜ける様な苦痛を味わった。

でも、それは思わず身顫いするほどの、衝撃を伴った快感に似ている。略

誰でも、マゾヒズム的な、感覚の快楽を所有しているということを、何かの本で読んだ記憶がある。これは確かなことね！苦痛には苦痛そのものと、マゾヒズム的な快感を伴うものとの二通りがあるのじゃないかしら（傍点は島）

この作品は、高校卒業したばかりの美貌のデパート店員「あたし」の、「あたしは、あたしをへ女Vにした上、侮蔑と苦痛だけを残して去っていった木村を代表とする、あらゆる男性への復讐を思い立った」結果、コールガールになっていく告白記録めいたものである。

ここに紹介した文でも判るように、浣腸に関する部分は、流石、女性だけに感覚的な描き方とあいまって、私をすっかり夢中にさせ、ひよっとすると、作者は浣腸にも興味を持っているのではないかとさえ、想像したのである。作品の中に、女性でありながらこれだけ大胆に浣腸をとりあげ、そして更に、浣腸の苦痛と快感をマゾヒズムと結びつけたこと等、Kク愛読者（特に浣腸マニヤ）にとっては貴重な参考資料だと思う。

創 作

酒

(さかだる)

樽

蒼 野 礼



ひとけのない暗がりになると、海津京子はしの子の肩をひき寄せた。豊かなしの子の髪から香水が匂う。「いい匂い」京子は鼻をうずめた。ハンドバッグを開けた。口金の鳴る音が高くひびくほど、このビル裏の露地は静かである。

「キスおし」

「はい……」

バッグから取りだされた黒い皮むちにしの子は、そっと唇を触れる。

「ここで責めるの……」

唇をはなすと、しの子は美しい瞳を京子の瞳

にそそぐ。夜目にも白い顔である。

「まさか、ここではねえ」

「いいの。思いきり、むちで打ってえ」

「すっかりマゾづいたわねえ」

「貴女のおかげよ」

「行こ」

京子は、しの子をうながした。鞭をしの子の頸へかけて。

目当の酒場が、実はもうすぐ其処である。

酒場、黒猫。

その前に着いたとき、暗い夜空が割れて月が顔をだした。さっと露地に月光が満ちた。

「綺麗だわ」

しの子は空を仰いだ。京子は把手を廻した。ぎーいと軋みを立てて扉はすぐ開いたが、中は真暗である。

「だれだ？」

奥からロウソクの火が寄って来た。炎の明るさを半顔に受けた顔は、壮年の男である。

ずっとロウソクを差しだして、

「海津先生か——」

「ええ、あたし。地下室、空いてて？」

「どうぞ」

男は腰を引きながら、炎でしの子の顔を見さだめようとする。しの子の美貌が炎を浴びて浮き立った。頸で鞭が揺れる。

「誰、この方？」

京子へ訊いた。

「鳥羽さん」

「鳥羽です」

男は復唱するようにいい「どうぞ」二人の足許を照らしながら先に立った。

長い木梯子を伝って降りると、男は柱のカンテラにロウソクの火を移した。それから、ゆっくり木梯子を登って去った。ばたんと彼は上で昇降口の蓋戸を閉めた。カンテラの火が勢づいて、地下室を明るくする。

地下室とはいいい条、雑然たる物置である。六畳敷ほどの広さであろうか、周囲にうず高く積まれたガラクタから、しの子はちよっと目安がつかかねた。

「此処なら、いくら音を挙げて外には洩れないわ」

京子は、しの子の頸から鞭を取った。

「その樽の上に、お伏せ」

大きな酒樽が室の中央に、でーんと寝かしてある。しの子は、もう一度、皮むちに口づけすると、樽の上に跨って、からだを伏せた。

「覚悟は、いい？」

「はい。たとと責め——ううっ……」

答えるより早く、京子は鞭の第一撃をしの子のからだに加えた。

「ううっ……」

柔い肉が激しく鳴り、二の鞭が雪のように白い肌理に赤く血をにじませる。

「さぞ痛いだろうねえ」

鞭鳴りを立てて、びしーと炸裂る。

「噫……！ううっ……！」

灼けるような痛みに涙が噴き落ちる。

「まだまだ泣くのは早いわ。そうらっ」

「ああッ……！いたっ——」

「意気地がないぞ、しの子」

「ああッ——」

砕けよとばかり、びしーっ、びしーっ、女の腕で精一杯の力で鞭は柔肌を責めしばく。

「ああッ——」

しの子の口からはとばしる悲鳴が上へ昇って、幽かに鳥羽の耳にとどいた。真暗な酒場のスタンドで、この男は黙然とウイスキーをすすっているのだ。

鳥羽が京子に呼ばれて地下室へ降りて行ったときには、しの子は酒樽の上で、のびていた。素早く、鳥羽は脈を診た。

「脈がない」

「冗談いわないで。鳥羽さん」

京子は鳥羽のポケットからウイスキー瓶を取って、たらっと一、二滴、しの子の白い肉の傷口へ垂らした。無惨な鞭傷に強烈な液体は泌みひろがっていく。肌が焼けて白い煙が昇るかと思うほどだ。

「ム……！」

しの子は意識をかえし、樽の上で全身をよじって身もだえた。

「泌みるかい」

瓶の口を京子は一層、傾ける。ごぼごぼと鳴って琥珀色の液は、ふりそそいだ。

「ウウム——か、……勘念してえっ」

辛抱なさい、奥さん。鳥羽が耳にささやいて、悶えるしの子の頭

を抑えつけた。

「もっとなみだるようにしてあげる」

びしびし京子は掌で叩きだした。赤く腫れあがったしの子の肌を叩きしだいた。酒樽にしの子は、なみだをしたらせた。鳥羽の強い腕で頭をねじ伏せられて悲鳴は口に籠もる。もういいわ鳥羽さん、上に行っていて。掌がくたびれたのだらう、やがて京子は、そう鳥羽へいった。

鳥羽が梯子を登って行くと、京子は再びしの子へ鞭責めを加えた。樽に四肢をしがみつかせてしの子は泣き叫ぶ。二十八歳の女が嬰兒のように泣き狂うのだ。

京子が鞭をバックへしまったとき、その手には代って浣腸器にぎられていた。

夜空はすっかり晴れあがり、皓々と月光が地上へ射していた。濡れるような光である。

その月影のもとを、二人の美女は肩を抱き合って歩いた。京子がしの子に肩を貸してやっているのだ。しの子の黒髪が白い顔に乱れかかって凄艶である。

「今度はいつ責めてあげようか」

「いつでも」

「こっちをお向き」

着物の上から京子が胸をつねろうとしたとき、向うから人がやって来た。遠目にも背が高い。鳥羽である。

「タクシーがいましたよ」

露地の入口に待たしてあるという。

「御苦労でしたわ。鳥羽さん」

「すみません」

と、しの子も礼をいう。タクシーがクラクションを鳴らした。下北沢駅前で、しの子は車を降りた。彼女の家は此処から程近い。京子は世田谷代田である。しの子が車を降りるとき、運転手の目に隠して京子は鞭をしの子の唇へ差しだした。別れのキスをして降りよ、というのであろう。むしゃぶりつくようにして、しの子は冷たい皮鞭を吸った。

「お帰りなさい。奥様」

三人の女店員が、いっせいに挨拶する。しの子の家は洋品店である。店構えが近代的で垢ぬけがして、品物も一流品が多く占めている。

美貌の未亡人の女主人に相応しく、店も贅沢で美しいのであった。二階の居間にはいると、しの子は薬箱を棚からおろして、責めぬかれた肌の傷に薬を塗りだした。その手当ぶりも、すっかりしの子は馴れてきている。京子から責められるのは、もう何度目ぐらいか算えきれない程である。

手当が済むと、しの子は階下へ降りて行って店員に閉店を命じた。レジを見ると五万二千百十五円、売上がある。「今日はネクタイがよく売れました」店員の一人が報告した。この娘は住込みで女中を兼ねている。おなかをすかした女主人のために、台所で夜食をととのえだした。

トーストでおなかをこしらえて、しの子が寝室へはいると、寝室の窓に青く月光が洩れていた。少女時代を過した支那の月明を、しの子は、ふと想った。

二

先夜は月の光とロウソクの灯影で顔を知っただけなので、それとは気づかなかつたが、こうして昼間はっきり見ると、酒場・黒猫の男——鳥羽は、紛れもなく鳥羽霜風である。

前衛生花の一方の家元であるこの男の顔は、いろんな雑誌のグラビアで、しの子はよく見かけていたものであった。

「先生だとは気がつきませんでしたわ」

礼を執らなかつたことを、しの子は彼に詫びた。

「京子さんも教えてくれないんですもの」

鳥羽さんといえば、すぐ察するものと京子は思ったのであろう。京子を、なじることはない。しの子の方が迂濶であった。

「私は、もう先生ではない。ただの飲んだくれの酒場のおやじですよ」

のんだくれのね。と鳥羽はくりかえして、それから力なく笑った。

「私の生花芸術はすたり、私の名もすっかりすたれてしまいました」「でも——」

「でも、しかしありませんよ。ははは」

虚ろな笑声が、早春の陽差しのもと降っている海津邸の築庭へ流れる。さっきから小鳥のさえずりが樹枝に熾んである。

「のどかですなあ」

鳥羽霜風は話題を変えた。気の毒で、なんにもいえないでいるしの子が、鳥羽にしてはまた、かえって気の毒になったのだろう。

庭の苑路へ華やかな和服の色彩が溢れた。稽古の終えた弟子たちが、庭を伝って門へ向うのである。

しの子も今日は稽古日であったのだが、ズルけて、来合わせていた鳥羽と濡縁で陽差しにくるまっていたのである。もともと二年越しの生徒で、師匠の京子がもう教えるところはないくらいに、しの子は上達している。

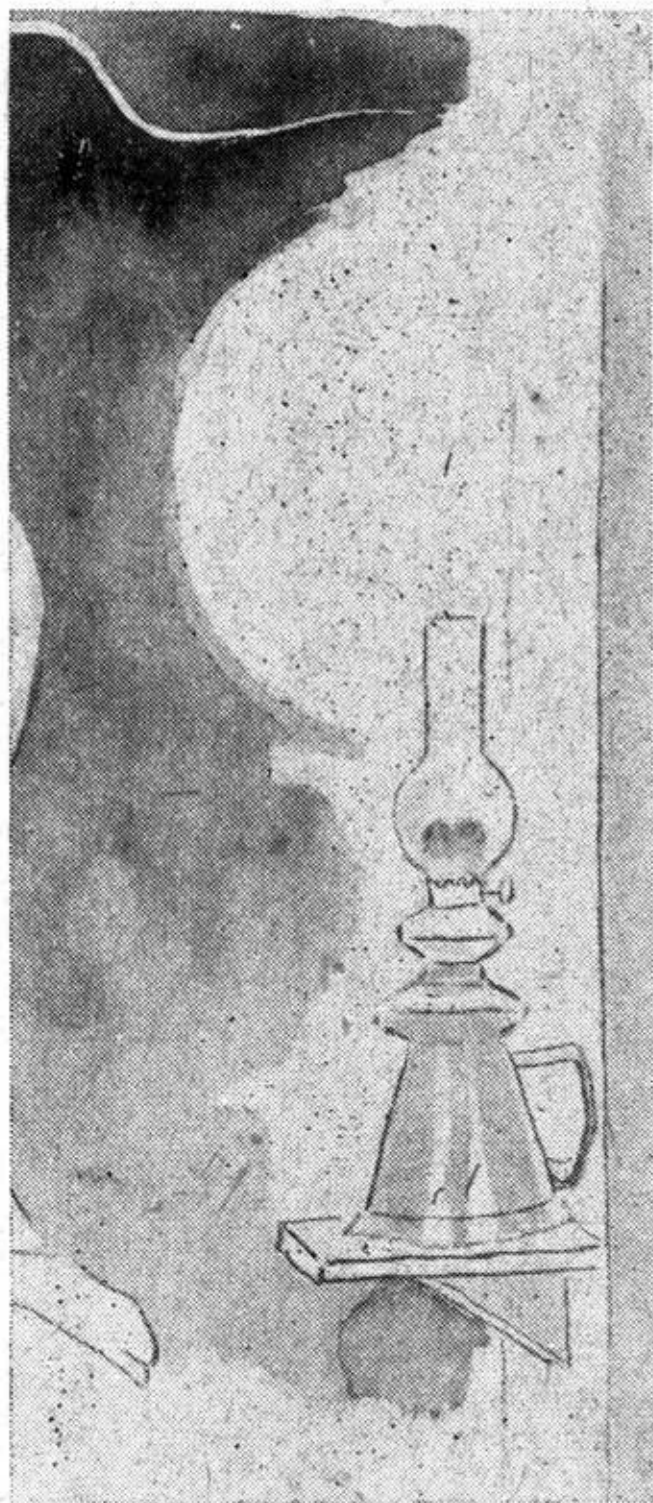
鳥羽と京子が心易いのは、かって或る家元に就いて、ともに生花を学んだ仲であるからである。そうして、ともに前衛花道に新らしい独創の流儀を興したのだが、一方は栄え、一方はすでに絶頂から落ちて、落莫の風に吹かれている――。

「しの子――」

湯殿の方で京子の呼ぶ声がした。

「はい」

鳥羽へ目礼を送って、しの子は急いで奥へはいって行った。一人になると鳥羽は、ごろりと濡縁に寝そべって、片時も離さない琥珀の瓶を口へ持って行く。



「背中を流して頂戴」

稽古を終えて京子は昼風呂をつかうのである。三十一の中年増の脂ののった白い背中が、湯気の中にあつた。

「はい、ただいま」

しの子が裾をからげると、

「貴女もおはいり。いいお湯だわ」

「はい」

素直に、いいつけにしたがつた。

「お湯を上ったら鞭を喰べるのよ。いい」

「はい」

背を流しながら、しの子の声は弾む。

「存分に」

しの子は先に風呂から上って居間へ行くと、京子の鏡台から櫛をだして、湯気に濡れた髪を梳くしがった。長い美しい髪である。濡縁で

鳥羽は惚れ惚れと、その後姿を眺めた。浮世絵から抜けだしたようなこの美しい女を、鞭で責めたてるのは惜しいような気がする。

惜しいと思うのは、鳥羽の男の感情からであろう。同性の京子には、そういう情念はない。しの子の可愛い白い肌を、花びらを擦つけたように紅い鞭痕で飾ることのみに、サディスティン・海津京子は心を燃もすのだ。それは無邪気で冷酷な娯楽であらう。

「おどき」

いわれぬうちに鏡台の前をどこうとしている

しの子の、折角、綺麗に櫛目をとおした髪を京子は、ぐいと曳くと代って三面鏡台の椅子に腰を据えた。犬のようにその足もとに這って、しの子は京子の足指の爪を切り、マニキュアをほどこす。

「もっと丁寧になさい」

びしっと一つ、素手撲ちをくれ、顔にクリームを塗りながら京子



は鏡面に写っている鳥羽の顔に笑いかける。私の奴隷の美しくって従順なことを御覧なさい。そういったげな得意な笑顔である。

皮鞭は鏡台の一つの抽出しの中にある。取りだして、

「さあ」

しの子の鼻先に突きつける。しの子は両手に戴いて唇を押しつけた。

此処には酒樽はない。木馬もない。

陽差しが明るく流れ込んだ部屋の真中で、しの子は四つん這いに這わせられた。

鞭責めが、はじまった。

三

——歩けないわ……。

海津邸から一丁余り来た路上である。辺りはたそがれて来ている。その薄暗い暮色の中に、しの子の白い顔はうずくまった。

「そんなに痛みますか……」

と鳥羽は訊いて、馬鹿め、と自分をわらった。

あれほど責めしだかれて、歩けないというのが当り前であろう。

京子のあの凄まじい鞭撲ちを、最後まで四つん這ってこの女はよく耐えた、と思う。白い皮膚が無惨にも幾条もの鞭跡を赤くきざみ、それから滴々と血がしたたり落ちだしても、なお渾身の力で鞭を加える京子であったのだ。嬰兒のように泣きぐるいながら、しの子も

また渾身、飽くなき加虐に耐えていた。凄艶といおうか、愴美といおうか、春光明るい日中の部屋で延々と繰りひろげられた美女同志のアブ絵巻は、流石に鳥羽を瞠目させるに充分であったのだ。

「しっかりなさい。奥さん——」

鳥羽は、しの子を助け起した。

「——ああ」

ふっくりした二重頤を鳥羽の肩へあずけて、美貌は紙のように白い。

「奥さんっ」

急に、からだが重たくのしかかって来たので、鳥羽は狼狽した。

「しっかりしてっ」

「……」

おそい。彼の腕の中で、しの子は意識を喪っていった。目蓋をかく閉じたその白い貌は、夢見る寝顔の如く可憐に見えた。

正体のないしの子を、鳥羽は通り合わせたタクシーへ抱え乗せた。

「死んでいるんですか——」

ぞーっとした声で運転手がいる。

「馬鹿な。一寸気分が悪くなったのだ」

「どちらへ？」

「——」

「どちらへ？」

「——そうだな」

鳥羽は瞬時、思案していった。

「神田」

「へい」

神田までなら大分メーターがあがる。運転手は気をよくした声で答え、ギアをローにいった。暮色をヘッドライトが裂いた。

神田のある街の、ビルに挟まれた露地中にある酒場黒猫は、今夜も灯が消えている。一体、商売をする気なのかどうか、近所の者たちは主人の鳥羽の気まぐれな行状を蔭で兎角、評し合っている。

灯の消えた黒猫の前で、その没落花道家がひとりの女を背中からおろした。女を壁に凭せかけて、素早く扉の鍵をあけ、女を横抱きに抱えて中へ這入る鳥羽の姿を、行人が見かけてちょっと異様に思った。

店のボックスに、そっとしの子を寝かすと、鳥羽はロウソクに火をつけた。料金が滞って電線を切られているのである。

ロウソクの光でカウンターの洋酒棚を漁ると、幸いなことにトリスが一本残っていた。

「奥さん」

気付薬代りに、それをしの子の白ざめた唇へしたらしたが、あふれて、いたずらにしの子の衿元へ流れる。白い胸が濡れた。

「仕方がない」

鳥羽は口移しに飲ませた。しの子の喉がかすかに鳴って、液体は彼女の胃におりた。胃のふにそれが泌みると「ああ……」しの子の美しい眼がひらいて鳥羽を仰いだ。

「——京子さん、もう責めないで……」

「僕ですよ、奥さん。分りますか。海津先生ではありません。僕。僕ですよ」

「——鳥羽先生……」

しの子は半身を起した。

「先生のお店ですね、此処？」

「そうです。僕の店ですよ」

「鳥羽先生」

「なに？」

「なぜ、私を此処に？」

「——」

「せんせい……」

「いってやる」

鳥羽の語調がきびしく変った。ロウソクの炎を受けて彼の瞳が光った。

「貴女を責めるためだ」

「——もう一度、おっしゃって……」

「何度でもいおう。地下室の酒樽の上で貴女を鞭撲つためだ。わかったか」

「——はい」

声にはならず、唇だけが、そう動いた。承諾の意思が、こちらの胸に伝わると、鳥羽は、やにわに、しの子を両手で抱き上げ、

「行こう！酒樽のある地下室へ！」

ブラボー！と大声に叫んだ。

ブラボー！と鳥羽霜風が歓喜の声を放ったとき、海津京子の家では、人形が毀れた。茶の間のテレビの上に載っている、蛇目傘をさした芸者の艶な白首が、ころりと落ちた。やや大袈裟に言えば、この瞬間、京子の顔色には血の気がなかった。

人形の首が落ちる。この忌わしい椿事に京子は何を予感したのか？電話のある場所へ彼女は走った。ダイヤルを回す白い指がこまか

く顫えていたことをしるさねばならない。電話は下北沢のしの子の店へつながった。

「わたし、海津。奥さん、いて？」

「海津先生ですか。今晚は。マダムはまだ帰ってみえませんか」

先生と御一緒ではなかったのですか？向うは不審氣にいう。住込の女店員である。

「首が落ちたわけが分ったわ。矢張り……矢張り、鳥羽だわ——」

「首が落ちたって？——なんのことです？」

京子は電話を切った。悲りが双眸に燃え、美貌だけにその表情に凄みが漂う。

読者よ。

一寸、作者はここで一服したい。実をいえば、さっきから、のべつ一服しているのだが。

少時、無駄話をしよう。

恋の嫉妬は人によっては随分すぎまじくなるものだが、それよりもっと粘液的ですぎまじいのは、レスビアン^{レズビアン}の嫉妬である。レスビアン^{レズビアン}の嫉妬は皆、悉く異常な粘質な鬼火のような凄さがある、と断言し得るだろう。

二月生れの作者は今年三十五歳。この齡まで随分、浮世の垢に染まって来て、人生の吹き溜りの場所なら大概通って来た。色の白い私に岡惚れした風な上野^{ウギノ}の男娼から、渡世の術に思い暮れた身を半歳余りも養われたこともあるし、軍隊時代、拳銃の名手だった腕を買われて、ノガミ一帯に勢力を敷くK一家の用心棒にもなったことがある。命知らずのやくざの、そのまた護衛役になるくらいだから私もいい加減生命をないがしろにしていたものだが、無論、誰も射

ったわけではない。射たれても、自分は射たぬ積りでいた。軍隊は私の青春の悪夢であり、銃技はその暗黒時代の副産物であって、私は忌み、決してその手練を用いる気はなかったのである。

あれやこれや、私の過去は、さなきだに佗びしい流転の劇だが、その中で最も強い思い出として残っているのは、ホテル・明荘のことである。

場所はいえない。マンモス都市、東京の或る一隅にある穢い木造ホテルと思って戴きたいのである。経営者は中国人であった。その異邦人の彼の好意に甘えた恰好で、私はホテルの屋根裏の室を一時ねぐらとしていたのだが、此処に来る客がすべてレスビアンであったのだ。ホテル・明荘を、私は、ひそかにこう呼んでいた。

レスビアンレズビアンの宿——と。

そうして私は日夜、彼女たちの生態に触れ、その愛情と嫉妬の如何に烈しいものであるかを知った。愛情が深ければそれだけ嫉妬が深く、それはまことに世にも異様な鬼火図絵を見るような感じであった。

さて、いうならプラトニック・ラブともいえる関係にあるしの子と京子の、加虐者京子の双眸に燃える妬情の火は、これもまた異様に激しいものであった。

人形の首が落ちたことに、鳥羽の行動を読む風な彼女のカンの働きは殊に鋭い。海津京子は、すぐにタクシーを拾って神田へ向った。

黒猫の扉は閉っていた。中は真暗である。だが、表から錠がされていないところを見ると、鳥羽は必ず中に居る。そして、しの子も。

京子は確信を深めた。朽ちかけた扉へ、彼女は豹のように全身でぶ

つかった。

店の扉が、めりめりと毀された音は、地下室の鳥羽の耳にはとどかない。しの子の耳にも聴えない。

しの子の肌を撲ちしだく革バンドのすざまじい音と、身を切られるような悲鳴とが、地下室を一杯、領していた。

「もう撲たないでえ——許してっ——」

酒樽にしがみついて、白い背中に黒髪をふりみだしたしの子は泣き狂う。

「ああッ——せんせい……許してっ」

「もっと泣け。もっと叫べ。誰にも聴えない部屋だ」

しかし、一陣の風がこの地下室へ吹き降りて来てカンテラの火を煽った。

「鳥羽さん。しの子は私の奴隷よ。その鞭をお捨てっ」

怒りに青くなった顔で、海津京子は木梯子を駆け降りて来た。

四

十日余り経った頃である。

新宿西口のある安酒場で鳥羽霜風は酔いつぶれていた。まるで仕事にあぶれた土工のようなみじめな服装で、いぎたなくスタンドに突伏して口から涎をたらしている。

黒い手袋が、後ろからその彼の瘦せた肩を叩いた。

「起きなよ、おっさん」

おい。ぐいぐいと揺すった。

季節はずれの皮手袋をはめたこの若い男が店にはいつて来たときから、眠かだった雰囲気は急に鉛を呑んだような重いしーんとした

空気に支配されている。

「起きろ」

固いケントの靴先が、したたか霜風の背中を蹴上げた。

「むう——」

鳥羽はうめいて、この突然、暴力を加える男の顔へ、かあっと酔眼を剥いた。

「な、なにをする、か——」

「起きねえから起したのだ。外に出ろ」

「なんだと。そんな乱暴な云草があるか」

「ごたくをいわずに、出なよ」

もう一度、背中を靴が蹴った。

「むむっ……お、おやじ——」

この男は一体、誰だ。鳥羽は酒場の親爺へいった。

「俺か」

黙っている親爺を尻目に見て、皮手袋は薄く笑った。その刹那、

鳥羽の背中には固いものが触れた。

「おとなしく出な。——ぶっ放すぞ」

「——」

鳥羽は酔いが、いちどにひいた。

「出る……」

「ようし。話の分る、おっさんだ」

暗い露地奥まで鳥羽を歩ませると「こっちを向きな」振向いた鳥羽の顔へ、男は強烈なパンチを見舞った。

「しの子という女から手を引きな。忠告しておくぜ。俺の忠告を肯かなかったら、あの世行きだぞ。ええか、分ったな」

地べたに脆くも這ってしまった鳥羽の耳に冷たい口調でいい残すと、黒い手袋の若い男はゆったりした足どりで露地を去って行った。いまの振舞いをもう忘れたかのように陽気に吹いていく口笛の音が、いつまでも鳥羽の鼓膜にこびりついていった。

男はその足で、すぐ世田谷代田の海津京子の家へ向った。タクシ—の中でも、彼はブルースを低い音で吹いていた。

海津家の玄間のベルを男が押したとき、京子は恰度、しの子に鞭責めを加えようとしかかっていたが、

「そのまま待ってなさい」

「はい」

夜になって、しの子は電話で呼びだされて此処へ来たのである。

京子は、すぐ戻って来た。顔に会心の笑みがある。ぴしゃっと一つしの子の肌を張って、

「お聴き、しの子」

「何を？京子さん」

「ふふふ。鳥羽はね、もう絶対、しの子には手が出せないわ。いい気味。おまえは、さぞ残念だらうね」

「そんなことって、まだあたしをいじめるのね。あんなにお詫びしたのに」

「一生、詫びつづけるのよ」

「もうなんにもいわずに鞭をください」

「お誓い、決して鳥羽の処には行かないと。さあ、お誓い」
ぴしっと素手で叩く。

「京子さん、もう何度も何度も誓ったじゃないの」
しの子は甘えたような鼻声でいう。

「鞭で撲ってえ」

「誓うわね、ほんとに」

「心の中で、ちゃんと誓っているわ」

「よし、いい子だわ」

京子は立上って鞭を振り上げた。力一杯、打ちおろす。後は、つるべ打ちに責めしだく。従順な美しい奴隷の白い肌を、責めに責めるのであった。

鳥羽が絶対、手出しが出来ないといった京子の言葉は、どんな意味があるのだろうか？そうして、あのとき訪ねて来た者は誰なのか？その人間と京子の言葉と、どんな関連があるのか？

しの子は家に帰されると、寝室の窓辺に倚って、そのことを思いわずらった。鞭傷の激痛が思考を乱してくる。窓枠を両手で握りしめて声を忍んで、しの子は苦痛を耐えた。

翌日。しの子の店に鳥羽がやって来た。酒は、飲んではいなかった。

しの子に会いに来たことで、この落魄の前衛花道家は後に悲劇の死を迎えるのだが、彼としては、その死は本望であったかも知れない。一介の飲んだくれオヤジに墮した、身も心も行暮れた自己を清算して満足——という意味ではなく、愛する女のために、おのれの恋のために自ら招んだ死であったから。

彼は、すでに自分が死に見舞われることを覚悟して、しの子の店へあらわれていたのであった。ひくいブルースの調べを吹く口笛の音が、ずうっと鳥羽の跡をつけて来ていたからである。「つけられている」と、鳥羽はしの子の顔を見ると笑っていた。その笑いが

泣くように歪んで、しの子の眼に映った。

「——どうぞ、お上りになって」

鳥羽の表情から何か危険が迫っていることを感じると、しの子は先に階段に登って、

「さあ、先生。どうぞ」

「よろしいかな」

「なにを仰有るの。遠慮は要りません」

お会いしたかった、先生……。二階へ上ると、しの子はいった。声に真情が籠った。

「——うれしく……聞きます」

「先生」

「むう？」

「京子さんが、先生へ何か工作を？」

外を口笛が流れて行く。

「貴女は心配しなくてもよい」

口笛を聴きながら鳥羽は微笑した。

「相変らず京子から責められていますか」

と、彼は話題を変えた。しの子は、のらない。「心配だわ」鳥羽の手をにぎる。

「もうその話はよそう」

鳥羽は、しの子を引き寄せると、びしーっ、素手で叩いた。

「ひどい傷だ——」

「昨晚、鞭で責められました」

その上にまた鞭を浴びるのかと、流石にしの子は辛そうであった。びしーっ、びしーっ、素手撲ちがつづく。

「酒樽の上で責められたい
……ああッ」

「ああッ」

いつもの倍も、苦痛がある。「待って」しの子は鏡台の前まで這って行って、タオル掛からタオルを取って鳥羽の手に渡した。

「これで猿ぐつわを——」

「よし」

鳥羽は美女の唇をかたく結ぶと、四つん這わせておいて、ズボンのベルトをひきぬいた。

「しゃんと這っている」

皮ベルトが、しゅーっとうなった。白い肌を赤い条跡が灼いた。

鳥羽が、しの子の家を辞したときは、もう夕方であ

る。半ば喪神状態で畳に突伏しているしの子へ「さようなら」胸の中でいって、鳥羽は夕景の道へ出た。

池ノ上へ出る途中に、淋しい小原っぱがある。鳥羽がそこを過ぎるとき、夕もやの中から不意に低い口笛の音が湧いた。

五



蒼野礼は階段を降りて来た。この安ドヤがまったく古ぼけた建物の如く、階段もまた、がたがたにゆるんだ、あぶなっかしいものである。だから蒼野は、静かな降り方だ。「貴女は、だれです？」階段の下に佇んでいるしの子を見て彼は、ぶっきらぼうに吐いた。
「美川しの子と申します。——初めまして……」

「挨拶はいい。用件はなんですか？」

とりつく島がないような物いいに、しの子は、ひるみそうになる心をはげまし、

「済みません。お呼びだて致しまして」

応待に出た女中は「蒼野さんなら、まだおやすみです」と答えていた。それを、しの子は強^たって起してくれるように頼んだのだ。蒼野は寝不足の赤い眼をしている。色が白というより、青くむくんだ感じなのは、この男の生活の不節制を物語っている。

「用件をいい給え。早く」

俺は、ねむくてたまらんだというような顔をする。しの子の素晴らしい美貌を、まるで眼中に置かぬ態度である。しの子の美人意識は、少しく傷ついた。

「なに？鳥羽が射たれたあ！」

蒼野はというと、

「待て」

ここでは話にならない、静かなところでゆっくり伺おうと、しの子を外へ連出した。

連れて行かれた上野広小路の、こじんまりした喫茶店で、しの子は今日までのことを一切つつみ隠さず蒼野へ打明けた。この男にはどんなごまかしも利かない気がしたからである。マゾであることを赤裸々に語って、鳥羽と京子と自分との巴の関係をさらけだし、真正直に正面から、しの子は蒼野へ縋った。

「これは鳥羽の頼みか、それとも貴女御自身の頼みなのか——どっちですか？」

しの子の家から戻り道、池ノ上へ抜ける途中の原っぱで、鳥羽は

背ろから狙撃されて右腕の上腕部を射ち貫かれた。鳥羽は附近の病院に收容された。京子と京子に頼まれた若い男の不気味な監視の眼を怖れながら、しの子は、こっそり鳥羽を見舞った。その時、鳥羽はこんなことを洩らしたのである。

自分を射ったあの若い男は、やくざだろう。やくざの中でも、金銭の報酬とひきかえに平気で人間を殺傷する所謂、殺し屋と呼ばれる種類のやくざにちがいない。自分はもう、いつ死んでもいいような零落した身の上だが、貴女と別れになることを想うと、矢張り、この世に未練を覚える。

あの若い男——あいつをやっつけてくれる適当な人物を、自分は一人知っている。軍隊時代、自分の上官だった男で、今、上野のK組の用心棒をしている蒼野という男だ——。

いうまでもないことだが、鳥羽が警察に対して犯人の素姓を隠蔽し、原因に就いて、かたく口を緘したのは、しの子の迷惑を慮ったからである。マゾヒスティンであることが世間に公けになった場合偽物道徳で身を飾る世間が、しの子へ対して、どんな指弾をなすか火を見るより明らかであろう——。

「二人のお願いです」

貴女の頼みかと訊かれて、しの子は相手の眼に言葉以上の瞳の色をそそいで答えた。

「なるほど」

また、煙草を吸いつけながら蒼野はうなずいた。しかし、承知したとはいわない。

「職業柄、やくざの世界には明るいし、鳥羽を射った奴も、探ればすぐ分るだろうけど——」

自分だって命は惜しいと、笑う。

「お金は差上げます」

「幾らくれますかな？」

「二十万くらいなら、すぐにでも」

「人が見てなかったら……」

にやりと、蒼野は笑う。

「見てなかったら？」

「貴女をおんなぐるとこだ」

「——」

「百万でもまだ安いと私は思う」

「——分りました。百万、出します」

「私がいうのは百万ドルだ」

「ドル？」

美貌が悲^{いか}りで青ざめた。

「からかっているのですか——」

椅子を引いて、ゆっくり蒼野は立った。

「この話は断わる。命が惜しいからでもなく、私こそいつ死んでもいいと思っている男だが……報酬にこだわるのでもないのです。ただ、私は支那で沢山、人間を殺して来た。拳銃中尉とか鬼中尉とかいわれてね。もう殺生事は金輪際したくない」

外へ出た。今日も明るい春日和である。雑踏の中で、蒼野は背後から、いきなり、どしんとぶっかられた。人目もはばからず、追いつがって来て全身でぶっかった美女？

「鳥羽先生を助けてください——」

白い頬を、きらきらと涙が走った。哀れ。その想いが初めて蒼野

の胸を揺すった。

鳥羽が退院したら、身柄を自分が預り、生命を保証するという蒼野の約束を得て、しの子が欣喜雀躍して我家へ戻ったのは、今から思えば、いっそ哀れである。

家へ帰って店の様子を見、彼女はすぐ病院に行つて、このうれしい蒼野の返事を鳥羽に伝えるつもりであった。蒼野礼という、往年の拳銃中尉への信頼は、直属の部下であっただけに、鳥羽にしてみればしの子が測りきれない深い強いものがあつたであらう。

だが、我家には怒りの形相もすぎまじく海津京子が、しの子を待つていたのである。

六

時を移さず京子は、しの子を車で自分の家へ運んで行つて、ものすごい折檻を加えた。しの子の白い肌が鞭の乱打で裂け、赤い血しぶきが畳に懸るまで手をゆるめなかった。しの子が泣きぐるって畳に突伏して、へたばると、髪の毛を曳^ひ張^はつて引き起して四つん這いにさせ、へたばると、また、ずるずると髪を掴んで引き起し、四つ這いに這わせた。京子の顔は夜叉のような形相に変じ、誓いを破った憎い奴隷を責めに責めるのであつた。

しの子が病院に鳥羽を見舞つたことを、京子は知っていた。あの殺し屋に監視させていたにちがいない。しの子の心が自分を離れ、鳥羽という男の胸へ傾斜してしまつた絶望的な怒りが、京子を夜叉に変えていた。

「きえっ——ゆるして……!!」

血しぶきが、紅く畳に懸る。

「ううん——」

一声うめくと、必死に四つ這っていたしの子のからだは、ぼたぼたに倒れた。——死んだ、と京子は思った。手から、ぼとりと鞭が離れた。海津京子は、それからふらふらと家を出て行ったのである。

暮色の中を、幽鬼のような白い顔で、京子は歩きつづけた。虚ろにひらいた両眼から涙がしたたる。しの子が死んだ……死んだ……ぼんやり胸の中で、つぶやく。

一時的にせよ、このときの京子は精神錯乱状態にあったのではないかい？

しかし、彼女が果物ナイフを持ち出して来ていたことから、殺意を抱いていたことは疑えずと、後になって検察側に有利な根拠を与えている。京子は十年の刑を求刑された。それも後の話であるが——。

鳥羽霜風が京子に殺害された模様は、描写を避けたいと思う。勝手なようだが、これは作者の倫理観からである。

〔伝言板〕

○高原正夫氏へ——御指定の局留にて四月十一日信書、四月十六日写真をお送りしましたが、そのいずれも留置期間経過で返戻になっています。前回も当方からお送りした写真は受取られなかった為か戻っています。再送いたしますから連絡場所をお知らせ下さい。

(編集部)

臨時増刊号

「青い廃院」

定価一部 二百円 (送共)

四馬孝画の豪華口絵集

二大長篇異色読切サド小説

美貌の踊子にまといつく執念の男。全篇に

みなぎる悦虐の妖気。(青い廃院)

女護島に展開される緊縛と処刑にまつわる

エロチックなドラマ (与那国奇談)

元前衛花道家、鳥羽霜風の死が興味的に新聞、ラジオ、週刊誌で発表されてから、四、五日、経ったある晩、しの子は神田の或るビル裏の路地で蒼野礼らしい人影を、今は主亡き「酒場黒猫」の前に見かけた。しの子は近寄った。矢張り、そこに佇んでいるのは彼であった。

一度は命を救ってやろうと心にきめた元部下の非業の死を悼むためか、蒼野は主なき店に向って一礼すると、しの子の横を、しの子だと眼にとめていながら、一言、言葉を掛けるでもなく通り過ぎて行った。今となっては、この無頼の男に、しの子も用はない。

しの子は空屋の店にはいると、地下室へ降りて行った。カンテラに火を入れた。ぼうと地下室が明るむ。酒樽の上に、しの子は跨ってうち伏した。

(鳥羽先生……)

滴々と涙が酒樽にしたたる。

(おわり)

◎アイデア募集◎

絵画、写真のアイデアを募ります。こういった趣向で作成してほしいという御意見御希望はどしどしお寄せ下さい。採用の分には作成した絵画又は写真を贈呈いたします。略画を添布下されれば幸いです。文章だけでも結構です。

編集部

麻生保氏の

生活と

意見 (十六)



麻生保

広告に於ける乗馬女性について

本誌三月号所載の「生活と意見(一二三)」

で、「NECテレビ」や、「フレンド・バンド」の広告に、乗馬女性、又は馬装りらしい女性が登場する事を報じ、近頃、乗馬女性の株が上っているらしいと書いたが、それあらぬか、今度はキスミーフアンドの広告に、中原ひとみの乗馬服姿があらわれた。胴の細い上衣、腰のふくらんだ乗馬ズボン、革長靴、それに鞭を携えて、気取ったポーズで立っている。

これ等、一連の社会現象(何と大げさ!)

は、どう関連するのかは麻生にはよくわからない。単なる偶然とも思える。然し、広告と言うものは、各会社が非常に注意を払っている事業の一つなのだから、単にPR課員の好みで左右される筈のものでもあるまい。要するに、乗馬女性の美しさが一般に認識されて来たというに他ならない。そして「人々が広告の中の彼女等を見ることによって憧れに似たものを持ち、ひいては、それがために購買慾をそそり得る能力」を持つことが証明されたからに違いない。

ウィンクして、媚びを含んだ笑いを浮かべ乍ら、甘ったるい声で「皆さま、〇〇の製品は如何でございますか」といった手合がそろそろ飽きられて来たのだろう。

又、昨年のテニス、今冬のスキーに於ける女性の進出は目ざましかったが、今秋の女性スポーツの花形は射撃だそうである。又、フエッシングも、そろそろ流行のきざしを見せているという。こういった女性のスポーツに於ける貴族趣味が著しい昨今、乗馬女性を広告に使うのは当を得た事なのであろう。

五月号について

倉仁氏の「ある女優の乗馬日記」は、いよいよ佳境に入ってきたの感がある。いささか拵えものめいたくだりが無きにしもあらずだが、とも角、御健筆を喜びたい。大崎蘭子さん、御自分の体験を御投稿なさっては如何ですか? 必ずや、麻生が渴望しているところのものが出来ることと思つて期待したいと思ひます。

今月、麻生は忙しいので、これだけ。

セミドキュメンタリー

バスガールの運命 (二)

(この一篇は實在モデルの数奇な

生活を描いたものである)

滝 畑 三 郎

見習車掌生活一カ月の規子は、たった一枚の百円札を発見されて、それも全く身に覚えのない不正のために、不安に震えながら、夕食も食わずに今、宿舎の自室に謹慎しているところである。

時計が六時を打って間もなく、同室のお師匠さんの敏子が帰って来た。

「規子さん、こんなあやまちが二度とあっては大変ですから、今夜は私がみっちりお仕置してあげます。覚悟は良くって？」

「お師匠さん、私何も……」

「横着な事をしておいて、言分けは見苦しくってよ。それより早く作業衣に着換えておしまい」

仕方なく規子が紺デニム、オーバーオール
の作業服に着換え終ると、敏子はすかさずバンドを強く締めさせ、乗務用の鞆をもつけさせた。

「じゃ、今から△△町の本社まで駆足！専務さんがいらっしゃるから、この手紙をお届けして御返事を貰っていらっしゃい。そうね二軒位だから規子さんの足なら三十分もあれば

往復できるでしょう。あ、そうそう。鞆に何か入れてあげないと空では走りにくいわね。何が良いかなあー」

と、あちこち物色していたが、結局、規子の鞆には修理用のスパナや切符切りのパンチ等が、ぎっしり詰め込まれて、規子は夕闇の街へ走り出した。

このお仕置は規子には随分こたえたよう地道行く人の好奇心な視線を感じつつ、憤怒と屈辱で混乱する胸中を静めながらも、規子は目的地まで、息をはずませつつ走り続けなければ

ばならなかった。

やっと本社に辿りつく頃には、びったりした上下続きのデニムの作業服は、背中や脇の下から太股まで汗がべっとりにじみ出てまわりつき、規子は全くみじめな気持ちに陥っていた。その上、腰のバンドが息苦しい程に身体を締めつけるし、走る歩調に合わせて重い鞆がズシズシひびき、二重、三重の苦痛を味わされるのである。

新入生に対する物珍しさも加わって、受付で待たされる間にも遠慮なく眺められひやかされたので、規子は正に半泣きで信二郎の部屋に通された。

「突然、どうしたんだい。まあ、こっちへ腰かけて」

「ハイ」

「一度、訓練所を訪ねてあげようと考えていたのだが、君が恥しがると却って気の毒だと思っただけ。ところで、今日は大変な恰好をして急用を言いつけられたというのは何だね」

規子は、我身の情けない服装を、許婚の信二郎に見つめられている恥しさに真赤になって、ギコチない手付きで腰の鞆の中から黙って信二郎宛の手紙を差出した。

「大変な失敗をやっちゃったね。庄司君の報

告には、何分、見習生のことだし正規の処罰手続をするのも可哀そうに思えますので、本人には内緒で御裁断を迎えます」と書いてあるよ。困った事になってしまったなあ」

「ハイ、でも信二郎さんまで、私を疑われるなんて……」

「判っているよ。どうせ何かの間違いか誰かのいたずらだろうよ。けれど、私からいい出して会社の内規を破らせるわけにも行かぬし、君が許婚だって事も会社には伏せてあるのだから弱ったなあ。まあ今度の事は、庄司君の肚にまかせて見よう。後で電話して置くよ。でも、そういう服の君も良く似合っているな。すっかりバスガールが板について来たよ。やれやれ可哀そうに汗びっしょりになって、此処まで走って来たのだね」

規子は信二郎の懇望によって、結婚するまでの間、会社の実態を研究する目的で、身分を秘して入社したのだし、今夜はもっと親切に扱ってくれる事を期待して甘えた気持ちになっていたのだ。意外に冷淡な信二郎の言葉には半ば絶望し、半ばカッとしてしまっているのであった。

「エエ、私にとっては専務さんより恐いお師匠さんですもの、帰りも走って帰らなかった

ら大変ですわ。それにこんな恰好ではバスにも乗れませんもの。それとも信二郎さんが車で送って下さるの？」

「まあ今晚は庄司君に甘えて、罰を軽くして貰うんだな」

信二郎は素知らぬ顔をしていたが、すでに今夜のことについては庄司敏子からの電話があつて、その際、大体の指示も完了してあつた次第で、規子だけが、ずっと後日になって気がつくまでの間、お師匠さんは私の身上の事を何も聞かされていないのだから仕方がないわ」と諦めて、色々のつらい訓練やお仕置の度に、反対に敏子を慕うような気持ちで終始したのは、極めて皮肉なことである。

一方、今夜の敏子は大事な預り人に途中で万一の事があつてはと、見え隠れに自転車で規子の後を追って来たが、規子が会社に入つたのを見届けたのち、五分ほど経過して専務室をノックした。

「専務さん、只今、参りました。大事な見習生をお預りしていて、このたびは誠に申しわけありません。御書面で御指図を仰ぐつもりでしたが心配になりましたので、この人の後をつけて来ました。まだ見習中の方ですし、どうか寛大な御処置を私からもお願い致します



「ウン、そうだな。僕は何も聞かなかった事にするよ。反則を報告するもしないも、万事、

君の一存で計らう事。但し、今後、間違いないように良く教育してやって下さい」
「ハイ、ほんとうに有難うございました。内

田さん、じゃ御礼申して私と一緒に帰りましょう」

「二人で一旦、本社を出たが、敏子は直ぐ引返して今度は綿ロープを持って来た。」

「さっきは規子さんを見失いそうで心配だったわ。だから今度は名案を思いついたのよ」

「いいながら規子を後向かせ、腰のバンドに綿ロープを手早く結びつけ、一方の端は自分の乗る自転車のハンドルに結んだ。」

「では出発。脇見をしないで一定のスピードで走ること。駆足！」

こうして帰途の規子は、一層みじめであった。身心共に疲労して、もう一刻も早く寄宿舎に帰りつきたいと願うのみで、他の事を考える余裕もなかったが、思い出したように意地悪する敏子に刺戟されて、嫌でも猿廻しの猿にされたような気持を間断なく味わされる。

敏子は、わざとゆっくり自転車を踏んで「規子さん、そんなに慌てたら途中でへばるわよ。もっと、ゆっくり、ゆっくり」

といったり、反対に自転車の前輪が規子のお尻に触れる様にして急がせたりする。

規子は、その意地悪のたびに身体がのけぞったり前のめりにされたり、絶えずびくびくさせられながら、それでも早く帰って解放されたい一心で、あらゆる屈辱を噛みこらえて走りつづけた。

だが訓練所の門をくぐっても、規子は直ぐ許されるのではなく、そのまま裏山に引立てられるのであった。

「規子さん、このぐらいのことでお仕置が済んだと思ったら間違つてよ。あちらを向いて手を後にお廻しなさい」

というより早く、規子が気づいた時は既に綿ロープが両手の自由を奪っている素早さで規子を縛り上げ、縄尻を松の幹につないで立たせ、おごそかに敏子は宣告した。

「八番練習生、内田規子」

「ハイ」

「車掌勤務要領は教わりましたね」

「ハイ」

「貴女は今日、大変な反則を犯したのよ。けれど前途ある練習生だし、幸い専務さんが穏便にして下さったから良かったの。でも二度と、こんなことをしてくれたら、貴女だけで

なく私の立場も滅茶滅茶になるって事をよく覚えておいて頂戴。私は、これから一とねむりして、目がさめたら来てあげるから、その間によく反省なさるのよ」

敏子は、さっさと寄宿舎へ帰ってしまい、後に残された規子は、生れてはじめて味わされる屈辱感に異常な緊張を覚えて敏子を恨み信二郎を恨み、身の不仕合わせをなげいて次から次へと考えつめている間に、泣くまいと思っても自然、涙がたままって、しまいにはハラハラと落涙しつづけるのであった。

やがて涙も涸れたと思われる頃、規子はウトウトと睡魔に見舞われて、いねむりをはじめていた。何時間か経ったであろう。突然

「八番練習生、どうしたの」

という声と共に、いやというほど強く二の腕をつねられて、規子は目をさまさなければならなかった。

相変らず後手に縛られた哀れな自分を再認識させられて、規子にはもう反抗する気力もなく、今では絶対権威者としての敏子から、どんな罰を受けても素直に命令に従っても良い、そんな気持が芽生えかけている自分が我ながら不思議であった。

「貴女って割に横着な人ね。立ったまま、い

ねむりするなんて、ちっとも反省していない証拠だわ。勘忍してあげたらと思ったけれどやっぱり見せしめに懲罰にかけた方が良いか知ら。まあ一まず、お部屋に帰りましよう」

次第に不安に襲われて来る規子は、後手のまま、よろよろ歩かされつつ、あくまで冷酷な敏子に、喉をつまらせながら哀願しなければならなかった。

「お師匠さま、私どんなつらいことでもします。だから懲罰の申告だけは許して。お願いします」

「規子さん、じゃ私の命令だったら素直に従う勇氣はあつて」

「ハイ、お師匠さん。だから早く縄をといて……」

「駄目々々。縄はお部屋へ帰ってからといてあげるわ」

その翌日から「厚生訓練」の名のもとに、絶対服従を誓った規子は、事実上の奴隷生活を余儀なく強制され、思いもよらぬ新しい受難がはじまった。

(未完)

告白

ふんどし奇譚 (一)

内田武男

私がヤマモトというある三流会社の重役の指金ですし、屋を経営することになったのは、今から数えて、ざっと一年前になる。

このすし屋は大阪の心斎橋筋をはずれた人目のつかぬ小じんまりした場所が選ばれた。店の構えは小さかったが、奥行は広く、主人（ヤマモトをそう呼んでいた）が来店したときに使用する室と使用人の室のほかに、いくつかの小部屋が用意されていた。私は元来、すし職人で、江戸前の「にぎり」で年期を入れた前歴があり、それをヤマモトが利用したのである。

私とヤマモトが知り合ったのは軍隊であり当時、彼は海軍の先任下士官で私はその部下であった。私は彼のいわば「稚児さん」として可愛がられた関係が、そのまま戦後になっても切れず今日に到ったものである。戦争が終ると彼は何よりも私を一箇の貴重品のようにな軍隊から連れ出し、彼の身辺に関する一切の世話をやらせた。私は彼の男らしい女房役をおおせつかったわけである。私は彼の好みのままに六尺褌を日常しめるように命ぜられていた。外出する場合は人目をはばかって正常な服装を許されたが、家の中では褌一本で働くのである。ランニング・シャツと腹巻は

許されたが、彼のそばで仕えるときは必ず褌一つにならなければならない。私は彼の肥満した体を風呂場で流したり肩をもんだり、毎日が殆んど忙しい日程でぎっしりつまっていた。

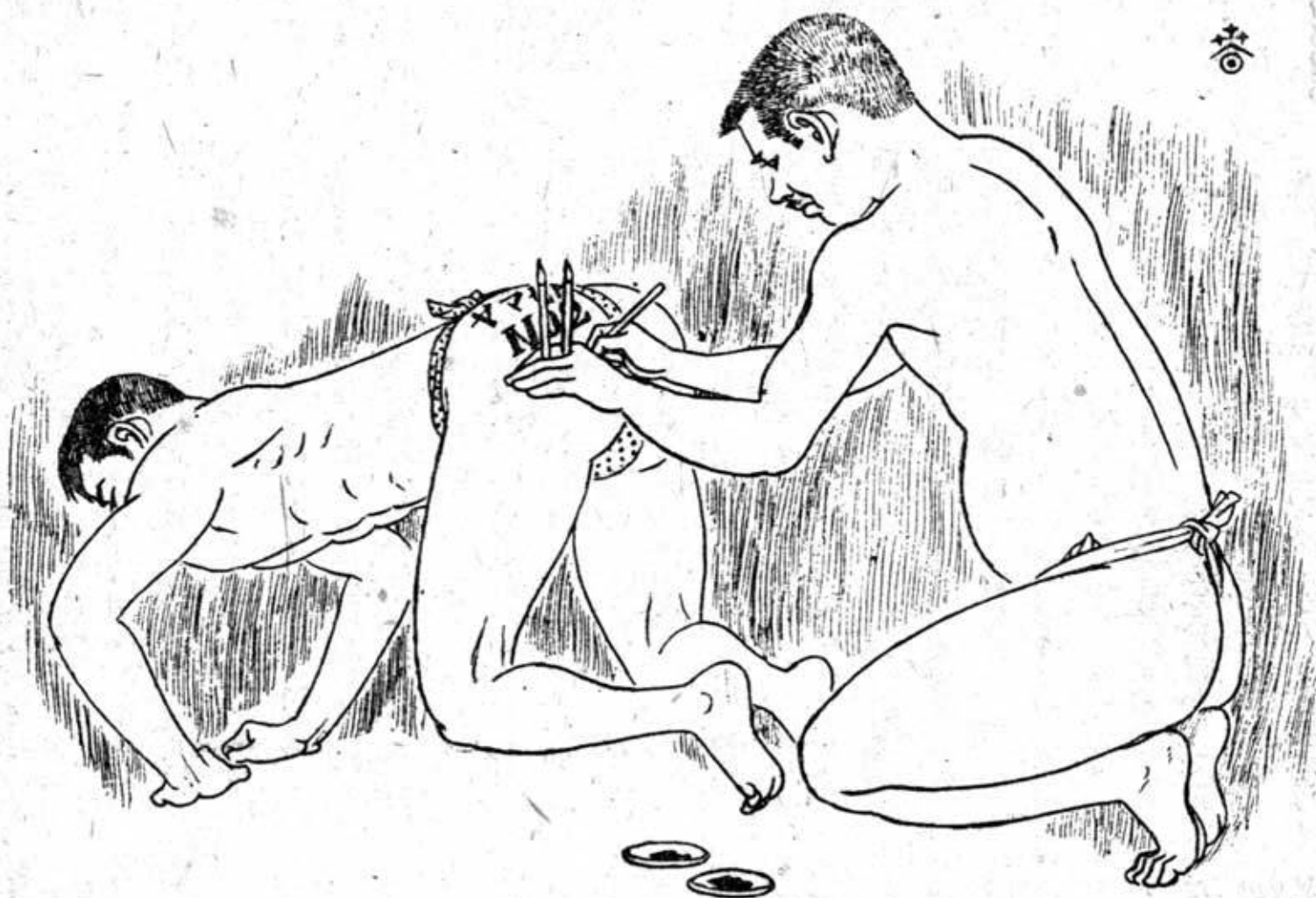
彼は私を、投げやりに「小僧」と呼んでいた。それ以外に私には名がないのも同然だった。彼が勤務先から帰ると私は即座に彼の処に駆けつけ、かいがいしく女房役よろしくやるのである。その間、彼の眼はきびしく私にそそがれる。なぜかという、彼が非常にしつと深く、私の体に異常（彼の嗅覚にもとずくところ）があると、それがはれるまで激しく折檻されるのである。私の体は、彼の帰宅と同時に検査されることになっていた。彼が着物に着換えてくつろぐと、間髪を入れず「お願いします」といって、その場に直立不動の姿勢をとらなければならぬ。彼は先ず、私の褌のしまり具合を入念に検査するのである。私は、彼のざらついた大きな手が褌の前袋に触れ背後の三つ又を引きあげると一種のスリルともつかぬ恐怖が背筋を走るのを感じる。なぜかという、三つ又のしまり具合や前袋のぴったりとしたふくらみは、彼の不在中、私の緊張した生活の反映である筈だからだ。

彼の割れ鐘をひびかすような声が落ちてくると、もはや狙われた餌物のように立ちすくんでしまう。

「この禪のさまは何だ」という怒声は、私には耳馴れた、しかも常に恐怖を呼び戻す音楽になっていた。

—そんな生活が数年続いた。彼の生活は事業が成功すると共に豊かになった。それと同時に彼の支配欲は私一人では満足できなくなった。

ある日、彼は一人の男を連れて来た。それは、公園で知り合った私よりいくつか年下の若い、しかも、がっしりした逞しい体の持主であった。その日から彼は私と同様に彼の身辺雑事を引き受けることになった。彼はヤマモトに豆絞りの禪を巾狭くしめるよう命ぜられ、当分、シャツなしの裸体を毎日さらさなければならなかった。ヤマモトは如何にも愉しそうに彼の動作を見守ることがしばしばだった。力一杯しめあげられた後禪は、筋肉の流動が如何にも男らしく美感を発散していた。この男の体には禪が丁度、体の一部のように



吸いついていた。特に廊下の掃き掃除は彼の仕事であった。大柄な体を四つん這いにして「廻れ、廻れ」という主人の号令で勢よく走り廻るのである。朝日に映えて美しく照り輝く彼の尻をヤマモトは如何にも満足そうに鞭で殴りつけた。「尻に力がいっとらん」という気合に調和するように、はずんだ息が床に吸いこまれてゆく。

—ヤマモトは彼の独占欲を象徴する一つの癖があった。私は彼の側近として仕えるようになって間もなく刺青を強制された。それは私の一方の尻に、それこそ墨痕鮮かに「ヤマモト一号」と刻みつけられた。彼はどこで覚えたか刺青の技術があり、このため私は殆んど三日間、苦しんだ。特にNOは朱をいれるので、その痛みは言語に絶するものであった。そこで新米の男も、しばらくするとヤマモトの支配下におさまった印として刺青をされることになった。日々の労働によって鍛えられた彼の体格は、はちきれような、しかも滑らかな日焼した肌でおおわれている。ヤマモトは私に介添えをさせ、毎

日、彼の尻たぶに針を刺しこんだ。男の筋肉のけいれんとうめきはヤマモトを喜ばせた。NO2の朱は特にゆっくりと入れた。

——男が新しくはいってから、ヤマモトの猜疑性は一層はげしくなった。彼にしてみれば私たち一人一人、彼につながる別個の品物でなければならなかった。したがって検査は、彼の入来と共に厳格になったことはいうまでもない。実際に彼の不在中、ソドミア化した感情のうずきを私自身、抑えかねることが、しばしばあった。しかし、ヤマモトへの忠誠と検査の厳しさを思うと、それも出来なかった。

——ある日、それは夏の仮借なき日差しが二階のヴェランダを焼きつけていた。NO2号になった男は、そこで汗を噴きあげながら板張りに磨きをかけていた。私は階下の用事を済まし、彼の「つや出し」を手伝うことになった。彼は教えられた通り尻を高くあげ両腕に力をいれて黙々と働いていた。汗と夏の日に光った彼の皮膚は、異様な美しさをたたえていた。私は彼と前後しながら、相互の尻を追いかける恰好になった。禪は、盛りあがる筋肉の流動を力強く統制していた。私は肩で大きく呼吸する彼の動作を通して、私の感情が

次第に彼に吸いつけられてゆくを感じた。私の尻を追う彼の態度にも同じ感情の兆がみられた。感情の接近は、もはや抑止できない強さで高まってゆく。彼が私の前に立ちただかると、私の眼は彼の前袋にそがれていた。

その日はヤマモトの荒々しい折檻の嵐の中に叩きこまれる運命にあった。彼の嗅覚は、すべてを見逃さなかった。私達は天井から逆さに吊り下げられた。禪の三つ又にかけられたフックは私の腹部を圧迫した。バッテリーの打撃が尻を隅どると、私は時計の振子のように左右に揺れた。彼は鉄の分銅を吊り下げられた。前歯にかけられた分銅が落ちると、即座にバッテリーが飛ぶように威嚇された。彼は脚を開き尻で安定をとりながら、長廊下をよちよちと歩かなければならない。ヤマモトはバッテリーを握りしめながら、後を追いつづけるのである。私は依然、逆吊りされたまま、この異様な光景を眺めなければならなかった。

私がヤマモトの命令ですし、屋を経営するようになったのは、その後、間もなくである。それは一号の私と二号の彼とを離すのが目的だったが、それだけではなく彼の欲望を満すためでもあった。それというのは、私たちのような本来のソドミアを相手とするだけでは

もはや欲望も充足できなくなったからでありつまり、正常な青年をソドミア化することによって快感を貪ろうというのである。これはまた、私にも非常な興味があった。

店に私が出るようになってから数日して二人の青年が連れられて来た。一人は高校卒と同時に没落した良家の子弟で、高額の借金の返済を労働をカタに行うという約束で連れてこられたものである。まだ少年らしい、あどけない風ぼうをたたえた、しかし筋肉質の、がっちりした骨組の青年だった。もう一人は東北出身の貧農で、如何にも素朴な感じを与えていた。彼等がはじめて店に来た日を、私は今でも、ありありとおぼえている。

彼等は場馴れしない、きよろきよろした不安な眼で帳場に正座していた。ヤマモトは、まったく御満悦の体で、何かと注意をこまかく与えていた。彼は、ときどき大ように笑いながら彼等の不安感を消すことにつとめていたが、一つ一つの言葉には相手をしばりつけてゆくトゲが含まれていた。最後に彼等は主人への絶対服従と、一号の私の指導で一人前になるまで、みっちり修業することを誓わせられた。

(次号へ続く)



マゾヒズム百景

馬場好男

第三十四景 あね、おとうと

昭和二十年の四月、大平洋戦争も日本の敗色を濃くして来た頃の事である。

齊藤光夫は、その前年、徴兵検査を受けたが肋膜炎がよくなったばかりの時だったし、又、眼が非常な近眼で左眼は殆んど見えない位だったから丙種となって当時としては世間に恥ずかしい刻印をおされたのである。処が彼も一億玉碎のスローガン通り遂に召集令状

即ち赤紙を受けたのだ。内心、戦争に行かずに済む事を、又、話にきく皇軍の軍隊内務班の暴虐的な真空地帯に入らずに済む事をよろこんでいた彼には、とんでもない大きなショックを此の赤紙でうけたのである。

こんな彼の事だから性格は柔弱で、口にくそしないが戦争など早くやめてくれたらいいと、いつも思っている非国民？の一人だったのだ。

彼には二ッ年上の姉がいて、此の姉は彼の

性格とは逆に、どちらかと云えば気性の強い大和撫子で女子青年隊の班長役など率先して買って出る程だった。薬局の商売をやっていた父母は、光夫の召集は一人の男の子だけに矢張りショックで、と云ってメソ／＼する事も出来ず、当の光夫自身も「来るとは思っていたが、とう／＼来たか。一つ頑張ってくるか」と父母や姉の前で快活に冗談の様に笑うのだったが、これは戦地に行きたくもないのに、さも嬉しそうに手を振って出征する者の

心境と同じになった。

・父母は光夫の細い身体が軍服をつけたらどうなる事かと案じたが親子でもそれが口に出せない程、戦争の冷い現実家は家の中にまで入りこんでいたのである。然し憂うつで陰うつな彼の気持と家の空気を、かき乱す様に明るくしたり、そして又、暗くしてゆくのは姉の昌子だった。

昌子は光夫の頬ぺたを両手でパタ／＼と軽く叩いて云った。

「光夫の此のやわらかい頬ぺたが軍隊で持つかしら。二等兵は、ぶたれて／＼顔がいびつになってしまふんだって」

これを聞いて光夫は、

「大丈夫だよ、今はそんなにひどくないよ」と不安をかき消す様に云ったが、父母は自分の口から云えなかった事を昌子が云ったので、改めて息子の顔を不びんそうに見るのだった。

召集日は日一日と迫って来て、もう明日となった。光夫は一人自分の部屋で大の字に寝転んでいたが、気の弱い彼には、話にきく軍隊は何か怖くて、と云って皆が万歳を叫んで送ってくれる期待にはそんな顔も出来ず、人に逢えば此の不吉な事に対して「おめでとう

御座います」と云われ、それに対して「有難う御座います。頑張つて来ます」と心にもないウソをつかされる矛盾に一人憤っていたのである。古年兵のリンチ、戦争、銃剣、そして死、そんな事を考えているうち、彼はガバツと、うつぶせになると声をころして泣き出した。今まで泣けそうに泣けなかった涙が、せきを切って、あとから／＼流れ出るのだ。

「う、うう」彼は声を殺して誰もいない家の中で泣きじゃくっていた——その時、ドスンと彼の背に馬乗りになって姉の昌子が跨ったのだ。

彼は驚いて両手で顔をかくしたが、姉は馬乗りのまま明るい声で、

「光ちゃん、大丈夫よ。私がきつと、あんたを軍隊生活が楽な様にしてあげる。だから心配しないで行くのよ。ね、これ以上、泣くんだったらお姉さんは本当に怒るからね。さア、上をむきなさい」

姉は馬のりのまま、光夫を仰向かせて胸の上に跨ったまま、彼を見下した。

「お姉さんはね、貴方をこうして随分ぶった事もあったけど、他の人にはそんな事はさせないわ。貴方のためにきつと力になってあげる。安心するのよ、いいわね」

光夫は姉の気性から、ひどく叱責されるかと思ったり、恥ずかしい気持で「一杯だったけど、もう何の抵抗もなく姉の脚にしがみついていたのだった。」

防諜、秘密、と家族の面会も殆んど許されずに、光夫らは或る部隊に配属されたが、彼の班の班長は鬼熊と称せられる位の猛者だった。

「貴様達に皇軍の真隨を教えてやるッ」

と木刀片手に大声で怒鳴られた時には光夫はもう生きた心地なく、身体に合わない軍服をつけて直立不動の姿勢で、みんなと共に内務班の中に並んでいた。

ところが入隊して翌朝の事である。古年兵に怒鳴られ乍ら一応、朝食を終えた時、此の鬼熊班長が、ごつい顔で光夫を呼んだのだ。

「斉藤、貴様は俺の身の廻りの事をやれ。いわば俺と貴様は戦友だ。判ったかッ」

と云ったあと、

「軍隊は怖い所じゃない。お前には俺がついているから安心しろ。古年兵達には話をつけてある。困った事があったら何でも云え」と彼にだけ云ったのである。

狐につままれた様に光夫は驚いたが、とにかく軍隊生活は無我夢中だった。内務班での

古年兵のリンチには不思議と彼はうまく除かれたし、鬼熊班長の暴力も彼の前では黙って素通りしてしまふのだ。

一カ月、二カ月、そして三カ月、彼は或る日、鬼熊班長と一緒に公用外出を命ぜられた。外の初年兵はまだくく外出などとてもないことだった。公用と云っても殆んど此の班長の私用の様なものであった。そして彼は此の時にはもう、此の鬼熊班長と姉の昌子が交際していた事を知らされていたのだ。彼自身も姉は美しい顔と姿態の持主と思っていたが、鬼熊班長からすると女神にも匹敵する程の熱の入れ様だったのである。

彼等二人は当然の様に光夫の家に行ったのだ。鬼熊班長を二階に招き乍ら昌子は、そつと光夫に耳うちした。

「あとで、そつと私達を覗きなさい。ふすまの内からね」

彼は何の事か判らなかつたが、饗応に転手古舞している父母の隙をみて、そつと二階に上った。彼の家は造りが父の自慢で、階段はミシリツと云う音一つたてない。そつと廊下からボソ／＼と姉と班長の喋る声をきき乍ら彼は、姉がわざとあけてあるらしい、ふすまの隙間に顔をおしつけたが

「？」正に奇怪な光景だった。髪もじゃの陽やけした野球の応援団長の様な怖い乍らも最近は親しみを感じていた此の鬼熊班長の顔は、班長の胸の上に馬乗りに跨っている昌子の両膝にびったりと挟まれて、姉の顔を女神でも伏しおがむ様な眼で見上げているのだ。

あの部隊でも有名な程の、男の中の男と云う鬼熊班長の胸の上に姉は跨り、おさえつけている。何と云う事だ。彼はゴクツと、息をツバでのみこみ乍ら抑えると、それと察したのか、昌子がふすまの隙間を見て、そつと片目をつむってみせた。

それからの光夫は元氣そのものだった。正

に気合の入った兵隊となつて、いざ戦地行と云う時に敗戦を迎えたのだった。

姉の昌子が青年団の班長をしていた事から軍事教練の将校を手ずるに此の班長を手中にした事はあとで知つたが、鬼熊と称されるほどの荒男を自分の膝下にふみしいた姉のてく、だは彼にも判らなかつた。

ただ、姉にはいつも、頭の方も口争いも、それから腕力の実力行使も勝てなかつたが、これでは当然と彼も又、姉を女神にあがめてしまったのである。勿論、鬼熊班長は現在では彼の義兄である。

＝ 懸 ＝ 賞 ＝

原 稿 募 集

告白と手記と体験

☆ 規定 ☆ ☆ 賞 金 ☆

- | | | | |
|----|------|-----|-----|
| 優作 | 一篇に付 | 一万円 | 若干篇 |
| 秀作 | 一篇に付 | 五千元 | 若干篇 |
| 佳作 | 一篇に付 | 二千元 | 若干篇 |
- 一、必ず未発表の自作であること。
 一、枚数に制限はありません。
 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。
 一、原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
 一、賞金は発表と同時に送りいたします。

連載第三次元小説

影の国

雪俊

遙

第八章 鉄砲背負う座長

その夜更け。踊子達の寢室から小さな荷物を抱えて、そっと抜け出した黒い人影があった。

ネッカチーフを被って紫のコートを着た人影は、暫く廊下の端に佇んで邸内の物音に耳を澄ませていたが、稽古場の耳門をあけて庭先へ降立ち、忍び足で玄関の方へ行った。

高い石塀の外からピューツと鋭く口笛が鳴る。

人影は目を光らせて急ぎ足になった。

しかし、玄関の傍まで来ると急に立ち停った。

八手^{やっで}の茂みの間から、二人の男が、のっそりと現れたのだ。

「この野郎。どうも様子がおかしいと思って夕方から見張ってたんだぜ」

上村の声だ。人影は助けを呼ぶ様に何やら大声で叫んだが、忽ち二人の男にとびかかられて、その場によるめき倒れた。

玄関の灯が点き、もう一人、加勢の男が飛び出した。

塀の外をバタバタと逃げて行く足音がした。逃亡者は抑えつけられ、コートを脱がされて、後手にヒシヒシと縛り上げられた。玄関

から射す灯の届く所まで引摺られ、ネックチーフをむしり取られた。うなだれた顔を掌でしゃくって起す。牝鹿の様な大きな澄んだ目が憎悪にキラキラ光っていた。いつも、珠子に責められる毒婦を連想させる目である。

塀外の足音を追って行った阿藤が戻って来た。

「畜生、逃げられた。表通りに車を待たせてあって、感附かれたと解った途端、さっさと久美なんかに見向もしないで逃げちまいやがった。車輛番号を確かめる暇もなかったよ」

「こいつ、先生の所へ連れて行こうぜ」

大柄な身体を藤色のワンピースでピッタリと包んで、後手に縛り上げられ、べったり地べたに座り込んで動かない久美の豊満な臀部を、仲井が力一杯、蹴飛ばした。

「立て」

久美は、うなだれていた顔を起し、諦めた様に立上った。縄尻を上村に取られて歩き出した。

翌朝、目が醒めた珠子達は洗面所へ行こうと南側の縁に出た途端庭先の痛ましい拷問劇を見て、一斉に声を挙げた。

粗朶の束を並べた上に仰向けに寝かされた久美が、豊かな胸の上に大きな石臼を載せられて苦しげに唸っていた。顔をのけぞって空を向いている鼻の穴には、ビッシリ蠟涙が詰められていた。胸を押しつけられ、鼻腔を塞がれた久美は、大きく口をあけハア、ハア、と辛そうに喘ぐ。時々、

「ウーン」

と呻いて、切なげな顔を一層のけぞらせる。可愛い顎が空に向ってそそり立ち、あけ放しの口の中で桃色の舌が軟体動物の様に、チ

ロチロとうごめいていた。

ピチツと身体に合った藤色ワンピースの裾が捲れて、逞ましい太腿がパンティのヨークの所までのぞいていた。足は縛られていないので、膝を立てたり伸したり、胸にのしかかる石臼の苦痛に耐える為、ひっきりなしに動いている。

石の重さで粗朶の中に食い込んでいる後手が、いかにも痛そうだ。「久美は昨日、逃げようとしたからお仕置しているんだ。みんな、よく見ておくんだぞ」

驚愕と恐怖に声も出ない六人の娘達を睨み廻し乍ら、高倉が言った。

朝食後、全員が稽古場に集められた。

久美が引たてられて来た。麻縄のひしひしと喰い込んだ胸から腕のあたり、藤色のワンピースが裂けて、白い肌着や栗色の素肌がのぞき、粗朶に引搔かれてみみず腫れになった所も見える。いつも一人飛び抜けてあでやかな久美だけに、その折檻姿は痛々しかった。

久美は高倉の前に正座させられた。

「久美。昨晚、車に乗って来た連中は、どこの奴等だ」

「……」

「東洋劇場の人かい」

座長が口を添えたが、久美は斜め前の床板を見詰めて頑固に押し黙っていた。

「強情な奴だな。よし、そうやって一人で頑張っているよ」

高倉は上村を呼んで何か囁いた。上村は直ぐ合点して、何かを取りに出て行った。

「こいつを裸にして、足の先まで縛ってしまえ」

高倉の下知で、仲井と阿藤が久美に飛びかかった。

藤色のワンピースが脱がされた。下には薄い革のベストを着ていた。ベストを取られ、ブラウスを剥がれると、久美は若草色の透き通ったナイロンのスリッパ一枚になった。

スリッパの肩紐が肩から落された。ブラジャーも外された。ストリッパーらしく黒いTの字の細いツンパをつけていた。

阿藤が、更に薄い革のブリーフをはかせた。

久美は憎悪で目をキラキラ光らせながら、強情に押し黙ってそれをはいた。かすかに革の匂いが漂う。「いつかの公演で、お前が兎跳びをやった時のパンティだ。舞台で本当に尻を笞打っても余り痛くない様に、わざと革を使って、お前に合わせて作った奴さ。今日は舞台の責めと違って本物だぞ。覚悟してろよ」

革ブリーフ一つきりの久美は、麻縄でギッチリと縛しめ上げられた。手は後手にされ、両足は揃えられ、腿と膝と足首とを固く縛り合わされた。黒ツンパを丸めて口の中に押し込まれ、上から赤いネッカチーフで



猿轡された。それから久美は素足で稽古場の冷たい床の上に立たされた。

阿藤が短靴を履いて、久美の後に廻る。尖った爪先で力一杯、踵を蹴った。その痛さは、頭のとっぺんから背骨の髄にまでジーンとしびれ渡る程だった。手も足も縛られているので、唯一の逃道はピョンと前へ跳んで逃げる事だ。

久美は赤い猿轡をはめられた顔を一生懸命、上下させ、ギッシリ縛られた豊満な肉体をくねらせ、ピョン、ピョンと前へ跳んだ。

跳んでも跳んでも、追いかけて踵を蹴られるので、兎の様にピョンピョン跳びながら、久美は稽古場の中を二回も三回もぐるぐる廻った。時々かすかに咽喉が鳴った。牝鹿の様な目から大粒の涙がホロホロこぼれ落ちる。

足首から下は播粉木の様にしびれてしまつて、久美は時々、五尺四寸の身体をボキリと折る様な恰好で前のめりに倒れた。仲井は、その度に引き起して真直ぐ立たせ、又、「コイツ！」

と掛声をかけて、久美の踵を蹴った。

踵は、両方とも皮が破れ、血塗れになった。爪先で跳ぶので白い足の裏がチラチラのぞいたが、そこにも鮮血が滴り流れ、遂に久美はバツたり倒れた。腰の力が抜け、足先は無感覚にな

うて、起しても起きられなくなってしまった。肉付きの良い広い背中が大きく喘いでいた。無言のまま、いかにも苦しげに悶えているのが、かえって凄惨だった。薄い革のパンツがキッチリ豊かな臀部を引締め乍ら覆っていて、体を動かす度に微妙な筋肉の動きが誇張されて、細部までハッキリ見えた。露わな臀部の輪郭が、見物者達にまだまだ責め足りない渴きを感じさせた。

猿轡を解かれると、久美は苦しい物でも吐き出す様に口中から、唾液に濡れてネットリした黒ツンパを吐き出した。それから悲痛なすすり声を放って泣いた。

高倉は暫く泣かせておいてから、久美に

「どこから引抜かれる所だったんだ」

と又、訊いた。驚いたことに久美はシクシク泣き乍ら、まだ強情に、かぶりを振った。

その時、漸く上村が帰った。

彼は、わざわざ劇場へ行って、大道具倉庫から磔柱の大きいのを運んで来たのだ。

磔刑台は庭先に深く立てられた。柱の下に石臼を置き、久美はその上に立たされた。後手の縄だけが外され、胴体に太いロープを巻きつけて、久美の身体は、爪先が石臼の上三寸位に吊上る様に、磔刑台の縦柱に括りつけられた。五十四キロの豊かな女体の重味を支えきれず、二本のロープはギュウっと、久美の胴中にのめり込んで行った。拇指程の太いロープだが、肉体美の久美の肌に埋ると、小柄な女を縛った細引位にしか見えない。

上村が火のついた百匁蠟燭を二本、自由な久美の掌に握ませ、腕を水平に伸ばさせた。手首、肘、二の腕、肩の上に二本宛、合計八

本の大型のお燈明蠟燭を立てた。

「さあ、腕が動く」と蠟燭が傾いて、熱い蠟涙で腕の肌が焦げるぞ」

久美は細面の顔を仰向けて、ぐったりと死んだ様になっていた。仲井が久美のハイヒールを、その口にくわえさせた。泥のついた爪先の部分を、久美は温和しく前歯で噛んで支え、すすり泣いた。

最後の仕上げは酷かった。三寸位の、先の鋭く光った円錐型の木の二つ、久美の爪先の下に置いたのだ。錐の様に尖った先端部は両足の拇指の腹の下に当てられた。

吊された時は石臼との間隙は三寸位だったが、スラリと伸びきった鞭の様にしなやかな長身の割に、着衣を剥ぐと意外に肥えている久美の身体を吊したので、重味でズンと下っていた。そこへ三寸の円錐体を入れられると、錐の先が指腹の皮膚に突き刺さった。最前の兎跳びで、踝の関節が動かせなくなった。その上、足首から太腿までは麻紐で固く縛られている両足は棒の様に動かなかった。

胸と腹とを吊縄で締め上げられる苦しさに、爪先に力を入れると柔かな拇指の腹に錐の様に細い円錐が一層、突き刺さる。痛さに思わず悲鳴を上げると、口にくわえさせられていたハイヒールが落ちた。

ピシリッ。

と答打たれて、又、ハイヒールをくわえさせられる。暫く我慢しているが、吊縄の苦しさに又、爪先に力が入ってしまう。指の肉に突き刺さっていた円錐が、待っていた様に、ズブッと更に深く突き進んで来る。キーンとむき出しの神経に電流を通される様な痛さが頭まで突っ走る。久美の美しい顔が引きつった。

「痛ッ」

ポトリ。

ピシッ。

色こそ浅黒いが、久美の身体は傍で見ると気持ちよく肥えていた。珠子の様な堅肥りではない。見るからに柔らかそうな脂肪肉がタツプリ附いていた。それでいて遠目にはスナナリして、いかにも十九才の乙女らしい清純な姿体だった。答打つ男達には又とない魅力のあるいけにえなのだ。

又、ハイヒールをくわえさせる。黒いしほ革の靴の上に、少女の暖い涙がポタポタと落ちた。

その内に腕の力が緩んで、熱い蠟涙がツ、と落ちて来て、腕や肩の肌に、チーンとしみる様な熱感を与える。

腕の蠟燭と、口にくわえたハイヒールと、胸と腹のロープ。太腿や臀を叩く答。指先の裏の円錐と、四方八方から絶え間、切れ目もない責めが続けられて、百六十三種の長身も弱りきり、ぐったりして来た。もう一時間もこの複雑な凝った折檻が続いたろうか。目の前が時々真暗になる。そうかと思うと、チカチカと無数の銀の矢が頭の芯に向って飛んで来た。人一倍、強健な逞ましい身体に自信満々だった久美も、責められて弱って来るにつれて自信を失って不安になった。すると、お仕置の痛さが骨を刺す激痛となつて一層、身に泌みた。激痛が氣になると錯乱しそうだった。

高倉は久美の弱り工合を、じっと見ていた。

頃合を見計らつてツカツカと久美の前に進み、ガクガク震える顎で辛うじてくわえられているハイヒールを口から引抜いた。

落したと思つて、目を閉じて呻いていた久美がハッと目をあける。そのオドオドした表情。一晩中、吊されていても氣丈に屹と顔を起

している久美をよく知っているだけに、高倉は、いい様のない征服の快さを覚えた。

「どこに引抜かれる所だったのだ。いえッ」

大喝された勢いに押されて、久美はとうとう口を割った。呻く様な声だった。

「大京映画です」

「そうか。そんな所だろうと思つた。俺が恐れながら、と訴え出たら、お前は逆磔だぞ。奴隷の身分も忘れて太い奴だ」

「先生、勘忍して下さい。もう決して逃げようなんて考えません」
「殺すのも可哀想だから逆磔は許してやる。その代り今日から当分、檻の中に監禁だ。舞台の責めはお前だけトリックなしの本責めにする。いいな。オイ、さぎり」

と高倉は座長の名を呼んだ。

「ハイ」

「久美が倒れたら、すぐ珠子を代役に使える様に仕込んでおけ」

「ハイ」

久美は磔台から下されたが、その下に戸を開いて待っていたのは六面全部、鉄棒で出来ている車附きの檻だった。久美は手足に環をつけられ、鎖を通された。首には首輪をされた。

上村が髪の毛を驚擱みにして這わせた。

「入れ」

「ヒーッ。カ、勘忍して下さい。こんな獣を入れる所へ人間を入れるなんて酷いわ。アッ」

仲井と阿藤に力一杯、蹴りつけられて、無理矢理、檻の中へ追い込まれた。

檻は小さいので背中がつかえて立ち上る事は出来ない。豊かな背肌鉄棒が喰込んで、焼網にかかった魚の様。四つん這いの身体をくねらせて久美は烈しく泣いた。ガチャリ、ガチャリと、その度に鎖が鳴った。手足の鎖も首輪の鎖も適当な位置で鉄棒に繋ぎ留められた。

さ、さ、さがピンと南京錠をかけて、

「さあ、もう小屋入りの時間よ。久美ちゃんの檻は男の人達で引張って行って頂戴」

檻の前には太い綱が附いていて、男達がそれを引張ると、綱のもとの方に結んである鈴がチリン、チリンと鳴って女の曳き廻しを告げた。

日の出町の盛り場に出ると、通行人はもとより、デパートや喫茶店の中からまで人が飛び出して来て、泣いている久美を羨しそうに見物している。

「逃亡奴隷の私刑よ」

人に訊かれてエミが大声で答えている。交通警察が近附いて来たが、その声を聞くと、すぐ納得して戻って行った。

「金の城」のいい宣伝だわ」

さ、さ、さが京人形の様に優美な顔に似ぬ残酷な事をいった。

その夜、久美は檻に入ったまま縁の下で泣いていた。うずくまった身体は至る所、生々しい答傷で腫れていた。舞台上答打つ時は、普通、厚布地のパンツをはかせておいて、そこにだけ答を当て、ピシリと大きな音を出すのだが、彼女だけは素肌の部分だけを狙い打ちされた。それも男の力一杯で撲るので、ピシリッ、ピシリッと鋭い音がして、若い女の肌に生々しいみみず腫れが見ている中に増え

て行くので、観客は大喜びだった。一芝居終って楽屋裏の通路に置き放しの檻の中に入っていると、打たれた傷がズキズキ疼いた。通いの連中に棒で突かれたり、鼻を掴み上げられたり、楽屋でも気を許して居られない。二度目の芝居からは、脚本にないのに舞台上でハイヒールをくわえさせられ、女憲兵の太い帯革で打たれた。そして夜は縁の下の檻の中。

明るい籠燈の光が闇の中から射して来た。泣いた顔を上げると、鍵が外され脚に荒縄を巻きつけられて這ったまま曳きずり出された。外へ出ると荒縄はそのまま、首輪を外されて首にも荒縄を巻かれた。

「さあ稽古場へ来い」

高倉が手荒く首縄を曳いて大腿に歩き出した。兎跳びの跡がまだズキズキするので久美はその速度について行けず、上体が前に傾く。首輪の擦り跡に荒縄のケバが突き刺さると、飛び上る程痛い。座長がトネリコの答でビシビシと背中を叩きながら後から蹤いて来た。

踊子達は寝ていたが、ナナと珠子だけ寝る事を許されずに天井の鉄の釣金具からぶら下っていた。久美が倒れたら代役をやらねばならぬので珠子はその稽古だ。しかし、後手を水平に縛られるあのスタイルだけは、とてもまだ無理なので、エミ、桂子、久美に次いで古いナナにこの機会に稽古させていた。二人は白い顔を異様に歪め、脂汗を滴らせて呻いていた。

久美は珠子の足許に跪かされた。首縄は、足首を行儀よく揃えて縛られている珠子の脚に結びつけた。下向きの爪先が久美の目の前にあった。白い芋虫の様に足指が蠢く。

久美の背は前に倒され男に両手を後手に捻じ上げられ、手首に喰

い込む鉄環が外された。両手首を後手に縛り合わせ、縄尻を自分の口にくわえ、別の縄を久美の二の腕から肘と巻きつけた。久美は最初、何をされるか解らなかつたので、行儀よく正座したまま身を倒し、うつ向いて目の前三寸位の所に迫った床板を見詰めていた。

右の腕にも左の腕にも縄を掛けると、高倉夫妻がそれを、ぐいッ、ぐいッと引張って二の腕と肘とを少し宛、近附け始めた。関節も外さず生身の腕を真二つに重ねようというのだから、これは痛い。痛かつた。

「あー、あーッ。先生。勘忍……。ツウッ」

久美は上体を一層、前に倒して悲鳴を上げた。しかし首縄を頭上の珠子の脚に結かれているので、絞首刑の様に首が締って、目が白黒。

柔らかな少女の腕が、ほんの十五度か二十度位の角度まで曲ると、それから先へ折り曲げるには仲々力が要った。

「いいかい。ソラ、ヨイシヨ」

「いいわよ。ハイ、ヨイシヨ」

二人は掛声を掛けて久美の腕縄をぐい、ぐいと締めつける。その度に久美は歯を喰いしぼり、目と眉を狐の様に細く釣上げた顔をのけぞらせ、唸った。骨がミシミシ鳴っている。

「ウッ。グウッ。ギャアッ。ゲエッ。クッ」

栗色の額は蒼ざめ、唇は開いた儘ブルブル震えた。冷たい脂汗が体をじっとり湿らせ、全身から責められる女肌独特の異様な脂の匂いがムツと立ちこめる。顔は蒼白になり、カッと大きな目を剥く。骨がポキポキ鳴った。口の周りに白く唾液が泡になって噴き出され、くっついていた。

完全に水平後手にしてしまふと、二人はパツと責^{せめ}から離れた。長身を三重四重に折疊んで座った犠牲だけが、そこで獣の様に低く呻き続けていた。蒼白な背中。脂汗の匂い。

「出来ないことはないな、さざり」

「ええ。でも何日、保つかしら」

「いいさ。動けなくなるまで、この娘は舞台の上で責め抜くんのだ。客は喜ぶだろう」

高倉は強い口調でいった。

久美を檻に戻して居間に戻ると、高倉は書きかけの原稿用紙に向つた。次の芝居の脚本である。若い時は、この国のシェークスピアになるのだという野心に燃えていた彼も、今では場末の小劇場のバアレスクで、お山の大将に納まり、結構、満足してしまつていた。そういう脚本だから凄^{すご}い勢いでブンブン書けた。

薄いピンクの、清楚な中にムンと色気のこもる浴衣風の衣服に着換えたさざりが茶を運んで来た。

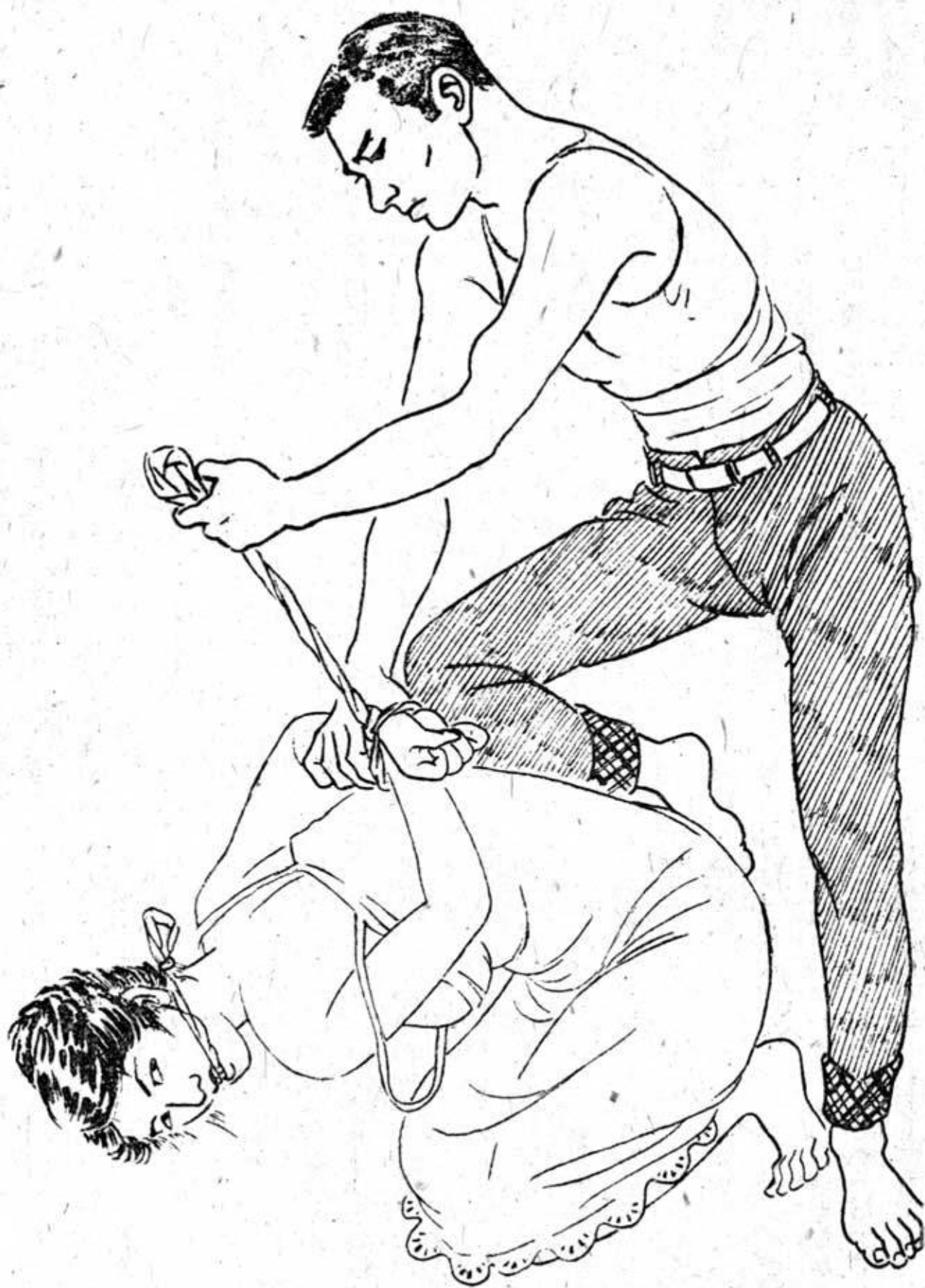
「大京映画じゃ、久美ちゃんの事をどう思っているかしらねえ。もう要らないと思つてゐるかしら」

「久美が何れは口を割らされると見ているだろうからな。もうあきらめて手を引くだろう」

「百万なんて少し吹っ掛け過ぎたわね。もともと、あの子は十六の歳に二十万で買った子でしょう。七十万位で手を打っておけば、京映だって只で誘拐しようと思えなかつたと思ふわ」

「そりゃ、芸も仕込んでやったが、大分稼いで貰ったんだから、それ位で映画会社へ転売してもよかつたさ。以前ならね。しかし今は

とにかく東洋劇場という強敵が日の出町にも進出して来たんだからね。向うは大資本に物をいわせて、芸の巧い、五尺三、四寸級の踊子ばかり十数人も揃えているのに、此方は小劇場の悲しさ、専属で三寸以上は、お久美とお照だけ。併もお照はこの四月までセーラー



「冗談言うな。今月の壺焼の受けてること。さ、ざりがバタフライ附けたのも責め場を演じるのも何年ぶりだろうね。それであれだけ客が沸くし、拷問の迫力に惹き込まれるのだから大した物だよ。結局、東洋劇場に対抗するには、さぎりの責めをだすより仕方がないのだ

服を着ていた素人同然の娘だからね。幾らヴァンプしか出来ない柄でも、この危機に久美を手放す訳には行かないよ。少し痛めつけたら嚴重に監視し乍らでも、もっと稼いで貰わなくちゃ」

「来月の芝居じゃ、久美ちゃん使わないの」

「一応キャストに組んであるけど、責め潰した場合の事も考えてある」

「珠ちゃんじゃ、まだ大役は無理だし。エミちゃんは面がまずいし……困るわねえ」

「来月もさ、ざりに熱演して貰うより手がない」

「私みたいなお婆ちゃんのお仕置じゃあね」

なあ」

「じゃあ、これから毎月あんな役を私がするの？ いやよ私。約束が違いますわ、パパさん」

「仕方ないじゃないか。先月と今月との入りを比べてみるよ。座長が責められると聞いただけで、遠退いた客がワツと戻って来たんだ」
「嫌だわ私。皆、私をニヤニヤ笑って涎を垂らさんばかりの顔で見てるのよ。パパさんだって私をそんなに羞しめていい気持がして」
「しかし長年、日の出町の名物だった『金の城』を潰す訳には行かんからね。男には仕事があるさ」

「来月は仕方ありませんけど、再来月は元通り絶対、脱ぐ必要のない役を頂くわ」

「そんなことは俺が決める」

「私にだって決める権利はあるわ。私が座長ですもの」

「バカ、いい気になるな。何という目で俺を睨むんだ。こいつ。大分甘やかしたので、すっかり図に乗りやがった」

高倉は、いきなりさぎりの腕を掴んで引寄せ、その手を逆手にねじ上げた。

「あッ、痛ッ。ウウッ。ウーン」

「役についてツベコベ言う事は許さんぞ」

「で、でも……、私は貴方の奴隷じゃないわ」

「此奴ッ。奴隷ではないが妻だろう。夫は妻を奴隷同然。いやそれ以下にだって扱える権利が民法で保証されているんだぞ。殺しさえしなければな。俺は今迄それを行使しなかっただけなのだ。図に乗るな」

「フンだ。いつもいい役だけやるからって、私を奥さんにする時、

誓ったのは一体、誰よ」

「畜生、俺を本気で怒らせたいのか」

猛り立った高倉は、さぎりの細い脰を締めつけた赤い扱帯をほどくと、中程を細く燃って、抵抗するさぎりの口の間に押しつけた。

「ウ、ウ、ウ」

齒を喰いしばって、それを口中に押込まれまいと必死のさぎり。蒼ざめ引き緊った顔が右に左に高倉の手を逃れようとする。男は女の胸の上に馬乗りになった。鼻筋の通った小さな恰好の良い鼻を、ギョーンと抓み上げた。

「アッ、アッ。ウーン」

抓んだ鼻を吊上げたので思わず女は抵抗を止めた。顔を真上に向けて首を起し、ぐみの様な艶やかな唇ばかりか、直白な齒まで開いてしまった。白い齒の奥で少女の様に可愛い桃色の舌が苦しげにうごめく。その齒の間へ細く燃った部分を挟み、両端を掴んでギョーンと引張り乍ら耳の下から後頭部へ廻す。細く燃れた紅い扱帯は唇の端から白い頬にまで痛ましく喰い込んだ。後頭部でしっかり縛っておいてから帯幅を拡げ、顔の大部分を包んでぐるぐる巻きつけてしまった。さぎりの小さな卵型の顔は目までかくれて、紅い覆面をした様だ。白い富士額の上の方だけが紅覆面の下からのぞいていた。それでもまだ長いので、最後に扱帯の余りを後頭部で、お太鼓に結んだ。

目も見えず声も立てられない癖にさぎり、は、まだ身を揉んで高倉の手から逃れようとしていた。身をよじる度に薄いピンクの着物がズルズルとずり落ちてレースの肌着に包まれた半裸姿を露わにして行った。

覆面し終ると、高倉はさぎりを乱暴に抱き起した。その勢いで、はだけきつた衣服がスリと肩から抜けて落ちた。

白いスリッパに包まれた熱れきつた三十女の半裸体が、その下から現れた。高倉は一旦、さぎりを立上らせ、二、三步前へ移動させて、纏いついていた衣服を、完全に体から引離した。

頬の千切れる様な厳しい猿轡がさぎりの心突き崩したのか、裸にされた羞恥で抵抗力を失ったのか、或いはもうされるままになっているより仕方ないと観念したのか、さぎりは白いスリッパ一枚で畳の上に蹲って温和しくなった。奇妙にも顔が見えないのに恥しうにうなだれている。

さぎりの肩は少女の様に丸く、白い肉が盛り上っていた。それもよく締っていて、抓むとムッチリした弾力が指先に抵抗した。腿も豊かで美しい丸味を持ち、膝の上に珠子に負けない深い笑窪が凹んで、肌は滑らかでツヤツヤと良く光っていた。

「俺は今迄お前を『金の城』に繋ぎ止めておきたいので随分、甘やかしていた。しかし今後の小屋の事を考えると、お前に対する態度も考え直した方がいい様だ」

さぎりは、うなだれて聞いていた。男の手が伸びて雪白の肩の肉に軽く喰い込んだスリッパの紐を、二の腕の脇へ滑らせた。

右も、左も。

さぎりは嫌ッという様に一寸、身を震わせたが自分の夫なので暴れもしなかった。二の腕を驚掴みにして肩紐から腕を抜く。

「来月の公演で、さぎりは鉄砲を背負うのだ。しかし、さぎりはもう何年も背負った事はないから、少し練習させておく必要があるな」夜も遅いので高倉は低声で囁く様にいった。扱帯で顔を包まれた

さぎりの耳には、かえって不気味に響いた。

鉄砲を背負わされる……。

さぎりは、ビクリと身を震わせ顔を上げた。

目を恐怖で一杯に見開いて、高倉の声のするあたりを瞬きもせず見上げたが、無論、高倉には見えない。

しかし、その気配だけはよく解った。

口辺に残忍な薄笑いを浮べて高倉は、そっと机の傍に置いてある竹刀を引寄せた。

さぎりが暴れるか逃げようとするかしたら、懲しめに思いきり叩きのめしてやろうと思っていた。目標は充分、大きい。

さぎりは猶も顔を上げ、豊かな胸を大きく波打たせていたが、急にガックリ首を垂れた。肥った膝を並べて行儀よく座り直す。今更、暴れても仕様がなと思ったのだ。第一、そんな事したら、寝静まった座員を起して、夫に折檻される妻の惨めな姿を皆に見せなければならぬ。座長としての誇りがそんな事を許さない。勝気なだけに彼女は健気に折檻に耐える決心をした。舌も動かさない程強烈な猿轡をはめられている事も、かえって幸いだ。どんなに痛くても悲鳴の挙げ様がない。無言のまま誰にも知られず、ひっそりと死ぬ様な辛いお仕置を夫の手から受けるのだ……。そう思うとジーンと熱い物がこみ上げて来て、扱帯の目の辺りが涙で湿って来た。

高倉は、竹刀でさぎりの顎を下からしゃくって顔を上げさせた。おだやかな声になって。

「流石は、さぎりだ。素直に受ける気だね」

竹刀に顎を載せたまま、こっくりと肯いた。

「じゃあ、一人で用意をしてみろ」

手の手首とは、背筋の上でピッタリ背合わせに重なった。男が一寸でも力を緩めれば直ぐに弾け離れそうな、その手首を押えつけて、ギリギリと器用に括り上げた。

覆面は、いつか鼻の半ば近くまで捲れ下っていた。額も目の下も白い皮膚が真赤。大きく開いた目は激痛に瞬きも忘れ、透明な涙が盛り上り、溢れて頬へ流れ落ち覆面を濡らしていた。さしも嚴重な猿轡も苦痛に怒張する筋肉の内圧力のため自然に緩んで来てしまったのだ。

「ムウッ、ムウッ」

抑えきれぬ呻き声が紅の扱帯の下から間断なく洩れて来る。男は女の黒髪を驚嘆みにして上へ引張った。両腕を背中で斜め一本背負いに縛られた儘、さぎりは上体を吊り起された。お臀が踵から浮くと、白い肌をよじっていた苦悶のうねりが小さくなった。

高倉は、さぎりの被虐姿体を満足そうに見やった。前から後から何度も点検した。両腕が右の肩から左の脇下へ斜め一直線を描いて丸く持ち上っている。その腕恰好が丁度、兵隊が鉄砲を背負った形に似てるので、鉄砲背負いとか鉄砲縛りとか言われる酷責である。腕を少しずつ深く縛って円を浅くして行けば、幾らでも苦しめる事が出来るし、腕と背中の中に薪の束などを挟み背後の腕を弓なりにすると、大の男でさえ恥も見栄もなく号泣する程だ。

しかし高倉は今、さぎりをそこまで責め苛む気にはならない。先刻の反逆行為に対する仕置は、もう充分だ。責めに熱中したがさぎりの白い身体が眩しい程蠱惑的で拷問を続行する気を失わせた。

翌朝、稽古場に集った一同は、高倉がさぎりを引立てて来た姿を見て仰天した。さぎりは運動選手の穿く小さなサポーターパンツ一

枚の姿で手は後手に廻され、手首と腹部を洗濯用ロープで縛られ、ケースは口にくわえさせられている。

あの勝気な座長が京人形のように美しく整った顔を真赧に染め、こんな姿で座員達の前に曳出される恥しさに、うつむいた顔を上げる事も出来ない様子。後から来る高倉は右手に割竹の笞を持って、キリリと引緊った小さな白いサポーターパンツの上から、

ビシッ、ビシッ

と笞を打ち下して、さぎりを引立てる。

誰もまだ座長のそんな哀れな姿を今まで一度も見た事がないので、皆、目を丸くしてさぎりの全身を見詰めていた。吊るされた珠子も、ナナや檻の中の久美も、その上品な美しさに秘かに憧憬さえ感じていた座長のあられもない裸同然で縛られた姿を突然、稽古場で見せつけられ、奇蹟でも起った様に呆然と目を見張っていた。皆の真中まで座長を引立てて来ると、高倉はさぎりのムッチリした逞ましい左太腿の外側を、力一杯、割れ竹の笞で打った。

「停れ」

ビシーリッ。

烈しい笞音と共に、うなだれた全身がピクンと震えた。豊満な外腿に薄い紅紫色の笞跡が鮮やかに残った。座長は温和しくキチンと足を揃えて立停る。続いて又、笞が飛んだ。

ビシーリッ。

「顔を上げろ」

優しく美しい顔に言い様のない羞恥と怨恨をこめて座長は顔を上げた。小さな下唇を歯で噛みしめて、口惜しそうに正面の壁にはめ込まれた鏡の中の自分の顔を睨んでいる。ゴクリ、と上村が生唾を

呑んだ。

「今日からこの女にも拷問訓練を施す事にした。座長だと思つて遠慮なんかするなよ」

高倉が宣言した。さきりの白い顔が耐えかねた様に下を向く。と見るや、すぐに高倉の手中の笞が一旋、右太腿の外側に唸って飛んだ。

ピシーリッ。

「誰が下を向けと言つた」

さきりは改めて血が出る程、下唇を噛んだ。

「先生……」

純朴な阿藤が口を開きかけて絶句した。何と言つていいのか解らないのだ。昨日まで彼は、五年前、始めて履歴書を持って「金の城」へ来た時と少しも変わらない気持で、この美しい座長を尊敬していたのに。高倉は上村を呼んだ。

「さきりの後へ廻ってロープを外せ」

恰好の良い腹部に喰込んだロープが、ほどかれた。白絹の様な肌に縄目の跡が凹んでいる。

「菱縄を掛けてやれ。さきりは両手を頭上へ上げる。指を全部開いて掌を上に向ける」

さきりが命じられた姿勢を取ると、上村が真白な肌を目の前に晒している体に、ピッ、ピッ、と厳しく黒縄を打ち始めた。流石に顔を上げる事が出来ず、縄の幾らでも埋って行く体ばかり見ている。

「やめてエ、パパさん」

我慢出来なくなつたか、ホールドアップした儘、さきりは叫んだ。口からケースが落ちた。

ピシーリッ。

高倉は容赦なく笞を振つた。エミに命じてケースは又、ぐみの唇にくわえ直さす。今にも泣出しそうな目が、唇を開いてケースをくわえる時、チラッとエミを見た。エミは気の毒そうに慌てて視線を逸らせた。菱縄がかかった。

「今度は臀縄を掛けてみる。さきり、廻れ右」

ピシーリッ。

ムックリ盛り上げる様な白い太腿に左右対照に笞跡が腫れ上っている。廻れ右をすると赤い筋で彩られた太腿の肉が揺れる様に動いた。腹に菱縄を掛けたので純白なサポーターパンツの上から黒紐がT字型に座長の臀を締上げていた。それとは別に、下から上へ左右対照に斜縄が対角線を描いてのめり込む。右も左も三筋宛、縄が掛つた。腹の菱縄をピンと張っておくため、腰には既に大きく十文字の縄が打つてある。臀縄を打ち終つた上村は、縄目の余りをその縦縄に絡ませて縄玉を作ってから背中まで持つて来た。

「さきり、手を上げたままで右膝をつくんだ」

ピシーリッ。

「今度は左膝も。爪先を立てて座れ」

ピシーリッ。

「エミと桂子。さきりが暴れられない様に、太腿の上に小蠟燭を一杯立てる。蠟燭が傾くか。じゃ真直ぐ立つ様にさきりは爪先を開いて臀をその間から、床へ落せ」

ピシーリッ。

小さな蠟燭が何本も立つと、照代とユカが傍から次々と火を灯して行く。整った美貌を凜然と起し、口にケースをくわえ、目を閉じ

て何ともない様な平静な表情で居るが、飽くまでそれは座長の權威を保つ虚勢だった。内心の屈辱感に加虐者がすべて丹精して芸を教えた弟子達であるだけに、言い様もなかった。

上村と仲井が、ほっそりした手首をムンズと掴んで肩の上と腋の下から両手を斜めに後手にした。昨晚と同じ責めが繰り返された。白魚の指先が背中の中で交り合う頃から、さざり、は烈しく身をよじって悶えた。海老の様に身を曲げた。床に胸をこすりつけてビクン、ビクンと白い胴をくねり曲げた。太腿の蠟燭が次々に倒れ、熱い蠟涙が肌の上を流れ、冷えて肌にこびりつく。倒れてもまだ火の消えぬ物もあって、肌の焼ける音が、ジリ、ジリと秋の虫の声の様に鳴った。

「熱、熱。痛、痛。アッ、ヒューッ」
口のケースを落し、美しい顔を床に這わせて座長は呻いた。ギュッと筋肉が緊張する。その時、彼女の手首は盛上った肩胛骨の辺りで逆向きに合わされ、残ったロープの先でキリキリと縛り上げられていた。

高倉が髪を掴んで曳きずり起した。のけぞった腹部が黒い菱縄を打たれた儘、漁船に釣上げられ放り出された巨魚の腹部の様に、妖しくくねっていた。苦しげに喘いでいるさざり、の、ぶざまな姿を見守る目は、もう一つとして、あの済まなそうな視線を残していなかった。拷問は彼等の前にあった座長の身体を只の女の身体に変えていた。阿藤の目にさえも……。

(次号へ続く)

掲載予定作品一覧

遠い昔に夢を求めて	松井 籟子
初夏の時代劇縛り映画	東山 映史
女相撲と女斗美	雲崎 京人
女装に魅せられて	朽木 博
私の 浣腸	春村 玲子
昼と夜と	二俣志津子
脱腸 帯記	森 太一
私のサジ・レポート	椿 弓子
告白 口を聞く犬	左江木 勝
鼻と紐と私	中村 良子
特高拷問史(男責)	庄田美起夫
私のマゾスクラップ	馬化三太郎
花の男責	菅 良太

時代小説 夏草ごよみ	多山 皓二
奇妙な通信	滝見 章仁
手記 赤い羽根	須藤 律夫
檻の時間	栗瀬 長
女人哀詩	春川みどり
君に捧げし乳房なれども	東町 三郎
夕陽を染める乙女たち	藤山 秀緒
太平洋にかける橋	藤山 秀緒
オールドビーデビル(悪魔の酒)芳野眉美	林 弓志雄
色魔の幻想	才 昭吾
告白 愉しき敗北	原 研吉
女性緊縛の夢と現	中村美佐代
腰紐について	藤井 清典
嫂を縛るの記	

伝言板

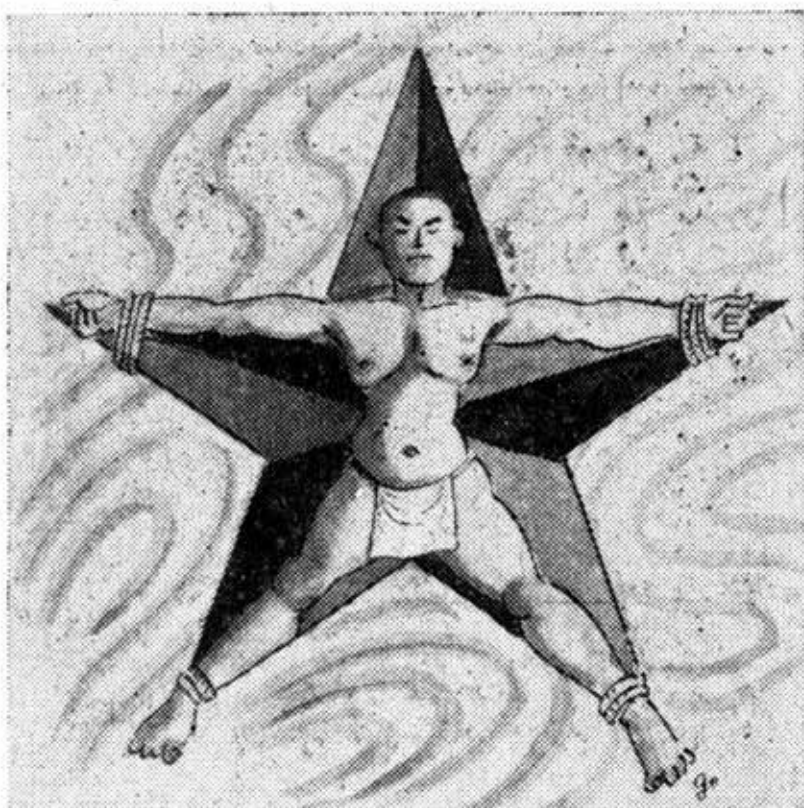
「バスガールの運命」をお送り下さった滝畑二郎氏へ。今月号に掲載しましたが「規子の夫婦生活について」はお便りにありましたように出来上った分だけお送り下されば結構です。○沼正三氏へ。四月号、五月号は発売と同時に二部宛お送りしましたが御便りによるとお手元に届かなかったようですね。○南条三吉氏へ至急御住所をお知らせ下さい。○最近局留発送のもので留置期間満了のため返戻になるものが割合多くあります。局留にて未受領の方は御照会下さい。

回想録

縄の無い緊縛

—日本軍隊の嗜虐性について—

菅 良 太



戦時下、各占領地域に於ける日本軍の捕虜や無辜の住民に対する暴虐については、独乙のナチのそれとともに全世界の話題となった様である。そして日本や独乙のファシズムと暴虐という事が、ある必然的な結びつきをもっているように解釈されているが、この事はかなり一方的な報道で、反対に日本軍の将兵が敵兵から受けた暴虐については殆んど日本内部で語り伝えられているにすぎないが、結果として相当に多い被害をうけている。ともかく、戦争という非人道的な場に追い込まれて行った場合に起る異常な心理状態が、渴き

きった人間味と結びついて起った現象だと思うので、あながち「日本の軍隊」を野蠻視するのは当を得ていないのではないかと思う。

しかし日本軍隊というものが、その発生からすでに先天的な嗜虐性の中に生長して来たことは、戦争という問題と切離して考えていきたい問題である。ここに筆者の体験した軍隊生活というものをいささか述べて、その嗜虐性という問題を衝いてみたい。

本誌の読者の殆んどが経験者であろうとは思いますが戦前、男子が二十一才になると、好むと好まざるとにかかわらず徴兵検査というも

のがあり、壮丁に対して軍務に適するか否かを微細に亘って検査された。これは言わば男子の成人式のようなもので「検査前」という言葉は未成年を意味し「検査を終った」というともう一人前の男として通用した。だから検査前には酒、煙草を口にするこや、花柳の巷に入ることなどをきびしく禁じられていた。青年達も「検査までは」という信念で、すべて謹慎しているのが、その当時の習慣であった。だから当時の検査場の風景は、清純な壮丁の汚れない肉体が、純白な越中褌一つの姿で、整然と号令の下に動くのは、男の清潔

ないさぎよさを漂わせる快い場面を展開した。こうした中に軍隊の嗜虐性というものが既に萌芽していた。当時、青年たちに「必ず越中褌を着用すべし」との印刷物をかねて配付するのも、肉体の露出部をなるべく多くして、体の各部の発達を視ようとする必要から起ったものとは言え、やはり一種の嗜虐性を感じられる。壮丁たちの、穿きなれぬ越中褌を着けてまごまごする様子は、滑稽でもあり、哀れでもあり、男性的エロチズムがある。

検査官の前に出た壮丁はもはや一個の人間にすぎない。言われたままの屈辱的なポーズをとらなければならない。これが又必要以上に加虐的なもので、純真な青年達が頬を赤らめる場合が幾つもあった。全裸になる時は屏風や衝立を用いる習慣があったらしいが、地方によっては全く用いられず、手伝いに來ている在郷軍人や愛国婦人会の人々の面前で検査が行われる事さえあった。犬のように四つ這いになったり、脚を開けるだけ開いたり、必要以上に念入りを極める。この時、検査官の野蛮な人間にでも当たるとたまらない。壮丁の大かたは頬を赤らめ、額に汗さえ浮べている。ここで悪い病気でも発見されると、どんなみじめな結果になったかは想像に難くない。

このような屈辱の門を通過してよいよ入営する事になる。「軍隊は男の地獄」といわれ

「大の男が泣く処」だと言われていたのは周知の通りだ。軍隊生活については石川達三の「風にそよぐ葦」野間宏の「真空地帯」五味川純平の「人間の条件」(三部・四部)にその内奥が詳述されているが、地方の連隊程、苛酷で野蛮であった事は言う迄もない。青々と刈り上げた坊主頭の初年兵が、指導係の上等兵に獄卒のように叱咤されて、うろうろしている姿はいたましい。

兵隊さん又寝て泣くかよ……

消燈ラッパが、そう聞えるのもその頃である。昼間、ビンタや罰を食った新兵が、毛布の端を噛んで声を耐えながら男泣きに泣くのである。

「新兵は殴れば殴る程強くなり」と言われる程、入営後数カ月には殴られる。別に失策をしないものでも連帯責任の名で殴られる。一番辛いのは、班内の一人が失策した時、その兵隊だけでなく、班全員、班長までを殴るという意地の悪い罰の方法である。失策者は自然皆から白眼視される破目に陥いる。失策した兵は夜になると班の一人一人に詫びに行かなくてはならない。「お互いさまだ」と同情してくれる者もあるが「貴様がボヤボヤしとるからだ」と又、殴られることもある。

「ビンタ」「バツタ」「蟬」「鷺の谷渡り」

「急降下」「前支え」などという私刑は、あまりに有名であるから述べないが、嗜虐好みの

下士官が独創的に創案したものに随分、特異なものがある。

軍隊という処はどんなむごい刑罰を課すにも決して縄がいらぬ。兵は上官の命令にはどんな難題でも甘んじて服するからである。

「不動の姿勢をとれ」と一言命ぜられれば、殴り倒されても、又、起き上り直立不動の姿勢をとる。つまり無縄の縛めである。下士官達は二言目には、

「そんな態度で天皇陛下の軍人になれるか」と言い、「上官の命令は恐れ多くも大元帥陛下の命令だぞ」と呶鳴る。この一言で兵隊は人形のように硬直した一個の物体となり、上官の命に服す。「靴の底を舐めろ」と言われれば舐めるし「馬糞を食え」と言われても拒否は出来ない。

筆者の居たT海兵団にAという応召兵がいた。中学教員だと言っていたが一寸した美男であった。この男は若干要領が悪かった点もあったが、よく下士官から罰を受けていた。夕食後、営庭裏で一貫の「前支え」を長時間させられていたり、下士官室に連れて行かれ、机の下に数時間、中腰で跣まされた揚句下士官連の弄り物にされたりした。衣袴を両手に抱えて逃げるようにして、下士官室から泣きながら出てくる裸姿を見た事もあった。

「どうしてAばかり虐められるのだろう？」と僕は他の新兵にきくと、「要するに彼は好

男子だからさ。吾々は醜男に生れて来てよかったよ」と言つて笑つた。下士官たちの嗜虐の対象となるには美青年が最も恰好な獲物だったのである。

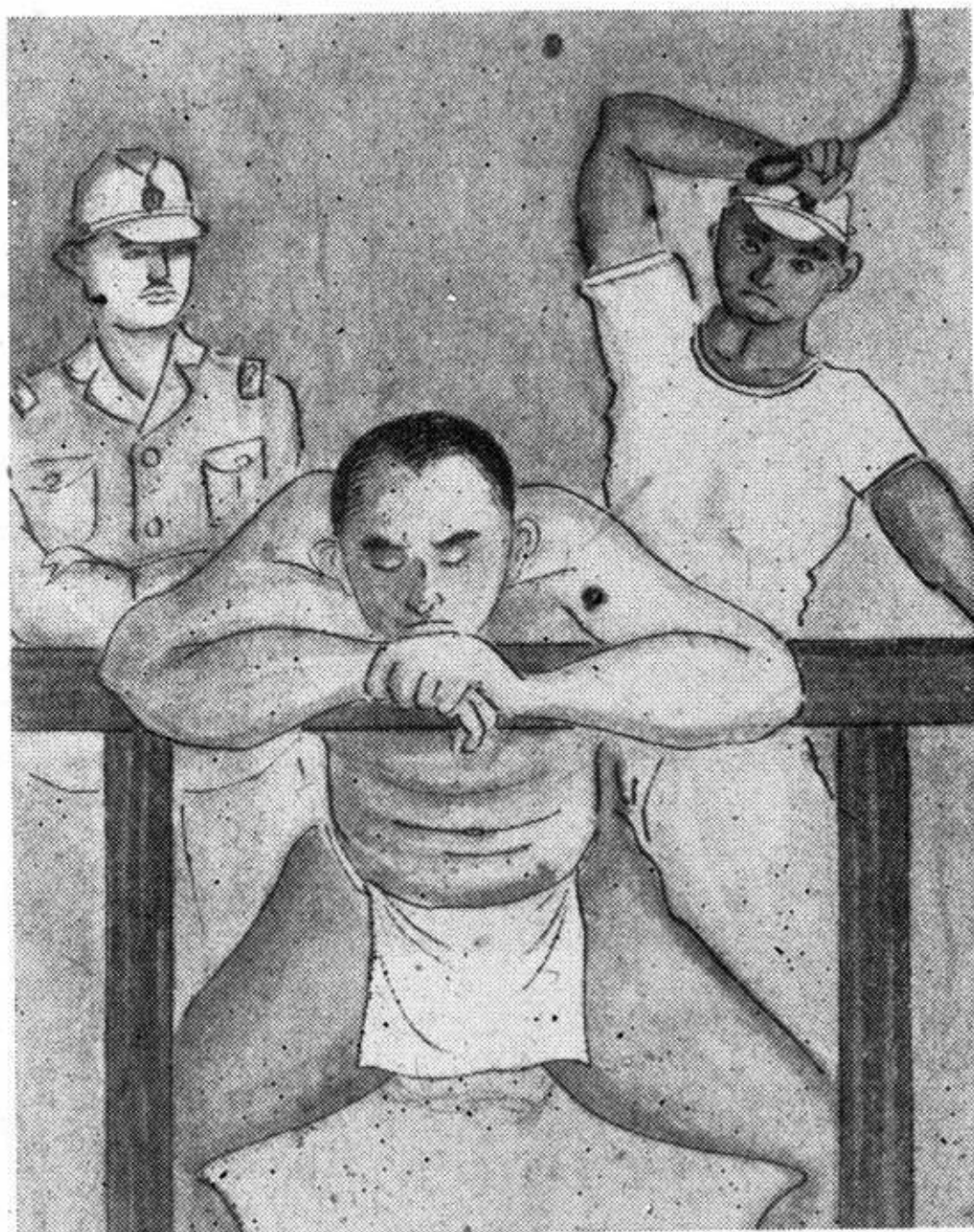
梅雨期になり、外の訓練ができなくなると、下士官達は焦々する事が多く、大した落度がなく罰をうける事が度々あった。「禪ひとつで棒げ銃」という二等兵の流行歌があるが

さすが、寒夜に裸にすること
は少いが春から夏にかけて罰
を喰う時は大抵裸にされる。
彼らはこんな理由をつける。

「軍服はいう迄もなく、襦袢
フンドシに至るまで、すべて
天皇陛下よりの賜り物である
みだりに汚したり、破損して
は申訳ない」と。「裸になれ
ーッ」にいう号令によって、
禪一つで罰を受ける事もある
が、時として「エッチュー外
せーッ」という号令がかかる
時もある。最初新兵達はこの
号令がかかると互に顔を見合
せてもじもじするが、馴れて
しまうと最早何の逡巡もなく
白旗を脚下にひらりと落す。
太い精神棒を持った下士官は
妙に獣めいた充血した眼でお

もむろに「前支え」を命じたり、「急降下」
を命じたりするのである。二、三十名もの若
い裸の群が、自分の命令一下、思うままな姿
勢をとるのが愉快でたまらないらしい。
軍隊生活をしたものなら誰でも知っている
私刑に「射撃大会」というのがある。この罰
は銃の手入れが悪かったり、射撃成績が悪か
った場合に課せられる事が多い。筆者もこの

罰を一度受けたが、いかなる罰よりも耐え難
い屈辱的な刑である。下士官は兵を並べて置
いて、越中禪を俗に言う「吹流し」という恰
好にして、筆舌に尽しがたい屈辱場合を展開
させる。それは滑稽というより、凄惨であ
り、且つ惨鼻を極める。服従しないと更にひ
どい罰が加えられるので、兵隊たちは額に汗
をうかべ頬を紅潮させて必死で屈辱演技をす
る。ふら／＼になり中には倒



れる者さえ出てくる。下士官
たちはこれを眺めて野卑な言
葉で批評をする。この型を向
い合いで演ずるのが「相互射
撃」である。初めてこの罰を喰
った僕は、夜、隣ベッドのK
と肩を抱き合つて男泣きにむ
せび泣いたのを覚えてい
る。又「使い犬」というリンチ
がある。これはある時、隣の小
隊の兵隊が、スリッパを盗み
に来たのを捕えられて受けた
リンチであつたが、これが又
ひどいものであつた。禪一つ
にして兵隊たちのベッドの間
を四ツ這のまま、スリッパを
啞えて二往復するのである。
汗を滴らしながら往復した時
に、下士官の一人が「この泥

棒犬めワンと吠える」と言つて吠えさせた。そして更に、「犬がフンドシを緊めるか」といつて紐を引き千切つた。

「人間の条件」の三部に、行軍で落伍した兵を二年兵たちが「自転車乗り」等の罰を課しその中の一人に売春婦の客を呼ぶ真似をさせた。ためにその兵が自殺する事件がでてくるがこんな事は当時ザラにあつた事だった。

こんなふうだから意志の弱い者には、思いつめて脱走する者がいた。然し内地の場合など一日経たない中に発見されて逮捕されたしこれに対する罰は、もう私刑どころでは済まない。散々営倉の苦しみをなめた揚句、刑務所行である。営倉の一部に懲罰室というものがあり、僕は一度ここで懲罰を受けている兵隊の姿を垣間見た事があつた。着衣の一切を脱いだ兵が、辛抱柱とよばれる太い横木に両腕でしっかりしがみついている。その臀部を帯状の皮鞭で十、二十と殴りつけるのである。傍にオスタッフとよばれる桶に水が湛えられて、失神した時の用意に備えられてあつた。縄でこそ縛らないが軍規という名の緊縛にあつて、兵隊たちはそれに雁字がらめにあい、藻掻き、悶えるのである。

営倉でさえそうであるから、陸海軍の刑務所という所の恐ろしさは正に生地獄の世界であつた。軍の刑務所勤めが出来たものは、民間の刑務所など極楽だとさえ言われている。

囚人を脅すためだとも言い、刑事の博物資料だとも言われているが、江戸時代の刑具である木馬や算盤や手枷、足枷も用意されていたと言う。吊責の時には分銅を足に結びつけると聞いているし、他の小型の分銅は囚人の急所に結んで吊すとも言われている。「真空地帯」には皮の搾衣の事が書かれてあるが、これを着せられて水を浴せられると、五体が徐々に緊めつけられて、囚人は涎を流しながら次第に失神する。又浴槽が懲罰場に利用されることが多く、寒中、冷水を張った水槽に足を擱んで逆に浸される事などは、楽な責苦の中に入っている。

最近出た読物現代読本二月号の特集号「戦争と女」と、現代のバイブル四月号に、憲兵の行つた拷問の記事が載っている。ともに憲兵が無実の兵隊を責めたもので、前者は焼火箸、後者は木綿針で急所を責めたとある。ともに拷問後、薩摩諸大に腫張し、呻吟した結果死亡したとあるが、この種の私的拷問の数は無数にあつたらしい事は、隊内のリンチが無数であるのと、ほぼ同じである。

このような中で育つてゆく兵隊が、自然と嗜虐を好むようになり、上等兵にでも昇進すれば、待っていましたとばかり新兵虐めをたのしむようになる。すべてが循環である。営内でもそうだから、まして拘束のない戦地に行くと、鬱積したものの一つのはけ口として

敵の捕虜や非戦闘員に暴虐が加えられた。中国人や満州国人に加えた暴虐はその最たるもので、石川達三の「生きてゐる兵隊」や、五味川純平の「人間の条件」の中に描かれているので詳述しないが、近刊の田村泰次郎の小説の中に、ある捕虜斬り達人の準尉の事がでている。彼は捕虜を逆さ大の字磔にした上、縦割に真二つに、ものの美事に斬り下げた態が書かかれています。処を見ても、その残虐さが想像される。

終戦となるや総ての事情が逆転し、一部の兵隊は、自分達を縛っていた階級の枷である肩章や襟章を剥ぎ捨てると、却つて逆の立場になつて士官や下士官を戦争責任者として吊し上げたりして裁いた者もあつたようだ。嘗て本誌に掲載された横村泰氏の「復員船」にその模様が描かれているが、兵隊達に屈辱を与えた士官、下士官が、かつて自分達が強いたように「前支え」「犬の使い」果ては「射撃大会」までを演じさせられた者があつたのは、因果応報とは言え、何か哀れであつた。

すべて悪夢のように日本の久しい暗黒時代は過ぎ去つて、自由と人権を尊重する現代に戻つた。現代の青年たちは軍隊という名の緊縛に脅やかされないだけでも幸福だと言わなければならぬが、軍隊生活を身に体験した筆者にとっては、あの恐怖と屈辱に充ちた軍隊そのものに、何か淡い郷愁を感じるのは何故であろうか。



沼正三だより

沼正三だよりと雑報欄

沼 正 三

られ、それだけに早急に紹介しておきたいと思いました。そして、筆を執るついでに、他のものも、メモから選んで、雑報欄らしい体裁をつくることにしました。

(本月の雑報欄について) 一月号の「雑報」以来、半年の余もごぶさたしてしまいました。考えてみると、今年になってからの資料は、全然、私としては報告に及んでいなかったわけです。忙がしくなつて「ヤブー」も「手帖」も休載させて貰っている私ですが、いずれは一まとめに……という気持はあるので、メモだけは怠っていません。それが、もう相当量になりました。しかし同好者の眼は鋭いもの故、その多くは既に読者諸君の目にも触れていると思われ、その気持が、特に私をいそがせようとはしなかったのですが、この頃読んだ「スパルタクス」だけは、あるいは諸君の目を逸したかと考え

(最近の奇クについて) 雑報三四八が、本来なら手帖新稿において先に発表せられていた筈のものだったのが、他の人によって他誌に発表されてしまったということは、私として残念なことはもちろんですが、それ以上に、奇クのマゾものの軽視への反省の機会を与えていないでしょうか。今までマゾものは売れなかった。事実です。今でもサドの方が売れる。事実でしょう。しかし、今後もマゾものは売れないとは限らないので、雑報三四七が指摘するような「残酷のムードの女性への波及」は、マゾものへの需要の伸びを暗示すると言えましょう。女性読者を開拓することによって推理小説ブームは恒常化しましたが、今迄のサド一遍倒に、多少ともマゾもの(女性サドはマゾものと表裏一体ですから)が喰い込んでゆくとすれば、

それは女性層の開拓に違いありません。風俗奇譚誌のような、奇クのやり方をそのまま真似ているような類似誌が、マゾものを載せる頁数を割くに比例して光彩を放って、無視できないような内容（ほんの一部ですが）を示して来たのは、そういう意味での編集意識をあらわしていないか。それを参考にする余地はないか。サド男性ばかりでなく、女性中のサド気質にも媚びる様な要素がもっとあっても良いのではないか。そう、編集者に忠言したいと思います。

（特に六月号について）しかし、編集者がサド男性だけが顧客であるとの見識を持って、サド特集号ばかり続発しても、私たちは別に不平は言いません。少数派であることは自覚していますから。けれども、今度の六月号には一体何ということなのか、と思いました。編集者とは長いつき合いで、善意からの悪口は許してくれると思いますから、はっきり言いますが、私達は、本号に関する限り、だき合せて買い度くもないものを買わされた不快感を持ちました。「もう出る頃だ」と店頭を捜しても、いつもの白表紙は見当らず、「おや、また、新しいサド特集号か」と思って手に取った中に、「宇宙のどこかで」があつて、これが六月号！と知った時の驚き。値段はいつもの倍、しかし、写真なりグラフィアなりにマゾものが——たとい二番煎じでも、一枚二枚に過ぎなくとも——入っているのなら、値段は問わないでしょうが、増えた分は全くサド派のため、まるでサド特集号くずれを例月号として買っているようなものです。今後、特別値段の号を出す時には、それ相応のマゾ向きサービスをして欲しいということを、マゾ読者諸君に代り、編集部にお願ひしておきます。サド読者だけのための特集号はいくら高くても私達は何も言いませんから。少数派に余り経済的にしわよせすると、かえって本

誌からマゾ読者を離反させてしまうことになりますよ。（佐治麻造氏に）「宇宙のどこかで」は今のところ、本誌唯一のマゾ小説になってしまいましたね。大いに期待します。他誌の手際よい作り斬とは違ったマ、ニアの生涯唯一の作品といった感じがするところが嬉しい。あなたは、かつての真金氏のように、緊縛、鎖錠に強い執着を持っておられる点で、私とは少し傾向が違いますが、しかし、凌辱の味はよくご存知のようですし、殊に、別れた女性を二人も伏線として置かれた点、今迄の奇ク小説になかった「芦荻テーマ」（別れた妻に見返されるテーマ）（手帖旧八八項附記参照）や「準三者関係」（女から女に売買されるテーマ）（手帖旧九九項参照）が味わえるのではないかと楽しんでいます。汚物テーマ、家畜テーマはどの程度になるのか、まあ、これは、奴隷テーマに含まれる最低限程度でも仕方ないかも知れません。しかし、地球以外の星というのなら、随分な空想も可能な様ですね。とにかく、大作としての完結を祈ります。

（麻生保氏に）KK通信R子様の文は、私の引用した部分以外は、量質共、重要性ありません。また「吸血魔女」は、古本屋で「世界奇書異聞類聚」中の第一巻「女天下」というのを捜されると、村山知義の訳文中に収載されています。これは、フックスとキントの原著の第一巻のひどい抄訳ですが、「吸血魔女」の紹介の部分に関する限り、大体、訳してあります。なお、別項雑報でお分りのとおり私はこの頃、小説類は殆んど読んでいませんので、いつかの「愛の喪章」のような新刊小説類からのマゾ資料紹介を貴下に大いに期待しております。

雑 報 欄

三二六 ハワード・ファースト作・村木淳訳

『スパルタクス』(上) (下) 二冊 (三一新書) スパルタクスは

古代ローマの剣闘士で、^{グラジャートル}奴隷叛乱の首領として、数年にわたり、ローマを苦しめた人物で、革命家に尊敬される人物である。本書もそういう立場から書かれているので、もちろん、マゾヒストのための本ではない。しかし、本書の第一巻は、当代の奴隷制の実態についての見事な敘述に満ちているから、隷属の観念を愛する人には、大きな刺激を与えうる筈である。「もちろん犁は奴隷にひかせた方がいいでしょう……考えることのできる獣の方が考えることのできない獣よりはましですからね……それにまた馬は高価です」……剣士達の決斗場面もすばらしい。彼らは檻の獣のように飼育されている。貴族達が夫婦づれ、友達づれで来て、死ぬまでの戦いを買いとると、彼らは、素裸かで、網の向うで見物している人達のために殺し合いをするのだ。そして、ローマからカプアまでの六千四百七十二体のはりつけ……「ローマ人という奴はなんと人間の生命を粗末に考えているのだろう……また人を殺すときのその喜びようはなんということだろう……全生活が奴隷の血と汗のうえに築かれているというのに……」奴隷に関心をもつ方に一読をすすめる。

三二七 サド作・渋沢訳『悪徳の栄え』(続) これは発禁になつてしまったから、ここで吹聴することは控えたいが、二八二に紹

介したものの続編であり、訳文も立派な労作である。

三二八 清水正二郎『情欲の大陸横断』これは、三〇九で紹介した『アメリカ情痴物語』の続編で、三二〇であげた「火の遊戯」前後が収載されている。

三二九 清水正二郎『アフリカの性典』

週刊実話連載中のものの単行化で、先に紹介した『エロスの航海』(雑報二八〇)の続編。しかし、内容は大したことはない。

三三〇 清水朝雄訳『肉体の讚美』

三三一 清水朝雄訳『悪女の魅力』

前者は「豊満な女」後者は「淫蕩な女」の訳で、いずれも、原著はウィーン性科学研究所篇の「五種類の女」(女一全能なるもの)の一冊。「淫蕩な女」は以前清水覚三訳として出たことがあり、雑報一二〇で紹介してある。この五冊の中一冊が「残酷な女」で、森本氏が本誌上に訳出されたのがそれであるが、遂に未完に終わった。本項の書物の続篇として「性の残酷史」という書名が見えるのが、おそらく「残酷な女」の訳であろうと思う。かなり期待できるものである。

三三二 阿川弘之『カリフォルニア』白人富豪令嬢との恋に破れる日本人留学生。その心理にたて糸のように織られている白人への劣等感が嬉しかったので。しかし、淡いものである。

三三三 原忠正「わが性欲に鞭あるのみ」(実話雑誌四月号)

「暗会事件」については、すでに読者が熟知されているであろうし、本誌の立場も、四月号巻頭の「私の編集ノート」の一文で明らかにされているが、そこでは、週刊サンケイ(1・25号)、週刊実話(2・1号)、週刊スリラー(1・29号)等しかあげられていないの

で、資料的に、気づいたものを補充しておく。本誌四月号のマゾ時評（最終回）で、原氏自身「某三誌を通じて……」と書いておられるが、そのうち、二誌に気づいた。（もう一つは、右のスリラー誌であろうかと思う）一つは「セックスに反逆した曙会始末記」（実話誌四月号）で、原氏の手記と題し、原稿の写真もあるが、内容は弁明的なものに過ぎない。もう一つが、本項の見出しに立てた実話雑誌の文で、この方は、フィクションが全然ないとも思えないが本誌への氏のデビュー作「乗馬服と長靴と鞭」以来のテーマを今迄のうち一番詳しく語っていて、仲々面白い。ただ、曙会員だった人々の性向等をデータをあげて語っているのは、仮名をある程度用いているとしても、会の主宰者としての信義に反することではないかと、氏のために惜まれる。なお読物実話四月号にも「私書箱利用の猟奇クラブ」というのがあったが、これは氏からの資料によらぬ、悪意的なものであった。

三三四 「私は男を奴隷にしたい」（別冊アサヒ芸能2）「サド・マゾガールの比類なき快叫の夜」（一〇〇万人のよる三月号）右の曙会のサド女性だった人が体験を語っているもので、前者は早川洋子というひとの手記、後者は座談会で、サド女性は田所とし江とあるが、同一人であろうか。どちらもある校長先生のマゾを語る。もっとも、校長先生の方が両女性に接したのかも知れない。なお「ミスター人間馬と呼ばれて二十六年」（現代生活のバイブル3）愛の技巧の画報）は中野保太郎とあり、本誌上で、森山美歌氏との出会いかつて語られた中野氏の文らしい。

三三五 裏窓誌のマゾもの 二月号では「怨夢譚」（黒田史朗）「美貴の矯正室」（南村蘭）「犬侍脱走記」（矢桐重八）「足に憑か

れる」（篁文彦）「女神の鞭」（池田好光）とマゾ的作品が多かったが、記憶に残るのは、初めの二つである。三月号「肩籠が招いた」（篁文彦）、四月号「マダム魔美の晩餐」（南村蘭）いずれも大したものではないが、六月号「梨花社長の秘密」（南村蘭）はよい。南村氏の作品は、これによって初めて、かつての奇クの名作の域に近づいた（まだその程度）と言えると思われる。このひとは、奇クでなくて他誌に生れたことが、奇クの愛読者として、残念に思われる唯一の作家である。

三三六 別冊笑の泉ユーモアグラフ五月号 この雑誌のことは本誌六月号一七三頁に鞍氏が触れておられる。たしかにこの雑誌には女体乗馬のネタが多い（品はないが）。五月号では、「女ターザンと人喰人種」としてライオンに跨ったところあり、ライオンは縫いぐるみとお面の男と分る。更に「腰元変化殿様御難控」では、浅草座のゆりみずき、浅草陣太等とキャストを明らかにして、腰元が三太夫を籠絡した上、殿様を無条件降伏させる筋の写真物語。それも、単なる色仕掛でなく、腰巻一つになって短刀でおどし、殿様を四這にさせてどっかと跨る場面がある。殿様に代ってこの腰元が屋敷の主人となり、「それからが大変、酒は飲む、肴はパクパク。肩をもませられる。腰巻を洗わせられる。いやはやとんだ仕儀となる、赤井御門守ご難の一幕」。漫画では「わたしはコールガール」の中で美女のお尻をペロペロやっていたライオンが実は男の縫いぐるみという夢の場面あり、「よかちよる族」では、二人乗り用のダブルサイクルに男を二人乗せてこがせ、後に繋駕をつないで馬車に仕立てて女が乗って鞭ってサイクリングに出かける。途中で女はお婆さんを後の席と一緒に乗せる。男達がへばると、お婆さんはお尻にお灸

を押しつけて元氣を出させる……という、男達を女の轎馬に見たてた漫画である。漫画といえ

三三七 実話と秘録誌五月号「女が敷くとき」(あゆざわまこと画) では、敷かれた亭主のコンクールがある。第一の夫はエプロンに犬首輪、犬鎖で妻に曳かれてやって来る。第二の夫は、着ている服がそのまま座布団型になっている。ところが、第三の夫は、裸になった背中が、女のお尻のふくらみに合せて凹みがえぐられていて、これが一等という。つまりぬ絵であるが、ちょっとヤブーを思わせる想であった。

三三八 クマゴロー(三五・三・一三・日曜・夜六時チャンネル10「珍犬ハックル」シリーズのうち) 私はあまりテレビは見ない。金曜夜七時からの「アニーよ銃をとれ」は、この雄々しい美少女の姿を見たさによく見るが、ほかは殆んど見ない。ところが、偶然の機会に標題のテレビ漫画を見、しかも、非常にマゾ的な経験も味わったので、いささか雑報の枠を外れるが、ここで書いておこう。

その日、私は大先輩にあたる人のところへ頼みごとがあつて出かけた。学生時代以来、家庭的につき合つて来て、お引越しの時には手伝に行った様な立場である。その頃から馴染みの令嬢が、小学一年生のお嬢さんともっと小さい子と二人連れて里帰りしていた。彼女は私のことを親しみ易い人だと思つてゐる。父の部下という気持もあるうし、マゾヒストとしての私特有の折にふれての奉仕的態度の感化にもよるだろう。もちろん、私をマゾヒストと知つてゐるわけではないが、昔から私に対して遠慮はもつてゐないのである。もっとも結婚後は殆んど会つてゐなかつたし、お嬢さんとは初めてであつた。この子が大変活潑な子で、私は馬にされてしまった。先輩が出

先きから帰るまで待つてゐたのだが、令嬢が母堂と話し込みたいあまり、邪魔になるお嬢さんのお相手を心易い私に仰せつけた、といつたところであつた。別に頼みはしなかつたが、座敷で私が乗り廻されてゐるのを承知で、別に子供を止めに来なかつたのだから。小さい子供とはいつても、何度何度も座敷を這いまわるのでは、たまらない。それにズボンが傷んでしまふ。だから、五回も廻つただろうか、私は、「もう降参々々」とのびてしまつて、とうとう解放してもらつたのである。その後で、令嬢と顔を合せた時、別に「ご苦労さま」とも言われないのが、正常な感覚ではひどく物足らず、一方マゾヒストとしては、それだけ彼女から軽く見られているのかとも思つて、心がうずいたのだった。

さて、その日の夕方、結局、夕食をよばれることになつて、腰を据え、食事までの時間をお嬢さんと一緒にテレビを見て過すことにした。その時、私は標題の漫画を見たのである。珍犬ハックルというのは現在もうやつてゐないし、私としてはこの時見たきりだから、ふだんがどんな風なのか知らないが、とにかく、この時の記憶では犬の巡査や熊の住人が公園にゐるが、いわゆる動物漫画でなく、人間社会の中で生活してゐるのである。

この時見たのは、題を忘れた(というより見なかつた、内容を知つて驚いた時には終つてゐた)が、十分位のものでハックルは余り出ず、クマゴローと人間が接触するのであつた。……公園に若い夫婦が坊やをつれて車でやつて来る。父さんは昼寝、母さんは読書、どちらも坊やの相手はご免、そこで「あつちで遊んでおいで」と言う。坊やはクマゴローの方にやつて来る。クマゴローは子供が好きだ。坊やのピストルに死んだふりをして遊んでやる(遊んでやつてゐる

つもりである。坊やは狩猟の獲物としてクマゴローを母親の所に連れて帰ると、彼女は汚ながって、「クマなど飼うんじゃありません」と追い払う。坊やはタマゴローに首縄をつけ、馬にして乗り廻す。余り徹底的にやるので、クマゴローはのびてしまう。坊やは下りて行ってしまふので、クマゴローがほっとしていると、戻って来た坊やは何と靴に拍車をつけて帰って来たのだ。クマゴローはもう疲れた……などとサボルことを許されない。坊やの拍車に駆り立てられて、そこから中を走り廻る。その間、父親の昼寝と母親の読書は坊やに妨げられずに済むのだ。が、遂にクマゴローはそれでも動かなくなる。乗り潰されたのだ。帰りの自動車、前の座席の夫婦が「坊やは強いからな」「あたしの子ですもの」と対談している、その後の座席の床にはグルグル巻きに縛り上げられたクマゴローと腰掛けた坊や……

クマゴローはひとりでは口をきいて考えるが、夫婦も坊やも彼に對して全然、口をきかない。つまり、知情意を備えた人間的存在が全く家畜扱いされているのである。（舶来映画だから、白人對黒人の關係と見たてることもできよう。）子供の玩具として飼われるべく連れ帰られるクマゴロー。哀れ……

ところで、この場面は、当然、私に当日の昼の行動を想起させた。私はひどく心を打たれていた。その時である、例のお嬢さんが、こう言ったものだ「わたしも、あんなトゲ（拍車のこと）を使えば良かったわ！」

恐いような、しかし、ゾクツとする快感がこみあげて来たことだ。昼間乗せている時、女を乗せているという感じでなく、マゾ的快感はなかった。それがこの時、急に生じた。彼女が急に女になったので

はない。今迄の大人と子供という關係が、人間と馬の關係に変わったといえは近からうか。子供はまだ女ではないが、既に人間として家畜に臨みうるのである。クマゴロー漫画を見つつ、私はクマゴローに、彼女は坊やに、知らず知らず感情を移入していたわけなのである。

三三九 ディズニー映画「ぼくはむく犬」 これは犬への変身のテーマである。飼主は美貌の令嬢であるから、普通の演出感覚なら、彼女の私室での更衣が、犬だと思つて平然と行われるといった場面があつてもおかしくないのだが、子供向き映画とて、それはない。ただ、彼女から、犬用のドッグ・ビスケットを与えられて、洗々ながら食べるころなど、やはり空想をそそられる。スパイを捕えるというストーリーは、SFの傑作「完全な人狼」コンプリート・ソールから得たものであろうが、小説では、狼になったウルフ教授を彼の恋人が裏切つて、「お前をこのままずっと狼として私の手許で飼うことにする」と宣言する（人に戻す呪文は彼女だけの自由になる）戦慄的な場面があるのに比し、物足りない。

三四〇 映画「痴人の愛」これは大方の読者諸君の期待したものであつたらう。手帖新稿第四章附記第三で述べたように、先の昭和二四年の映画化が原作のイメージを損ずるひどいものであつただけに、今度の映画化への期待は大きかつたし、一方、前作と同じ木村恵吾の監督なので心配もあつた。結果としては、私の印象では、一応及第である。一度家出して戻つて来てあやまる譲治を太股にはさみつけていじめるころ、最後に、譲治を馬にして歩かせ、ふくらはぎに接吻させるところ、そして、ナオミの勝利として作を終つているところなど、前作よりは遙かに進歩している。もちろん、ナオ

ミがすっかり落魄するところはなくもがなだし、人間馬が単なるその場での支配被支配象徴になっただけで、讓治の偏執性として描かれていないための不徹底(そのため批評家の誤解も生じている、例えば「ナオミの肉体のとりこになった讓治は彼女にあやまり、ナオミのために四つんばいの馬になって歩く幕切れなど、まったくいやらしい感じだ」八朝日・磯V)など、不満を覚える点も多いが「氾濫」の人間馬、船越英二が、再びこれだけの人間馬シーンを演じたことをマゾヒストとして感謝しておきたい。叶順子のナオミも概して良かった。もっとも、原作のはもう少し妖気があるが、「馬にしてくれ」と言われて笑ったあたり、その妖気が多少うかがえたと思う。馬に乗ったまま「ここにキスして」と足を出して、ふくらはぎに接吻させるが、いっそのこと、足先、足の裏にすれば、なお良かったのに……と思った。

三四一 映画「墓にツバをかける」 原氏がマゾ時評最終回で題名をあげておられる。氏は女性乗馬の場面の故に引かれたのかと思う。女主人公は、先に読者を熱狂させた伊太利映画「愛は惜しみなく」と同じアントネラ・ルアルディで、同様に、小粋な乗馬振りが見られる。しかし、私はそれ以上に、この作の基調をなす黒人侮辱のテーマにマゾヒズムを感じる。「黒人は好きだわ、良い召使よ」であり、老黒奴ハリソンは女主人にパラソルを掲げて随行する。白人は黒人酒場で十二と十四の少女を買おうとするが、売る方は「泣いても構いません、親も承知です」と保証する。主人公ジョーを愛して床を共にしたシルビアは、彼が黒人だったと知ると、彼を憎み、彼を射つのである。フランス映画であるが、アメリカ黒人がこういう映画を見てどう感じるか知りたいものだ。

三四二 映画「十三階段への道」 これは收容所の女看守が憎らしい、との批評を聞いてから、見たくなって、覗いたが、大したものではなかった。ただ、イルゼ・ユッホの人皮スタンドなどの実写が見られる。映画では、その他「狂乱のボルジア家」「嘆きの天使」等をあげたかったが、いずれも、原氏の時評で詳しく紹介されているので、略する。以下、新聞切抜きを見つつ……

三四三 グライダー選手権に女性初優勝(三四・一一・四・朝日) 学習院大、三浦嬢二才とある。こういうスポーツ方面への女性進出は、少しも珍らしくなくなってしまったが、馬場馬術の名手、井上喜久子夫人のローマ五輪出場が実現しなかったのは残念だった。ニュースで見るこの女性騎手は、端正な服装が良く似合って、私達を喜ばせるのだが……。年頭の産経紙に「スクリーン五種競技」とて、女優に各競技のスタイルをさせたのがあったが、浅丘ルリ子の「馬術」と司葉子の「フェシング」はどちらも良かった。そういえば、女流登山家だけのヒマラヤ登山記事も切り抜いておいたが、これはご存じのケチがついたから、止めておこう。

三四四 一月下旬のアルジェリア問題、三月下旬以来の南ア問題とアフリカ関係の切抜きも多い。南アの状態については、手帖一〇八項でかなり詳しく紹介しておいたから、読者には予備知識たりえたと思う。結局、皮膚の色の問題が入って来るので、私などは、マゾヒストとして関心を持つわけである。今年元旦の朝日新聞に森田たま女史の「天使の色」という一文があった。「私はライデン大学で、ミルクのように白いうなじの青年たちを見た。うすい皮膚の下にはのかな赤味がさして、青年たちのはおはバラ色にかがやいていた。私は目のあたりに天使を見たと思った。……色の差別と人種の偏見

とには、かわりがないという。だがしかし、私はまだ黒い天使の画は見たことがない。——これは、手帖新稿一章一二章等の註釈として拝借できそうである。厚木基地近い大和市では混血児の入学拒否問題があったが、これからは、皮膚の色について、日本人はしばしば試練されよう。黒人を軽蔑する一方では、白人への劣等感があるのだということを忘れまい。西独でも、黒人混血児の就職は偏見により多難であるという(三五・一・一六・毎日夕刊アンテナ)

三四五 あばれ者にはムチを(三五・四・一四・朝日) 英国はロンドンのダン判事が答刑復活論を唱えた由。手帖新稿KK文庫が仲々実現しないので、答刑についての本文が出るのを待たず、最新資料を雑報で示す。

三四六 西独で携帯用トイレお目見え(三五・一・一六産経)とやま氏の記録にも出ないようだから出しておく。キャンプ用の携帯トイレットの発明として写真が出ている。折り畳み式の脚がついているのは、さすがに西洋人の発明だ。行為の方はこれでいいとして、廃棄処理の方はどこへするのかな。やはり、不便は残るようでもっと便利なものを発明——いや、訓練するを可とす。

三四七 「女が残酷になるとき」(週刊スリラー三月二五日号) ショッキングな題名ほどの内容ではないが、一節だけ引用しておく。『——最近では都会女性の間に乗馬ブームが起っているが、それをもまた色情倒錯的な刺戟を求めている場合が多い。「馬に乗ると私たちがいつも男性に対して抱いているある種の劣等感から解放されます。生理的にも女にはたしかに強い刺戟が与えられます。それにポーズそのものが奇妙な欲望につながっているわけね」とは、ある乗馬マニヤの若い女性の言葉である。かの女たちが残酷のムードの

支持者であることはいうまでもあるまい』……なお、同誌グラビアは女子射撃界、狩猟界に知られた藤田節子さん(射撃のNo1藤田正男氏の夫人、三〇才、女医)の紹介。

三四八 間瀬照夫「マゾツホの被虐待契約書」(風俗奇譚五月号) 実は、この契約書は、ずっと以前に手帖新稿として訳出してあったのだが、原稿のまま寝ているうちに、他誌に先んぜられたのは残念である。本項はモルの文にあるもので、それをクラフト・エービング云々といっている点など誤りも見当るが、資料的には珍らしいものと言ってよい。

三四九 谷貫太「マゾヒストの手紙から」(同誌六月号) これは曙会系の資料ではないかと想像される。作りものではないようであって、その意味では面白い。なお、同誌同号及び画報風俗奇譚には、以前、森本氏が本誌に紹介された泰西マゾ名画が再録されている。二番手ではあるが、マゾ読者は一枚でもこういう名画があると買いたくなるのであって、商売上手である。

三五〇 マルシャーク作・湯浅芳子訳「森は生きている」(少女世界文学全集) 戯曲である。芝居にもなったそうだが、私は見なかった。人間が犬になるところがあるというので早速一読した。わがままな少女の女王が罰せられず(わがままがなおるだけで)人間の化した犬にそりを曳かせて平気であるところが面白かった。一度、舞台で演ぜられるのを見たいと思っている。もっとも、かえって不自然で、想像上の変身の見事さがこわされるのが落ちかも知れない。例えば、泉鏡花の原作「高野聖」を日本テレビで見たが(三五年四月一五日および二二日)井川邦子の熱演にもかかわらず、動物変身は馬鹿々々しい限りで、呆れたことであった。



はじめてお便りいたします。私は女相撲の記事をあつめています。貴誌もこの方面の記事をしばしばのせて下さるのでお知り合ひになりました土俵四股平氏は大正以来?と思います(滑稽新聞の相撲絵馬)まだ健在の様で驚きました。昭和五年ごろ頒布されていた女相撲の絵馬はどなたかお持ちないでしょうか。又女相撲人形も最近古物商でも見かけなくなりました。お持ちの方、写真でも拝見させてもらえませんか。かつて清水坂のある陶工が焼いていた様なのですが……。それはそれとして女相撲に関する文献集でも、貴誌でまとめていただけません。江戸時代のもは各々著名でもあり知られておりますが現在のものは土俵四股平氏の書いたおびたらしい女斗美短篇を私も集めてみました。また他に知らぬものもある

かと思ひます。識者の教示を乞いたく思ひます。貴誌の記事も大版のとき以来ずっと見て来ましたが、まだ見落しもあるかもしれせん。この辺で一ツ、女斗美特集でも出して下さいませんか。現代娘の相撲は一昨年ある週刊誌のグラビアページにストリップ嬢をモデルにしたものが出て私も持っていますが、あまり面白いものではありません。御存知ない方には書名号数をお知らせしてもよろしい。他にもこの種のものがあるかと思ひますが、こういうものを蒐集して発表して下さいとのしめです。貴誌に毎号一頁宛でも女相撲四十八手の絵を連載してくれませんか。女相撲は好色家の見世物のように云われておりますが、中々ゆかしい風雅なものであり丁度、黒ぬりの小づつみの赤い緒の様なものであります。これを愛好いたす者として中々洒落れた

趣味と思ひますが如何でしょう。女のやさしさ柔かさと、女のはげしさ逞ましさを一挙に混淆して見せてくれる、そんなものと思っております。緊縛、切腹、浣腸、男色と中々御多忙ですが一ツ女斗も加えていただいて(特に相撲に限る)時々亡者を済度して下さい。御清栄をいのります。どうもこの道の愛好者は京都の人ばかりの様ですね?(京都 北生)

東京にアメリカ製品のみ売っている薬局があります。パンティ形の薄い布地の下部だけにゴムをはったメンスバンド。コルセット形でゴム入の布地でゴム製のベルトのついたもの、色は白黒ピンク等あります。総ゴム製のアメ色のおむつカバーにはありますがメンスバンドは見当りませんでした。でも小生が興味を持つのは浣腸器です。黄色や赤のゴム又はラテックス製のメンスバンド位に小さな旅行用イルリガートル。腔洗器用と浣腸用と二本嘴管がついて二立以上、入ります。アメリカではガラス製の浣腸器は使わないうらしく売ってないので女店員に注入薬は何を使うのかと聞きますと普通は

石鹼液でミネラハを使う事もある由でした。ミネラハはヒマシ油の様な便秘に飲む薬です。小生も浣腸に使ってみました。が刺激はグリン程にはありませんでした。その他ゴム製の三百CCの大型スポイトもあります。直腸用と書いてあります。グリセリン座薬は日本よりも太く長く、特に小児用は十センチ位あって浣腸マニヤにはチャーミングです。エネマシリンジは管が透明のビニールですから白い石鹼水の入ってゆくのが見えます。最近日本製のメンスバンドもチャーミングな色が薬屋にあります。小生もゴムのにおいは心ひかれます。特にイルリガートルのゴム管に熱い湯を通した時においが好きです。女性浣腸マニヤと文通したし。(東京 良武満)

五月号奇譚クラブ拜見、久しぶりで女斗美の記事あり、たのしみしました。京人氏によると今東光、村松梢風御両所に作品があるそうですが今は手に入りそうもなく、プリントでも好事家に頒つていただけなのでしょう。女斗美は緊縛などちがって、どういうジャンルに入るのか知りませんが、愛

好者は中々多いようでしたのもしく思っています。奇々旧号の読者通信をみても、数年前にはずいぶん多くの人々が女斗美について通信文を寄せているようです。御誌の読者の中にはGストリングのような細い鞭を愛用される人がいる様ですがインドのヨガの呼吸法からして肛門と腰骨をひきしめるため男女をとわず六尺サラシの様なしつかりしまるものがよいのであります。終りに奇々の御発展をいのる。(京都 紫野女斗美生)

御誌の御隆盛お喜び申し上げます。私も御誌を知ってから四年になります。その間、毎号かかさず切腹の記事、又は小説を読んでいいます。然し最近の号はグラビヤに切腹がのっていないのが残念です。読物としても藤山秀緒氏の「乗馬ズボン・シリーズ」のみです。旧号の時のように色々な先生方が切

腹マニヤのため筆を揮われんことをおねがいいたします。私が自分で描いた女性切腹画(現代の女性昔の腰元切腹、男女の心中での切腹など)がありますし、又、私は実際に切腹ブレイをやっております。私と同じような気持の人がおられましたら御便り下さい。(山形 愛読者)

小林一文様。五月号で小林様のおたよりを拝見いたしました。小林様は、盲腸炎で看護婦さんに浣腸されて、まるで責められているようでしたとお書きになっておられますが、私も小さい時、病院で浣腸をされ、その時の看護婦さんが、とても意地悪で長い間、我慢させられて、恥しい苦しい思いをしたことがございます。それ以来かどうか知りませんが、私は責めとして浣腸に大きな魅力を感じているのでございます。その点、何

絹川文代緊縛姿態集
○全裸緊縛集 略号(きぬ)
三枚一組 二五〇円
○股間縛三態 略号(きこ)
三枚一組 二五〇円

大手札型印画紙焼付型
○全裸高手(小手) 略号(きた)
三枚一組 二五〇円
○緊縛全裸立姿 略号(きり)
三枚一組 二五〇円

か小林様と共通点がございますねでも私は、何度も書きますが、痛い感じの吊りや残酷な感じの責めは好みません。でも、責めで全部肉体的苦痛はいやというのではなく、浣腸なども、あのどうしようもない恥しさだけでなく、その後肉体的苦痛と云える強制的の我慢の苦しさも私の魅力の一つでございます。ムチ打ちなども勿論、肉体的苦痛なのですけれども少しぐらいでしたら精神的苦痛を強めるため打たれてもよいと思っております。又、お灸も魅力は感じます

てみたいと思っています。その他の方も色々実現可能な浣腸責めのアイデアを発表して下さいたら嬉しうございます。(上原由紀子)

花坂道子緊縛フォト集 大中判印画紙焼付

○全裸緊縛 略号(はな1)
八枚一組 八〇〇円
○股間縛集 略号(はな2)
八枚一組 八〇〇円
○ヌード縛 略号(はな3)
二枚一組 三〇〇円
○股間緊縛 略号(はな4)
二枚一組 三〇〇円

が一寸、恐しい気がします。一度こうした責めをして頂けたら素晴らしいことと思います。最近の本誌で一番、私の心を惹きましたのは栄養浣腸という文字です。大阪の大橋清様、その他の方で導尿の方法、器具をお教え下さったら嬉しうございます。こうした浣腸に関するファンタジーに近い中に書い

先日、書店にて本月号を購入しました。グラビヤ頁を見ました処待望のマゾフォトと男性緊縛写真がありました。たしか復刊してから始めてと思います。マゾフォトの掲載が許す限り、マゾフォトの掲載をおねがいします。マゾフォトを拝見して思ひ出しますのは、昨年募集されました男性モデルのことですが、あの時、私も応募したいと思っていました。持前の引込思案により、とうとう断念してしまいました。勿論、申込んでも採用して頂けるかどうか分かりませんが、それでも一応は申し込むべきだったと今になって後悔しています。今度、募集される時は、ぜひ申込みたいと思っています。小生

は身長一メートル七五、体重六十キロ強で、どちらかといえればヤセ形の方です。モデルに向くかどうかは分かりませんが、よろしかったら御使用下さい。

(名古屋 T・H生)

女装とは嫌な言葉！ 自分の氣持に合った服装をするのに特異な呼び方をする。私は、この呼称に反対する。しかし、女装者という言葉がフェチシズムの段階である時、特別に強い響きを持つ。女性の衣服や、かつらを手にいれなければ女装は出来ない。この入手は容易でない。この時、ブラが欲しい、ストッキングが欲しい、パットが欲しい、スカートを欲しい：ETC。その一つ一つに対する欲望は強烈である。洋装店のウィンドウをのぞきこむ哀れな男は実はフェチを楽しんでいる。購入には勇氣がいる。そして演技。恥しさを我慢する。しかし、一つ一つ手にいれた喜びは大きい。その夜着て寝る！ 下着！ 普段着る。男装の時、コルセットのかたさが氣になる微笑ましい感じ。フェチ意識の満足だ！ 女装のフェチは本当のフェチでない。そのようなものが窮極に欲しいのではなく、

手段であるからである。結局、このフェチは最後にアクセサリーに変わる。ブラウス、スカート、自分の好みを選ぶ余裕が出来る。ヘヤの髪形を変えて楽しむ女の氣持が生れる。このように自分の服装をゆとりある氣持で選択している時、女装者という言葉は実に迷惑である。私は、このように自分の好きな服装やスタイルを選ぶ時、その人を倒錯者の側に置くことは反対で、むしろ最も自由な人間として取扱うべきだと思う。

(原田幾世)

五月号を見て、すっかり嬉しくなっていました。というのはいままで殆んどといってよいぐらいの男性の縛り写真が出ていたからです。それも小生の好みにピッタリで、Gパンを穿いた男性が大好きだからです。次号はどのように展開するか今から楽しみにしています。何卒長く続けて下さる様おねがいします。小生の勤め先の倉庫係に一人の青年がいて、たいていGパンを穿いています。私はそれを見て心の中で色々なことを想像しています。想像は発展して彼をドレイの様にこき使うこと(唯プレイの時のみ)です。彼の

美貌汚辱

△鼻責めを中心とした▽

大手札型印画紙焼付

略号(はせ)

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

特高拷問

△破られたズロースから▽

大手札型印画紙焼付

略号(とく)

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

服装は唯、肌になじかに穿かせられたGパンのみです。それも尻にピッチリして股に食いこむ程のもので、すり切れてしまうまで替えることを許さず、汗と脂でベトベトになっている。仕事上でミスをしたときは四つんばいにさせ手足をくくりつけて尻を竹で打ったり後手に縛りつけて立たせておいたり又、彼自身で梱包用の箱を工作してオリを造らせて、その中に押し込めたり(このオリは小さいので中では身体を曲げていなければならぬ)色々の仕置を加える。それ等の仕置を受ける前には、彼は次の様なことをいわなければならぬ「私は充分にお仕事が出来ませんので出来るようにして下さい。ど

うぞ充分に矯正して下さい」と。又、略式の仕置はGパンの上から禪を締めさせることで、これは精神のタルミを締めるという意味であり、そのまま仕事させる。仕事の中にゆるんでくると、手荒く引っぱって来て二つ三つピンタを食わせてから再度きつく締め直します。このように充分にピシピシ矯正して見たいと思います。又、兵隊、男囚、少年囚、などがきびしく矯正されたり学生が色々のスポーツの部員として訓練される処などが好きです。先日もある高校で非行少年を休日に登校させ、掃除させたり特別精神訓練をしたとか新聞に出ていましたが、小生にいわせると、そんな時は、もつと

女体浣腸連続フオート

略号(ちよ)

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

モデル 愛川悦子嬢

R組 百花撰 大手札判 (印画紙9×13 浬)

各組一枚一組（全部送料共）

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

R	R	R	R	R	R	R	R	R
9	8	7	6	5	4	3	2	1
股間しぱり	鏡に映つた後手	後手足しぱり	後手猿ぐつわ	海老賣しぱり	高小手猿ぐつわ	床間の飾り物	海浜に於ける緊縛	柔肌に強烈な荒縄
(須川令子)	(伊吹真佐子)	(村田那美子)	(須川令子)	(萩千恵子)	(花坂道子)	(佐賀美智子)	(萩千恵子)	(須川令子)

R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R				
10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	RRR	
鎖しばり晒責 股間しほり正面 女学生制服しほり 尻立後手しほり 開股しほり 猿ぐつわの魅力 トイレでの縛り 立木野外しほり 緊縛横臥 足揚梯子ゼメ いたふり 帆立しほり 強烈な梯子ゼメ 梯子責め 逆さ本吊りゼメ 後手吊りゼメ 股間しほり後手 逆エビ責め 高手小手しほり 変型足手しほり 松樹後手しほり くさりゼメ 薄羅の後手緊縛	(萩千恵子)	(伊吹真佐子)	(須川令子)	(萩千恵子)	(川辺砂登子)	(伊吹真佐子)	(須川令子)	(村田那美子)	(厚狹春江)	(伊吹真佐子)	(春日ルミと伊吹)	(荻千恵子)	(伊吹真佐子)	(佐賀美智子)	(伊吹真佐子)	"	(中塚文子)	(伊吹真佐子)	(加賀利江子)	(萩千恵子)	(村田那美子)	(伊吹真佐子)	(加賀利江子)

股間タテしほり	首繩股間しほり	手足逆吊り	和服の後手しほり	仰向全裸悦虐責	後手首繩シメ	乳房下しほり	肉体美への折檻	お灸ゼメ	後手猿ぐつわ	松樹縛り晒責	コルセツト縛り	股間しほり	手と足と緊縛	後手しほり	御開帳	くさりゼメ	折檻の魅力	全裸の股間しほり	逆立の折檻	開股椅子ゼメ正面	振袖の緊縛	腰元の吊り責	ヌードしほり	本縄しほり	股間しほり	落花狼藉の緊縛	樹間のハリツケ	帆立舟のゼメ
(中富綾子)	(坂口利子)	(伊吹真佐子)	(藤田節子)	(川端多奈子)	(加賀利江子)	(村田那美子)	(伊吹真佐子)	(春日、伊吹二嬢)	(萩千恵子)	(村田那美子)	(中塚文子)		(萩千恵子)	(加賀利江子)	(萩千恵子)	(川端多奈子)	(須川令子)	(愛川悦子)	(大塚啓子)		(花坂道子)	(村井知可子)	(愛川悦子)	(田中芳代)		(川辺砂登子)	(益田房子)	

[illegible]

の一月から愛読してゐるダークホースです。よろしく。初めて本誌を見た時は、その喜びは筆舌にくされないほどでした。本誌のこの貫録や充実さは、とりもなおさず読者通信によつて生まれると思ひます。今後も読みつづけ本誌の

影の愛読者、後援者、広め屋として頑張ります。ここで失礼ですが小生の本誌向上の希望を述べさせていただきます。最近、同種の愚書が乱発されます。一層、充実しなければなりません。そのためグラビアを、もう少し多くする。又、四馬

氏の画を毎月、三葉ぐらゐにする。又、内容も連載物より読切のサジ小説創作を半々ぐらゐにする。まだ他にも小生の希望は多くあるが後ほど又。本誌のグラビヤのモデルに一言。もつと大胆にスタイルよくするために高手小手、足自由

女体『浣腸風景十二態』

(9×13Cm)
十二枚一組印画紙焼付
九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(ちふ)

の美容体操を。勿論、ムチを持つた助手つきでオムツカバーやメンスパンドをつけ、縛り上げ、下半身大写しのもを。又、名所旧跡をバックとした、あで姿は如何でしょう。いたらぬ愚文をお許し下さい。(大阪 Y・N生)

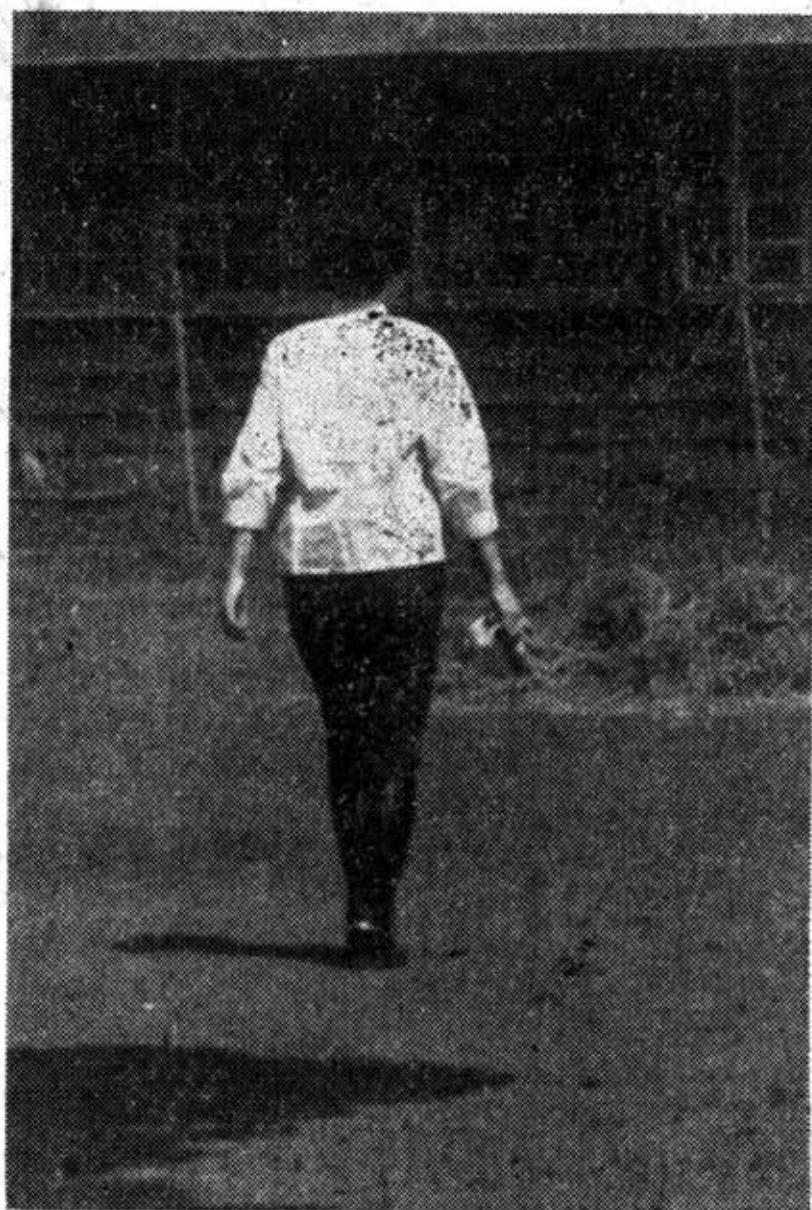
江木清様、御手紙ありがとうございました。私のような特殊な趣味のものは他にないと思っていました。貴方のような方がいることに驚きました。一種のソドミアです。ブレイは全く好まず読物や画を楽しんでます。貴方が私の作品のカットされたと思われる個処を自分で補筆して楽しんでいられた、その種の面を描いていられることをうかがい、ぜひ拝見したいと思っております。お互いにそうした資料の交換が出来たらどんなに楽しいかと思っております。私は自分軍人生活をしたせいか、すべて対象が軍人に限られて、現代青年などイメージにびったり来ません。映画でも軍人、殊に中尉少佐級のたくましい美貌の日本将

校が出てくるものを好みます。まして、そうした男が捕虜となり異人種にむごたらしく責められながらも、歯を食いしばって毫も屈服しない姿を想像しただけで興奮します。だから女性に屈服するマゾ男など好みません。そうした小説は本誌に余り見られないのをいつも残念に思っています。

その後、「投降部隊」というビルマで連合軍に投降した日本軍隊を描いた小説を本誌に投稿しました。が、未だに掲載されません。おそらく敬遠されたのかも知れません。直接、文通が出来たら……と思っております。又、おたより下さい。——編集部へ。五月号拝見して、いつも真先に見る榎村泰氏の作品がないので、すっかり失望しました。あの特異な感覚の作品は他の何を削っても載せて頂きたいのです。その代り「宇宙のどこか

で」という小説が載りました。前の「拷問に耐える」ほどの迫力はありませんが、次号へも続きそうなので楽しみです。挿画も綺麗な青年なのが残念ですが「猿廻し」「鉄砲責め」など若干、満足しています。それから我々の要望に答えて「穴倉幽閉」という男性緊縛フォトが載りましたが、モデルが余り感心しないのと、上半身裸体というのが不満でした。しかし来月号も更に続くそうで楽しみにしています。御誌としては、あのかく

らしい頁を割くことは何でもないとおもいます。今後必ず、あの程度の男性緊縛フォトを載せていたいただきたいと思っています。続々と特集号が出ているので女性緊縛ファンは十二分に満足していると思います。しかし、せめて普通号の方でも男性責の小説や挿画を載せて頂きたいと思えます。「編集つれづれ草」は大変、興味ぶかく読みました。あの種の雑誌の編集の御苦労が推察されます。この次には掲載出来なかった作品の題名



青山時子さん(武蔵野市)から送られた写真。

「私の新しい馬装です。一寸素敵でしょ」

又は傾向、種類など書いていただけたら、投稿するものに参考になると思います。その要領に添って今後の執筆が出来ると思います。又、「編集つれづれ草」が書けない時は、編集後記を載せて頂きたいと思います。それから出来るなら来月号の予告(掲載予定のもの)を知らせていただけたら、充分だと思えます。最近、東京には「風俗クラブ」とか「風俗綺談」とか他に二、三種の女性緊縛雑誌が、かなり派手な体裁にてあらわれ、かなり自由に購入出来るようですので、本誌のような地味な純文化雑誌は大変、損な立場に立っています。

新人モデル嬢新作緊縛姿態集

大手札型(9×13センチ)印画紙焼付

愛川悦子嬢の巻

☆ベッド変型縛り(略号しん1)

四枚一組 三〇〇円

☆全裸強烈縛り(略号しん2)

四枚一組 三〇〇円

大塚啓子嬢の巻

☆股間縛り(略号しん3)

ます。それだけに今後の編集方針は、もつと異色あるものでなければなりません。女性緊縛だけに依存して行くという方針は、却って平板化してしまうのではないかと思います。御熟考をおねがいいたします。(東京 R生)

○ 拝啓、御誌をずっと愛読しております。私は浣腸の記事に最も心をひかれます他の方々からも要望のありますように、浣腸特集号の実現を是非おねがいします。私は緊縛と浣腸とオシメを組合せました素晴らしいフオトを夢みております。海老縛りにされ三〇〇Cのグ

☆全裸縛り(略号しん4)

五枚一組 三五〇円

田中芳代嬢の巻

☆セーラー服縛り(略号しん5)

五枚一組 三五〇円

☆股間しばり(略号しん6)

四枚一組 三〇〇円

写真 三態

(ハリツケ) 略号(はり)

大中判印画紙焼付 三枚一組 四〇〇円

モデル 大塚啓子

○ リセリンか、又は一〇〇〇C位、の石けん水で浣腸され、オシメをあてられ、その上にオシメカバーまでされて放置されると、その苦痛と羞恥は耐えがたく強烈だと思えます。上原様、久仁子様、その他の方々の体験やアイデアをお待ちしております。(静岡 S子)

○ 四馬孝先生へ。最近の四馬先生の御力作は、どの一枚をとってみても実に素晴らしいものばかりで、何度くりかえして見ても飽くことなく楽しい夢の雰囲気へ小生を誘い入れてくれます。このように小生は先生の大ファンなのでございます。それだけに先生の絵に對しまして一つだけ気になることがございまして。と申しますのは、先生の御力作の中で他の御巧妙な筆に似ず、いつもパンティやズロースの面き方が粗雑であるように思えてならないのです。その上、いつもメリヤスカブロードのゴワゴワした感じのパンティやズロースばかりのように思えますが、如何で

ございましょうか。最近にはパンティやズロースにも色々な型があり、又、キャンティやクロスティのようなものまでございすし、製品もメリヤスカブロードだけではなくトリコットもナイロンもあり、しかも半透明、透明などのものもございす。その型やレースから色、模様に至っては全くの千差万別でございす。又、時には脱げおちていたり破れていたりするものもよいのではないかと存じます。いろいろ変化を楽しむためにも、。もう一つ、欲をいわせて頂きますと、先生の絵には全裸の女性が非常に少いように思います。当然このような時には全裸にされている筈なのに、と思われるような時でも大抵の場合、行儀よくパンティを穿いておられます。そのため受取る感じがチグハグになることもございす。後姿が斜後姿だけでなく結構ですから、全裸にされて羞恥にもだえる女性を、もつと沢山登場させて下さい。先生の絵を愛好するのあまり、つい勝手な

注文ばかり並べてしまいました。どうぞお気を悪くならぬよう。失礼の段、重重お詫び申し上げます。山口の本郷様へ。アメリカのメンスバンドは総ゴム製でオムツカバーのようだとか、と読者へ尋ねかけておいででしたが、それは布地の部分がコルセットのようにゴムの編みこみの様になっているものではないでしょうか。型はパンティの通りで、底部は防水ゴムが取りつけてありますが、他の部分は全部、細いゴム糸が横に織込まれているものことだと思えますが、そのようなものなら国内にも多数、出廻っております。オムツカバーのように全部がゴムで出来ているとしたら着用時に内部がむれてしまつて不衛生なことこの上もないと申せましょうから、そのようなものはないとしか考えられませんが……。名古屋の坂井様、小生も貴方と同様にフエチとマゾの性向を持つ者です。お便りをお待ちしております。(身枷輪生)

原由貴子様へ。五月号の貴女の作品「ガラスとゴムの想い出」素晴らしい思いで読ませて戴きました。三十二年八月号の「オムツカバー

と私」で、はじめて貴女の作品を読んだから、貴女の作品を心待ちにしていただけに、五月号の作品は私を夢中にさせました。貴女はオムツマニヤであると同時に浣腸マニヤでもあるのですね。浣腸されたり、オムツをあてられたり、どんなに恥かしいことでしょうか。貴女が羞恥のために頬を赤らめている様が目に浮ぶようです。私は貴女の作品内容は勿論のこと、その文章が、とても好きなのです。一言でいえば雰囲気のある文章、やわらかい表現でありながら心にくいまでに描き出す感覚的な文章いかにも少女的で、暗記してしまふほど好きなのです。作品の上から色々貴女のことを想像してみたりしています。失礼ですが……。上原由起子様、貴女の読者通信、本文より楽しみです。貴女の出現は同好の者として心強く思いますし、貴女の好みが私のと一致しているのて親しさを感じます。ズバリと書かれる貴女の態度、敬服します。浣腸に関するフォトや資料がありますから、お見せしたいと思います。久里須照夫様、文通したいと思いますが、どんな作品を発表して下さい。短い作品が多いので今度はぜひ長いものを書いて

代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13) 印画紙焼付

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)

3枚1組 二五〇円

悦虐雨ざらし

愛川悦子 略号(あめ)

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛

花坂道子 略号(きよう)

5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号(ふさこ)

5枚1組 四〇〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号(くもん)

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)

3枚1組 二五〇円

行燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)

3枚1組 二五〇円

いたぶり 略号(いた)

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶園の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)

5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号(ふと)

3枚1組 二五〇円

で色々な拷問が加えられることを想像すると胸がぞくぞくします。さて、僕は同性とのM・Sプレイの愛好者です。青少年とプレイを楽しむみたいと憧れています。M傾向の多い僕ですが、無理矢理に色々のポーズをとられ、モデルにされたら、どんなに幸福でしょう。か。同好者の皆様、よろしくおねがいします。(奈良 田中満寿夫)

○ 御誌の御発展を喜んでいます。この頃、御誌に似た雑誌が色々現われているようですが結局、真似事は本物には及びません。では、どんな点が御誌に及ばないかと申しますと、それは色々あるでしょうが、その中の一つとして私の考えを申しますと、私が御誌に興味をそそがれるのは、全体的の姿態も勿論よいのですが、女性の体の一部、たとえば顔とか鼻とか手足とか、色々な部分が時々載ることです。私達マニヤは本の中に一つでも、このようなものでも氣にい

った写真があれば、それこそ飛びついて買うのです。それですからありきたりの全体的の姿態だけでなく、このような身体の一部のクローズ・アップを出来るだけハッキリ写したのが時々載れば、なおいいと思います。(東京 落合生)

○ 私はここ数年、本誌の既刊号を探し求めています。それは、この中に幾つかのせられていた女装の記録がほしかったからです。そして今までに告白を記録せられた村田、原田、桜さん等を知りました。又、読者の頁では、それに何倍かの多くの女装愛好者がいることを知って本当に嬉しく、これらの女装愛好の方には限りない親しみを覚えます。女装特集号の希望を見て一日も早く実現を望んでいます。グラビヤにこんなのが出たら、どんなに素晴らしいでしょう。私は四十才近い会社員で妻子がいますので平常は立派な男性として社会生活をしているものですから

新作『血紅使用切腹フォト』分譲

モデル 絹川文代嬢

第一集 五枚一組 八百円

略号(によ1)

第二集 五枚一組 八百円

略号(によ2)

(大中判印画紙焼付)

○浣腸フォト

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちせ)

○浣腸責アツプ

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちあ)

他の人には絶対に知れたくない私の秘密として自分ひとりで女装するのが、とても楽しみなんです。私の女装へのあこがれは中学生の頃からありました。家人の留守の折などコッソリと義姉の部屋にはいつて目ぼしい着物を取り出すのですが、この時から私はドキドキと故ない喜びの感激にふるえながら、腰巻や肌着をつけるのです。鏡台の前に両膝をついて座りながらパフで粉白粉を胸から頸、顔にはたきます。真赤に口紅をつけて眉毛をかく頃には喜びの絶頂です。キチンとした扮装をわざとしないので襟や裾のほうにのぞいてみえる赤いものが私を無上に刺戟したので覚えています。その後、あの嫌な戦争にはいつて、折角の願望もどうすることも出来なかったのですけど、終戦になってからは本当にヤレヤレと思えました。再び女装することが出来るようになったのです。経済的にも少しゆ

とりが出来たようになったので日曜日を選んで芝居道具屋に行ってカツラや衣裳を借りて女装をはじめました。これは私にとっては何よりも楽しみでした。けれど、長く女装でいることも出来ないのです。写真をとる位で止めていました。今ではその頃からの女装アルバムが二冊出来ています。桃蝶さんがいろいろな女に扮装したのや花柳章太郎さんが男から女になるまでの、雑誌に口絵として出ていたのを真似てやったのが今も綺麗に残っています。私は徴兵検査で丙種になるような、男子としては小柄な方なので大抵の女の着物や洋服は、どれでも結構からだに合うので、そんなに女になりたいなら役者になるといい等、人にすすめられたりしたこともありましたが。でも私は人に見せるようなことは好みません。できればコッソリと一人で女装してたいのです。最近では下着や腰巻など女物を持って

います。妻が私が夜になると赤い腰巻をしたりピンクの肌着をつけるのを知っています。私は自分の分は妻のと区別してしまっており、家族といっても妻と子供二人なんです。家では女装も出来ないので本場に女装するは大変で借りているアパートにいる時に決めているのです。仕事の関係で毎月二回から五回ほど来阪するのですが、これが私にとって何よりの楽しみなのです。着物は二、三枚ほどしか用意してないので多くは借りて来ます。カツラは今のところ洋髪ばかり二つ用意してあります。時には朝から女装していることもあり、多くは夕方になつて電灯の下で入念に化粧をはじめるのです。鏡に写る私が、男性から女性に変わって行く姿を眺めるのが、とても楽しみです。外出は映画かパチンコに決めています。女装での外出は、もう平気になつてしまいましたが、余りに怪しまれる風もありません。最近では女装して大ビラに談笑できる仲間がほしいと思つています。同好の方にお知り合いになつていただけたらと念じています。東京の森本様におねがいします。ぜひ、あなたの女装を写真入りで御発表下さい。楽しみにしています。(香川 山本元)

前略、ふとしたことから本誌に手にする機会を得ました。秘かな浣腸趣味の私にとっては何と表現してよいやらわからぬほど興奮し体が小さきまにふるふるほどでした。と申しますのも、実は多くの浣腸趣味の方々がおられ、しかも女性の方々までがおられるということ。その後は、全く本誌の「とりこ」となつてしまいました。私も御多聞にもれず、小さい頃から浣腸の洗礼を受け、長じてそれが秘かな趣味として私の心に焼つきました。色々の器具を使った浣腸の記事には胸をしめつけられる思いで読んだりしました。しかし最近では私一人で楽しむより、たとえば女性を対象とした責めとして実際にやって見たいという欲望に変化して参りました。しかしこのような趣味が私一人の秘かな趣味として同好者を求めるなど全く不可能な事だと思つていました。ここで偶然、全く偶然、本誌を手にして私の趣味が全く形の変つた趣味となつてまいりました。これからは浣腸趣味の方々と通信の仲間入りをさせて頂き、色々と体

女性『切腹風景十二態』(9×13センチ)印画紙焼付 十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(せふ)

禪美切腹

大手札判(9×13厘米)印画紙
焼付 モデル 愛川悦子嬢
二枚一組 二五〇円
略号(こせ)

切腹のプレイ

大手札判(9×13厘米)印画紙
焼付 モデル 愛川悦子嬢
三枚一組 三〇〇円
略号(れい)

女性自刃三態

大手札判(9×13厘米)印画紙
焼付 モデル 愛川悦子嬢
三枚一組 三〇〇円
略号(じじん)

豊麗切腹三態

大手札判(9×13厘米)印画紙
焼付 モデル 愛川悦子嬢
三枚一組 三〇〇円
略号(ほう)

験など発表し合える機会を得たいと思つております。ぜひお便り下さい。(静岡 鈴木通夫)

五月号から掲載が始められた佐治麻造氏の「宇宙のどこかで」の掲載によつて毎月末になると、まだかまだかと本誌の発売日待つあのイライラしたしびれるような気が、更に何層倍かされたと感じている方が多いと思います。特に「女看守、対、男囚」をバックボーンとした作者のかもしれないゾフィスティックな雰囲気のもと

に、精神的従属と肉体的緊縛の様子が極めて綿密に描かれており、一文に何物にもかえ難い宝物を感じさせます。沼正三氏の「家畜人ヤプー」休載の代りに、そのアチを補つて尙あまりある、この「宇宙のどこかで」に寄せる期待には大なるものがあります。どうか一大長篇として、いつまでも楽しませて頂きたいのです。ここで編集部の方々に一寸、お願いがあります。それは挿画に對して一考していただきたいということです。現在の挿画は第一に、本文に對し

て忠実でないこと。第二に雰囲気
の描写に欠けること。折角、作者
が綿密な状況の描写をしておられ
るのですから、それに合った挿画
をお願いしたいということ。す
本文に更に花をそえる画でなけれ
ばならず、本文との喰い違いのた
め興味が半減されるようではつま
りません。又、あまり人物本位の
画ではなく、その場所、その他、
周囲（バック）も少しは描きいれ
ていただきたいと思ひます。グラ
ビアの、美しい女奴隷たち、のよ
うな味のある画を、この佐治氏の
小説にもぜひ望みたいものです。
（大阪 赤城生）

○ 本誌新緑躍進号の貴方の「麻生
保氏の生活と意見」の文中に私に
言及されていることを知り早速拝
読しました。時評の中絶は誰より
も私自身が一番心外に思っている
ところ。私はこれまで多く
の努力をこの時評に傾けて来まし
た。「残酷なる女性達」に劣らず
私はこの時評の価値を知っている
つもりです。中絶することは本来
の目的に反するところであること
は勿論、このような内容から考え
ても不適当だし又友人の中には何
も時評や奇クそのものが抵触した

わけでなし構わずつづけたらとい
う人もおられます。併し私は私自身
で考えた次の理由で中絶が最善の
途であると考えました。一、一部
紙上に如何にも奇クと関係がある
かのように掲載されたこと。二、
私が時評を書くに至った動機は世
の中の同憂の人々に少しでも光明
を与えたいというところに在り、
私の方で起った紛争（一部は解明
されましたが売春は勿論のこと恐
喝などをするわけがないのです。
では何故そういう調書その他が作
り上げられたかについては公判廷
でも明らかにありますし、時機を
見て発表する心算であります）の
為に今まで奇クによってのみ異常
傾向を満足させていた人々の一部
でも奇クをおそろしいような人々
の集りの機関誌などと考えられて
はならないと思つたこと。三、異
常傾向者の中に甚だ不明朗な人々
が存在することが判つたこと。四、
一般人や司直の甚だしい無智と国
家権力を以てする不合理な圧
力。五、私が止めても他に必らず
後継者が存在して異つた題名
で同様の仕事をつづけてゆくであ
らうこと。勿論私としても女性乗
馬の解明をすることの出来る段階
に至っているのに残念な思ひは人

女体責写真厳選集

大手札型印画紙焼付
各三枚一組二五〇円

危機一発 略号「きき」

雁字搦目 略号「から」

後手猿轡の無防備な身体に襲
いくる悪魔の手に引きはがれよ
うとするパンティ（絹川文代）

女体開陳 略号「かい」

寝室俯瞰 略号「ふか」

美しい女がきびしい縄目に足
をくの字に曲げての喘ぎようは
ただでない。（絹川文代）

哀花悶々 略号「あい」

柔肌地獄 略号「やわ」

白く輝く柔肌をぎりぎりタ
テに縛りあげて悶えに悶えぬく
哀れにも艶な姿。（絹川文代）

ボリウムのある愛川さんの肉
体が縄目にくびれて盛り上りベ
ッドに転々と……（絹川文代）
押せば凹こみ放せば弾き返え
す張りのある全裸の柔肌を余す
ところなく露呈。（大塚啓子）

一倍です。マゾヒストのパラダイ
スについての意見はよく判ります
が私としては貴方のような賢明な
考え方をする方々が多かつた為
に今日までサド・マゾヒズムに対
する理解や認識が余りにも少く、誤
解が多かつたのではないかと思ひ
ます。私は、ですから何とかして
サド・マゾヒズムをもう少し陽の
当るところに引出したいのです。
その為に私は、実話雑誌の四月号
に自分の来歴をくわしく書きまし
た。之は勿論裁判の為にかかる多
額の費用の一部を稼ぐ為もありま

○ この写真をごらん下さい。私の
新しい馬装です。一寸素敵でしょ

颯爽たるドミナと言いたいたいところなのですが、乗馬の方は空ツきし駄目なの。唯こんな恰好をするのがとても好きなの。異装マニアって言うのかしら。それとも長靴フエチかしら。一週間に一度か二度位長靴を穿いて外出しないと憂鬱になってしまうの。今度私は思いついて従来の乗馬ズボンをやめて股の線があらわに見えるGパン風のズボンにしました。上衣もナイロンの薄い短いもので、わざと裾を外に出して着ます。着衣の下はブラジャーとパンティだけしか着けません。長靴は従来からの固胴の英国風ですが、出来れば軟皮のびったりした細身のものにかえたいと思います。いっそのこと太股の附根まである長靴をあつらえて強烈な拘束感を味わってみたいと夢想したりしています。私の心にえがいているのは、パウル・カムの画のような、裸に長靴を穿くことですが、今のところとてもそんな勇氣がありませんのでこんなスタイルで我慢しています。私のような同好の方がおいででしたら、よろしく御教示下さいませ。

(武蔵野市 青山時子)

僕は数年来貴誌を愛読している

マゾ男です。旧刊時代のあの楽しかった記事や写真、それは今でも懐しく繰返し繰返し見えています。復刊後は実に手堅くこうして毎月刊行されている労苦は並大抵の努力ではないと新刊に接する度にその労を謝し有難く読ませて頂いてます。最近ではその内容も殆ど旧刊時代に還ってきたし臨時増刊もどしどし出されて誠に心強い限りですが、男の責場を扱った記事は誠に寥々たるものであります。それにも拘らず読者通信欄にはマゾ男のやるせない希望が毎月訴えられています。サド物なら外に類似の雑誌はいくらでもありますがマゾ物は日本中に貴誌以外全くないので、キク誌に頼るより外ない我々なのです。読者からの絶讃を博した旧刊時代の「ある被虐マニアのポーズ」はモデルが愛読者で素人であるだけに芝居気がなく実感が溢れていました。出来ることなら、読者から送られてくるであろう緊縛写真を毎月何葉か宛載せて頂けないものか。曾って読者通信欄にその希望が載っていた様に思う。男性緊縛写真についての我々の夢を二三述べさせて頂く。先ずモデルは美男に越したことはないが、寧ろ平凡な容貌の方が身近に

感ぜられて共感が湧く。然し肉体だけはなくましい青壮年者であつてほしい。これは女性の場合と同じで蚊とんぼの様な身体に縄をかけてもさっぱり魅力は感じない。縄は股間縛りと思つて十分に締め上げて欲しい。ゆるふんはだらしのないものの代表語であることは御存知の通り。僕は又半股引を推奨したい。これもだぶついたのは真平で腿の肉がはみ出る位小さめのものに限る。縄は藁縄が粗野で荒々しく断然男性向である。麻縄やロープならまだよいが、木綿縄や紐類は女性的ですぐにも切れそうで男性の肉体を縛るのにはふさわしくない。縛り方は縦横全身に十分きびしいものでありたい。女でさえあれだけ緊縛しているのだから男はそれ以上に縛り上げなければ強い男を束縛したという実感が出て来ない。殊に脚を縛ること。男には脚が一つの武器であると確か中谷冷一氏が旧刊に書かれていたと思う。又女性に負けず股間縛りも是非見せてほしい。米俵か炭俵の様に雁字搦目に縛られた男の裸体が是非見たいものである。ポーズは男らしく堂々と正面きつたものを望む。崩折れた女の様なポーズはどうも頂けない。磔、吊し

伸し、棒縛り、それらの逆さまのもの、海老責や四つ足縛りの様に殊更に折り曲げたもの。又は鞭打ちに見る責の瞬間的動作、苦悶のための無理な体形はひどい感じが出てよいと思う。場所は山、野、水辺、空地、路地、大空の下ならどこでもよい。若し屋内を選ぶなら、工場、倉庫、地下室の様な粗野な処がよい。責の道具は殊更作らなくとも立木でも梁でも鉄骨でも何でも構わない。直接地面に磔するのも面白いし岩やコンクリート塊でも、電信柱、大八車などいくらでも責の道具はある。最後に加虐者はなるべく二人以上であつて欲しい。多人数で一人を苛める処に嗜虐の醍醐味がある。

(小川辰次)

さわやかな五月晴れの空にくつきりと浮かんだ富士を遠くはるか仰ぎ見ながら、ふと店頭に映った貴社発行の奇譚クラブを手にした時は思わず驚歎の目を見張らせた一人でした。私は毎年新緑の頃になると晴れ晴れとした明るさに全身がのびのびとするような躍動を感じるのですが、この雑誌は計り知れない明るさと広さを持っていた私の心を押し包んでしまいました

麗しき縛しめの乙女たち

大手札型印画紙焼付
各組三枚一組二五〇円

聖壇の裸女 略号(けい)

△モデル 絹川文代▽

カーテンの翳 略号(けろ)

△モデル 絹川文代▽

艶姿色模様 略号(けは)

△モデル 絹川文代▽

浴場の欲情 略号(けに)

△モデル 大塚啓子▽

いけにえ人形 略号(けほ)

△モデル 絹川文代▽

のぞき見極楽 略号(けへ)

△モデル 絹川文代▽

開股悦唐境 略号(けと)

△モデル 大塚啓子▽

ダンロの開股 略号(けち)

△モデル 田原美佐子▽

開股絶命 略号(けり)

△モデル 愛川悦子▽

悲鳴開股 略号(けぬ)

△モデル 絹川文代▽

を注文したいと思います。

(静岡 森成友)

手にするだけで、ほのぼのと心に
通う明るさが私をいたく刺戟しま
した。新緑躍進号では私の平常胸
に抱いていた夢をそのまま誌上再
現してくれたのではないかと疑う
ばかりの「美しき女奴隷達」の美
しい口絵。現世には有りうべから
ざることもながら、それでいて私達
の心の奥底をゆさぶるこのイメー
ジがかくも大胆に率直に絵面化さ
れているということは全くの驚異
でなくてはなんでしょう。雑誌総て
にみなぎる吸引力は言葉で言いあ
らわせない不思議な魅力を私に与
えてくれました。早速既発行の分

奇クの女装愛好者の諸兄弟、御
元氣の事と存じます。最近私は裾
除を一着買いました。それはピン
クのレース付ナイロン製です。そ
の裏地に薄地の緋チリメンの裾除
をつけて衿にして着用しています
が実に肌ざわり良く着心地は快適
です。夜は一人その感触に酔つて
います。そして又今晚呉服店にて
裕の赤い花模様のある長襦袢を私
の好みの仕立方で注文しました。五
日以後に仕立上るそうです。注

文する時は少し恥しい気持で一杯
でした。が店の方の質問する事に思
いきって何もかも本當の事をつ
みかくす事なく返事しました。こ
る初めは店の方も好奇の目で見て
いました。が最後には心よく引受け
てくれ自分もよかつたとずっと気
が楽になりました。今後女装に必
要な品はその呉服店で買うことに
きめました。過日私は女性和服下
着愛好者として初めてレターサロ
ンに投書し三月号に掲載されまし
たが、少し書き足らぬ向きもあり
ますので補足します。私は和服女
装下着だけでなく一般の女装愛好
者と同様にはなやかな長着、帯等
女装一般にづいての執着は皆様と
共に強甚ですが目下のところ長襦
袢をやつと新調する事の出来た身
分故に長着、帯までにはまだ
時間がかかる様です。ですが先回
何故下着のみを強調したかと言
いますと、なんと云つても女装はそ
の基本である腰巻、肌襦袢はその
感触にあつて柔らかなその感触と
それによつて、女である事を全身
に感じさせてくれる下着こそ最上
のものであると言いたかつたがた
めです。ですから直接肌にふれあ
う腰巻と肌襦袢には十分注意して
います。又色合いも然りです。又

帯についても愛好者によつては違
うでしょうが私は比較的細い帯(ハ
ダチ巻より少し広い目位の)でギ
ュツと締めつけられて胴がくびれ
る様な帯に興味があります。それ
を私は長襦袢姿のダチ巻で実現出
来る喜びを女装愛好者として幸せ
に思つております。そこでお願い
したい事は私の様な同好の方と心
ゆくばかり女装姿で楽しみたいと
常日頃思つています。私は三十才
です。(小樽 藤岡浩)

○ 純白の六尺褌、それも少し細目
のが隆々たる男性美を誇る腰にび
っちり締まつている、責めにか
けられて七転八倒する図なんて、見
度も見られない。男対男の責め
りも女から責められてこそ六尺褌
が効きめがある。本誌にも余りそ
うしたものはなく、写真でもい
から企画して欲しい、手脚を中へ
一緒に縛り付けられて雨の中で、
赤い腰巻一つの妖婦や女達に責め
られる。仰向けになつたまゝ、上
から百目ローソクのロウが腹や太
股へ垂れて苦しむのへ長鞭が容赦
なく股、腰へ飛ぶ。凄絶さは思
ただけでも魅惑的である。六尺褌
に特に強い関心を抱くと云う人は
通常西洋下着をしている人に多い

のではないか、否責めに關心をもつ本誌ファンだけで特に感ずるのではなからうか。一昨年も此の欄に書いたが、昔の姐妃のお百と云う毒婦に非常に魅力をもつ、小生は毒婦の責めを夢想する。赤湯文字一つのお百が、矢場女十五人程を見物させ、蕩し込んだ男を六尺一本にして雨中の庭で責める、見物の女がそれも淫蕩的な女がいい一人でも多い方が男にとっては利く責めである。つきものにかかっただうに小生はそんなことを考えて、拙筆をとって大衆読物として本誌へと、思っているが仲々巧く書けない。余談乍ら六尺一本の男を責めてくれる女性の方はないかと本欄をかりて一寸。

(東京 百生)

○ 五月号に大変良い記事が有りました。私達揮愛用者諸君を喜ばしめて呉れたそれも新しい記事で「宇宙のどこかに」である。まったく素晴らしい記事で読んでいる中、胸があつくなつた位だ。このような記事は三面記事以上良い。しかし丸裸の男性の姿はあまりにも無残私にいわせれば越中禪かモツコ禪位しめさせていたかもしれない。憎らしい婦人刑事でパンツまで脱

されて四ツ這いにされ肛門まで嚴重な取調、その上正座して眺められる男の胸の内、思つても叩いてやりたい位憎らしい刑事にはフンドシ一本で苦しめられていいると書いてあつたが挿絵にはパンツでガツカリです。どうしてフンドシ一本の挿絵を書いて呉れなかったか残念だ。(静岡赤禪)

○ 一昨年からの貴誌の愛読者である工場の寄宿舎に住んでいる女性です。昭和二十九年頃に発売になつた貴誌を偶然手に入れてからすっかり愛読者となり最近では毎月拝見しています。この欄では余り女性の方はお顔を出さないようですね。私の知つてゐる範囲では相当の女の読者の方も多いと思ひますが、やはり引つ込み思案で通信を書かないのだと思ひます。それに私たちのように平ぜいペンを持つことの少ない者はよけいおっくうになりがちです。でも貴誌を読んでいますと私たち何にも知らない者もよく人間というものがわかつてくるようで喜んでいます。私たちの部屋の中にもデパートのエスカレーターに乗るとき下駄をぬいで上へいつてから大騒ぎするような者もおつて本当に田舎者ばかり

です。こんな田舎者でもよかつたらモデルにでも一度使つて貰えませんかでしょうか。肌は小麦色で余り白くありませんが割合ふとっています。今仕事が大分いそがしいので、又お便りします。(大阪 春木京子)

ヌード初縛り

大名刺三枚一組 二〇〇円
新人モデル 平野 笑子 略号(みい)
敷布の白さよりも白いヌードが縄目にもだえて……。

全裸股間縛

大名刺五枚一組 三〇〇円
新人モデル 岩井 知子 略号(みは)
稚き柔肌にまといつく縄目は痛々しいまでに苛烈だった。

観念の座

大名刺三枚一組 二〇〇円
新人モデル 平野 笑子 略号(みは)
縄と縛の祭壇に上つただけにえは観念の眼を閉じていた……

開股縛くらべ

大名刺五枚一組 三〇〇円
新人モデル 絹川 文代 略号(みと)
黒い紐は白い肌に奇妙なコントラストをかもし出した。

ヌード初縛り

大名刺五枚一組 三〇〇円
新人モデル 田原美佐子 略号(みる)
初々しい裸身が縄で自由を奪われて描く美しい女体構図。

全裸後手くらべ

大名刺三枚一組 二〇〇円
新人モデル 平野 笑子 略号(みい)
艶やかな色香に満ちた餅肌も縄にくびられて哀れな表情……

全裸股間縛

大名刺五枚一組 三〇〇円
新人モデル 絹川 文代 略号(みへ)
白磁の肌にヒシヒシと喰い込む妖しい縄の魅力……

椅子開股縛

大名刺三枚一組 二〇〇円
新人モデル 絹川 文代 略号(みち)
身動きも出来ない後手しぼりと剝がれたスロースとは……

○ 緒方春生様、奇クにおよせになりました貴男様の「或る女性への手紙」を拝読致しまして急におよびかけ致してみたくハンをとりました。貴男様は少年の頃柔道を習いにいった道場の娘さんから課外

教授といつて押え込まれ又馬乗り
に組み敷かれたそうですが、その
女の先生は可愛いらしい少年の貴
男様を人のいないところで一寸い
たずらしてやろうというごく軽い
気持から行われた事と存じます。
と言いますのは実は私は奇巧の熱
烈な愛読者であり又マゾ男性を対
象にプレイを行つておりますサド
女性です。貴男様は顔の上に跨る
ことは危険をとまなうと申されま
すし、いつか私が奇巧にマゾ男性
相手のレスリングごっこについて
東京の諸岡堅雄様から読者欄に通
信をいただいているのを拝見しま
したが、その中に相手をフオール

するのには相手の首又は顔の上に乗
らなくても相手の肩口の所に馬乗
りになって膝でしっぺりふみつけ
体重をかけはね返されそうになつ
たらお尻をすこし上げて前かがみ
になるだけで十分だとの御説でし
た。緒方様、貴男様にお便りを差
出された女性の方にお逢いになり
ましたならば一つそのサド女性の
方と試してごらんになつては如何
ですか、東京の諸岡堅雄様も今一
度柔道奥様と一度お試しなされて
は如何でございますか。奇巧を通
じましてお便りをお待ち申し上げ
ております。(鳥取 花田靖子)

本誌御購読案内

一月分 (1冊) 三百円
三月分 (3冊) 八百円
半年分 (6冊) 千五百円
一年分 (12冊) 二千八百円

購読御希望の方は上記の通り割引
きいたします故なるべく月極にて
お申込み下さい。毎月発行の都度
厳重包装の上急送申し上げます。
尚景品の贈呈は今後中止いたしま
すから御承諾おき願います。

奇譚クラブ 麦秋増大号 (7月号) 定価三百円

昭和三十五年六月二十日 印刷昭和三十五年七月一日発行

発行所 大阪市阿倍野郵便局 私書函第十四号 天 星 社

編集印刷兼発行人 吉田 稔
振替口座大阪五〇〇四二番 電話天下茶屋 三六〇七番

本誌発表の口絵並に写真の複写転載を固くお断りします。

〔編集後記〕

○本号では口絵の増頁と共に四馬孝氏描
くところの「白線地帯の飼育室」を特集
した。先月号の滝れい子氏の「美しき女
奴隷たち」の口絵に引続いてであるが、
今後興味ある題材を捉えてこういった特
集を当分続けるつもりである。

○久方ぶり沼正三氏から玉稿を頂く。
既に全部の割付を完了した後に到着した
のだが翌月号に廻すと腐ってしまう恐れ
があるので「私の編集ノートより」を削
って載せることにした。そんなわけで編
集ノートの毎月多少なりとも載せると約
束しながら休載になってしまったが、誌
面のあるとき、書き溜めた分を余分に発
表するとして御諒承を乞いたい。

○出来るだけいろいろの傾向のものを各
種掲載したいと努力しながら誌面の狭隘
さのため、十分期待に応え得ない憾があ
るのは残念だが、これは本文の増頁とい
うことで保留原稿を一掃したいと思つて
いる。休刊前の特大号の如き体裁になれ
ばと常々願っているのだが。

○休刊といえは先日、復刊第何号とい
う呼称は、復刊後すでに五年も経ち六十
何号という号数を数えているのだから、
やめにして通刊で呼んだらどうかと或る
読者からいつてきたが、年月の経つのは
早いもので、いつの間にか、そんな数
になつてしまった。差し当り通刊といえ

は百四十何号ということになるが、よく
もこれだけ続けたものだと思つ。

○このあたりの曲り角で百八十度の転回
とまではゆかなくとも、九十度ぐら
いの方向転換も面白いんじゃないかと。
考えたりする。とにかく、ここの当分の間
形式、内容ともに新企画を練って実現し
たい。御意見のある方はどしどしと申し
述べて頂きたくお待ちする。

○新緑の好季節を迎えて写真の撮影が進
捗しているのでベテランのモデル陣に加
えて初々しい新人モデル達の緊縛艶姿を
逐次、号を追つてグラビアにてお目に
かける筈。桜井葉子嬢の松の木吊り責めや
立木宙縛りの特別写真も辻村隆氏の指導
にて撮影済、御期待を乞う。

○昨秋来、大分座談会も行わなかったの
で機会をみて撮影会兼座談会を開催した
と思つ。今まで特集号の発行で手をと
られていたが、それも一段落したのであ
つと言わすような座談会記事を盛り上げ
るか或は誌上に掲載しない雑談会を開催
しようかとも思っている。

○本月号のグラビヤは一挙に三十二頁に
増頁、杉江美津子氏の女装緊縛などいさ
さか新味を加えたつもりである。全員を
通じ地道な歩みながら進歩の跡と真摯な
編集ぶりについて共感を得るところが、
いささかなりともあれば幸甚である。